

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 5

荒屋敷遺跡(4次)
桜町遺跡(1次)

2005年

福島県教育委員会
財団法人福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 5

荒屋敷遺跡（4次）
桜町遺跡（1次）



口絵 1 桜町遺跡遠景



口絵 2 桜町遺跡出土弥生土器

序 文

「会津縦貫北道路」は喜多方市と会津若松市を結ぶ総延長13.1kmの地域高規格道路です。平成8年度に都市計画道路として建設が決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この計画路線内には、先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在しております。この埋蔵文化財は、各地域の長い歴史の中で育まれ、今日まで大切に受け継がれてきたものであり、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上と発展の基礎をなすものであります。

そこで、福島県教育委員会では、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね、現状保存が困難な埋蔵文化財については、記録として保存することとし、平成12年度からは試掘調査、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成16年度に発掘調査を行った、塩川町の荒屋敷遺跡と湯川村に所在する桜町遺跡の調査成果をまとめたものです。この報告書が、県民の皆様の埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには、生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団等の関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成17年12月

福島県教育委員会

教育長 富田 孝志

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。会津綾貫北道路にかかる埋蔵文化財調査については、平成9年度に表面調査、平成12年度試掘調査、翌平成13年度から発掘調査を実施いたしました。

本報告書は平成16年度に発掘調査を行った、塩川町荒屋敷遺跡と湯川村桜町遺跡の調査成果をまとめたものです。

荒屋敷遺跡は、平成13年度から調査が開始され、本年度は4次調査となります。今回の調査では、平安時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されました。なかでも溝跡出土の銅鏡は古代末から中世のもので貴重な資料です。これらの資料は、これまでの調査成果と併せて、荒屋敷遺跡の性格を推定する良好な資料になると考えられます。

桜町遺跡からは、弥生時代後期の竪穴住居跡と方形周溝墓群、平安時代の集落跡が確認されました。方形周溝墓から出土した土器の特徴は、在土地器の他に北陸地域や北関東地域の影響を受けた土器が含まれています。会津地域の方形周溝墓では最古段階に位置づけられます。会津地域における弥生時代後期に属する墓制のあり方を知るうえで興味深い成果となりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。また、埋蔵文化財の保護につきまして、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

おわりに、この調査にご協力いただきました塩川町と湯川村ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

平成17年12月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 高 城 俊 春

緒 言

1. 本書は平成16年度に実施した会津縱貫北道路（会津若松～喜多方間）遺跡発掘調査の報告書である。

荒屋敷遺跡：耶麻郡塩川町大字遠田字荒屋敷 他 埋蔵文化財番号：403-00073
桜町遺跡：河沼郡湯川村大字桜町字中町 他 埋蔵文化財番号：422-00030

2. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査に係る費用は国土交通省が負担した。

3. 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

4. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査にあたった。

文化財主査 宮田 安志 文化財副主査 福田 秀生
なお、臨時に次の職員の参加・協力を得た。
専門文化財主査 安田 稔 文化財主事 稲村 圭一

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を明記した。

6. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製したものである（承認番号 平17東複第206号）。

7. 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し、付編にその結果と考察を掲載している。

付編1 荒屋敷遺跡銅鏡付着繊維分析……………財団法人 元興寺文化財研究所
付編2 桜町遺跡弥生土器放射性炭素年代測定分析……株式会社 バレオ・ラボ

8. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

9. 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関および個人の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順位不同・敬称略）

塩川町教育委員会・湯川村教育委員会・福島県立博物館・新津市教育委員会・中村五郎・馬目順一

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

湯川村…U K	塩川町…C K	桜町…S K R	荒屋敷…A Y S
豊穴状遺構・住居跡…S I	土 坑…S K	溝 跡…S D	掘立柱建物跡…S B
小穴・ピット…P	グリッド…G	トレンチ…T	遺構外堆積土…L

遺構内堆積土…ℓ

2. 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 方位記号の表記がないものは、全て本書の天を北とする。
- (2) 荒屋敷遺跡の遺構番号は基本的に3次調査からの連続番号である。
- (3) 遺構図の縮尺率は、各挿図版に示した。
- (4) 遺構内の傾斜面は  で表示したが、相対的に緩傾斜の部分は  で表している。
また、後世の削平や人為的な削平部分は  の記号で表記した。
- (5) 挿図中の網点は、図版ごとに凡例を示した。
- (6) 断面図および地形図における標高は海拔標高を示す。
- (7) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は算用数字で表記した。
〔例〕 遺構外自然堆積土：L I・L II…、遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…
- (8) 各小穴の深さは、平面図に示したピット番号の側に（ ）で数値を明記している。単位はcmである。

3. 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮尺率は各挿図版に示した。
- (2) 土器の断面は、土師器を白スキ、須恵器はベタ黒とし、必要に応じて凡例を設けた。粘土紐の積み上げ痕は器面で実線、断面図では一点鎖線で表記した。
- (3) 遺物番号は挿図版ごとし、文中では下記のように省略している。また、掲載土器の出土位置・層位は、右下に示している。
〔例〕 図28の10番の土器…図28-10

4. 本書における遺物写真の中で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。

5. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、参考文献として各章末に収めた。

目 次

序章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
1. 平成16年度調査までの経過	1
2. 平成16年度の調査経過	3
第3節 遺跡の位置と自然環境	3
第4節 周辺の遺跡と歴史的環境	4

第1編 荒屋敷遺跡（4次）

第1章 遺跡の位置と調査経過	11
第1節 遺跡の位置	11
第2節 調査経過	12
第3節 調査方法	12
第2章 遺構と遺物	15
第1節 遺跡の概要と基本土層	15
第2節 土 坑	17
第3節 溝 跡	23
第4節 その他の遺構と遺物	28
第3章 ま と め	33

第2編 桜町遺跡（1次）

第1章 遺跡の位置と調査経過	37
第1節 遺跡の位置	37
第2節 調査経過	37
第3節 調査方法	41
第2章 遺構と遺物	43
第1節 遺跡の概要と基本土層	43
第2節 竪穴住居跡	47
第3節 周溝状遺構	50
第4節 竪穴状遺構	72
第5節 掘立柱建物跡	87

第6節 土 坑	118
第7節 溝 跡	159
第8節 その他の遺構と遺物	173
第3章 ま と め	193
1. 弥生時代の遺構と遺物について	193
2. 平安時代の遺構と遺物について	202

付編 自然科学分析

付編1 荒屋敷遺跡（4次調査）出土の和鏡に付着した布の分析報告	267
付編2 桜町遺跡（1次調査）出土遺物放射性炭素年代測定	271

挿図・表・写真目次

序 章

〔挿 図〕

図 1 会津綱貫北道路位置図	1	図 3 桜町遺跡と周辺の遺跡位置図・一覧表 …	6
図 2 荒屋敷遺跡と周辺の 遺跡位置図・一覧表	5		

第 1 編 荒屋敷遺跡

〔挿 図〕

図 1 調査範囲とグリッド配置図	13	図 7 59~63号溝跡	25
図 2 荒屋敷遺跡（4次） 遺構分布図・基本土層	16	図 8 溝跡出土遺物	27
図 3 84~91号土坑	20	図 9 3号性格不明遺構・出土遺物	28
図 4 92~98号土坑	21	図 10 4号性格不明遺構	29
図 5 土坑出土遺物	22	図 11 4号性格不明遺構出土遺物	30
図 6 59~65号溝跡	24	図 12 柱穴群	31
		図 13 遺構外出土遺物	32

〔写真図版〕

1 4次調査区全景	205	8 59~63号溝跡	209
2 4次調査区遠景	205	9 61・64号溝跡	210
3 4次調査区遠景	206	10 3号性格不明遺構全景	210
4 基本土層	206	11 4号性格不明遺構全景	211
5 84~91号土坑	207	12 4号性格不明遺構細部	211
6 92~98号土坑	208	13 出土遺物	212
7 59~65号溝跡全景	209		

第 2 編 桜町遺跡

〔挿 図〕

図 1 会津綱貫北道路路線図（湯川村）	39	図 9 1号周溝墓出土遺物（1）	52
図 2 調査範囲と工事計画図	40	図 10 1号周溝墓出土遺物（2）	53
図 3 大グリッド配置図	41	図 11 2号周溝墓	54
図 4 遺構分布図	44	図 12 2号周溝墓出土遺物	56
図 5 基本土層図	46	図 13 3号周溝墓	57
図 6 3号竪穴住居跡	47	図 14 3号周溝墓出土遺物	58
図 7 3号竪穴住居跡出土遺物	49	図 15 4号周溝墓	59
図 8 1号周溝墓	51	図 16 4号周溝墓出土遺物	61

図17	5号周溝墓	62
図18	5号周溝墓出土遺物（1）	63
図19	5号周溝墓出土遺物（2）	65
図20	6号周溝状遺構	67
図21	6号周溝状遺構出土遺物	68
図22	7号周溝墓・出土遺物	69
図23	8号周溝墓・出土遺物	71
図24	1号堅穴状遺構	73
図25	1号堅穴状遺構出土遺物（1）	75
図26	1号堅穴状遺構出土遺物（2）	76
図27	2号堅穴状遺構	77
図28	2号堅穴状遺構出土遺物（1）	78
図29	2号堅穴状遺構出土遺物（2）	80
図30	4号堅穴状遺構	81
図31	4号堅穴状遺構出土遺物	82
図32	5号堅穴状遺構	84
図33	5号堅穴状遺構出土遺物	86
図34	1号掘立柱建物跡	88
図35	2号掘立柱建物跡	89
図36	2号掘立柱建物跡出土遺物	90
図37	3号掘立柱建物跡	91
図38	4号掘立柱建物跡・出土遺物	92
図39	5号掘立柱建物跡・出土遺物	93
図40	6号掘立柱建物跡・出土遺物	95
図41	7号掘立柱建物跡・出土遺物	97
図42	8号掘立柱建物跡	99
図43	8号掘立柱建物跡出土遺物	100
図44	9号掘立柱建物跡・出土遺物	102
図45	10号掘立柱建物跡	104
図46	10号掘立柱建物跡出土遺物	105
図47	11号掘立柱建物跡	106
図48	12号掘立柱建物跡・出土遺物	107
図49	13号掘立柱建物跡・出土遺物	109
図50	14号掘立柱建物跡・出土遺物	111
図51	15号掘立柱建物跡、5・12号溝跡	112
図52	16号掘立柱建物跡・出土遺物	114
図53	17号掘立柱建物跡	116
図54	18号掘立柱建物跡・出土遺物	117
図55	1～4号土坑	142
図56	5・6号土坑	143
図57	7～11号土坑	144
図58	12～16号土坑	145
図59	17・18・20・21・23・25・26号土坑	146
図60	19・22・27・28・43号土坑	147
図61	24・29～31・33号土坑	148
図62	32・34～36・44号土坑	149
図63	37～42号土坑	150
図64	45～48号土坑	151
図65	49～55号土坑	152
図66	56～62号土坑	153
図67	土坑出土遺物（1）	154
図68	土坑出土遺物（2）	155
図69	土坑出土遺物（3）	156
図70	土坑出土遺物（4）	157
図71	土坑出土遺物（5）	158
図72	2～6・8・9・12号溝跡	163
図73	2～4・6・8・9号溝跡土層断面	164
図74	1・13～18号溝跡	166
図75	14・15号溝跡	167
図76	溝跡出土遺物（1）	168
図77	溝跡出土遺物（2）	169
図78	溝跡出土遺物（3）	170
図79	溝跡出土遺物（4）	172
図80	柱穴群A	174
図81	柱穴群B	175
図82	柱穴群出土遺物	176
図83	遺構外出土遺物（1）	179
図84	遺構外出土遺物（2）	180
図85	遺構外出土遺物（3）	181
図86	遺構外出土遺物（4）	182
図87	遺構外出土遺物（5）	184
図88	遺構外出土遺物（6）	185
図89	遺構外出土遺物（7）	189
図90	遺構外出土遺物（8）	190
図91	遺構外出土遺物（9）	191
図92	遺構外出土遺物（10）	192
図93	1・2号周溝墓遺物出土状況	198
図94	3・5号周溝墓遺物出土状況	199
図95	桜町遺跡出土弥生土器（1）	200
図96	桜町遺跡出土弥生土器（2）	201

[写真図版]

1 桜町遺跡遠景	215	38 11号掘立柱建物跡全景	233
2 1次調査区全景	215	39 9号掘立柱建物跡全景	234
3 調査区中央部全景	216	40 12号掘立柱建物跡全景	234
4 調査区南西部全景	216	41 13号掘立柱建物跡全景	235
5 調査区西端部全景	217	42 14号掘立柱建物跡全景	235
6 調査区中央部、5・9・13号 掘立柱建物跡周辺全景	217	43 15号掘立柱建物跡全景	236
7 3号竪穴住居跡全景	218	44 16号掘立柱建物跡全景	236
8 3号竪穴住居跡細部	218	45 17号掘立柱建物跡全景	237
9 1号周溝墓全景	219	46 18号掘立柱建物跡全景	237
10 1号周溝墓細部	219	47 1~7号土坑	238
11 2号周溝墓全景	220	48 8~14号土坑	239
12 2号周溝墓細部	220	49 16~22号土坑	240
13 3号周溝墓全景	221	50 23~31号土坑	241
14 4号周溝墓全景	221	51 32~39号土坑	242
15 5号周溝墓全景	222	52 40~47号土坑	243
16 5号周溝墓土層断面	222	53 48~50・52・54・56~58号土坑	244
17 5号周溝墓細部	223	54 59~62号土坑	245
18 6号周溝状遺構全景	223	55 1・2号溝跡	245
19 7号周溝墓全景	224	56 3~6・8号溝跡	246
20 8号周溝墓全景	224	57 7・9号溝跡	246
21 1号竪穴状遺構全景	225	58 5・10~12号溝跡	247
22 1号竪穴状遺構細部	225	59 14~18号溝跡全景	247
23 2号竪穴状遺構全景	226	60 15・17・18号溝跡	248
24 2号竪穴状遺構土層断面	226	61 1号周溝墓出土土器	249
25 4号竪穴状遺構全景	227	62 2号周溝墓出土土器	250
26 5号竪穴状遺構全景	227	63 3号周溝墓出土土器	250
27 1号掘立柱建物跡全景	228	64 5号周溝墓出土土器（1）	251
28 2号掘立柱建物跡全景	228	65 5号周溝墓出土土器（2）	252
29 2号掘立柱建物跡細部	229	66 6~8号周溝墓出土土器	252
30 3号掘立柱建物跡検出	229	67 3号竪穴住居跡出土土器	253
31 4号掘立柱建物跡全景	230	68 1号竪穴状遺構出土土師器	253
32 5号掘立柱建物跡全景	230	69 1号竪穴状遺構出土土器	254
33 6号掘立柱建物跡全景	231	70 2号竪穴状遺構出土土器	254
34 7号掘立柱建物跡全景	231	71 4・5号竪穴状遺構出土土器	255
35 8・10・14・16号掘立柱建物跡全景	232	72 掘立柱建物跡出土土器	255
36 10号掘立柱建物跡全景	232	73 土坑出土弥生土器・石鎌・土製筋錐車	256
37 8号掘立柱建物跡細部	233	74 土坑出土土器（1）	257
		75 土坑出土土器（2）	258

76	土坑出土木質遺物	258	83	遺構外出土弥生土器（6）	262
77	溝跡出土土器	259	84	遺構出土土師器・須恵器・ガラス製品	263
78	遺構外出土弥生土器（1）	260	85	出土弥生土器細部（1）	264
79	遺構外出土弥生土器（2）	260	86	出土弥生土器細部（2）	264
80	遺構外出土弥生土器（3）	261	87	出土墨書き土器（1）	265
81	遺構外出土弥生土器（4）	261	88	出土墨書き土器（2）	265
82	遺構外出土弥生土器（5）	262			

付編 1

〔写真図版〕

写真1	鏡面付着布	268	写真3	鏡背付着布の繊維断面	270
写真2	鏡背付着布	269			

付編 2

〔表〕

表1	測定試料及び処理	271	表2	放射性炭素年代測定及び 暦年代較正の結果	272

〔挿 図〕

図1	暦年代較正結果（1）	273	図3	暦年代較正結果（3），測定試料	275
図2	暦年代較正結果（2）	274			

序 章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

会津縦貫北道路（地域高規格道路）は、喜多方市閑柴町大字西勝から耶麻郡塙川町・河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字木流の2市1町1村に至る延長13.1kmの4車線自動車専用道路である。平成8年度に都市計画道路の決定が行われ、平成9年度から建設省（現国土交通省）直轄事業として進められている。

この事業は喜多方市と会津若松市の会津北部地域の縦軸を強化し、「会津地方拠点都市地域」・「会津リフレッシュ構想」・「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジェクトを支援し、会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成により、会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ、産業・経済の発展が期待される。将来的には北へ向かっては東北中央道路の米沢IC（仮称）と、南では会津縦貫南道路（会津若松～田島：約50km）を経て、栃木西部・会津南道路（田島～栃木県今市市：約60km）と結ばれる計画である。

第2節 調査経過

1. 平成16年度調査までの経過

会津縦貫北道路路線内に所在する埋蔵文化財の保護にかかる調査については、福島県教育委員会が平成9年度から財團法人福島県文化振興事業団に委託している。

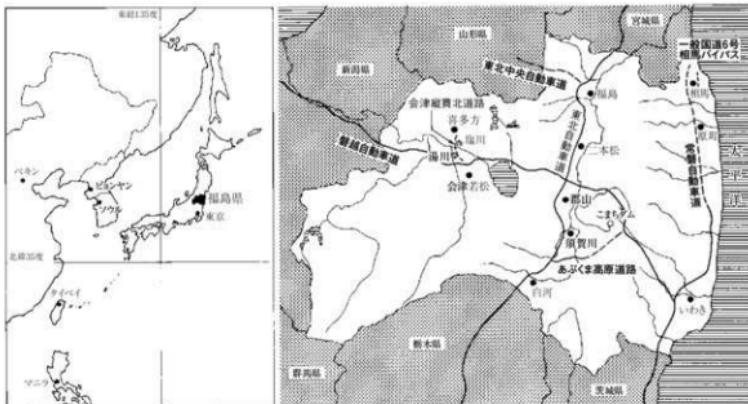


図1 会津縦貫北道路位置図

【分布調査】埋蔵文化財の調査は、平成9年度県内遺跡分布調査の表面調査から始まっている。表面調査は計画路線図を基に、喜多方市から会津若松市までの延長約12.3km・幅150mを対象として平成9年11月12日～26日まで実施し、新発見遺跡の他に周知の遺跡についても遺跡範囲の再確認を行った。なお、表面調査は当初、道路予定全区間を対象に計画したが、会津若松市中沼地区12haについて諸事情から除外した。調査の結果、2市1町1村で21遺跡と遺跡推定地3箇所を確認し、その詳細を『福島県内遺跡分布報告4』に報告した。

表面調査の結果を基に当事業では平成12年から試掘調査が実施される。初めに建設工事の優先箇所となる塙川町遠田地区的麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100m²を対象に実施された。この調査結果は、『福島県内遺跡分布報告7』に所収され、麻生館跡は館跡関連の遺構と奈良・平安時代の集落跡、荒屋敷遺跡は平安時代を中心とした遺構・遺物が検出され、両遺跡とも保存必要面積が確認されている。なお、同年には当事業に伴う付帯工事のため塙川町教育委員会でも試掘調査が実施されている。

その後、荒屋敷遺跡については、平成13・14・16年に工事計画と土地買収の進捗にあわせて試掘調査が実施され、各年度の対象面積は7,500m²・5,900m²・1,000m²となっている。調査成果は、『福島県内遺跡分布報告8・9・11』に所収した。各年度において平安時代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、保存必要面積が確認されている。

桜町遺跡については平成15年度に46,500m²、16年度に25,500m²を対象に試掘調査が実施された。調査成果は、『福島県内遺跡分布報告10・11』に所収し、いずれも弥生時代終末から平安時代にかけての遺構・遺物が検出され、保存必要面積が確認されている。

【発掘調査】発掘調査は平成13年度から開始された。13年度は麻生館遺跡6,200m²と荒屋敷遺跡9,700m²を対象に調査を実施した。麻生館遺跡では平安時代の集落と中世の屋敷跡が確認され、その成果を『会津綾貫北道路遺跡発掘調査報告1』として報告した。荒屋敷遺跡では竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡などの遺構と、かわらけ・白磁・青磁・中世陶器など12～13世紀の遺物が出土し、その成果を『会津綾貫北道路遺跡発掘調査報告2』として報告した。

平成14年度は荒屋敷遺跡2,100m²を対象に調査が実施された。調査区は13年調査区の東側にあたり、13年度調査と同様に平安時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多く検出された。中でも12世紀代を中心とする貿易陶磁器や在地系土器は、質・量共に県内でも良好な資料であり、遺跡の性格としては日橋川沿いの自然堤防上に立地する「川湊」と判断されている（『会津綾貫北道路遺跡発掘調査報告3』）。

平成15年度も引き続き荒屋敷遺跡の調査が行われ、その対象面積は2,600m²である。調査では中世と考えられる屋敷跡の一部が確認され、その成果を『会津綾貫北道路遺跡発掘調査報告4』として報告した。

なお、以上のはかに荒屋敷遺跡については塙川町教育委員会による農道・用水路部分等の発掘調査が3回なされており、事業団調査箇所と連続する遺構等が確認されている。

2. 平成16年度の調査経過

本年度の発掘調査は、福島県教育委員会より桜町遺跡が4月23日付け、荒屋敷遺跡が7月23日付けで指示された。調査面積は4,300m²と1,700m²を対象として実施した。発掘調査に先立って、国土交通省東北整備局郡山国道工事事務所・福島県喜多方建設事務所・福島県教育庁文化財グループ・財福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課の4者で協議し、現状確認・調査範囲の確認・路線幅の確認・排土置き場確認・調査事務所位置の確認をした。なお、作業員の採用に際しては遺跡の所在する湯川村教育委員会と塙川町教育委員会の協力を得た。

桜町遺跡は広大な面積を有する遺跡であるが、今回の調査は平成15年度の試掘調査で確認された範囲の南側部分4,300m²を対象として5月から実施した。調査では県内で最古段階と考えられる方形周溝墓群や平安時代の集落跡が確認されるなど、大きな成果があった。

荒屋敷遺跡は調査の優先順位は高かったが、試掘調査を実施して面積を確定した後に、調査を実施するという段取りであったために、発掘調査の開始は7月に入りながらであった。調査ではこれまでに確認されていた遺構と同様に、平安時代から中世にかけての土坑・溝跡などが検出された他に、弥生時代終末から古墳時代にかけての方形周溝墓が検出されるなど新たな発見もあった。

第3節 遺跡の位置と自然環境

福島県は、東北地方の最南端に位置し、県としては岩手県に次いで全国2番目の13,782km²の面積を持つ。県土のおよそ8割は山地で占められ、東は太平洋に面し、中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖がある。また阿武隈川・久慈川・阿賀川など大きな河川も流れている。東部には太平洋岸に沿って阿武隈高地、中央部には磐梯吾妻を含む那須火山帯に属する奥羽山脈が南北に連なり、西に越後山脈が迫っている。これらの山地山脈により、県全体は3つの地方に区分される。太平洋に面した浜通り地方、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ阿武隈川の流れに沿って広がる中通り地方、新潟県境に連なる越後山脈と奥羽山脈間の高原、盆地を含めた会津地方である。

県内3地方の気候はそれぞれ大きな違いがあり、浜通りは海洋性気候、会津地方は内陸性気候を示す。会津地方の冬は寒冷で積雪が多く、山間部では数mに及ぶことが多い。春は雪解け水により河川が増水するが、治水工事が発達している現在では被害は少ない。梅雨時は中・浜通りと比較すれば好天の日が多く、降水量もあまり多くない。夏は高温多湿であり、雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し、時として視界が大変悪くなり交通事故等の原因にもなる。

荒屋敷遺跡・桜町遺跡が所在する耶麻郡塙川町・河沼郡湯川村は、南北に隣り合う町村であり、地質学上は西南日本内帯の東端に位置し、南北およそ30km、東西およそ12kmの南北に長い形状を示す会津盆地のはば中心に当たる。盆地の地表部は、北からは湯川、東からは猪苗代湖を源流とする日橋川、南からは南会津の山々を源流とする阿賀川（大川）とその支流が葉脈状に盆地内を西進している。これらの河川により盆地内は、周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ、なだら

かな沖積平野および扇状地を形成している。これらの堆積物は、年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は喜多方市慶徳町付近で一つに合流し、阿賀川（大川）となって越後山地の地峡をさらに西進し、新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟市から日本海に注ぐ。

会津盆地の地質は、東の奥羽山脈等の山々は新第三紀層を基岩とし、南部の会津若松市南東域では背炙山安山岩、北部の塩川～喜多方市東部では猫魔ヶ岳火山噴出物が地表を覆っている。西の越後山地等は、新第三紀鮮新世および第四紀更新世の堆積岩層を基岩とし、只見川流域には沼沢火山噴出物（約5,000年前）が堆積する。地質調査の柱状図では、地下15mくらいまで埋もれ木の存在が認められ、沖積層の深さは約150m、その下には七折坂層の凝灰岩層が確認されている。

この他、盆地の南東部および北西部にはそれぞれ南北に断層が走るが、この断層は有史以来しばしば活動している。特に、江戸初期の慶長16（1611）年の大地震では、慶徳町付近の地峡で崩落および断層隆起があり、阿賀川が堰き止められて「山崎新湖」が形成され、標高175m以下の付近の集落（12村ほど）が水没して多大な被害を生じ、元通りに開削するまでに約40年もの年月を要したことが記録として残っている。

第4節 周辺の遺跡と歴史的環境

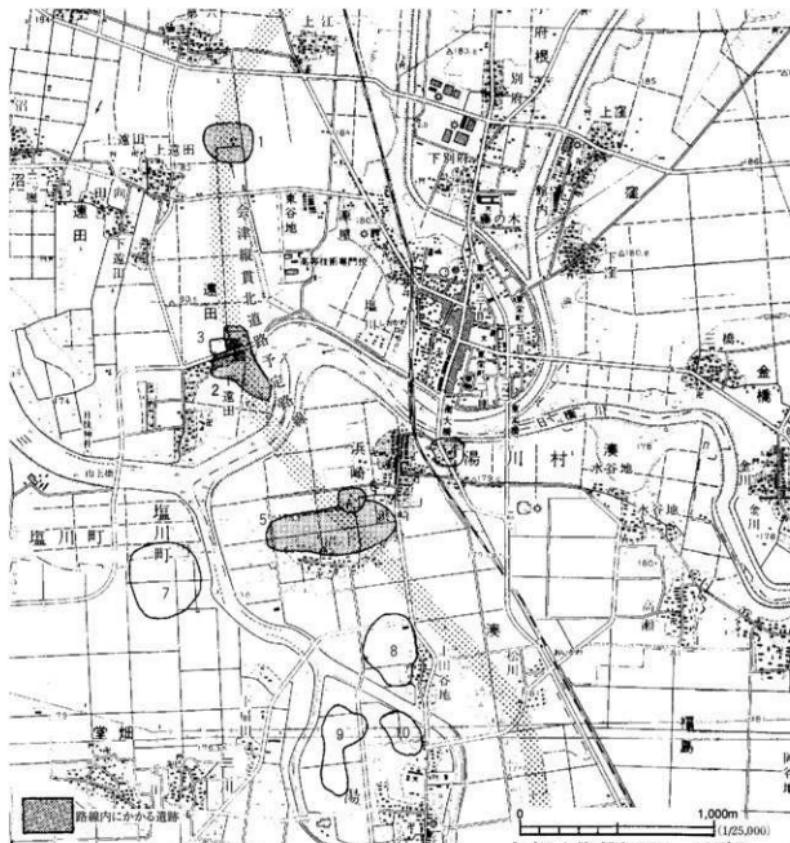
塩川町・湯川村の、歴史的環境について『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』（1984・10刊行）・『福島県遺跡地図』（1996・3刊行）・最近の文化財調査報告書・町村史を参考に概観していく。

旧石器時代の遺跡・遺物は現在まで両町村内では確認されていない。近隣では旧石器時代後期の遺跡として西会津町山本遺跡や高郷村塙坪遺跡がある。

縄文時代の遺跡は、塩川町では東部にある標高1,271.2mの雄国山の西側山麓を中心に数多く発見されている。地形的には西側に広がる扇状地の扇尖から扇端に分布する傾向にあり、遺跡地図には11ヶ所が確認されている。これらの遺跡の中で、常世原田遺跡は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文系土器群で「常世式期」の標識遺跡である。常世式土器は、貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と底部が乳房状を呈する尖底土器等の特徴を持ち、その分布は広く東北地方一円に及んでいる。この他に、上ノ台・南原・堀込・大原・森台・鶴塚遺跡などがある。湯川村では縄文時代の遺跡発見例は少なく、前期後半段階の西川原北遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、塩川町内平坦部の沖積地に立地する館ノ内・堂後・村南・長内・高畠遺跡から土器片が出土している。まだ本格的な調査が実施されておらず、遺跡の性格や時期等は不明点が多い。湯川村においても状況は変わらず、弥生時代後半段階と考えられる資料が南オダン遺跡などで少量表採されている。

古墳時代に入ると会津盆地内でも数多くの古墳が築造されており、周辺の開発が進み支配階級の台頭が著しい時期である。会津盆地内では、前期の古墳群として塩川町から喜多方市周辺の深沢・田中舟森山・觀音森（竹屋古墳群）・高森山古墳・十九塙古墳群等が、会津若松市周辺では会津大



No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	備考
塩川町	1 麻生館遺跡	40300049	塩川町 遠田字浅生館	平安・中世	H13発掘調査
	2 荒屋敷遺跡	40300073	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文・古墳	H13~15発掘調査
	3 下遠田館跡	40300050	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世	
	4 浜崎城跡	42200001	湯川村 浜崎字北殿町	中近世	
湯川村	5 沼ノ上遺跡	42200020	漆字沼ノ上	奈良・平安	
	6 漆崎館跡	42200029	漆字宮前	中世	
	7 北田館跡	42200002	三川字大館	中世	
	8 上田谷地遺跡	42200021	漆字上田谷地	奈良・平安	
	9 下川原遺跡	42200022	笈川字下川原	奈良・平安	
	10 西川原北遺跡	42200023	笈川字西川原	奈良・平安	

図2 荒屋敷遺跡と周辺の遺跡位置図・一覧表



No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	備考
湯川村	桜町遺跡	42200030	湯川村 大字桜町字中町	弥生～平安	
	下樽川西遺跡	42200024	笠川字下樽川	奈良・平安	
	殿田遺跡	42200026	笈川字殿田	縄文	
	作園遺跡	42200009	田川字作園	奈良・平安	
	畠田遺跡	42200010	清水田字畠田	奈良・平安	
	上樽川遺跡	42200027	田川字上樽川	奈良・平安	
	米丸館跡	42200016	清水田字堂北	中世	
	堂北遺跡	42200012	清水田字堂北	奈良・平安	
	一本木遺跡	42200013	熊ノ目字一本木	奈良・平安	
	熊川館跡	42200017	熊ノ目字館ノ内	中世	
	中ノ目館跡	42200015	熊ノ目字南田中	中世	
	村前遺跡	42200014	清水田字村前	奈良・平安	
	笠ノ目館跡	42200011	清水田字堂前	中世	

図3 桜町遺跡と周辺の遺跡位置図・一覧表

塚山・堂ヶ作山古墳等が、会津坂下町では亀ヶ森・鎮守森古墳等が分布している。これらの古墳分布から会津盆地には、盆地東部・北西部・北東部に大きな勢力を持つ豪族の存在が考えられてきた。近年、塙川町館ノ内遺跡から2基の方形周溝墓が発見されている。共に一辺10m程の規模で周溝のみの確認であったが、いずれも四隅が張り出す平面形態を示しており、周溝内からは北陸系土器も出土している。これらの特徴から山陰・北陸地方で確認されている「四隅突出型埴丘墓」の影響が推定され、本報告書所収の桜町遺跡と同様に東北地方における最古段階の周溝墓と考えられている。このような古墳を形成する有力者の出現の背景には、会津盆地北部の地域が濁川・田付川・姥堂川・大塩川・日橋川等の中河川の洪水等がもたらした肥沃な土壤が生産性の高い地域を形成していたからと考えられる。

次の中期～後期の古墳は、前期古墳同様に雄国山麓の末端部に数多く築造されており、七ツ壇・金森・狐壇・松崎・前畠・常世竹花・茶臼森古墳、明蓮寺・深沢前山古墳群などが確認されている。また、中通り地方で特色的な横穴墓の発見例は少なく、盆地西側の丘陵縁部に分布している喜多方市山崎横穴群や盆地東側の丘陵縁部に分布する河東町駒板新田横穴群等があるものの概して会津盆地では5地点と少ない。

古墳時代の集落跡では、塙川町の西側の沖積地に前期の内屋敷遺跡と中期の豪族（首長）居館跡とされる古屋敷遺跡があり、盆地平坦部の鶴塚遺跡や館ノ内遺跡などが後期の集落跡として確認されているが、町内に多くの古墳群が築造されているのに比べて現在のところ集落跡の数は少ない。今後の可能性として阿賀川（大川）に注ぐ中小河川流域の自然堤防や沖積地に集落遺跡の発見が期待される。

奈良・平安時代に入ると、律令体制の地方浸透に伴い安定した社会が形成されたものと考えられ、会津盆地内では集落跡を中心として遺跡の数は増加する。沖積地にも遺跡が多く分布しており、盆地平坦部の田付川沿いに位置する鏡ノ町A遺跡を中心に館ノ内遺跡をはじめとして、古屋敷・鶴塚・墓ノ前・鏡ノ町B・妙見・内屋敷・沼の上遺跡などが確認されている。鏡ノ町遺跡Aからは、数多くの建物や倉庫群、そして奈良三彩小壺や瓦塔片等の遺物が出土しており、地方官衙に関連する在庁官人の居宅跡と推定されている。桜町遺跡の東1.2kmに位置する河東町郡山遺跡は、近年実施された発掘調査により会津郡衙（会津柵）と推定されている。なお、湯川村の勝常寺は、磐梯町の恵日寺とともに、德一によって開かれたとされる記録が残っている。

武家社会が成立した中世には、新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では、三浦蘆名氏の勢力が伸び、その一族が各地を領していくと考えられている。塙川町・湯川村も位置的に北田城の北田氏と、新宮城の新宮氏の支配下にあったものと推定される。中世以降には城館跡を中心とした遺跡が町内外で多く確認されており、麻生館遺跡近隣には沖館跡・上江館跡が、荒屋敷遺跡近隣には下遠田館跡・新屋敷跡が所在している。城主名は記録も少ないが、沖館跡には山口沙弥道光、上江館跡には栗村彈正清政、下遠田館跡には三橋備前定重と二男の刑部重治との伝承が残っている。本年度発掘調査を実施した荒屋敷遺跡でも貿易陶磁器である青磁・白磁が出土してお

り、当時の日本海側での海運の発達を会津盆地の遺跡でも検証することができる。

戦国時代に入ると、会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いであり、文亀2（1502）年には常世・三橋など会津盆地北東部の在地領主らが追い払われ、天文年間（1532～1554年）には、会津地方の領主達の殆どは蘆名氏に服属し、蘆名氏は盛氏の時代に全盛期を迎える。その後、蘆名氏は内部で支配体制の矛盾が顕在化したり、家督相続や重臣間の対立が深まって、しだいに家勢も衰えてきた。天正17（1589）年6月には蘆名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが行われ、伊達政宗が勝利した。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗により、金川・三橋・塩川などが片倉景綱へ安堵されている。その後、豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は、蒲生氏郷・秀行から上杉景勝と支配者が変遷し、関ヶ原の戦いを迎える。遺跡の周辺には、中世～近世にかけての塚・供養塔・石造物等が建立されており、当時の人々の信仰に関連する遺構が多数残っている。

近世（江戸時代）に入り幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し、会津藩でも上杉景勝から蒲生秀行（再蒲生）・忠郷、加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科（松平）氏の治世を迎え、明治時代に至る。

(安 田)

引用・参考文献

- | | | |
|-------------|----------|------------------------------------|
| 井 慶治 他 | 2003 | 「会津縱貫北道路遺跡発掘調査報告2」福島県教育委員会 |
| 井 慶治 他 | 2004 | 「会津縱貫北道路遺跡発掘調査報告3」福島県教育委員会 |
| 井 慶治 他 | 2004 | 「会津縱貫北道路遺跡発掘調査報告4」福島県教育委員会 |
| 井 慶治 他 | 2005 | 「福島県内遺跡分布調査報告11」福島県教育委員会 |
| 小山正忠・竹原秀雄 他 | 1997版 新版 | 標準土色帖 |
| 香川 懈一 他 | 2001 | 「福島県内遺跡分布調査報告7」福島県教育委員会 |
| 香川 懈一 他 | 2004 | 「福島県内遺跡分布調査報告10」福島県教育委員会 |
| 塩川町史編纂委員会 | 1966 | 『塩川町史』 塩川町 |
| 鈴木 敬治 他 | 1973 | 「喜多方地域の地質」 福島県 |
| 福島県教育委員会 | 1988 | 『福島県の中世城館跡』 |
| 福島県教育委員会 | 1996 | 『福島県遺跡地図 会津地方』福島県 |
| 藤谷 誠 他 | 1998 | 『福島県内遺跡分布調査報告4』福島県教育委員会 第342集 |
| 文化6年会津藩福 | 1983 | 『新編会津風土記』雄山閣 |
| 森 幸彦 他 | 1999 | 『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』福島県立博物館 |
| 湯川村教育委員会 | 1994 | 『湯川村史』湯川村 |
| 横須賀 優達 他 | 2002 | 「会津縱貫北道路遺跡発掘調査報告1」福島県教育委員会 |
| 和田 聰 | 2002 | 「荒屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書10』塩川町教育委員会 |
| 和田 聰 他 | 2004 | 「内屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書12』塩川町教育委員会 |

第1編 荒屋敷遺跡(4次)

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置

荒屋敷遺跡は那麻郡塩川町大字遠田字荒屋敷に所在し、会津盆地のほぼ中央部に位置している。北緯37度35分55秒、東経139度52分50秒（世界測地系）である。

荒屋敷遺跡周辺は、南流する大塩川・姥堂川が日橋川に合流し、南からは濁川が日橋川に注ぐ場所である。日橋川は最終的に喜多方市慶徳町付近で阿賀川へ注いでいる。阿賀川は喜多方市の西市街地を流れる濁川・田村川、会津坂下町では鶴沼川や南会津地域を流れてきた只見川と合流している。阿賀川は越後山地をさらに西流し、新潟県に入ると阿賀野川と名称を変えて日本海に注いでいる。このように塩川町周辺は、会津盆地を取り巻く山地を源流とする大小の河川が一つに合流する地形となっている。これらの河川に運ばれた堆積物により、広く肥沃な沖積平野と扇状地を形成しているのである。

荒屋敷遺跡は、現在は日橋川北岸に位置し、大塩川と姥堂川が合流した日橋川が南側に流れを変えて蛇行する部分にある。また遺跡周辺は河川の合流点が近いことから、増水などでたびたびその流れを変えている。明治時代に作成された丈量図によると、蛇行する低湿地などが見られ日橋川が流路を大きく変えていることがうかがえる。荒屋敷遺跡の南部についても日橋川の蛇行により大きく削平されているのであろう。

遺跡周辺の地質は完新世の堆積物からなり、氾濫原堆積物と段丘・扇状地堆積物が接する部分にある。そのため遺跡の南東部は旧河川の流路、北西部は自然堤防状の微高地となる。標高は175～178mで、日橋川に向かって南に緩やかに傾斜した地形となっている。

平成16年度の荒屋敷遺跡（4次調査）の調査範囲は、遺跡全体から見れば中央北寄りの範囲にあたり、遺跡を南北に分断する県道会津坂下・塩川線のすぐ南側に位置している。これまでの調査範囲との位置関係では、1次調査区（平成12年度）の北西端と接する位置にあり、一部は塩川町教育委員会が実施した発掘調査（1次調査）とも接している。全体的には自然堤防状の平坦地が日橋川に向かって低く傾斜する部分にある。平坦地の標高は177.5m～178mで、調査区南端部は176mとなる。調査区北側の平坦面とは1.5mほどの落差をもって1次調査区へと続いている。

荒屋敷遺跡は、日本海と会津地方を結ぶ阿賀川とそこに流れ込む大小の河川が合流する場所に位置している。このような立地条件からすれば、舟など河川を利用し水上輸送が存在していたことは想像に難くない。荒屋敷遺跡の主体となる中世でも同様で、「会津綾貫北道路遺跡発掘調査報告3」で指摘する「船着場」・「川湊」が存在し、出土遺物では貿易陶磁器や珠洲系陶器がこれらを示す資料となる。今回の4次調査で確認された溝跡なども1次調査の多くの溝跡と同様に用・排水路と考えられ、「川湊」周辺の自然堤防状平坦地までも開発が及んでいたことを示している。

第2節 調査経過

平成16年度の荒屋敷遺跡の調査は、福島県教育庁文化財グループ、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団による協議を重ね、県道会津坂下・塩川線より南側の未調査範囲を対象とした試掘・発掘調査を実施することが確認された。6月上旬に試掘調査を行い調査面積が確定することが取り決められた。

6月上旬に実施した試掘調査の結果から、未試掘範囲を含めて3,900m²が保存対象となった。発掘調査に先立つ協議により、会津継貫北道路遺跡発掘調査にかかる契約面積6,000m²のうち、既に桜町遺跡において4,300m²の指示を受けて発掘調査に着手していることから、荒屋敷遺跡は保存対象のうち県道会津坂下・塩川線の南側、1,700m²を調査対象とすることが決められた。その後、廃土置き場や駐車場の確保など調査の実施に関わる条件が整い、7月23日付で調査指示された。

荒屋敷遺跡の4次調査にあたっては、平成16年8月3日から10月1日の期間に実施した。8月上旬は重機による表土除去が中心となる。同月4日からは作業員を投入した。盆休みとなることから、機材倉庫・仮設トイレを設置するほか、周辺の環境整備など調査の準備作業を実施する。

8月下旬は、遺構検出作業を実施し、本格的な調査に移行する。調査区北側の平坦面を中心に、土坑や溝跡を確認した。溝跡や土坑が重複する状況も確認できたが、全体的には遺構の密度は極めて低いことが分かる。調査区東端で確認した4号性格不明遺構からは弥生土器が少量出土した。荒屋敷遺跡では、今回の調査で初めて弥生時代の遺構を確認した。

9月中旬は遺構の確認作業と併行して、調査区内で新しい時期の溝跡から調査に着手する。なかでも61号溝跡の調査では、調査区北端に近い部分から銅鏡が出土した。銅鏡の年代は、溝跡から出土した土器などから平安時代から中世と考えている。1～2次調査で確認されている大型建物跡や銅鏡の出土からも、集落内における宗教関連建物の存在を裏付ける遺物と考えられる。

9月中旬から下旬は、調査区南端部の遺物包含層の調査に着手する。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影や遺跡の全体地形測量を実施する。

10月1日にはすべての調査を終え、福島県教育庁文化財グループによる調査終了の確認をし、国土交通省郡山国道事務所に引渡した。その後、調査範囲の重機による埋め戻しを実施し、郡山国道事務所喜多方出張所の確認を得て、本年度の調査を完了した。

第3節 調査方法

平成16年度の荒屋敷遺跡の調査は、平成12年からの継続調査で、その4次調査となる。遺構や遺物の位置などの記録についても、前年度までに設定されている国土座標IX系のグリッド網を基準としている。グリッド原点はX：176,230.00、Y：4,160.00で、これを基準点として5m四方のグリ

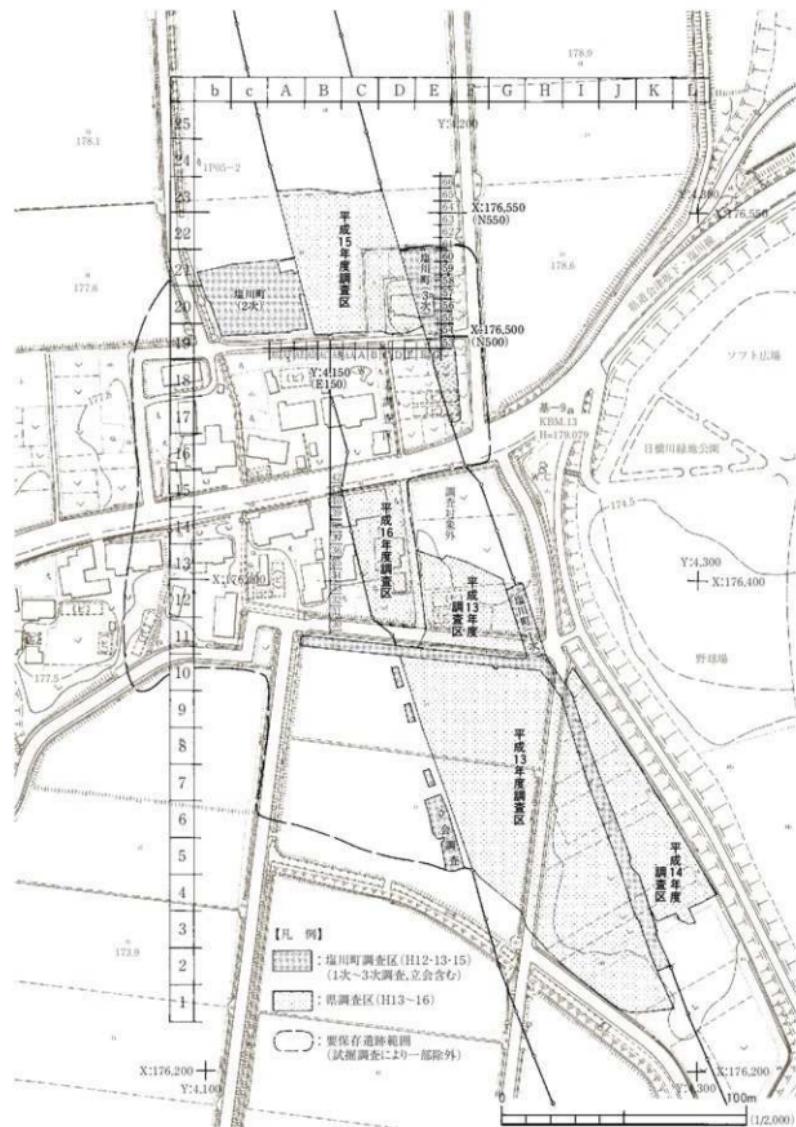


図1 調査範囲とグリッド配置図

ツを遺跡全体に設定した。記録にあたっては、5mグリッドを基に1m方眼に細分し、その交点を測点とした。地点の表記は国土座標のX・Y座標をそれぞれN（北）・E（東）に置換し、下3桁を表記した。グリッド原点はN230、E160となる。また荒屋敷遺跡はこれまでの会津継貫北道路建設事業に伴う発掘調査のほかに、塩川町教育委員会による県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が3次に渡って実施されている。この塩川町教育委員会の調査は、グリッドの設定基準が異なるが国土座標IX系を基準としている点では同様である。これらのグリッド設定法の違いについては、『会津継貫北道路遺跡発掘調査報告4』に図示している。

調査区の表土除去は重機を用いた。調査区の大半が宅地であったため盛土や搅乱が多く、調査区北側の平坦面では遺物を含む堆積土が確認できない。そのため遺跡の基盤層となるLV上面まで掘り下げた。また調査区南部は、谷状地形となり遺物包含層をわずかに確認した。遺物の出土量は少ないが、盛土は重機で除去し、それ以降は人力で遺物の包含状況を確認しながら掘り下げた。

遺構の精査では、その特徴や出土遺物の状態にあわせて土層観察用の畦を設け精査・記録をした。なお堆積土の観察には「新版標準土色帖」（1997年版）を用いた。遺構外の堆積土にはアルファベットLとローマ数字を組み合わせてL I・L II・・・、遺構内の堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせℓ 1・ℓ 2・・・と表記した。

図面記録については、各遺構の図化は平面図・断面図とともに1/20の縮尺で記録したが、遺構の性格や規模などから、溝跡などは1/40で記録している。また遺跡の全体図は1/100で記録した。

写真記録は調査の進捗状況に合わせ、調査過程に応じて随時撮影している。カメラは35mm判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットで撮影した。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は、財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は出土遺物・記録などの各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で、財團法人福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する。

引用・参考文献

- 小山正忠・竹原秀雄他 1997版 新版 標準土色帖
和田 聰 2002 「荒屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告第10集』塩川町教育委員会
和田 聰・植村泰徳 2004 「荒屋敷遺跡（3次調査）」塩川西部地区遺跡発掘調査報告8
『塩川町文化財調査報告第13集』

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺構の分布と出土遺物（図2、写真1・2）

荒屋敷遺跡4次調査で確認した遺構は、土坑14基、溝跡7条、性格不明遺構2基と柱穴群である。これまでの1～3次調査と塩川町教育委員会の発掘調査成果と併せると、竪穴状遺構3基、掘立柱建物跡12棟、柱列跡2列、土坑116基、溝跡88条、性格不明遺構4基、柱穴が多数となる。

今回の調査で確認した遺構の分布は、調査区北側の平坦面でもその西側付近に集中している。遺構の重複関係と出土遺物などから大まかに9世紀代を中心とした土坑群、中世以降の溝跡・柱穴群・3号性格不明遺構の2時期に大別できる。土坑群はいずれも浅く、明確な性格は不明であるが、97号土坑は土器廐棄坑の可能性が高い。溝跡群では、基本的には自然堤防状平坦地の排水を意図した溝跡と考えられる。中でも61号溝跡からは銅鏡が出土することから、近くに宗教関連の建物群の存在が想定できる。柱穴群は61号溝跡の西側に集中する傾向が見られるが、明確な建物を確認できない。調査区外となる西側に建物群が存在するのであろう。

調査区東側では、4号性格不明遺構を確認したのみである。これより東部分は試掘調査時に遺構・遺物が遺存していないことが確認され、調査範囲から除外された部分となる。一部弥生時代の周溝墓とする指摘もあるが、全体像が把握できないことから、ここでは性格不明遺構としておく。

出土遺物は溝跡から出土したものが大半を占める。また遺構外では調査区北西側で遺構が集中する範囲と調査区南部に若干の集中が見られる程度である。

2. 基本土層（図2、写真4）

遺跡内の基本土層は、基本的にはこれまでの1～3次調査までの調査成果に準拠している。しかし、今回の4次調査区は現況が宅地であったため、盛土や削平が著しく、南側に接する1次調査区の基本土層と比べると、LⅢ～LⅣとした褐色土系の堆積土は確認できないなど、若干の相違が見られた。以下4次調査区の基本土層について述べる。

LⅠ—調査区全体を覆う表土・盛土・耕作土など一括して表記した。調査区南部は宅地造成時に1m以上の厚い盛土がされている。

LⅡ—黒褐色土で、調査区全域で確認できる。層厚約20cmである。基本的には旧表土層と判断した。遺物は1次調査のような中世～近世の遺物が多いという明確な違いが見出せず、弥生土器・土師器等をごく少量含む程度である。この土層上面で遺構は確認していない。

LⅤ—黄褐色粘質土で、遺跡の基盤層となる。遺構はこの上面で確認している。これより下層は無遺物層となる。

第1編 荒屋敷遺跡

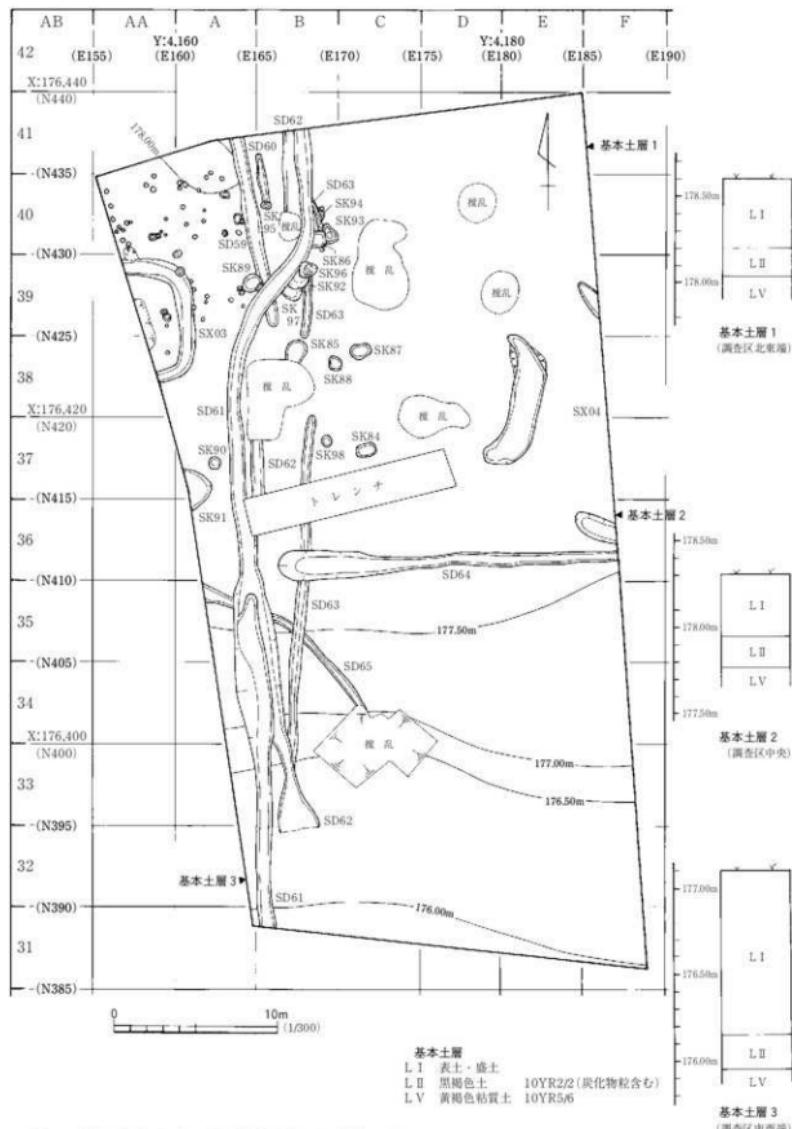


図2 荒屋敷遺跡（4次）遺構分布図・基本土層

第2節 土 坑

4次調査で確認した土坑は、84~98号土坑である。分布状況は調査区北西側の平坦面に集中している。土坑の多くは年代や性格は不明であるが、97号土坑からは9世紀中葉頃の遺物がまとまって出土し、土器などの廐棄坑と推定される。

84号土坑 S K84 (図3, 写真5)

本遺構は調査区中央部、C37グリッドに位置し、標高177.7mの平坦地に立地する。遺構検出面はLVの上面である。平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は長軸が1.16m、短軸が0.71m、深さが0.15mである。周壁は急峻な立ち上りだが、特に西壁が垂直気味となる。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黄褐色粘土塊が混入することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑からは平安時代の土師器片が十数点出土したが、いずれも摩滅した小破片である。その他に「寛永通宝」が2枚出土している。本土坑の年代や性格は不明である。

85号土坑 S K85 (図3, 写真5)

本土坑は調査区北東、B38グリッドに位置する。調査区内で最も遺構が密集する部分となる。遺構検出面はLV上面である。平面形は南端部を搅乱により失っているが、不整な梢円形と推定できる。規模は長径が1.44m、短径が1.18mで、検出面からの深さは0.12mである。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが、土質が均質となることから自然堆積と判断した。

本土坑からは土師器片・須恵器片が各数点出土している。土坑の性格については、それを特定できる所見は得られず不明である。周辺の遺構分布からすれば平安時代に属する可能性が高い。

86号土坑 S K86 (図3・5, 写真5)

本土坑は調査区北西部、B40グリッドに位置する。周辺遺構との重複関係を整理すると、61・63号溝跡よりは古く、93号土坑より新しい。平面形は整った方形になる。規模は南北軸で1.24m、東西軸は0.84m、深さは0.1mと浅い。周壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、わずかに西に傾いている。遺構内堆積土は黄褐色土粒を多量に含む黒褐色土で、人為堆積と判断した。

本土坑からは、弥生土器や土師器片が十数点出土している。図5-1は土師器で、長胴壺の底部破片である。ロクロ成形であるが、体部下半にタタキ調整を施し、小さい底部を造りだしている。周辺の土坑との関連からすれば、平安時代と推定されるが、その性格は不明である。

87号土坑 S K87 (図3, 写真5)

本土坑は調査区の北西側、C38グリッドに位置する。遺構検出面はLVである。重複する遺構は

ない。平面形は不整な梢円形で、規模は長径1.28m、短径0.82m、深さは0.17mである。底面は東側が一段深くなる。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とした2層に分け、2層は黄褐色土塊を多量に混入することから人為堆積と判断した。

本土坑は弥生土器の小破片1点が出土しただけであるため、その年代や性格は特定できない。

88号土坑 S K88（図3、写真5）

本土坑は調査区北西部、B38グリッドに位置する。遺構はLV上面で確認した。平面形は北西端が歪んだ長方形になる。規模は長辺が0.83m、短辺が0.72m、深さは0.15mと浅い。周辺の土坑群と同様に浅く遺存状態が悪いが、底面は西側がわずかに低くなる。遺構内堆積土は黄褐色土塊を多量に含んだ黒色土で、人為的に埋め戻されたものと判断した。

本土坑は出土遺物もなく、年代や性格を特定できない。

89号土坑 S K89（図3、写真5）

本土坑は調査区北西部、A39グリッドに位置する。59号溝跡、A39G P 8、B39G P 2と重複し、いずれよりも古い。平面形は梢円形で、規模は長径が1.2m、短径が1.05mで、深さは0.18mと深い。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。堆積土は黒褐色土の単層であるため、堆積状況については不明である。

本土坑からは土師器杯の小破片が数点出土しているが、年代や性格については不明である。

90号土坑 S K90（図3、写真5）

本土坑は調査区西側の中央付近、A37グリッドに位置している。平面形は梢円形である。規模は長径が0.75m、短径が0.65mを測り、深さは0.13mと浅い。南西側の周壁がやや乱れて、その上半部は緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は灰色砂質土を含む黒褐色土の単層であるため、その堆積状況は不明である。

本土坑は出土遺物もなく、その年代や性格を特定できない。

91号土坑 S K91（図3、写真5）

本土坑は調査区西端の中央部、A36・A37グリッドに位置する。遺構の大半が調査区外へと統くため、その全容は把握できない。調査区境の断面観察では、LVを掘り込んで造られていることが分かる。確認できた土坑の特徴については、平面形が梢円形と推定される。規模は南北軸で2.35m、東西軸では2m以上を測る。深さは0.2mと浅い。遺構内堆積土は灰色砂質土を含む褐灰色粘質土である。単層であるため自然堆積か否かは不明である。底面の南東隅付近で、直径20cmほどの小穴が1基確認できる。小穴の機能は、それを特定できる所見は得られていないため不明である。

本土坑は出土遺物がなく、その年代や性格については不明である。

92号土坑 S K92 (図4, 写真6)

本土坑はB39グリッドに位置する。周辺は、調査区内で遺構が最も重複する部分であり、本土坑との重複関係を整理すると、61・63号溝跡よりも古く、96・97号土坑よりも新しい。平面形は重複する溝跡に壊されているが、楕円形になると推定される。規模は長径が1.52m、短径は約1mを測り、検出面からの深さは0.18mと浅い。周壁は南部が乱れて緩やかに立ち上がる。底面は北東側が一部低くなる。遺構内堆積土は黒褐色土であり、単層のため堆積状況は不明である。

本土坑から土師器片が約30点出土している。いずれも摩滅した小破片であるが、概ね9世紀中葉頃と判断した。本土坑に重複する97号土坑と同様に土器を廃棄した「ゴミ穴」と推定している。

93号土坑 S K93 (図4, 写真6)

本土坑は調査区北西部、B40グリッドに位置する。86号土坑と重複するが本土坑のほうが古い。平面形は不整な楕円形で、規模は長径が1.35m、短径が0.85m、深さは最大でも0.16mである。周壁は崩落のためか乱れ、明瞭な屈曲を持って立ち上がる。底面は上端部に比べ小さく、中央部にまとまる。遺構内堆積土は灰色土を含む黒褐色土で、単層のため堆積状況は不明である。

本土坑からは土師器片が数点出土したが、摩滅した小破片であるため図示していない。年代は86号土坑より古く、平安時代と推定している。

94号土坑 S K94 (図4, 写真6)

本土坑は調査区北西部、B40グリッドに位置する。63号溝跡と重複し、本土坑のほうが古い。平面形は、西側が63号溝跡に壊され不明だが、楕円形になると推定している。規模は長軸が0.75m、短径が0.45mを測り、深さは0.08mと浅い。遺構自体が浅く、底面が丸くなるため周壁との境は不明瞭である。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるため堆積状況は不明である。

本土坑は出土遺物もなく詳細は不明だが、63号溝跡よりも古く、平安時代と判断している。

95号土坑 S K95 (図4, 写真6)

本土坑は調査区北西部、B40グリッドに位置する。60号溝跡と重複し、本土坑のほうが古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長辺が0.64m、短辺が0.45m、深さは0.15mを測る。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とし、土質と堆積状況から人為堆積と判断した。

本土坑は遺物が出土していないため、年代や性格を特定できない。

96号土坑 S K96 (図4・5, 写真6)

本土坑はB39グリッドに位置する。周辺は最も遺構が密集する部分で、その重複関係を整理すると、本土坑は、92号土坑、61・63号溝跡よりも古い。平面形は不正な楕円形をなし、規模は長径

第1編 草屋敷遺跡

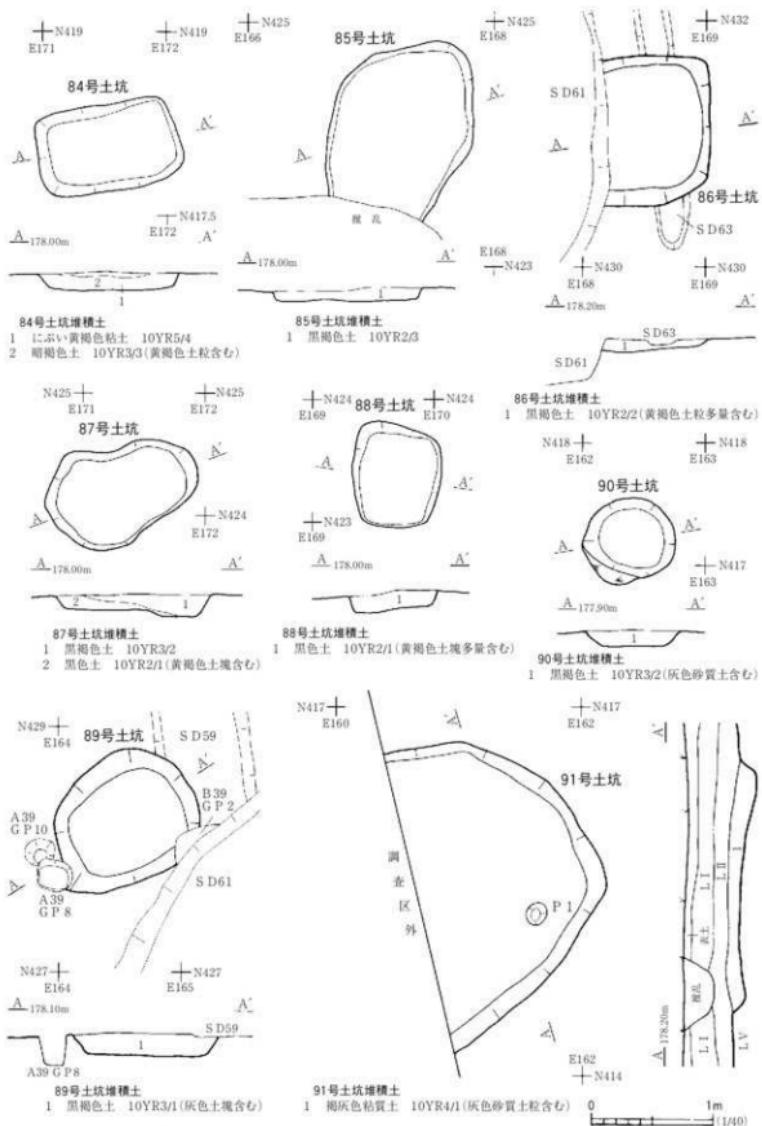


図3 84~91号土坑

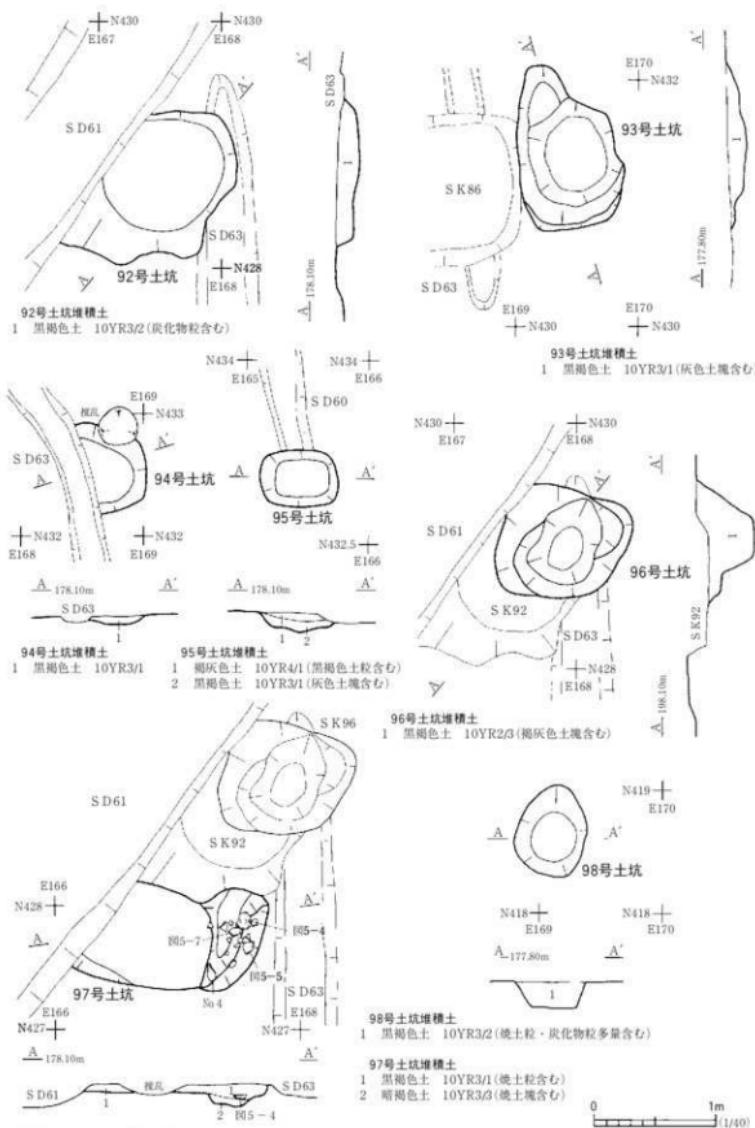


図4 92~98号土坑

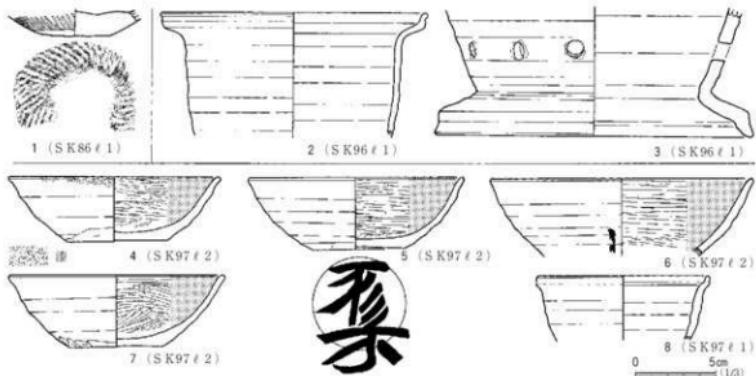


図5 土坑出土遺物

1.15m、短径が0.96mを測り、深さは0.48mと比較的深い。周壁は崩落による乱れがあるが、ほぼ急峻に立ち上がる。底面は上端部に比べ狭くなる。堆積土は黒褐色土の単層であるが、人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑の出土遺物は弥生土器・土師器など十数点で、そのうち図5-2・3を図示した。2は土師器壺である。ロクロ成形で、口縁部が上方に引き出されている。3はロクロ成形の瓶であろう。体部下端に円孔が確認できる。本土坑は97号土坑と同様に、9世紀中葉頃の「ゴミ穴」と推定する。

97号土坑 S K97 (図4・5、写真6・13)

本土坑はB39グリッドに位置する。92号土坑、61号溝跡と重複し、いずれよりも古い。平面形は重複する遺構により削平されて不明瞭であるが、梢円形と推定される。規模は遺存値で、長径が1.4m、短径が0.8m、深さは0.2mである。土坑の西半は浅く周壁も不明瞭であるが、東側は溝状に深くなる。出土した土師器片は東側に集中し、杯が4個体、小型壺が1個体である。出土状況から一括に廃棄されたものと判断している。

出土遺物は図5-4～8に示した。杯の底部切り離しは回転糸切りで、4・7は体部下端から底部外縁部にケズリ再調整を施している。5は底部に墨書きが見られるが判読できない。本土坑は遺物の特徴から9世紀中葉頃の土器など生活ゴミを投棄した「ゴミ穴」と判断した。

98号土坑 S K98 (図4、写真6)

本土坑は調査区の中央付近、B37グリッドに位置する。平面形は梢円形をなし、規模は長径が0.73m、短径が0.53mを測り、深さは0.2mである。遺構内堆積土は焼土や炭化物を多量に含む黒褐色土で、人為的に埋め戻された可能性が高い。本土坑からは摩滅した土師器の小破片が十数点出土しているが、本土坑の年代や性格を特定できる所見は得られていない。

第3節 溝 跡

今回の4次調査では、溝跡を7条確認した。61~63号溝跡は同じ場所で重複している。数期にわたり造り替え、維持・管理されていた結果と推察できる。また1次調査区の溝跡に接続するものもなく、性格を特徴付ける溝跡は少ない。出土遺物は平安時代の土器が主体を占めるが、かわらけ・白磁片など中世の遺物は貧弱である。中でも61号溝跡から出土した銅鏡が特筆に値する。

59号溝跡 S D59 (図6~8, 写真7・8)

59号溝跡は調査区の北西側、A41~B39グリッドに位置する。89号土坑、61号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。60号溝跡とは並行して延びる。調査区内で確認できた規模は、全長が12m、溝幅は0.7~0.9mを測り、深さは0.1mと極めて浅い。底面は南に向かって深くなる。遺構内堆積土は黒褐色土の单層であり、堆積状況は不明である。

本溝跡からは弥生土器、土師器片が少量出土している。そのうち形状が分かるものを図8に示した。1は土師器の小型壺である。頭部で外反して聞く口縁部となる。2は須恵器壺の胴部破片である。外面は平行タタキ痕、内面は無文のアテ具痕が観察できる。いずれも平安時代と判断した。

本溝跡は周辺に点在する柱穴群が本溝跡の東に延びない特徴があり、西側柱穴群を区画する溝としての機能が考えられる。

60号溝跡 S D60 (図6・7, 写真7・8)

本溝跡は調査区の北西部、B40・41グリッドに位置する。59・61号溝跡と並行するように延び、95号土坑よりも新しい。遺構検出面はLV上面である。

本溝跡は全長8.2m、溝幅0.5m、深さ0.14mと浅い。溝跡の方向は59号溝跡と平行し、真北に対して12度西に傾いている。遺構内堆積土は黒褐色土で、堆積状況は不明である。

本溝跡は削平されてわずかに確認できた程度である。59号溝跡との直接の重複がなく新旧関係は不明であるが、それらと並行する点を積極的に評価すれば、59号溝跡と同様に西側の柱穴群を区画する溝跡の一部になると推定される。本溝跡から出土遺物はなく年代を特定することができない。

61号溝跡 S D61 (図6~8, 写真7~9・13)

本遺構は調査区の西半部を南北に延びる溝跡である。周辺は最も遺構が密集する範囲で、本溝跡との重複関係を整理すると、本溝跡よりも古い遺構は96・97号土坑をはじめとする土坑群で、59・62・63号溝跡は新しい時期の遺構である。

本溝跡の北端は調査区外となるが南に向かって延び、B39グリッド周辺で大きく西に流れを変え、A38グリッドで再び南に流れを戻している。調査区内で確認できた規模は、全長48m、溝幅は北側

第1編 草屋敷遺跡

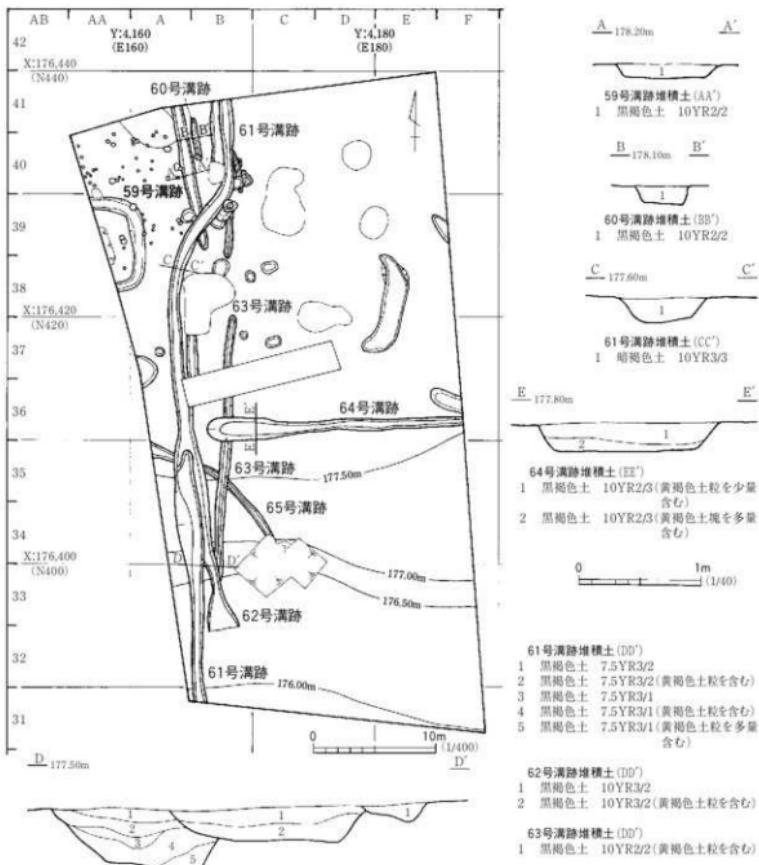


図6 59~65号溝跡

で1m、南側で0.9mを測る。深さは北側で0.2m、南側で0.45mである。底面は南に向かって低く傾斜する。周壁は北側では急峻になるが、南端部は斜面部となるため溝跡も細かく蛇行し、壁面も乱れている。遺構内堆積土は黄褐色土を含む黒褐色土で、廃絶時に埋め戻されたと判断した。

本溝跡の出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器・銅鏡1面である。土器類の出土状況は、溝跡が埋め戻された時に流れ込んだものと推定される。銅鏡は溝跡の埋め戻しに際して、投棄されたものと判断している。土器類は小破片が多く、形状が分かるものを図8に示した。

3は弥生土器で高杯または器台の脚部である。内外面ともベンガラを用いて赤彩される。外面は

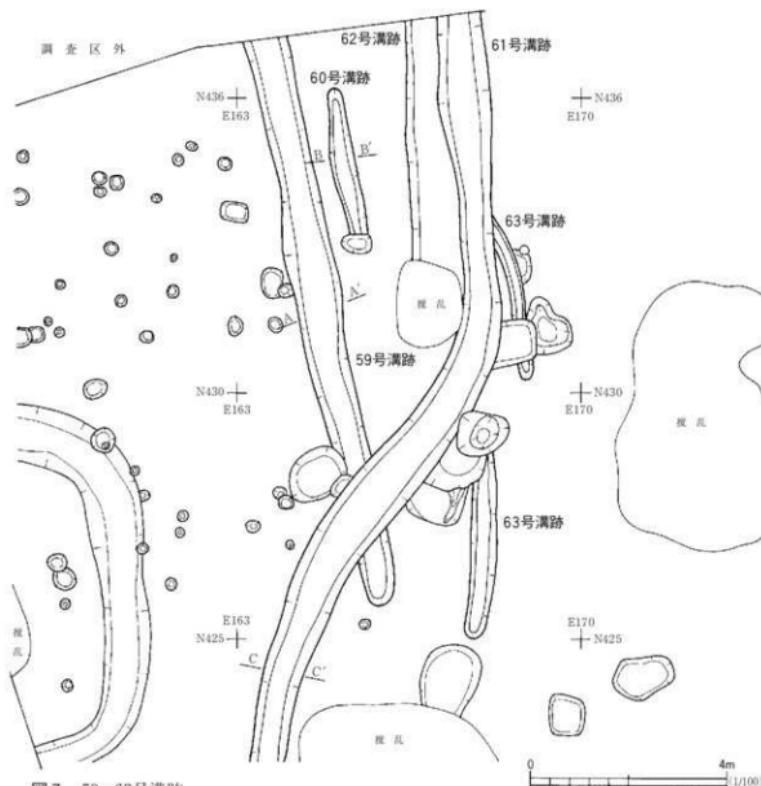


図7 59~63号溝跡

縦方向のミガキが密に施され、端部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。4は須恵器大甕の口縁部破片であり、口唇部が大きく発達して垂下している。外面には平行タタキ痕がナデ消され、クシ書きの同心円文が施される。5はかわらけで、全体的に摩滅しているが底部の糸切り痕が観察できる。6は白磁で端反口縁の椀である。内面の体部中央付近に沈線が巡る。7は須恵器の底部破片である。器種は長頸瓶または広口瓶であろう。

8は銅鏡で、瑞花双鳥鏡に分類される。規模は直径10.7cm、鏡面の厚さが2mm、紐を含めた部分の厚さが5mmとなる。縁は鏡背面に対し垂直に立ち上がり、外縁の高さが0.96cmである。鏡背面の文様自体が肉うすで、文様構成などは判然としない。しかし、文様帶を区画する囲線を境に内区には双鳥、外区に瑞花文を観察することができる。紐は中央に低い半球形を、紐孔の形状は半円形をなす。紐の周囲には、7枚の花弁状突起が配されている。鏡面・鏡背面ともに布状纖維が付着し

ており、紐孔内にも紐状繊維が確認された。これら付着繊維の化学分析結果については、本書の付編1に詳細報告を掲載した。

本溝跡は少なくとも3時期の造り替えが確認できた。溝跡としては、かなり長期にわたって計画的に維持・管理されていたものと推察できる。溝跡の性格は周辺に建物跡が確認できず、屋敷地の区画溝とは考えにくい。自然堤防状平坦面から日橋川へ注ぐ排水路と考えている。

本溝跡は出土遺物などから中世に属すると推定され、中でも銅鏡の出土は、荒屋敷遺跡の中世集落のあり方を考える上で極めて象徴的な遺物であろう。

62号溝跡 S D62（図6・7、写真7・8）

本溝跡は調査区西半部を南北方向に延びる。周辺は調査区内で最も遺構が集中する範囲で、その重複関係を整理すると、本溝跡よりも古い遺構は土坑群と61号溝跡で、新しい遺構は63・65号溝跡である。

本溝跡の北側部分は削平され、部分的に溝跡の痕跡を確認した程度である。南側は比較的遺存状態がよく、溝幅0.8mほどでまっすぐ延び、B33グリッド付近では大きく溝幅を広げながら斜面部と接している。遺構内堆積土は黄褐色土を含む黒褐色土である。本溝跡の廃絶時で、63号溝跡が新たに開削されるため埋め戻されたと判断している。

本溝跡から土師器片がわずかに出土しているが、いずれも摩滅した小破片で、溝跡の年代を特定できない。本溝跡は61号溝跡と同様に、日橋川の自然堤防状平坦部の開発にともなう排水路と考えられ、年代は61号溝跡に近い時期として、中世頃と判断している。

63号溝跡 S D63（図6・7、写真7・8）

本遺構は調査区の西半部を南北方向に延びる溝跡である。北半部周辺は調査区内で最も遺構が密集する範囲である。それらの重複関係を整理すると、86・93・94号土坑、61・62号溝跡のいずれよりも新しく、調査区中央付近の64・65号溝跡よりは古ないと判断した。

本溝跡は北半部が浅く所々途切れているが、調査区内で確認できた溝跡の規模は、全長約40m以上、溝幅は北側が狭く0.6m、南側が0.7mを測る。深さは約0.1mと極めて浅い。堆積土は黒褐色土の単層であるが、重複する61・62号溝跡から人為的に埋め戻された可能性が高い。

本溝跡からは遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、61号溝跡との関係から、中世に属すると考えている。

64号溝跡 S D64（図6、写真7・9）

本溝跡は調査区の中央部、B36～F36に位置している。周辺の地形は、標高177.5m付近の平坦面外縁に立地する。本溝跡の西端部は63号溝跡と重複し、本溝跡のほうが新しい。

本溝跡は東西方向に延び、その東端は調査区外へ続くためその全容は不明である。調査区内で確

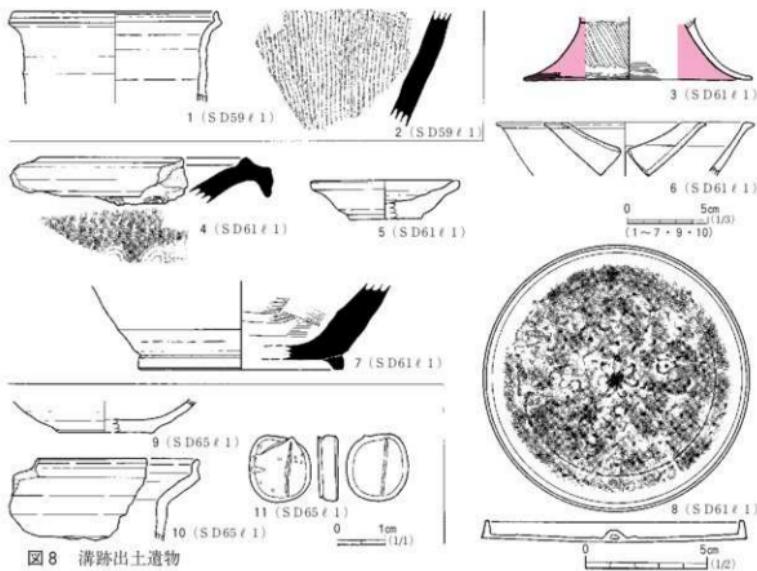


図8 溝跡出土遺物

認できた規模は、全長21.7m、幅は東に向かって狭くなり0.7~1.6mを測る。深さは0.24mと浅い。遺構内堆積土は黄褐色土塊を多量に含む黒褐色土で、堆積状況から人為的に埋め戻されたと判断している。周壁から底面にかけての断面形は、浅い皿状をなす。

本溝跡からは弥生土器、土師器、須恵器、陶器片が数点出土しているが、いずれも摩滅した小破片であるため図示していない。本溝跡の明確な時期や性格については不明である。

65号溝跡 S D65 (図6・8、写真7)

本溝跡は調査区の南西部、A35~C34グリッドに位置する。61~63号溝跡と重複し、そのいずれよりも新しい。

本溝跡は北西から南東方向に向かって延び、南東側は搅乱によって失われている。調査区内で確認できた規模は、全長12m、溝幅は北西部が1m、南東部が0.5mを測る。深さは0.1mである。

本溝跡からは弥生土器、土師器、須恵器、かわらけが出土し、形状が把握できたものを図8に示した。9はやや大振りのかわらけで、回転糸切り痕が明瞭に観察できる。10は土師器壺の口縁部破片である。頭部で屈曲して外反する口縁部となる。11はガラス製おはじきで、ヘラ状工具でプレスされたものである。色は透明な緑色である。ガラス内部の気泡は数が少なく、大きさも細かい。

本溝跡の明確な年代や性格は不明であるが、61号溝跡よりも新しい時期と判断した。溝跡の方向や配置から、その性格を特定することはできない。

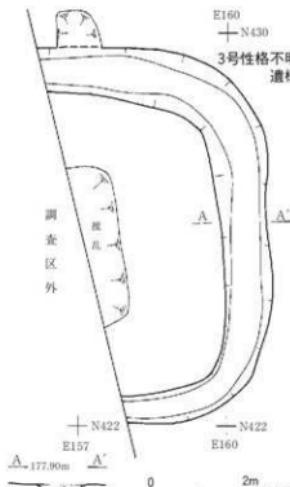
第4節 その他の遺構と遺物

今回の4次調査では、明確な性格を捉えることができない遺構として、性格不明遺構2基、柱穴群がある。3号性格不明遺構は周溝状遺構である。4号性格不明遺構は、今回の調査で初めて確認した弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構である。遺構の東半が調査区外となり全容は不明であるが、該期の方形周溝墓とする指摘がある。しかし、明確な根拠がなくここでは性格不明遺構としている。柱穴群は調査区北西側にまとまって分布する傾向が見られたが、明確な建物や柱列を構成するものが確認できない。

本節では性格不明遺構、柱穴群、遺構外出土遺物について報告する。

3号性格不明遺構（図9、写真10）

本遺構は調査区北西端、AA38・39グリッドに位置する。標高177.70m付近の平坦地に立地する。遺構検出面はLVとした黄褐色土上面である。柱穴群と重複し、本遺構のほうが古いと判断した。



本遺構は方形に溝が巡る周溝状遺構と想定されるが、西半部が調査区外となるため、その全体像については不明である。周溝に囲まれた内部は、平面形が隅丸方形と推定され、その規模は南北軸で6mを測る。周溝外側での規模は、7.7mを測る。

溝幅は南辺が最も狭く0.6m、東辺で0.9m、北辺で最大幅となり1.1mを測る。深さは東辺で0.2mとなる。周壁は各辺ともに急峻な立ち上がりとなるが、北東隅の上端部は崩落によりやや乱れて緩い傾斜となる。底面は平坦になる。

遺構内堆積土は黒褐色土を基調とし、焼土粒をわずかに含んでいる。単層であるため、堆積状況は不明である。

本遺構から土師器・かわらけなど数点が出土している。そのうち形状が分かるものを図9に示した。1はロクロ成形の土師器壺である。口唇部が上方に引き上げられている。

2はかわらけで、ロクロ成形の小皿の底部破片である。器面全体に酸化鉄が付着し、摩滅して不鮮明であるが、底部は回転糸切りによって切り離されている。

本遺構の性格については不明であるが、年代は出土した土器から平安時代以降と判断している。



図9 3号性格不明遺構・出土遺物

4号性格不明遺構(図10・11、
写真11~13)

本遺構は調査区東端部に位置している。周囲は自然堤防状の平坦面であり、南に向かってわずかに傾斜する地形である。標高は177.6~177.8mである。

本遺構は溝状遺構3条で構成され、それぞれの溝状遺構で囲まれた内部を方形に区画している。各溝状遺構の名称は、北溝・西溝・南溝とした。

本遺構の東半が調査区外となることから、溝状遺構の全容を把握できたのは西溝だけである。北溝・南溝はいずれも農道の下部であり、大きく削平を受けた部分であるため遺存状態もさわめて悪く、黒色土の範囲を確認した程度で、明瞭な周壁の立ち上がりは確認できない。西溝との距離は、北溝が4.2m、南溝が4.7mとなる。

西溝は南北両端が細く西側に反り返った三日月形をなす。規模は全長が8m、中央部の幅が最大で1.75mを測る。検出面からの深さは最大でも0.25mである。

西溝の北側は、周壁の上端部が崩れて緩やかになるが、その他の周壁は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、南側に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は2層に分けた。いずれも黒褐色土を基調とした土で、自然堆積と判断した。

本遺構の西溝から弥生土器・土師器が出土している。北溝・南溝から遺物は出土していない。遺物の出土状況について、その多くは検出面や堆積土中から出土したものであるが、4は西溝中央からやや北寄り部

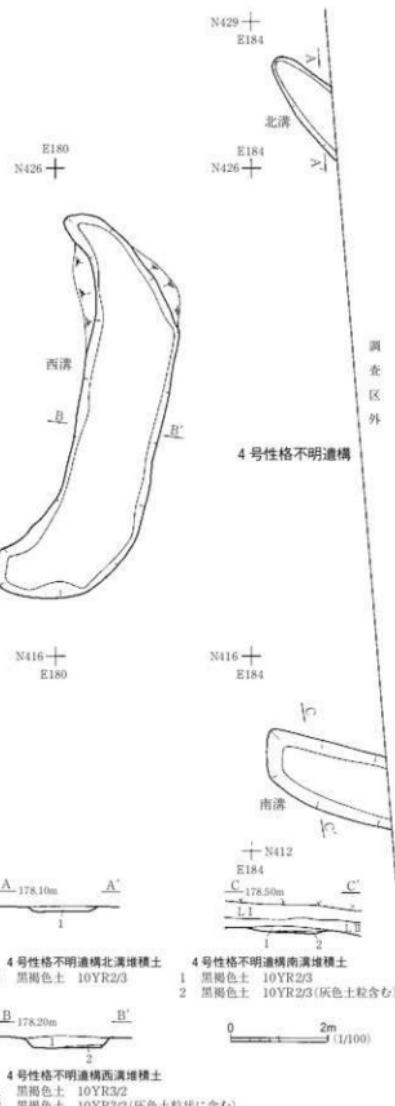


図10 4号性格不明遺構

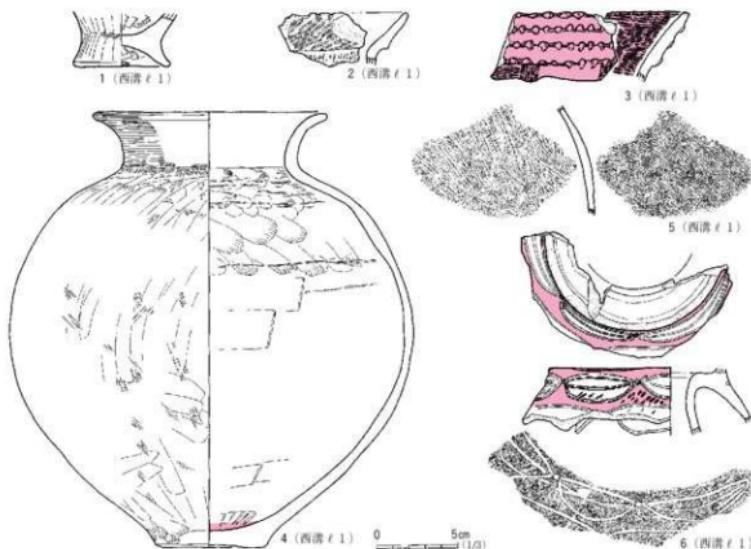


図11 4号性格不明遺構出土遺物

分からつぶれた様な状態で、底面から10cmほど浮いた位置から出土した。

1は台付壺の底部である。外面は指頭痕、内面はヘラ状工具痕が観察できる。2は折り返し口縁となる破片である。器種は壺形土器であろう。口縁部に明瞭な段を持ち、外面部には単節繩文が施され、口唇部にはヘラ状工具によるキザミが充填される。頸部下半はハケメ調整が残る。3は内外面ともに赤彩された壺形土器の口縁部破片である。口唇部にはキザミが施される。口縁部直下に明瞭な段を3段造り出し、この部分にもキザミを充填させている。口縁部の下部は4本歯のクシ歯状施文具による文様帶となる。縦位に数条施して区画し、その内部には同じ施文具による連続波状文が描かれる。内面はハケメ調整が残る。4は壺形土器で、約半個体分の遺存である。胴部が球形となる器形である。外面はハケメ調整の後に縦方向のナデで仕上げられている。5は壺形土器の胴部片で、内外面ともハケメ調整を残す。6は装飾器台または壺形土器の口縁部であろうか、器種は不明である。外面は沈線文による文様が施され、沈線の交差部分は円形竹管による刺突が配されている。地文の繩文が磨り消された部分にベンガラによって赤彩されている。

本遺構は全体像が把握できないことから性格不明としたが、溝状遺構3基の分布状況から方形周溝墓の可能性がある。さらに西溝の南北両端部が外側に大きく張り出し、溝自体が弓なりになることから、四隅部突出形の方形周溝墓が想定できる。年代は出土遺物の特徴から、弥生時代終末から古墳時代初頭頃と考えている。

柱穴群（図12）

今回の4次調査区を概観すると、柱穴群は調査区北西隅に集中していることが確認できた。しかし掘立柱建物跡や柱列のように、明確な規格性をもって柱穴が並ぶものを確認できないことから、ここでは柱穴群として報告する。各柱穴の名称については、各グリッド内での通し番号とし、A40 G P 1などと表記した。挿図中の（数字）は検出面からの深さを表している。

柱穴群は総数53基確認した。内訳は北西からAA40グリッドが18基、AA39グリッドで3基、AA38グリッドで1基、A40グリッドで18基、A39グリッドで11基、B39グリッドで2基である。調査区の北西隅に集中する傾向が見られる。

柱穴の平面形は、円形を基調とするものが大半を占めるが、A40 G P 14・15のように長方形を基調とするものもある。規模は直径15~30cmが多く、A39 G P 1・AA40 G P 17は最大となり、直径50

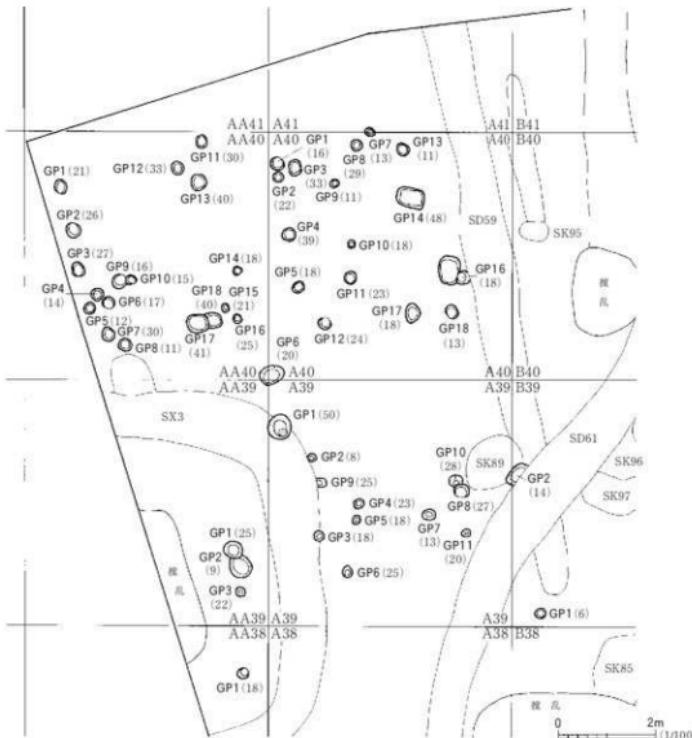


図12 柱穴群

cmになる。検出面からの深さについても、規格性を見出すことはできず、10~20cmの柱穴が多い。AA40G P17・18、A40G P14、A39G P1が最も深い柱穴で、40~50cmである。また明確な柱材の痕跡を確認できたものはない。

柱穴群の分布は、西側の調査区から59号溝跡までの間、南限が3号性格不明遺構までと極めて狭い範囲に限定される。周囲の溝跡との関係は、柱穴群の年代が不明であるものの、59号溝跡に並行する60号溝跡までが柱穴群の区画溝と推定できる。

柱穴群の年代について、柱穴内からの出土遺物も少なく、詳細な年代を特定できない。61号溝跡と重複する柱穴は、いずれも溝跡よりも新しく中世以降と判断している。この柱穴群の性格については、4次調査区の北側に近接する平成17年度調査予定範囲の成果を待って結論付けたい。

遺構外出土遺物（図13）

今回の4次調査において、遺構外から出土した遺物は弥生土器128点、土師器469点、須恵器55点、近世陶磁器21点、石器1点である。これらの多くは摩滅した小破片である。そのうち遺存状態がよく、形状が把握できるものについて図13に示した。

1は小型丸底壺の口縁部破片である。内外面ともに縱方向のミガキが密に入り、丁寧なつくりである。胎土は赤褐色で、石英微粒子を極少量含んでいる。しっかりした焼成により、土器自体が硬質な仕上がりとなる。古墳時代前期前葉頃に属すると考えられる。2は椀または高杯の杯部であろうか。体部外面はハケメ調整の後、やや幅広のミガキを施している。口縁部はヨコナデで仕上げている。内面は外面に比べやや荒く、カキトリ痕が残る。ミガキは施されていない。胎土は石英粒のほかに赤色微細粒を多く含んでいる。焼成は1と同様に、赤褐色で硬質な仕上がりである。古墳時代前期前葉に属すると考えている。3は弥生時代の壺形土器の胴部破片であろう。外面は、より糸文が施されている。4は底部資料である。全体的に摩滅して、明瞭な制作方法を示す痕跡は確認できない。形状から土師器長胴甕と考えられ、平安時代に属すると判断した。5は須恵器甕の胴部破片である。外面は平行タタキメであり、タタキメ内には本目が観察できる。やや彫りの浅い蝶状沈線文が2条観察できる。内面は同心円文のアテ具痕が観察できる。蝶状沈線文から大戸窓跡の製品で、9世紀中葉～後葉頃の所産と考えられる。

(福田)

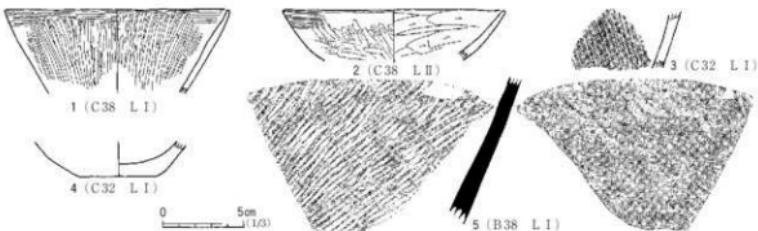


図13 遺構外出土遺物

第3章 まとめ

今回の4次調査で検出された遺構は第2章で述べたとおり、周溝状遺構と想定できる遺構1基、方形周溝墓と考えられる遺構1基、土坑15基、溝跡7条、それに柱穴群等である。なお、本遺跡はこれまでに塩川町調査分を含めて6回の調査が行われており、来年度の調査で会津縦貫北道路関連の調査としては最後となる予定である。したがって、総合的な見解は来年度に譲ることとし、ここでは今年度検出の遺構群についてまとめておくことしたい。

1. 弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構

該期遺構は4号性格不明遺構とした遺構である。全体の半分ほどしか確認されていないが、その形態からして方形周溝墓である可能性が高い。しかも、方形の4隅が途切れ、全体が確認できる西辺溝が弓なりである形態は、四隅突出型墳丘墓の特徴を有しているということができる。会津盆地内においては近年、周溝墓の調査が蓄積されてきており、会津若松市の屋敷遺跡、会津坂下町の宮東遺跡・男塙遺跡・稲荷塙遺跡、塩川町の館ノ内遺跡で当遺跡に近い時期の周溝墓が発見されている。特に本遺跡の北方2kmに位置する館ノ内遺跡では、やはり四隅突出型墳丘墓が2基確認されている。また、本書2編所収の湯川町桜町遺跡でも該期の周溝墓が確認されている。これらの資料からすると、会津盆地内では弥生時代終末頃から周溝墓を築く体制が整ったと考えられ、その体制は出土遺物からすると、他地域との交流の中からもたらされたと推測される。張り石を施さない四隅突出型墳丘墓が北陸地方に特徴的な墳丘墓であることを考え合わせれば、当地区と新潟県との阿賀野川経由での交流が考えられるところである。ただし、桜町遺跡では十王台式系統の土器や樽式系統の土器も出土していることから、複数方向との交流も推定しておくことが必要と思われる。そしてこれらの周溝墓を築いた勢力は、その後の古墳群のあり方からすると会津若松市東方の一箕古墳群・塩川町東方の駒形古墳群・会津坂下町北方の宇内青津古墳群・会津坂下町西方の塔寺新館古墳群へと集約していくように予想される。県内においては該期の様相がこれほどかがえる資料をそろえる地区は他になく、本遺跡の資料も更なる様相の解明に向けて貴重な資料になると考えられる。

2. 平安時代の遺構

平安時代の遺構としては96・97号土坑が注意を引く。出土した遺物は9世紀中葉頃のものと考えられ、近隣に位置し一括廃棄されたものと思われる。火を受けた小型甕や瓶の出土から生活感が窺われ、近くに住居の存在が予想されるが明確にできなかった。あるいは柱穴群中に遺物の出所となる遺構が存在するとも考えられるが、柱穴群からは決め手となる遺物は出土していない。なお、調査区南側の低地部分からも、少量の該期の遺物が出土しており一定期間の居住が想定される。当遺跡の2次調査では比較的まとまった9世紀の遺物が出土しているが、やはり明確な遺構は確認できない。

塩川町における該期の調査例としては鏡ノ町A・B遺跡・内屋敷遺跡で良好な資料が確認されている。両者とも有力者の居住域を含む集落遺跡と考えられ、出土遺物などからも集落の充実ぶりが予想される。当遺跡の近隣にも肥沃な耕地と日橋川を利用した水運を背景とした集落の存在を想定することも可能であろう。

3. 中世以降の遺構

該期の遺構としては溝跡・3号性格不明遺構・柱穴群が考えられる。溝跡は区画溝（64号溝）および排水溝（61～63・65号溝）と考えられるもので、排水溝は北側の高地から南側の低地へと排水するものである。今年度調査区の北側は来年度調査予定であるが、土壌が残存しており屋敷地が推定される箇所である。そうであれば、今年度調査の排水溝は屋敷地の排水を図った施設と考えることが可能であろう。なお、当溝跡からはかわらけ・白磁・銅鏡などが出土しており、屋敷地との関連を補強している。区画溝については、15年度調査区（屋敷地推定地域の北側）において建物の北側を区切るような形で確認されていることから、本溝の場合には南側を区切る施設とも考えられる。いずれにしても来年度調査の結果によって明らかになる部分が多いといえる。

3号不明遺構は部分調査であるが、方形周溝となる可能性がある。時期と性格については不明な点が多いが、いくつかの柱穴を切って掘り込んでおり比較的新しい時期の遺構と考えられる。ただし、柱穴には古代に位置づけられるものも見込まれることから、中世の遺構と無関係とは言い切れないところである。中世であるとすれば堂社のような施設を想定しておく必要もあるかと思われる。なお、中世の歴史的背景については会津継貫北道路遺跡発掘調査報告2～4に記述があるので参照していただきたい。

(安田)

引用・参考文献

- | | |
|------------|--|
| 井 恵治 他 | 2003 『会津継貫北道路遺跡発掘調査報告2～4』福島県教育委員会 |
| | ～04 財福島県文化振興事業団 |
| 塩川町史編纂委員会 | 1966 『塩川町史』 塩川町 |
| 湯川村教育委員会 | 1994 「第3章古代、第4章中世」『湯川村史 第三巻通史』湯川村 |
| 横須賀 遼達 | 2002 『麻生館遺跡』『会津継貫北道路遺跡発掘調査報告1』福島県教育委員会
財福島県文化振興事業団 |
| 和田 聰 | 1997 「鏡ノ町遺跡A」『塩川町文化財調査報告第3集』 |
| 和田 聰 他 | 1998 「鏡ノ内遺跡」『塩川町西部地区遺跡発掘調査報告書3』 |
| 和田 聰・植村泰徳 | 2001 「鏡ノ町遺跡B」『塩川町文化財調査報告第8集』 |
| 和田 聰 他 | 2002 「荒屋敷遺跡－会津継貫北道路整備に伴う付属施設建設並び同道路開
通工事遺跡発掘調査報告書－」『塩川町文化財調査報告第10集』 |
| 和田 聰 | 2004 「荒屋敷遺跡（3次調査）」『塩川町文化財調査報告第13集』 |
| 植村泰徳・和田聰 他 | 2004 「内屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告第12集』 |

第2編 桜町遺跡(1次)

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置

桜町遺跡は河沼郡湯川村大字桜町字中町他に所在し、北緯37度33分7秒、東經139度54分3秒（世界測地系）である。湯川村は会津盆地のはば中央にあり、北は飯豊山、東は磐梯山を望む。湯川村に接する市町村は、北は塩川町（平成18年喜多方市に合併）、東は河東町（平成17年会津若松市に合併）、南は会津若松市、西は会津坂下町である。

湯川村は南からの阿賀川、北からの濁川、東からの日橋川が流入し、扇状地・沖積地を形成して盆地内で最も低位となる。地形的には全体的に傾斜が緩やかで、河川の流域に沿って微高地状の低位段丘が発達している。現在では氾濫原の開発、水害防止のための河川整備、新水路の開削や圃場整備により平坦化され旧地形が分からなくなつた。

桜町遺跡は湯川村の南東隅に位置しており、日橋川の支流にあたる濁川の西岸に所在している。遺跡の標高は184.0～185.5mとほとんど平坦面である。遺跡の範囲は、八日町集落を含み東は濁川まで、面積490,000m²以上である。

遺跡内の現況は、八日町集落以外はほとんどが水田であり、わずかに畑地となっている。昭和40年代と平成6年に圃場整備が行われた。特に平成6年の圃場整備は大規模に実施されたため、遺跡南部および県道会津坂下河東線の北側では、遺構・遺物が確認できないほど削平されている。

今回の1次調査区では、西半部は畑地であったため圃場整備による削平が少なく、遺構・遺物の遺存状態は良好であった。一方、東半部は水田造成や土取りなどにより大きな改変をうけ、西半とは約50cmの段差を持って削られている。

調査区内の地形は、圃場整備で削られ不明な部分が多いが、おおむね微高地状の平坦面にあたる。その平坦地の内部で農業用の用・排水路が縦横に開削されていたと推定される。明治時代の丈量図には濁川から八日町へと続く水路跡が2条記されており、調査区東側で確認した水路跡（15～18号溝跡）がこれに該当する可能性が高い。

桜町遺跡の周辺に所在する遺跡として、弥生時代では南東6km、磐越道会津若松ICの屋敷遺跡（会津若松市）が所在する。奈良・平安時代では濁川の対岸、約1.2kmに郡山遺跡（河東町）があり、会津郡衙（会津柵）の推定地とされている。さらに北西2kmには、勝常寺がある。

第2節 調査経過

桜町遺跡は平成9年に福島県教育委員会の委託を受けて財團法人福島県文化センター遺跡調査課（平成13年に財團法人福島県文化振興事業団に名称変更）が実施した、会津縱貫北道路の建設に伴

う表面調査によって発見された遺跡（登録番号42200030）である。この調査成果は『県内遺跡分布調査報告4』として報告されている。遺跡面積は490,000m²以上と推定された。

平成15年度には国土交通省郡山国道事務所により会津継貫北道路の工事計画が提示され、工区内にかかる遺跡範囲76,000m²を対象に試掘調査が実施された。同年5月には、県道会津坂下河東線から北側部分の試掘調査が実施され、近現代の溝跡や陶磁器類が確認されているようであるが、保存対象にはならなかった。同年10月には遺跡南側の試掘調査が実施され、弥生時代・平安時代の遺構・遺物が多數確認された。この範囲8,200m²については保存措置がとられることが確定した。この調査結果は『県内遺跡分布調査報告10』として掲載した。また、平成15年度の試掘調査では、県道会津坂下河東線から南側で、八日町集落周辺の30,000m²が試掘調査の未了範囲として残り、平成16年度以降に実施することもあわせて確認された。

平成16年度は福島県教育委員会、国土交通省郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団による協議を重ね、前年度に保存範囲となった8,200m²のうち、側道部分を除いた調査着手可能な範囲、4,300m²について発掘調査を行うことが確認された。発掘調査は、財団法人福島県文化振興事業団が福島県教育委員会の委託をうけて、その調査指示の許に実施した。

桜町遺跡の調査にあたっては、調査員2名を配置し、第1次調査として開始した。調査期間は平成16年5月10日から平成16年11月19日まで、延べ112日である。5月には重機による表土除去作業とともに調査事務所・駐車場の造成など周辺整備作業も行い発掘調査の準備が中心となった。調査区西側では、表土除去作業中から弥生土器や土師器、須恵器が大量に出土し、土坑や柱穴など遺構も相当数確認されたため、重機の稼動には細心の注意を払った。調査区東側は近年の耕地整理に伴い大きく削平されて調査区西側とは約50cmの段差となる。この範囲での遺構や遺物の出土量が格段に低いことが分かる。

5月下旬には表土除去がほぼ完了した。作業員22名を雇用し、本格的な調査へと移行する。発掘調査の開始にあたり、作業員の安全作業に関する講習を実施し、発掘作業の円滑化と事故防止の再確認を行う。さらに調査区周辺は会津地区有数の穀倉地帯でもあり、農作業とのトラブル防止を心がけるとともに、調査事務所内の器材整理や調査区内の下草刈りなど安全衛生面を考慮に入れた周辺整備から実施した。なお調査区は周辺地形よりも低い地形となり、当初から梅雨時期の大雨水没することが懸念された。そのため会津継貫北道路の用地内で、遺跡範囲外となる側道部分に排水用パイプを埋設して排水措置を施した。

6月からは遺構検出作業を中心にして実施した。当初からの予想通り、検出作業中から土器類が大量に出土し、掘立柱建物跡や土坑・溝跡が確認された。特に弥生時代の土器とともに方形周溝墓が検出されるなど、調査の当初から近隣の研究者の注目を浴びた。また6月25日・26日には福島県教育委員会主催の「遺跡の案内人」による現地公開が行われた。あいにくの雨天であったが湯川村の小学校2校の高学年生が来跡し、発掘体験など実施し好評を得た。なお両日で200名ほどの来跡者があった。

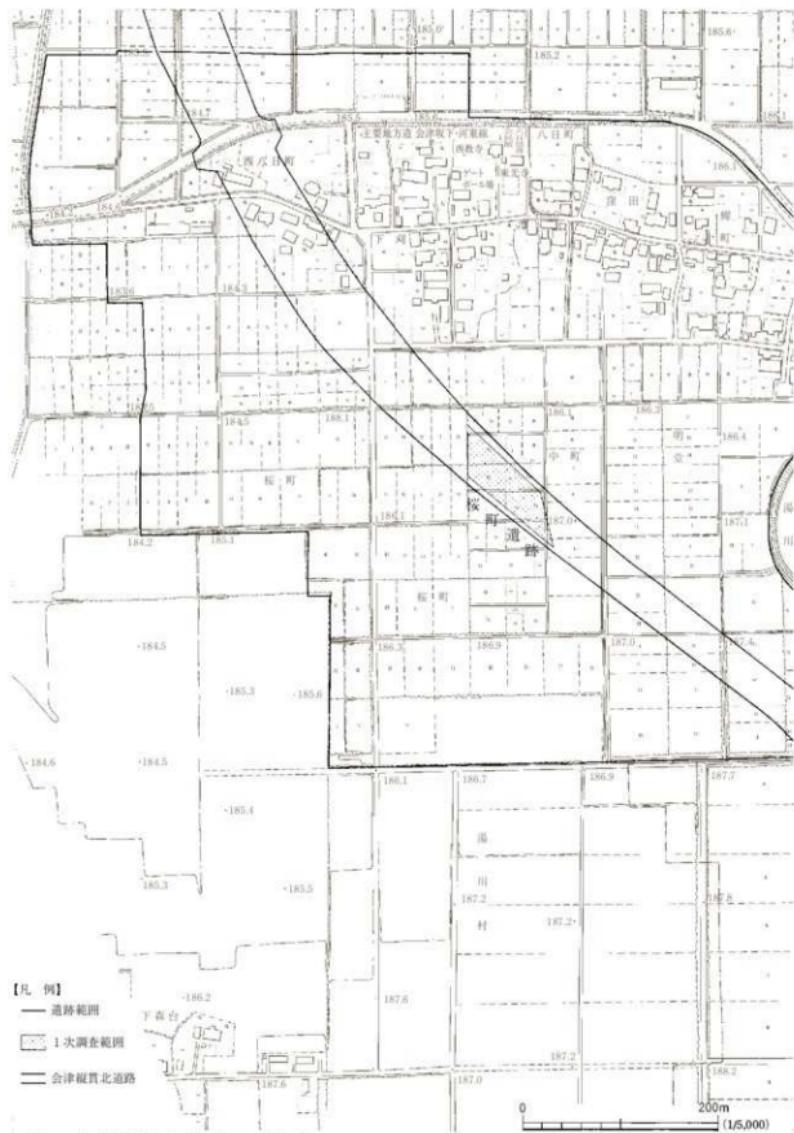


図1 会津縦貫北道路路線図（湯川村）

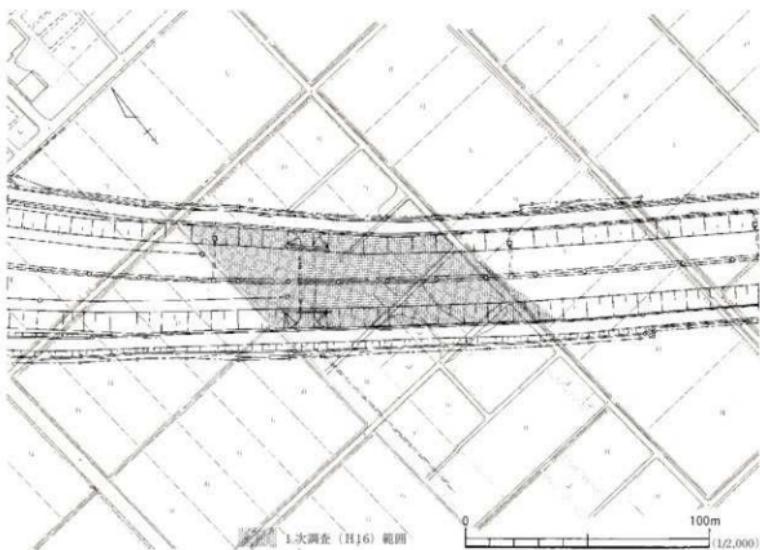


図2 調査範囲と工事計画図

6月後半から7月下旬は、天候にも恵まれただけでなく、調査区内の排水対策も功を奏し、遺構検出作業が順調に進む。その結果、一辺14m前後の大型方形周溝墓を含む7基の周溝墓を確認する。さらに周溝墓からは、いわゆる天王山式に後続する在地弥生土器の他に北陸系・北関東系の弥生土器の影響をうけた土器も出土するなど興味深い知見も得られた。

8月上旬は、お盆休み中の調査区保全と安全対策を入念に実施する。8月後半からは塙川町荒屋敷遺跡の調査を開始するにあたり、桜町遺跡は調査員1名で調査をすすめる。なお8月27日・28日には第2回目の「遺跡の案内人」現地公開が実施された。100名前後の来訪者がある。

9月は各遺構の調査も順調に進む。弥生時代後期の3号住居跡の調査に着手し、出土遺物などは周溝墓の土器とほぼ同時期であることが判明した。さらに平安時代の遺構では、8号建物跡が3時期の建て替えがあり、比較的長期にわたり存続していたことが分かる。周辺からは墨書き土器や須恵器の円面鏡が出土するなど、集落内の公的性を示唆する建物跡の可能性が高い。

9月下旬からは調査区東側の溝跡の調査に着手する。これらの溝跡からは弥生土器や平安時代の土器に混ざり、江戸時代から近現代の遺物が出土した。昭和40年代の圃場整備に伴い埋め立てられた川（用水路）との聞き取りを得た。さらに明治時代の丈量図とほぼ一致することが判明し、江戸時代まで遡ることが判明した。

10月には調査も終盤をむかえ、調査区東側の調査に重点をおく。10月16日には福島県教育委員

会の主催による現地説明会を催した。湯川村村民を始め福島県内外から約200名の見学者が訪れた。

10月下旬からは塙川町荒屋敷遺跡の調査も終了し、再び調査員2名体制となる。調査は東側の溝跡の精査に加え、断ち割りなど遺構の確認調査を実施する。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影や遺跡の全体地形図の作成に着手する。また遺跡基盤層を掘り下げ、最終的な遺構の有無を確認し、11月19日にはすべての調査を終えた。

11月26日には福島県文化財グループによる調査終了の確認を終え、国土交通省郡山国道事務所に引渡しを完了した。その後、本年度調査範囲の重機による埋め戻しを行い、12月10日には郡山国道事務所喜多方出張所の確認を得て、埋め戻し作業を完了した。

第3節 調査方法

桜町遺跡の発掘調査にあたり、世界測地系に基づく国土座標を用いて遺構の位置、遺物の出土位置を示した。桜町遺跡は490,000m²と広大な範囲であることから、100m四方の方眼を遺跡全域に設定し、これを大グリッドと称した。大グリッドは、X：173,000、Y：5,400を原点とし、南北



図3 大グリッド配置図

が1,300m、東西1,000mの範囲に総計130個を設定した。大グリッドの呼称について、グリッドの原点から南北方向は南に向かってアラビア数字を用いて1・2・3・・、東西方向は東に向かってアルファベットA・B・C・・とした。これらを組み合わせて呼称する。さらに、100m四方の大グリッドを10m四方、総計100個の方眼に細分し、これを小グリッドとした。小グリッドは、大グリッドと同様な方法を用いて細分し、これらの呼称には、大グリッドを組み合わせ、大グリッドー小グリッドの順に、F 8-A 1などと表記した。また遺跡内の標高は、会津綾貫北道路の水準点から移動した標高をベンチマークとし

て計測の基準とした。

調査区全域の表土除去は、前年度の試掘調査により遺構・遺物の密度が高いことが知られ、重機による作業には慎重を要した。特に調査区の西端部は開場整備による削平が少なく、遺存状態が極めて良好で、当初から相当量の遺物出土が予想された。そのためLⅢとした遺構検出面までの掘り下げを行わず、極力LⅡとした黒色土の上面で止めている。それ以降の掘り下げは人力で、遺構・遺物の確認に努めた。遺構の精査では、その特徴や出土遺物の状態にあわせて土層観察用の畦を設け精査・記録をした。なお堆積土の観察には「新版標準土色帖」を用いた。遺構外の堆積土にはアルファベットLとローマ数字を組み合わせてLⅠ・LⅡ・・・、遺構内の堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせℓ1・ℓ2・・・と表記した。

図面記録については、小グリッドを1m四方の方眼に細分し、この交点を測点とした。測点は国土座標と一致することから、座標値をそのまま表記した。各遺構の図化は、平面図・断面図ともに1/20の縮尺で記録したが、遺構の性格や規模などから1/10~1/40でも記録している。また遺跡の全体図は1/200で記録した。

写真記録は調査の進捗状況に合わせ、調査過程に応じて随時撮影している。カメラは35mm判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットで撮影した。また必要に応じて中判カメラでも撮影している。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は、財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は出土遺物・記録などの各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で、財團法人福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する。

(福田)

引用・参考文献

- 小山正忠・竹原秀雄他 1997版 新版 標準土色帖
湯川村教育委員会編 1995 『湯川村史第3巻通史原始・古代・中世・近世』

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺跡の概要と遺構の分布

桜町遺跡の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡1軒、方形周溝墓7基、周溝状遺構1基、竪穴状遺構4基、掘立柱建物跡18棟、土坑62基、溝跡18条、柱穴群多数である。これら遺構の年代は弥生時代後期、平安時代、近現代の3時期に大別できる。

弥生時代後期の遺構群は、竪穴住居跡、方形周溝墓、周溝状遺構、土坑である。これらの遺構の分布は調査区全域にわたるが、方形周溝墓は調査区の中央部にまとまって確認できた。方形周溝墓はいずれも周溝が全周せず、四隅部が途切れて陸橋となる特徴がある。周溝墓の規模は5号周溝墓が一辺12~14mを測る。その他の周溝墓は一辺が5~7mとなる。埋葬施設が確認できず、周溝墓の規模だけみれば、階層差を示す可能性も指摘できよう。また周溝墓の方向からは、調査区中央部に位置する1・3・7・8号周溝墓、調査区東側の4・5号周溝墓の方向がそれぞれ一致することから、周溝墓の造営単位として2つのグループの存在が暗示される。各周溝墓からは出土遺物に明確な年代差が認められず、継続して築造されたものと想定されるものの、その築造順序までを復元することができない。なかでも4・5号周溝墓は重複する位置で構築されており、周溝墓の埋葬施設が確認できないほど削平されている。周溝墓が近接し連続して構築された場合、先行して構築された周溝墓を壊して新たに造られたと考えにくい。4号周溝墓の西溝と5号周溝墓の東溝が共有するように造られ、5号周溝墓に後続して4号周溝墓が造営されたと判断している。

竪穴住居跡と円形周溝状遺構は北東側で確認できた。竪穴住居跡は楕円形を基調とするが、明確な柱穴や炉跡などを確認できなかった。竪穴住居跡から出土した弥生土器の特徴は、在地土器に混ざり少數ながら北陸地方や北関東の弥生土器の特徴を持つものが確認できたことである。周溝状遺構は円形にめぐる周溝とその内部に造られた建物跡から構成される。6号周溝状遺構の他に15号建物跡とその周囲をめぐる5・12号溝跡もこれに該当するであろう。これらの周溝状遺構は、先学の研究成果から北陸地方で確認できる平地式住居跡と共通する特徴が認められた。周溝墓を中心とする墓域と居住空間とに40mほどの距離があり、明確な土地利用の違いをもって集落が営まれる景観が復元できる。弥生時代の土坑については2・13・40・41号土坑が該当する。その性格は不明であるが、調査区全域で確認できる。

平安時代の遺構群は、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、溝跡である。調査区の西半部に集中する傾向が見られた。東側で確実に平安時代といえるものは2号建物跡だけである。掘立柱建物跡を中心とした集落となる景観が復元される。年代は9世紀前半から10世紀代までの存続期間を想定している。

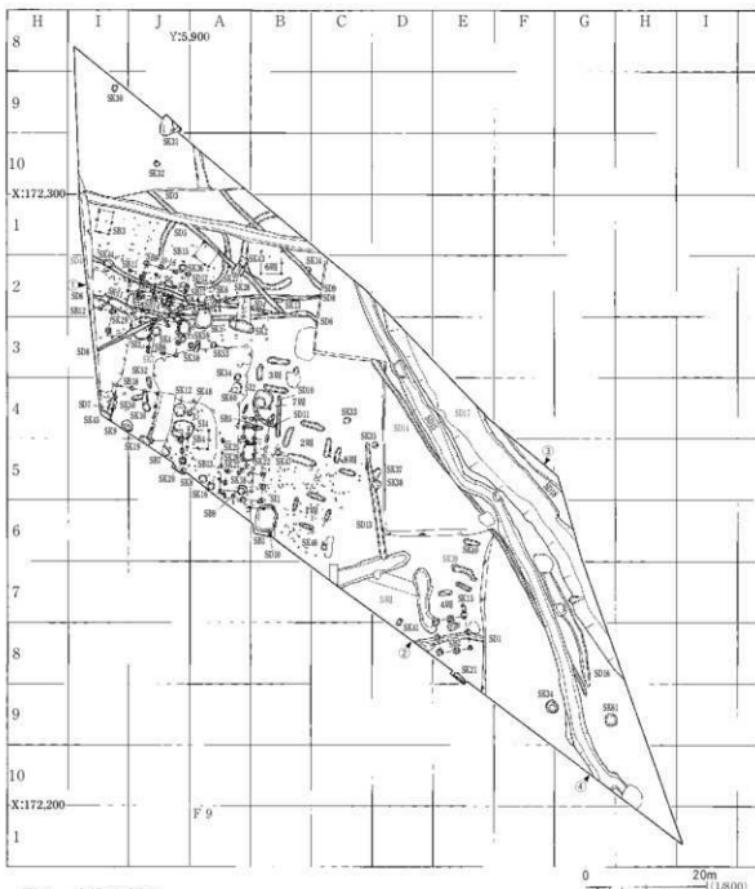


図4 遺構分布図

集落の中心的な建物跡は、調査区北西部の8・10・16号建物跡である。この建物は同所に2回の建て替えて、3時期の建物が建てられている。その規模は南北2間、東西3間で、柱穴は直径80cmと大きい特徴がある。またこの建物跡の周辺から須恵器円面鏡や墨書き器が多数出土するなど、集落内でも公的性格が強い建物跡と推定される。この建物跡と方向を同じくするものに、総柱建物跡である5号建物跡のほか、6・9・12・18号建物跡がある。方向は真北に対してわずかに東に傾いている。調査区東側の2号建物跡は真北に対し西に傾く建物であり、これと方向を同じくするのが7号建物跡である。建物跡の年代を特定できる出土遺物が少なく明確でないが、7号建物跡は土坑

群よりも古い建物であることから、西側に傾く建物群から東側に傾く建物群への推移が見て取れる。

竪穴状遺構はカマド・柱穴が認められず、居住施設とは考えにくい。いずれも大量の土器が出土する特徴がある。構築当初の明確な機能を推定できるものは得られていないが、いわゆる「方形竪穴」とよばれる半地下式の穴蔵として利用されたと推察している。廃絶後は人為的に埋め戻されたと考えられ、埋没過程においてくぼみ状になった段階で土器など当時の生活ゴミを廃棄する「廃棄坑」となったのであろう。土坑の多くは、掘立柱建物跡の周辺に多く分布し、「廃棄坑」と考えられる。その他に6号土坑は井戸跡と考えられ、木挽・ヘラ状木製品・ヒョウタン・トチなどの木質遺物も出土している。6号土坑の位置から、8・10・16号建物跡に伴う井戸跡と推定される。

近現代の遺構群は、調査区東側で確認した15~18号溝跡である。これらの溝跡は、明治時代の丈量図にも記載されている用水路で、江戸時代まで遡る可能性がある。会津若松市の木流地区で潤川を堰き止め、湯川村方面の水田に水を供給していたもので、会津地域を代表する当地の穀倉地帯を潤す水路として古くから利用されていることを示す貴重な資料となるであろう。この用水路は昭和40年代の圃場整備により埋め立てられたとの聞き取りを得ている。

2. 基本土層

桜町遺跡は日橋川の支流である潤川の西岸に位置している。地質は第四紀完新世に属する段丘・肩状地堆積物となる。遺跡内の基本土層は、調査区境の壁面の一部を重機によって深く掘り下げて観察を行った。その結果、大きく5層（L I ~ L V）に分けた。調査区内でも平成6年の圃場整備による削平が顕著な部分では、堆積状況が一様でなく、欠落する土層などもある。また同一土層でもその性質の違いに応じて細分した部分もある。この場合は、小文字アルファベットを組み合わせて表記した。（例：L III a）

以下、堆積土の特徴についてまとめる。

L I : 調査区全域を覆う表土、耕作土、盛土などを一括した。層厚は15~40cmである。表土中からは弥生時代から現代までの遺物が混入している。

L II : 黒褐色土（10YR2/2）。炭化物と焼土を極少量含む。旧表土層と判断した。この土層は、調査区西半部から南側にかけて顕著に認められた。層厚は最大でも15cm程度と薄い。この土層には弥生土器、土師器、須恵器が多量に含まれている。そのため基本的には人力で掘り下げ、遺物の出土位置を確認している。

L III a : 明黄褐色土（10YR6/6）。やや粘質で、直徑1cm前後の沼沢火山噴出物（NP）を含んでいる。L IIIは遺跡の基盤層で、無遺物層である。堆積土の性質に違いが認められ、L III a ~ L III eまでの5層に細分した。L III aは層厚が15~20cmで、調査区西端から中央部にかけて分布している。またNPは河川による再堆積と判断した。

L III b : 褐色粘質土（10YR4/4）。NPを含まない。層厚は20cm前後である。

L III c : 明黄褐色砂（10YR7/6）。層厚は40~50cmである。調査区南東側や北西側で、30cmほど低

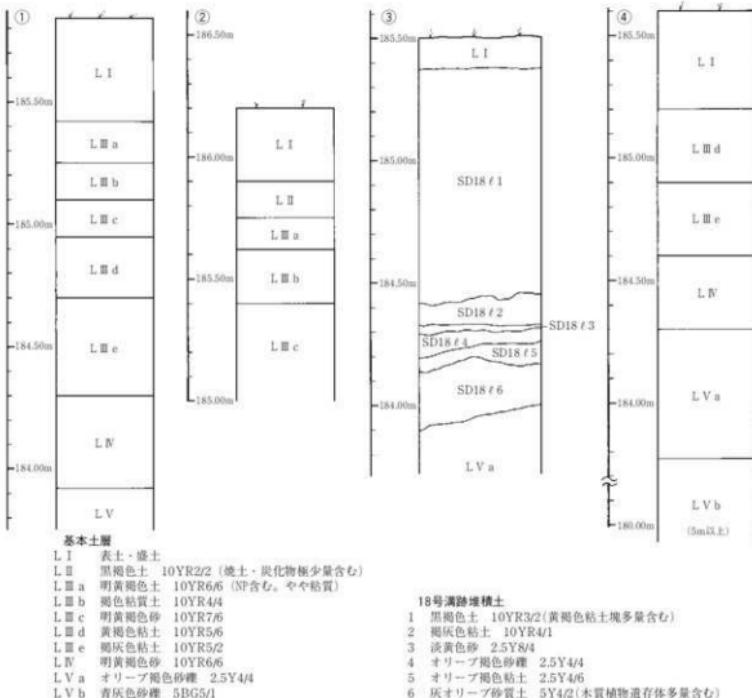


図5 基本土層図

くなった部分の構造検出面である。表土直下でL III cとなり、30~32・34号土坑、14~18号溝跡などの検出面である。また調査区西側中央、F 8-A 4グリッド付近は耕作によって搅乱され、L III cが露頭している。

L III d：黄褐色粘土（10YR5/6）。層厚は約30cmで、酸化鉄の集積が認められる。

L III e：褐灰色粘土（10YR5/2）。層厚は約40cmである。15号溝跡の底面付近である。

L IV：明黃褐色砂（10YR6/6）。層厚は30~40cmである。

L V a：オリーブ褐色砂礫（2.5YR4/4）。層厚50cm前後の砂礫層である。調査区東端を流れる17・18号溝跡の底面となる。礫の直径は3~10cmである。

L V b：青灰色砂礫（5BG5/1）。調査区東端部を重機で掘り下げて確認した。湧水が激しく砂礫層はグライ化している。層厚は5m以上である。

第2節 壇穴住居跡

今回の調査で確認した壇穴住居跡は、3号住居跡とした1軒だけである。出土土器の特徴から弥生時代後期と考えられ、近接する方形周溝墓と同時期の住居跡であろう。該期の壇穴住居跡が確認された事例は極めて少なく、良好な資料となる。

3号壇穴住居跡 S I 3

遺構(図6、写真7・8)

本住居跡は調査区の東端、E 8-J 3グリッドに位置する。周囲は標高185.4mの平坦な地形である。最も遺構が密集している部分であり、6・11号建物跡、8号溝跡をはじめ遺構の重複が著しい。重複関係を整理すると、本住居跡が最も古い時期にあたる。遺構検出面は、L III aとしたN Pが混じる黄褐色粘質土層の上面である。

本住居跡の東壁は、重複する遺構に埋され不明瞭であるが、平面形は梢円形と推定される。規模

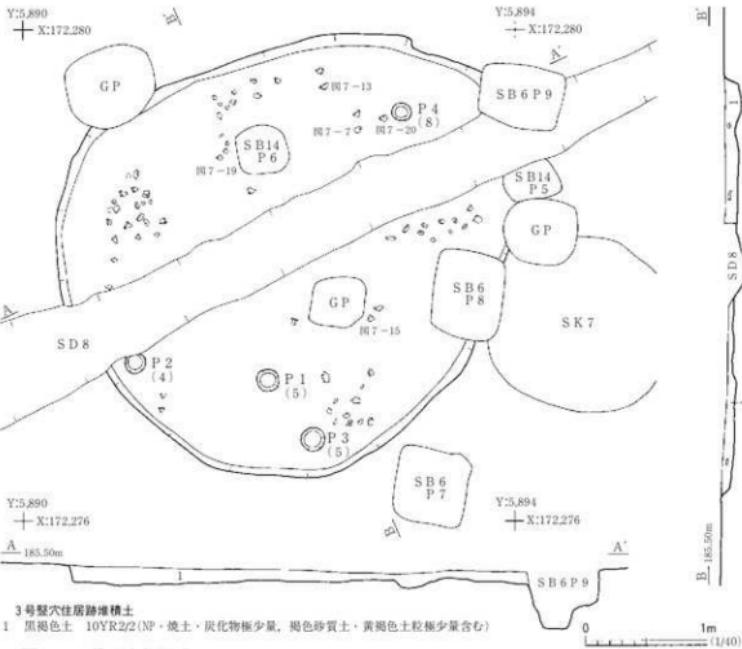


図6 3号壇穴住居跡

は長軸方向で3.95m、短軸方向で3.45mを測る。検出面からの深さは、北西側がわずかに深く14cmとなる。周壁は遺構自体が浅く不明瞭であるが、ほぼ垂直気味に立ち上がる。床面は標高185.2m付近ではほぼ平らになるが、床面の中央部に比べ、壁際部分が数cm程度くぼむ特徴がある。

床面上で確認できた施設は小穴が4基である。いずれも直径20cm前後の円形の小穴で、深さは最大でP4の8cmである。住居跡の屋根材を支える柱穴としては、規模が小さく浅いなどやや貧弱な印象がある。また小穴の配置に明瞭な規則性も見られないため、住居の上部構造は復元できない。床面中央部では8号溝跡に壊された部分に焼土粒を確認した。炉跡の可能性がある。

遺構内堆積土は黒褐色土の単層である。NP、焼土・炭化物を極少量含んでいる。遺構自体が浅く堆積状況は不明であるが、土質や含有物が均質な状態であることからすれば、自然堆積によって埋没したものと判断した。

遺 物（図7、写真67）

本住居跡からは弥生土器が約150点、土師器片が約50点、須恵器片が8点、石器剥片が1点出土している。出土状況は、土師器・須恵器など平安時代の遺物は溝跡や建物跡の検出作業の過程で出土したもので、周囲の遺物が混入したものと考えられる。堅穴住居跡の精査作業で出土したものは、図6に示したように破片で約70点出土し、まとまりを持っているように見えるが接合しない。いずれも床面から2~3cm浮いた位置から出土した。

出土した弥生土器はいずれも小破片で、器形を復元できたものはない。土器の文様や制作方法の違いで分類すると、地文に縄文を施し、太い沈線で文様をつけるタイプが最も多い。ハケメ調整痕を残す北陸系の土器群が次に続き、クシ衝状施文具による波状文や鋸歯文を施す北関東系土器は少ない。しかし胎土を観察すると、いずれの土器にも白濁した長石粒が混入することから在地の粘土を用いて土器を作っていることがわかる。

1・2・4・7・8は口縁部に加飾を施す壺形土器である。1は折り返し口縁部の下端部に、指頭の押圧によりキザミ状の突起をつまみ上げている。2は口縁部下端に2段の隆帯がめぐり、指頭押圧によるキザミが充填される。7・8は壺形土器の頸部付近で、交互刺突文が施される。交互刺突文の上部は、地文に単節斜縄文を施文後、太い沈線や押引文に近い連続刺突文を施している。9・10は折り返し口縁の壺形土器で、口縁部直下にクシ描き波状文が施される。

3・5は壺形土器である。3は頸部でくびれ大きく外反する口縁部となり、口唇が上方につまみ上げられる。外面は頸部付近が継ぎのナデで、口縁部がヨコナデで仕上げられる。内面は頸部の屈曲部付近にカキトリ痕が残る。5は有段口縁の受け口状の壺である。内外面とも稜が弱い。6は高杯脚部で、表面が摩滅して不鮮明だがナデで仕上げられている。

11・12は3本歯のクシ状施文具による文様が施されている。12は鋸歯状文が2段描かれるのであろうか。11はハケメ調整を残し、その後に鋸歯状文を描いている。13~15は外面にハケメ調整を残す土器である。壺または壺形土器であろう。16はクシ描き波状文が見られる。18~21は単節斜縄文を地文とし、太い沈線によって文様が施されている。18は軽い波状口縁部となり、口唇部にヘラ状

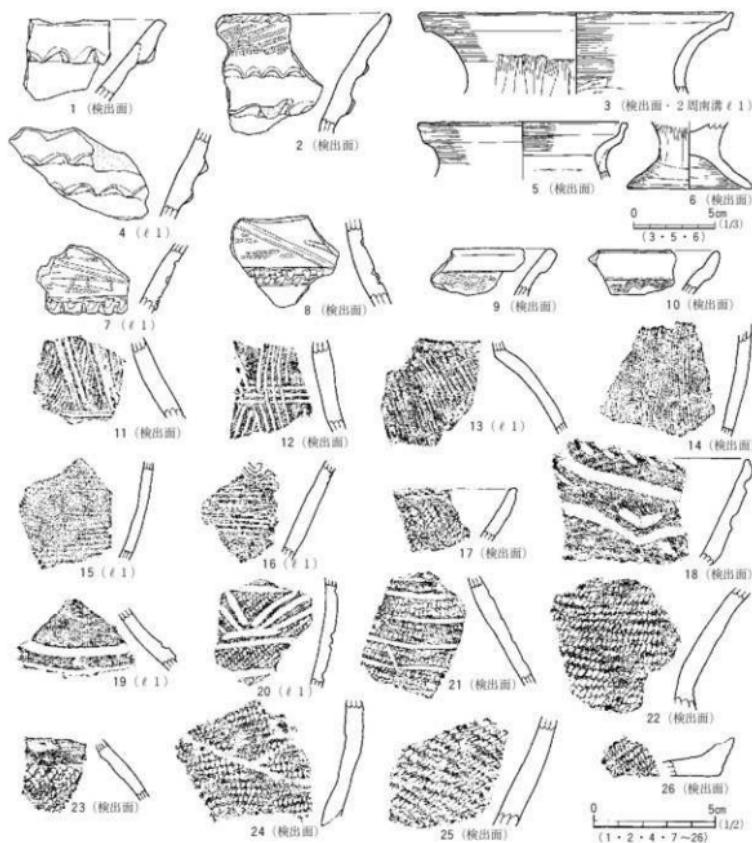


図7 3号竪穴住居跡出土遺物

工具の押圧によるキザミが充填される。口縁部には太い沈線による連弧文が2段施され、上下で天地逆にそれぞれ段違いになるように配している。各連弧文の交点部には、竹管状刺突具による「V」字状の刺突文を施す。19は壺形土器の頸部付近で、下部の沈線は、連続刺突状の沈線となる。21はやや細い沈線で連弧文が描かれる。26は底部片で、平底となる。外面は単節縦文である。

まとめ

本住居跡は、明瞭な炉跡や柱穴など住居施設が不明である。出土した土器の特徴から、弥生時代後期に属し、周溝墓出土の土器群とはほぼ同様な特徴を持つと考えられる。周溝墓の造営に深く関わる集団が居住する竪穴住居跡と推察している。

第3節 周溝状遺構

今回の調査では周溝状遺構を8基確認した。6号周溝状遺構以外の7基は方形区画の周溝で、その四隅が途切れる特徴があり、方形周溝墓と考えている。いずれも周溝が遺存しているだけで、周溝の内部に埋葬施設や墳丘盛土は確認できない。方形周溝墓の年代は、出土遺物の特徴から弥生時代後期後半頃である。

6号周溝状遺構は円形周溝で、その内部に掘立柱建物跡が建つ。北陸地域で確認される平地式住居跡との類似性が指摘されるが、周溝と柱穴が規則的配置をとらないなどの相違点も存在し、検討を要する。また5号溝跡・12号溝跡・15号建物跡も円形周溝内の小型建物跡を構成するが、溝跡自体が浅く途切れるため、6号周溝状遺構との関係が明確ではない。

1号周溝墓

遺構（図8、写真9・10）

本遺構は調査区の中央、F8-B5・B6・C5・C6グリッドに位置する方形周溝墓である。周囲は標高185.3mの平坦面であり、遺構検出面は表土直下のLIIIa上面である。周辺に点在する小柱穴群と重複し、そのいずれよりも本遺構のほうが古い。本遺構の北側には2・8号周溝墓が分布し、主軸方向を同じくする周溝墓群の中では最も南に位置する。

本周溝墓は墳丘部を区画する四方の溝で構成され、各周溝の四隅部分が途切れて全周しない。平面形は東西方向に長い長方形をなす。周溝内法の規模は、南北幅が4.32m、東西幅が5.14mである。主軸方向は真北に対して20度東に傾き、周辺の周溝墓と同じ方向で並ぶ。各周溝の規模は北溝が全長3.06m、幅0.78m、南溝が全長2.4m、幅0.66m、東溝が全長2m、幅0.52m、西溝が全長2.28m、幅0.52mとなる。周溝の深さは15cm前後といずれも浅い。

周溝は浅く遺存状態が悪いが、遺存する周壁から内壁側が外壁側に比べて急峻になる特徴がある。底面は平坦であるが、中央部から両端部に向かって浅くなる。

周溝内堆積土は黒褐色を基調とし、底面付近では上層部に比べ黄褐色土粒を含む割合が高くなる特徴がある。黄褐色土粒はLIIIaを起源とし、黒褐色土の中にまばらに含まれる。周溝内の下層堆積土は、自然流入土とともに墳丘盛土の崩落土が堆積したものと判断している。

遺物（図9・10、写真61）

本周溝墓からは弥生土器が87点、平安時代の土師器13点、須恵器6点が出土した。そのうち弥生土器の内訳は、北溝が18点、東溝が19点、南溝が35点、西溝が15点である。これらの遺物は各周溝の堆積土中から出土したもので、底面からわずかに浮いた位置で出土した。そのうち形状が分かるものを図9・10に示した。

1～5は壺形土器の口縁部破片で、口縁部下端に押圧による小波状突起が充填される土器である。

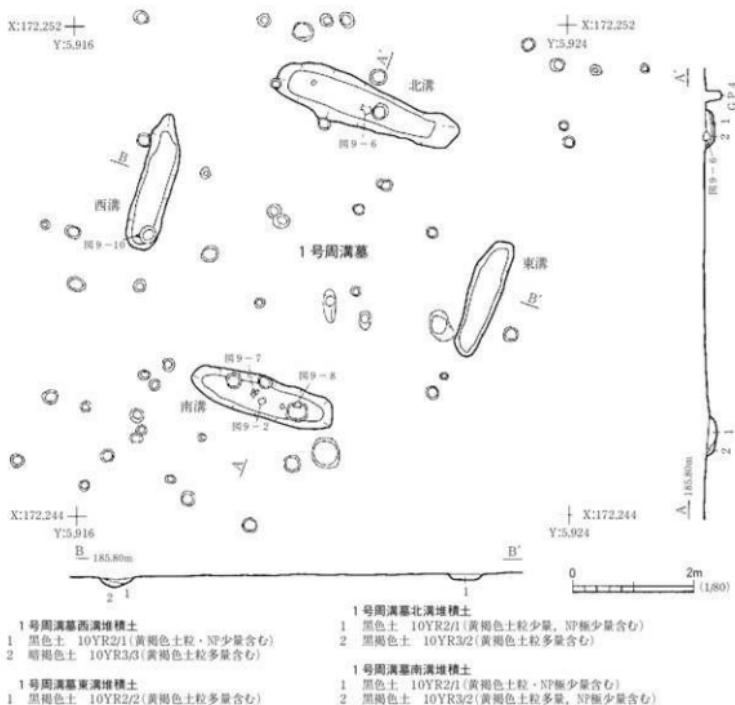


図8 1号周溝墓

1は口唇部が平らに整えられ、ヨコナデで仕上げられる。頸部上半はハケメ調整の上から半裁竹管状施工具による連続波状文が施される。2は地文が単節縄文で、口縁部下端の押圧が3段めぐる。6は複合口縁の壺形土器である。外面と口縁部内面にわずかに赤彩の痕跡が残る。口縁部はヨコナデで仕上げられ、体部はハケメ調整の後、ナデが施される。内面は横位のナデが観察でき、頸部の接合部に指痕痕が明瞭に残る。7は細長い頸部となる壺形土器である。体部はやや丸みを帯びる。外面は太い沈線により文様帶が描かれ、地文の縄文を磨り消して無文部を構成する。この無文部はペンガラを用いて赤彩されている。胴部の文様は対になる矢羽形の文様がモチーフとなり、胴部上半に3単位、下部はモチーフの天地を逆転させて3単位描き、モチーフ間に楕円形や連弧文を充填させている。また沈線の交点には円形竹管による垂直刺突が施される。2号周溝墓の図12-1と同じ文様構成である。8・9は口縁部下端に明瞭な段を持つ。8は口縁部に単節縄文の回転施文が施され、体部の内外面ともハケメを残す。9の外面には細かいミガキが施される。内面はハケメの後に横位のミガキで仕上げられる。10はハケメ調整痕を残す壺形土器である。口縁部は幅が短く、明

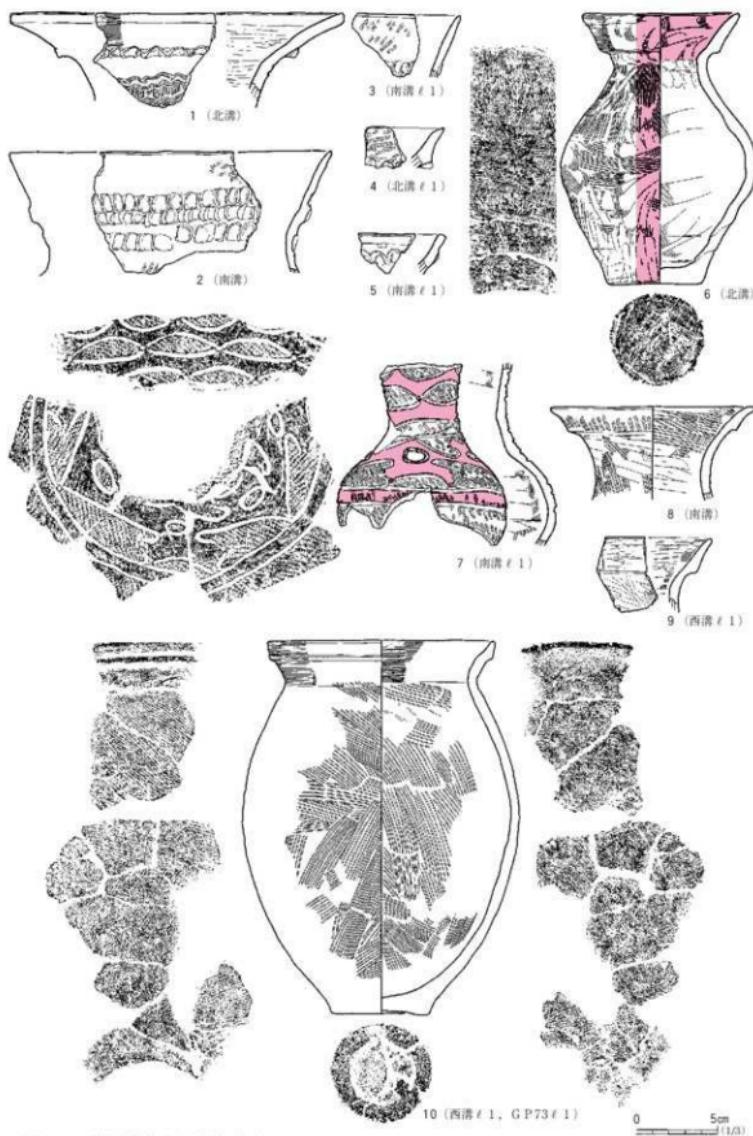


図9 1号周溝墓出土遺物（1）

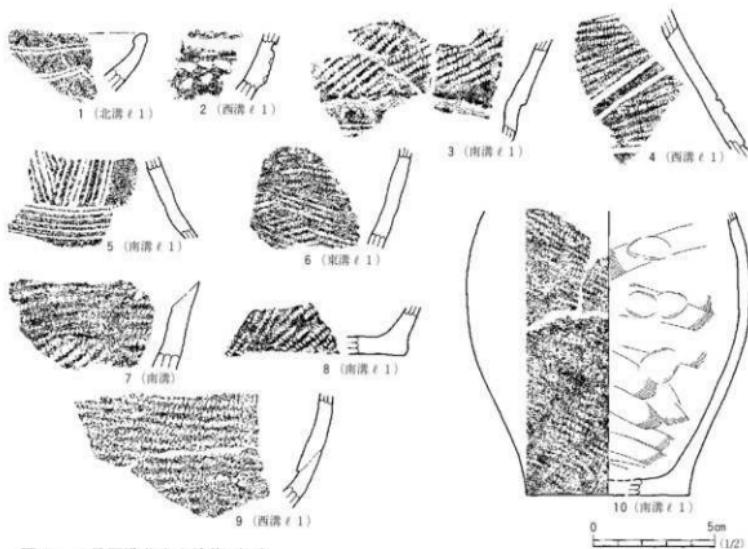


図10 1号周溝墓出土遺物（2）

瞭な段を持つ。頸部は「く」の字状をなし、口縁部が外反する。胴部中央に最大径を持って底部がすぼまり、全体的に卵形になる。

図10-1は口縁部が受け口状になる壺形土器で、口縁部直下に連弧文が描かれる。2は円形竹管を用いてやや斜めに交互刺突されている。3は口縁下端に段を持つ壺形土器で、外面は地文として単節繩文が施されている。5は壺形土器の頸部破片で、クシ歯状施文具により鋸歯文が描かれる。8・10は平底となる底部で、壺形土器であろう。外面の地文として単節繩文が施される。

ま と め

1号周溝墓は調査区中央に分布する周溝墓群の1基で、最も南に分布する方形周溝墓である。平面形が他の周溝墓と同様に東西方向に長い長方形をなす。1～3・7・8号周溝墓は、その主軸方向と同じくして企画的に配置されることから、同一集団の周溝墓と考えている。また4・5号周溝墓と主軸方向が異なるだけでなく、大型の5号周溝墓を含まないことから、同一集団内における被葬者の階層差は顕著でない可能性が高い。年代については、周溝墓群内の新旧関係は不明であるが、弥生時代後期後半と判断している。

2号周溝墓

遺 構（図11、写真11・12）

本周溝墓は調査区中央、F 8-B 4・B 5・C 4・C 5グリッドに位置する。周囲は標高185.5

mの平坦面である。遺構は近年の畠畝溝による擾乱が顕著な部分であったが、L III aとしたN Pが混じる黄褐色粘質土の上面で四方の周溝を確認した。F 8-C 5グリッドの小柱穴と本遺構の南溝が重複するが、柱穴の方が新しい。周辺に分布する遺構は、東側に8号周溝墓、南に1号周溝墓、北西側に3・7号周溝墓がある。

本周溝墓は四方の溝で構成され、それぞれ四隅部分が連続せず途切れる特徴がある。平面形は東西幅が長い長方形をなす。周溝内法の規模は、南北幅は5.0m、東西幅が5.94mを測る。主軸方向は、周辺の周溝墓と同様に真北に対して約20度東に傾いている。各周溝の平面形は、内壁側については直線的になるが、西溝と南溝では周溝の外側が弧状に突出する。周溝の規模は、北溝が全長3.96m、幅0.78m、南溝が全長4.76m、幅が1.13m、東溝が全長3.15m、幅が0.76m、西溝が全長3.65m、幅1.12mである。周溝の深さは10~20cmといずれも浅く、周溝墓自体が大きく削平されていることがわかる。

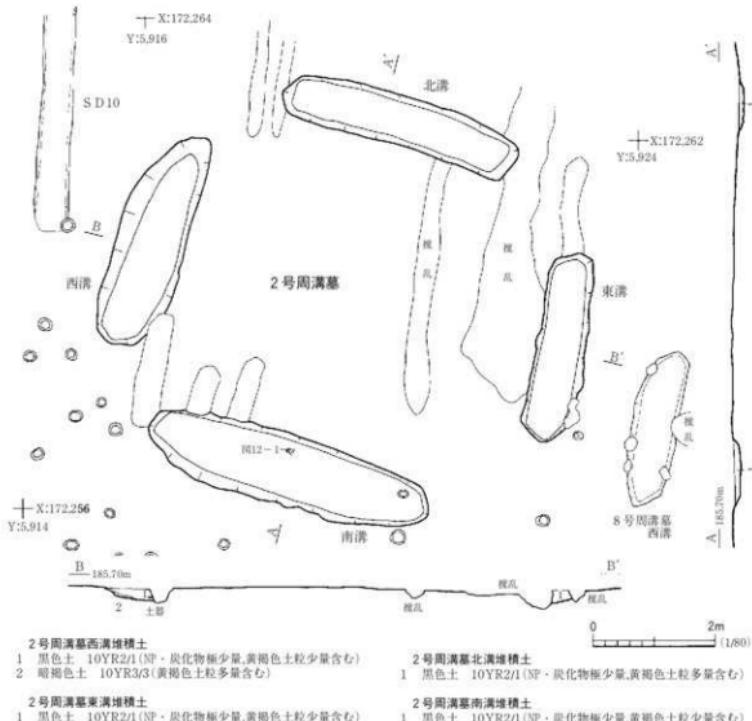


図11 2号周溝墓

周溝はいずれも浅く遺存状態も悪い。遺存する壁面では、外壁よりも内壁側が垂直気味に立ち上がる傾向が見られる。これは周溝の埋没過程において、周溝外面の崩落がより顕著であったことを示す。底面はいずれも平坦であるが、両端の四隅部に向かって浅くなる。

周溝内堆積土はいずれも黒色土を基調とし、N P や黄褐色土粒を含んでいる。この堆積土は墳丘の崩落土とともに流入した土で、自然堆積と判断した。西溝では、底部付近に2層とした暗褐色土が認められる。黄褐色土粒を多量に含み、周溝内部から流入したような堆積状況と判断している。

遺 物（図12, 写真62）

本周溝墓からは弥生土器が52点出土している。内訳は東溝が19点、南溝が16点、西溝が17点である。これら遺物は周溝の堆積土中から出土したもので、周溝底面から2~3cm程浮いた位置から出土している。このことから墳丘上に置かれた供獻土器が墳丘崩落土とともに流入したものと判断している。

1は南溝中央部の墳丘寄りの位置で、底面からはわずかに浮いた状態で出土した。器形は長頸壺で、約半分の遺存である。口縁部を欠くが、口縁部下端に明瞭な段が付く。頸部は胴部にくらべ細くのび、胴部はやや肩が張った器形で底部へとすぼまる器形となる。体部外面の地文は単節繩文で、沈線間は地文が磨り消されて無文部となり、赤彩されている。

口縁部は平行沈線と連弧文による文様で、口縁部下端の段には円形竹管による交互刺突文が施される。頸部は連弧文による文様が描かれ、地文の繩文を磨り消した無文部となる。連弧文の交点には刺突が施される。胴部上半は、対になった矢羽形のモチーフが主な文様となり、上半部が2単位で、下半部はモチーフの天地が逆転して3単位めぐる。そのモチーフ間には、楕円形や連弧文が充填され、各沈線の交点には、円形竹管による垂直刺突が施される。胴部下半は平行沈線の直下に下向きの連弧文が描かれ、連弧文の交点を一つ飛ばす位置から下方に垂下する波状沈線が描かれる。

2は有段口縁の壺形土器で、口縁部が外反して開く。口縁部には凹線状の深い沈線が4条めぐり、下端の段には指頭押圧による波状突起が充填される。頸部上半には、細いクシ齒状施文具による連続波状文が描かれる。3は壺形土器の頸部破片で、クシ齒状施文具により縱位に区画され、その内部に横位の波状文が描かれる。6・7は壺形土器の口縁部破片で、同一個体であろう。内外面ともハケメ調整痕が残る。4・5・8はより糸文を施す壺形土器の胴部片である。9は壺形土器の体部下半で、外面は地文に単節繩文、内面はハケメを残す。10・11は弥生時代中期に属するものであろう。11は断面三角形の細い沈線による円弧文が描かれる。

ま と め

2号周溝墓は調査区中央に分布する周溝墓群の1基であり、その中では最も規模の大きい周溝墓である。南溝と西溝の平面形は、外側中央が弧状に突出する特徴があり、7号周溝墓と同じく円を基調とする築造企画が想定される。周溝墓群の新旧関係は不明だが、年代は弥生時代後期後半に属すると考えている。

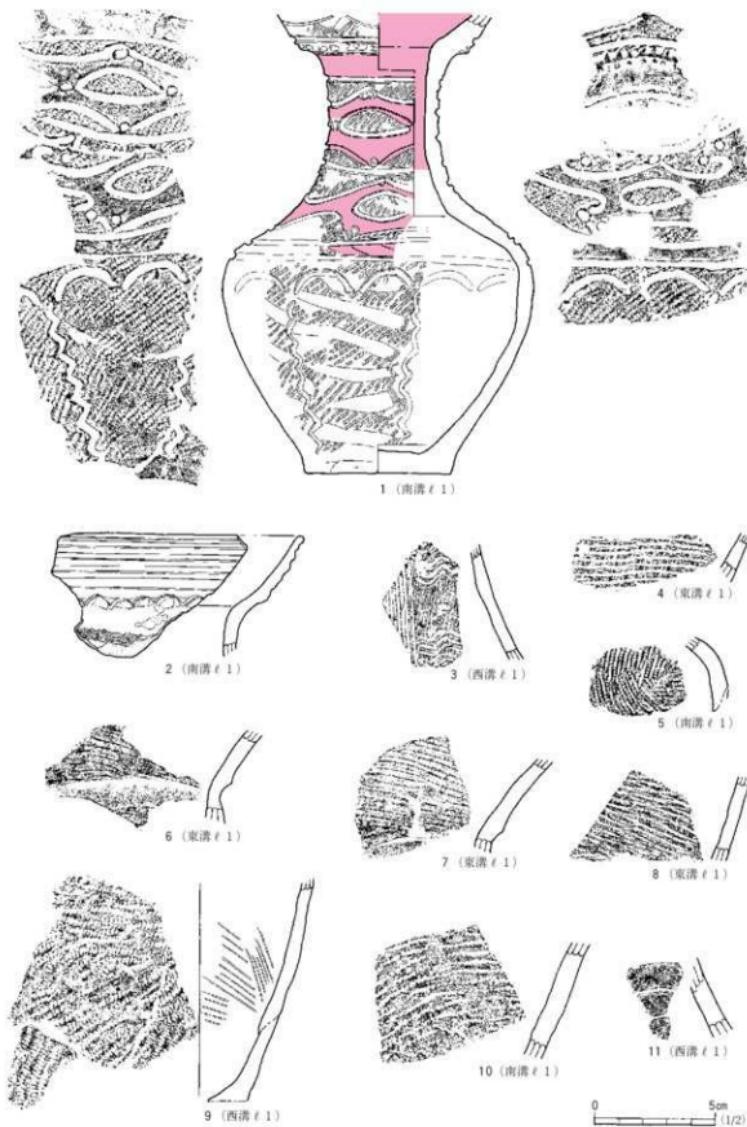


図12 2号周溝墓出土遺物

3号周溝墓

遺構 (図13, 写真13)

本周溝墓は調査区のほぼ中央, F 8-B 3・B 4 グリッドに位置する。周囲は標高185.3mほどの平坦面に立地している。重複する遺構はないが、東溝は近年の耕作によって、その大部分が失われている。調査区中央部に分布する周溝墓群のなかでは最も北に位置する。南側の7号周溝墓北溝との距離は2.5mである。遺構検出面はL III a上面である。

本周溝墓の平面形は、東西方向に長い長方形をなす。その主軸方向は、真北に対して約10度東に傾いている。周溝内法の規模は、南北幅が3.6m、東西幅が5.1mを測る。周溝の規模は、北溝が全長3.6m、幅0.98m、南溝が全長4.0m、幅0.8m、西溝が全長2.5m、幅0.9mを測る。東溝は大半が失われ、詳細な構造は不明である。周溝の深さは、各溝とも20cm前後である。

周溝はいずれも浅く壁面の残りも悪い。遺存する部分では外側の壁面よりも内壁側が急峻に立ち上がる特徴がある。底面はいずれも平坦で、中央部から端部に向かって浅くなる。

周溝内堆積土はいずれも黒褐色土を基調とする単層であり、NPや黄褐色土粒を含んでいる。堆積状況やその含有物が均質な状況からすれば自然堆積で、埴丘の崩落土などが周溝内に流入したものと判断した。

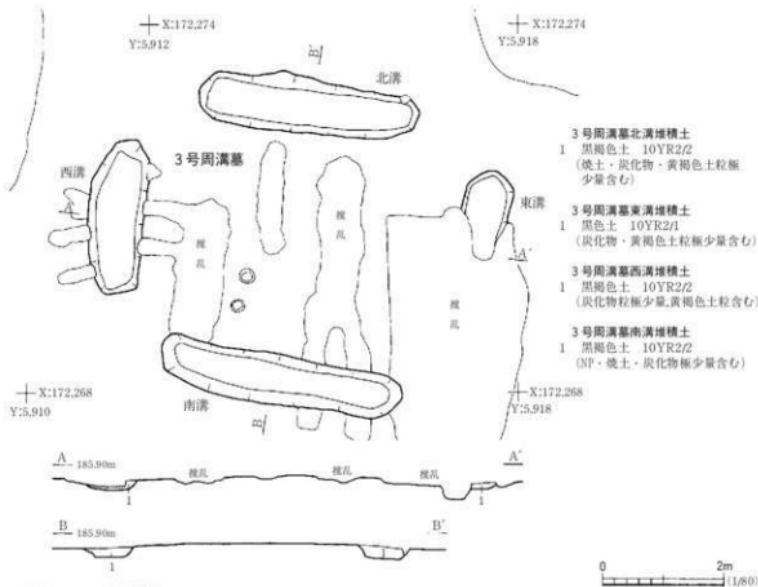


図13 3号周溝墓

遺物（図14, 写真63）

本周溝墓からは弥生土器が89点出土している。内訳は北溝が44点、東溝が6点、南溝が24点、西溝が15点で、その他に西溝からアメリカ式石鎚が1点出土している。これら遺物はいずれも周溝の堆積土中から出土したもので、周溝底面からわずかに浮いた状態で出土した。墳丘上に供獻された土器が崩落したものと判断した。

1は有段口縁となる壺形土器の口縁部破片であろう。口縁部下端に明瞭な段を持ち、大きく外反する器形である。内外面とも口縁部はヨコナデで仕上げられる。2は壺形土器の口縁部破片で、直立気味に開く口縁である。口縁部直下に指頭による連続押圧が2段めぐる。口唇部は平らに整えられ、ヘラ状工具によるキザミが充填される。地文は単節斜縄文である。内面は口唇部付近のみナデがみられる。3は口縁部が受け口状に開く壺形土器である。口縁部直下に沈線で連弧文を描き、その交点に円形竹管による垂直刺突が施されている。口縁部下端は明瞭な段となり、平行沈線がめぐる。平行沈線の内部に隆帯が貼り付けられ、円形竹管を斜めにした交互刺突が施される。隆帯の下部は横位沈線で区画され、文様は付かず地文の単節縄文が残る。4は壺形土器であろうか。口唇

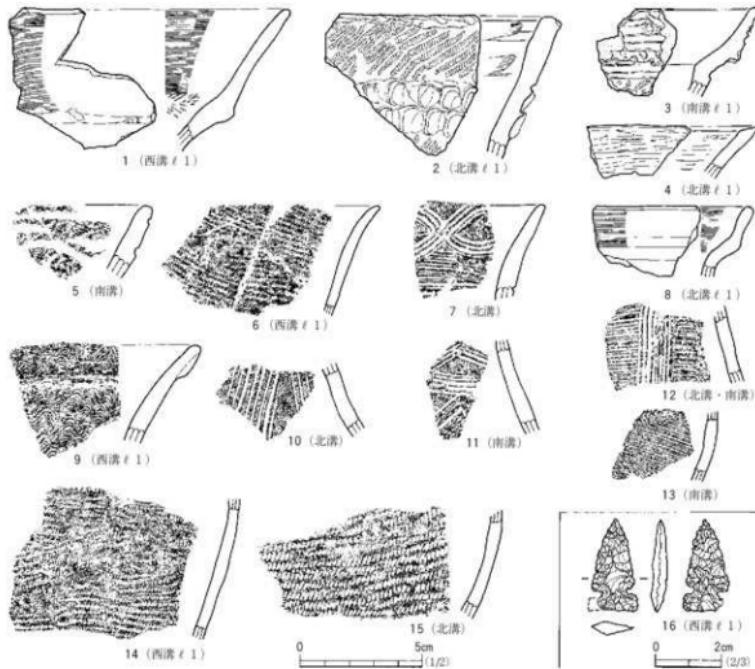


図14 3号周溝墓出土遺物

部の端部が内そぎ状に整えられる。内外面とも横位のミガキが施される。8は有段口縁の壺形土器で、口縁部はヨコナデで仕上げられる。5～7・9～15は壺または壺形土器の胴部破片である。7はハケメ調整の後に、クシ歯状施工具による文様が描かれる。「8」の字を横に倒したような文様が連続して描かれている。9は折返し口縁になる壺形土器で、外面に細かいクシ歯状施工具による連続波状文が描かれる。10～12は太いクシ歯状施工具により鋸歯文が描かれる。13は細かいハケメ調整を残し、内面はミガキが施される。16はアメリカ式石鏃で、石材は珪質頁岩である。

ま と め

3号周溝墓は調査区中央部に分布する周溝墓群の1基で、その中で最も北に位置する。周溝墓群の中での新旧関係は不明であるが、弥生時代後期後半頃と考えている。

4号周溝墓

遺 構 (図15, 写真14)

本遺構は調査区南東部、F 8-E 7・E 8グリッドに位置する方形周溝墓である。周囲は削平が

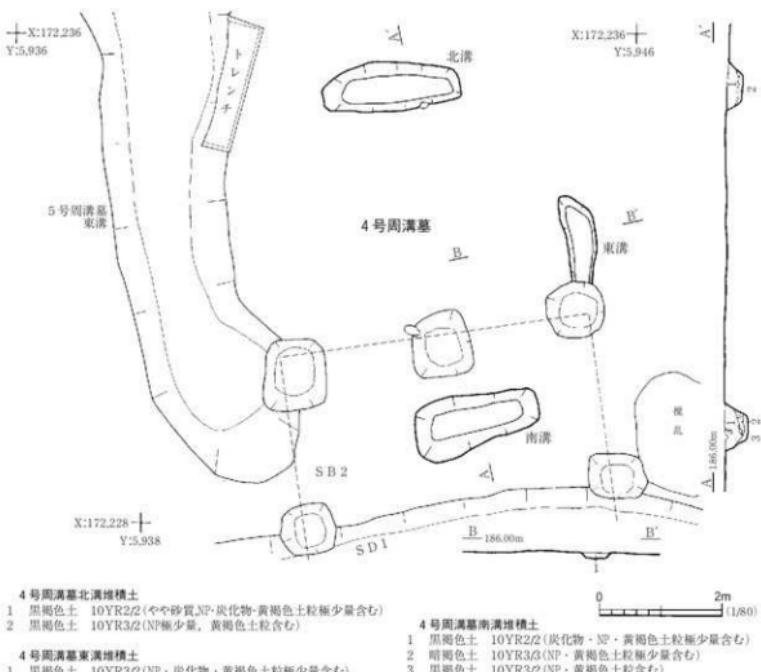


図15 4号周溝墓

最も少なく、標高は185.8mで調査区内では最も標高が高い。2号建物跡や1号溝跡と重複し、いずれよりも古い。遺構検出面はLⅢa上面である。

4号周溝墓は、5号周溝墓の東隣に位置している。直接的な重複はないため、新旧関係は不明である。さらに両周溝墓の出土遺物を比較しても、年代差を示す所見が得られていない。そのため周溝墓の分布や方向などを参考に新旧関係を推定する。

周溝墓の築造当時の地表面は現在の検出面より高いことは確かで、当然周溝の上端も外側に広がる。4号周溝墓が5号周溝墓より古い場合は、5号周溝墓の東溝はさらに東側に溝幅を広げ、これによって4号周溝墓の墳丘をも壊して造られたことになる。一方4号周溝墓の主軸方向と5号周溝墓のそれが一致している点を積極的に評価すれば、両周溝墓の密接な関係が想定でき、5号周溝墓が造営された段階で4号周溝墓の葬送儀礼行為を断絶させたとは考えにくい。4号周溝墓が5号周溝墓のすぐ隣に続けて築造されたと考えれば、既にある5号周溝墓の東溝を共有して、新たに3方の周溝によって方形墳丘が区画できる。この場合5号周溝墓の被葬者は周溝墓の規模からも、集落内の有力者で、4号周溝墓の被葬者と近密な関係を有する人物との評価もできよう。

本周溝墓は西溝を除いた3方の溝で区画され、それぞれが途切れで連続しない。周溝内法の規模は、南北が4.7mである。西溝が遺存していないため東西幅は不明であるが、周溝墓の平面形は、5号周溝墓の平面形から推定して、東西に幅広い長方形になると推察できる。周溝墓の主軸方向は、真北に対して10度西に傾く。

周溝の規模は、北溝が全長2.2m、幅が0.8m、南溝が全長2.0m、幅が1.0mであり、東溝は南端を2号建物跡の柱穴で壊されているが、全長1.4m、幅0.44mを測る。周溝の深さは、南北溝が深く22~38cmで、東溝は6cmと浅い特徴がある。周溝の壁はいずれも急峻であるが、内壁側の傾斜が特に急になる特徴が見られる。底面は平坦であるが、周溝の四隅部に向かって浅くなる。

周溝内の堆積土は、N Pや黄褐色土粒を含む黒褐色土を基調とした土で、周溝内に流入した自然堆積土や墳丘崩落土と判断している。

遺 物 (図16)

本周溝墓からは34点の弥生土器が出土している。内訳は北溝から3点、南溝から31点である。いずれも周溝内の堆積土中から出土したもので、墳丘崩落土とともに周溝内に流入したものと判断した。図示していない遺物は、摩滅した小破片で壺形土器の胴部破片がほとんどで、地文に単節縄文やハケメが施されるものである。

図16-1は鉢形土器または高杯の杯身であろう。やや丸みを帯びた体部から口縁部が大きく開く器形である。体部外面は縦位のハケメ調整を残し、口縁部をヨコナデによって仕上げている。内面は体部に横位のハケメ調整を施している。2は高杯の脚部である。円筒状の短い脚部で、脚下部に屈曲を持って大きく開く端部となる。内外面ともミガキが施され丁寧なつくりである。3は壺形土器の破片であろう。やや細めの沈線によって文様が描かれる。平行沈線の上に矢羽状のモチーフとその間に連弧文が描かれる。4は壺形土器の底部破片であろう。

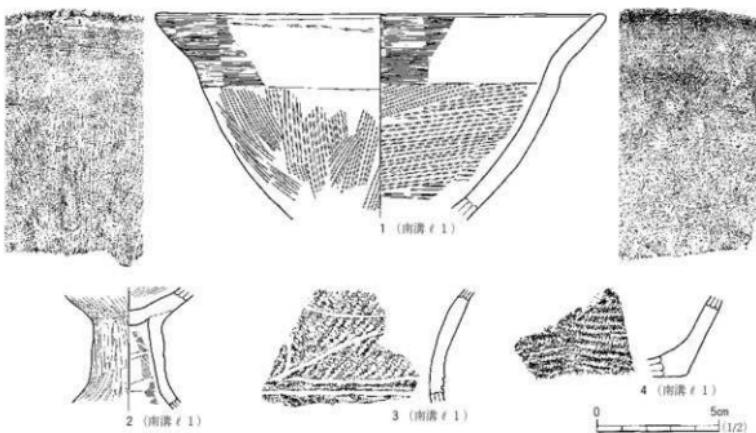


図16 4号周溝墓出土遺物

ま と め

4号周溝墓は5号周溝墓に近接する。直接的な重複関係がなく、新旧関係を特定できる資料は得られていないが、5号周溝墓とは周溝を共有して築造された周溝墓と推定している。遺跡内で最大規模となる5号周溝墓の東隣に造られた周溝墓であり、近接な関係で築造された周溝墓と推察できる。年代については、5号周溝墓との明確な年代差を示す遺物がないが、それほど時間差ではなく、弥生時代後期後半頃と考えている。

5号周溝墓

遺 構 (図17, 写真15~17)

5号周溝墓は調査区の南東側、F 8-C 7・C 8・D 7・D 8グリッドに位置する大型周溝墓である。周囲は調査区内で最も削平の少ない部分で、南溝周辺が標高185.8mの平坦面、北溝は近年の耕作で削平されたため低く標高185.5mとなる。本周溝墓は2号建物跡、1・13号溝跡と重複し、そのいずれよりも古い。2号建物跡は平安時代と考えられるが、本遺構は平安時代には周溝墓として認識されず、既に墳丘は失われていたのであろう。周辺の遺構として、本周溝墓東溝に接するよう4号周溝墓が分布する。4号周溝墓が5号周溝墓の東溝を共有して築造された可能性が高く、両者は密接な関係で築造されたものと推察している。遺構検出面は南溝周辺がL III a上面、北溝付近がL III b上面である。

本周溝墓は南西半部が調査区外となり、その全容は不明である。北溝と東溝、南溝の東端部を確認したにとどまる。平面形は東西方向に長い長方形である。周溝内法の規模は、南北幅が12mである。東西幅は西溝が確認できず不明であるが、13m以上と推定される。周辺の周溝墓に比べ、約2

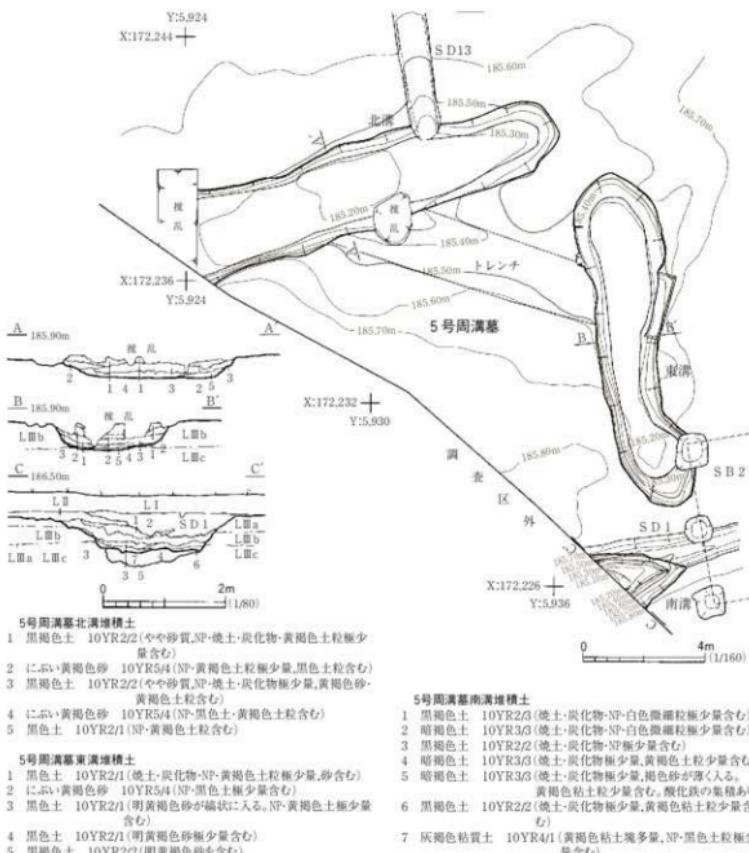


図17 5号周溝墓

倍の規模である。主軸方向は、4号周溝墓と同じく真北に対して約10度西に傾く。

各周溝の形状は北溝が直線的に延びる。東溝は内壁側が直線的になるが、外壁側の南北端が東側に張り出して「コ」の字形になる。南溝は東端部だけであるが、東溝と同様に南に張り出す。規模は北溝が全長12.2m、幅2.9~3.0m、東溝が全長11.0m、中央部幅で1.84mとなる。深さは南溝が最も深く0.84m、東溝が0.42m、北溝が最も浅く0.36mである。

周溝の壁面については、各溝とも内壁側が垂直気味に立ち上がり、外壁側は比較的緩やかな傾斜となる。底面はほぼ平坦であり、各溝の両端部に向かってわずかに浅くなる。南溝の底面は、断面

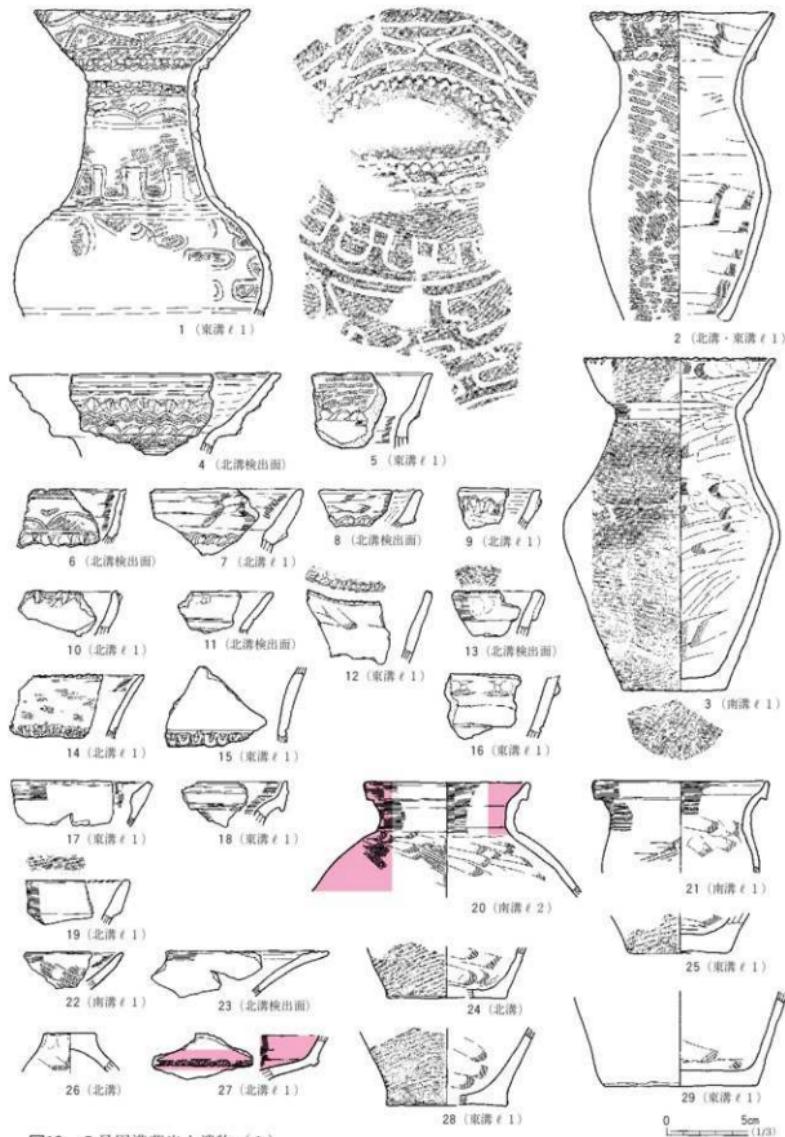


図18 5号周溝墓出土遺物（1）

観察によると平坦であるが、底面下部に人为的に埋め戻した様な堆積土が認められた。これについては現状で調査区際から周溝内で幅20cm程度しか確認できず、深さは20cmと浅いくぼみ状の掘り込みである。

周溝内堆積土は、各溝とも基本的には周溝内に堆積した自然流入土で、一部に墳丘崩落土も含まれるものと判断している。各溝とも堆積状況と遺存状況が一様ではないので、ここでは溝ごとに報告する。北溝は上端部に近年の耕作による搅乱が広く入っており、その搅乱より下層部分を5層に分けた。堆積状況は黒褐色土とぶい黄褐色砂が交互に入る。2・4層としたぶい黄褐色砂はL III cを起源とし、周溝外からの自然流入土と判断している。4層は底面上を薄く覆うぶい黄褐色砂で、黒色土を含んでいる。墳丘崩落土とともに、周溝墓の完成から比較的早い時期に堆積したものと推察できる。

東溝も近年の耕作による搅乱が深く溝状に入る。搅乱より下部を5層に分けた。北溝の堆積状況と同様に黒褐色土と明黄褐色砂が交互に堆積する。上層部は周溝内外からの自然流入土である。3層とした黒色土の中に、薄く縞状に明黄褐色砂が入る特徴がある。4層は周溝底面を薄く覆う黒色土で黄褐色砂を含んでいる。

南溝は調査区際に位置するため、土層は調査区際の壁面で観察した。周溝はL III a層を掘り込み、その後周溝を覆うように堆積したL IIを確認した。周溝内の堆積土は7層に分けることができ、周溝内の自然流入土と周溝底面の下部施設に大別できる。1~6層は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物・N P、黄褐色土粒が混入する。6層下部は草木根による搅乱でわずかに凹凸があるが、概ね平坦な周溝底面となる。7層は周溝の底面下部で確認された土層で、黄褐色粘土塊を多量に含む灰褐色粘質土である。上層の自然流入土とは明らかに異なる土層で、人为的に埋め戻された堆積土と判断した。7層の分布範囲は周溝底面に沿って掘り込まれているため、周溝墓より古い構造とは考えにくいことからも、周溝墓が完成した時点で、埋め戻されたものと判断した。この分布範囲は、調査区際から20cm程度の広がりであるため、その全容は不明である。周溝底面に設けられた施設と仮定するならば、周溝内の埋葬施設の可能性を指摘できる。

遺 物 (図18・19、写真64・65)

本周溝墓からは弥生土器255点、石器1点、平安時代の土師器94点、須恵器17点、陶磁器2点が出土している。弥生土器の内訳は、北溝が102点、東溝82点、南溝71点である。そのうち形状がわかるものについて図18・19に示した。これらの遺物は、周溝の堆積土中から出土したもので、すべて底面から5~20cm浮いた位置から出土した。遺物の分布状況は、北溝では中央から西側に集中地點があり、東溝の北側を含め周溝墓の北東隅からの出土遺物は極めて少ない。東溝では中央より南側に集中地點があり、周溝墓の南東隅に遺物の集中出土地点があるといえる。

図18-1は口縁部が受け口状に大きく開く長頸壺である。口縁部直下に太い沈線による連弧文と三角形が描かれる。三角形文の接点上下には、円形竹管で左右から刺突を加えた三角形状の陰刻が配される。口縁部下端に軽い段がつけられ、その段の上下に交互刺突文が2段施される。頸部には

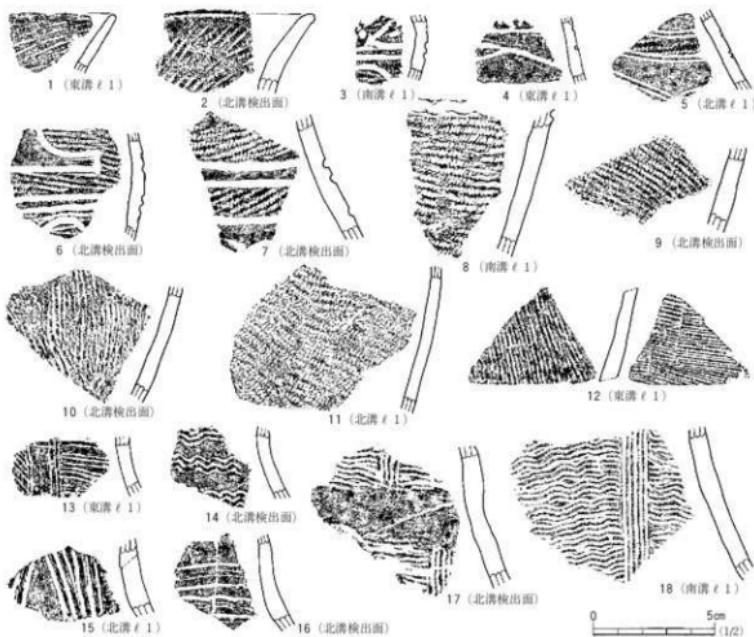


図19 5号周溝墓出土遺物（2）

平行沈線と連弧文が組み合わされた文様が描かれる。胴部の文様は遺存状態が悪く不鮮明であるが、沈線による文様が描かれている。2・3は広口壺で、口縁部下端に軽い段が付く。外面は地文として単節繩文が施される。2は口唇部と口縁部下端に繩文を押し当てたキザミが施される。3は胴部中央に最大径を持つ肩の張った器形になる。口唇部にヘラ状工具によるキザミが充填される。内面は頸部から口縁部下部にかけてカキトリ痕が残る。底部外面に繩圧痕が観察される。4は受け口状になる壺形土器の口縁部である。口縁部直下には浅い沈線状の凹線が2条めぐり、その下部に隆帯を2段めぐらせ、指頭によるつまみあげで小波状の突起を充填させている。隆帯間と頸部上端にはクシ歯状施文具による連続波状文がめぐる。5～9は壺形土器の口縁部破片で、口縁部下端に段を有し指頭押圧による小波状のキザミが施されている。5は口縁部に繩文が施されている。6は口唇部直下に横位沈線、その下部に連弧文が描かれる。10は口縁部直下に細い隆帯がめぐり、ヘラ状工具による押圧を加えている。14・15は壺形土器の口縁部破片で、頸部の屈曲部に交互刺突文がめぐる。18～21はハケメ調整痕を残す壺形土器である。20・21は短い口縁部で、その下端部がわずかに垂下する。26は蓋であろう。つまみ部で一部赤彩される。22は端部でハケメが観察できる。23・27は高杯である。23は口縁部内面が肥大し、浅い沈線状の凹線が2条めぐる。27は高杯の口縁部下端

にキザミが施され、そのキザミ部が帯状に赤彩されている。内面は全面に赤彩されている。24・25・28・29は底部資料である。

図19-1～11は地文に単節縄文を施す。3～7は沈線による文様が描かれる。12は銅部破片で、内外面にハケメが観察できる。13～18はクシ歯状施文具により文様が施される土器で、縦位に区画した内部に鋸歯文、連続波状文が描かれる。内面はナデ痕が観察できる。17・18は横位の連続波状文を密に施し、その後縦位に区画している。

ま と め

5号周溝墓は今回の調査で確認した方形周溝墓の中では最大規模を有する。墳丘部の平面形が東西方向に長い長方形になり、周溝の四隅が途切れるなどの基本的な構造には大きな違いが見られない。また南溝の底面で人為的に埋め戻された施設があり、周溝内埋葬の可能性が指摘される。

出土した弥生土器は、周溝の北西隅と南西隅に集中する傾向が見られる。年代については周囲の周溝墓と大きな時間差がなく、弥生時代後期後半頃と考えている。

6号周溝状遺構

遺 構 (図20, 写真18)

本遺構は円形にめぐる深い周溝とその内部に建つ小型建物跡から構成されており、他の周溝墓の構造とは明瞭な違いがある。調査区の中央部北側、F 8-B 1・B 2グリッドに位置し、標高185.4mの平坦地に立地している。3・9号溝跡、27・28・43号土坑と重複し、そのいずれよりも古い。本遺構の西隣には5・12号溝跡が分布し、その内部に15号建物が位置しており、円形周溝とその内部に小型建物跡を伴う点で共通している。遺構検出面はL III aである。

周溝の平面形は、北東側が調査区外となるため不明だが、南北方向に長い長楕円形をなす。周溝内法の規模は、長径が11.6m、短径が8.0m前後と推定される。周溝の幅は最大で1.0mである。周溝の深さは極めて浅く、南側が最も深く5cmである。底面は部分的に小起伏があるが、ほぼ平坦であり、周壁と明瞭な境はなく検出面へと続く。

周溝内堆積土は黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒や炭化物を極少量含んでいる。遺構が浅く、堆積状況は不明であるが、人為的に埋め戻したような痕跡も確認できなかった。

周溝内の建物跡は、南側に寄った位置で確認できた。建物跡は整った長方形をなし、その主軸方向はほぼ真北を向く。建物跡は四隅の柱穴を確認しただけの1間×1間の構造である。規模は南北長が3.64m、東西長が3.3mである。

建物跡を構成する柱穴の平面形は円形であり、その直径は20～25cmである。検出面からの深さは、P 2が最も浅く5cm、P 5が深く22cmである。P 2では柱材の痕跡を確認できた。その直径は10cmである。柱跡の堆積土はいずれも黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒を含んでいる。

遺 物 (図21, 写真66)

本遺構の周溝からは弥生土器40点、平安時代の土師器30点、須恵器1点が出土している。いずれ

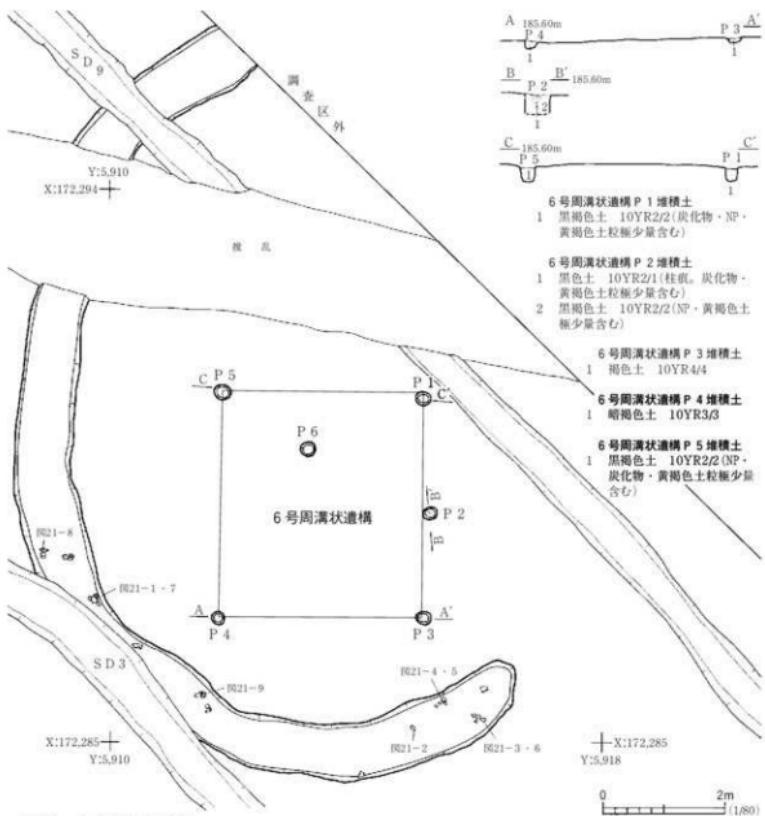


図20 6号周溝状遺構

も底面からわずかに浮いた位置から出土している。建物跡を構成する柱穴の内部からは遺物は出土していない。

図21-1は壺形土器の口縁部破片で、口縁部が受け口状に大きく開く。口唇部直下に2条の平行沈線がめぐり、この部分に円形竹管による交互刺突が施されている。口縁部下端には平行沈線間に隆帯がめぐり、円形竹管の刺突2ヶ所を一単位としたキザミが施される。内面にはミガキが観察できる。2は口縁部に軽い段がつく壺形土器で、幅広い口縁部が大きく外反する。口縁部には繩文が施される。内面は頸部付近にカキトリ痕が残る。3は壺形土器の頸部破片で、クシ状施文具を用いた押し引き文に近い簾状文がめぐる。4は壺形土器の口縁部で、口縁部直下に隆帯がめぐり、指頭のつまみ上げによる突起が充填される。隆帶に下部はクシ歯状施文具による鋸歯状文が描かれる。

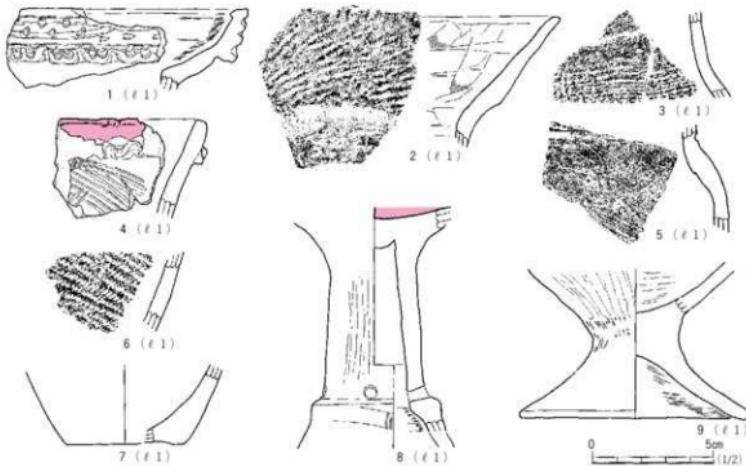


図21 6号周溝状造構出土遺物

また口唇部から隆帶上部まではベンガラにより赤彩されている。5は頭部から体部にかけての破片で、体部にはハケメ調整痕が残る。7は壺または壺形土器の底部破片で、表面が荒れて不鮮明だがハケメが観察できる。8・9は高杯の脚部である。8は円柱状の脚部で、脚の下部に明瞭な段を持って大きく開く。段の直上に4ヶ所の孔があけられている。表面が荒れて器面調整痕は不鮮明だが、脚部には撮位のミガキがわずかに確認できる。杯部と脚の接合は、円筒形の脚部に杯身を接合し、その脚部の穴を塞ぐように粘土を貼り付けている。杯部内面に赤彩が確認できる。

9は脚部が短く、杯部との接合点から「く」の字状に開く。杯部の内面は丁寧なミガキが施されている。脚部の内面にはハケメが残る。

ま と め

本遺構の特徴は、円形周溝とその内部に配される小型建物跡からなる。この特徴は先学の研究成果によれば、北陸地方で確認される平地式住居跡と類似している。しかし平地式住居と本遺構の相違点として以下の2点が挙げられる。1つは、本遺構の建物跡が周溝南部に偏った位置にあり、建物の方向などが周溝の形状と一致していないということである。次に挙げられるのは、建物跡からの出土遺物がなかったため周溝との関連を示す所見が得られず、周辺に点在する柱穴群と明確な区別ができない点である。

本遺構と類似する遺構は、会津若松市の屋敷遺跡においても確認され、平地式住居と指摘されている。このことから北陸系土器の流入と同時に平地式住居も採用された可能性を指摘するだけに止めておく。年代は円筒状の脚部を持つ高杯が含まれる点から、周溝墓より若干新しく弥生時代終末から古墳時代初頭頃と考えている。

7号周溝墓

遺構 (図22, 写真19)

7号周溝墓は調査区のはば中央, F 8-A 4・B 4 グリッドに位置する。周囲は標高185.5m付近の平坦面である。周辺は平安時代の遺構群が集中する部分で、2号竪穴状遺構、5号建物跡と重複し、本遺構がいずれよりも古い。本周溝墓の周囲には、東側に2号周溝墓、北側に3号周溝墓が分布し、その主軸方向は一致している。

本周溝墓は四方の周溝で構成されるが、それぞれ四隅部分が途切れる。周溝内法の規模は、南北幅が3.1m、東西幅が4.55mを測る。周溝墓の平面形は、東西方向に長い長方形になる。周溝墓の

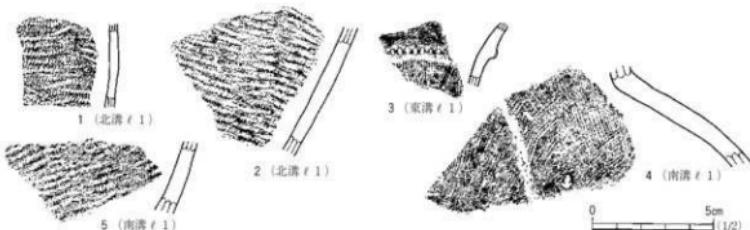
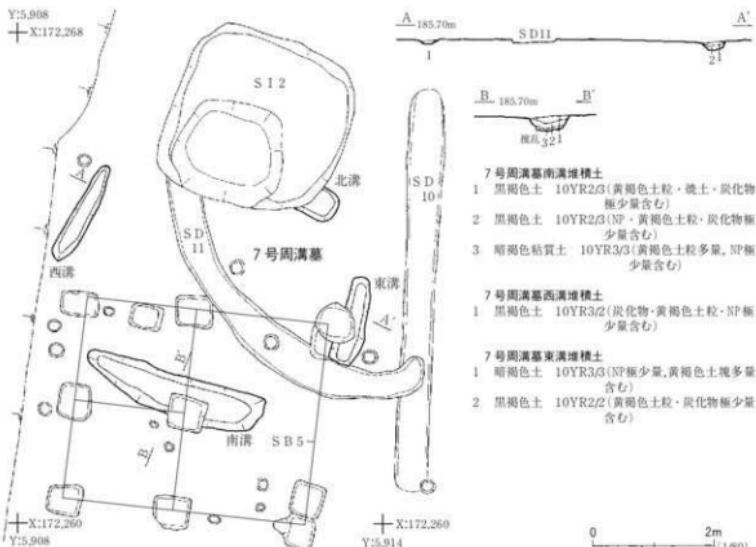


図22 7号周溝墓・出土遺物

主軸方向は近接する2号周溝墓と同じく、真北に対し東に20度傾いている。

周溝内堆積土は各周溝とも黒褐色を基調とした堆積土で、N P・焼土・炭化物などを極少量含んでいる。周溝内に堆積した自然流入土と考えられる。南溝3層とした黄褐色土粒を多量に含む暗褐色粘質土は、上層の黒褐色土を基調とする流入土と明らかに土質が異なる。墳丘の崩落土と判断している。

周溝の規模は、重複する遺構により壊されて不明瞭であるが、東西溝に比べて南北溝が幅広で深い特徴がある。東溝は全長1.5m、幅0.46m、深さ16cmであり、西溝は全長1.74m、幅0.32m、深さ8cmである。南溝は全長3.04m、幅0.65m、深さ24cmである。周溝の平面形については、南溝が特徴的で、内側が直線的になり、外側は中央部が突出した弧状になる。これは東隣の2号周溝墓の特徴と一致し、方形周溝墓の築造企画に関連するものと推察している。

周溝はいずれも浅いが、周壁は急峻に立ち上がる。底面は中央付近が深く、両端部に向かって浅くなる。周溝の内外ともに埋葬施設は確認できない。

遺 物（図22、写真66）

本周溝墓の出土遺物は、東溝から弥生土器2点、南溝から弥生土器6点、北溝から弥生土器4点と平安時代の土師器杯片1点である。これらは周溝内に堆積する自然流入土から出土したものである。そのうち形状が分かるものを図22に示した。

1～3・5は壺または甕形土器の胴部片であろう。1は器厚が薄い特徴がある。内面はミガキが施される。3は甕形土器の口縁部破片であろう。折り返し口縁の下端に明瞭な段があり、この部分にキザミが充填される。口縁部直下にはクシ状施文具により縦位に区画される。内面は摩滅して調整痕は不明である。4は壺形土器であろうか。頸部から胴部上半にかけての破片である。外面は縦位から斜位のハケメが観察できる。内面は不鮮明だがナデであろう。

ま と め

7号周溝墓は1～3・8号周溝墓と主軸方向を同じくして築造された小型周溝墓である。平面形は東西方向に長い長方形で3号周溝墓と共に通する。7号周溝墓からの出土遺物は少なく周溝墓群内の新旧関係については不明である。また南溝の平面形が外側に弧状に突出する特徴が見られ、2号周溝墓と同様に円を基調とした築造企画が指摘できる。年代については、出土遺物の特徴から周辺の周溝墓とはほぼ同時期で、弥生時代後期後半頃と考えている。

8号周溝墓

遺 構（図23、写真20）

本遺構は調査区の中央、F 8-C 5グリッドに位置する方形周溝墓である。周囲は標高185.5mほどの平坦面であるが、近年の畑地耕作による削平や搅乱が著しい。周溝墓の中心より北半部は搅乱が顕著であったため、北溝は確認できない。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂層である。本遺構は13号溝跡や小柱穴群と重複するが、いずれも本遺構より新しい。2号周溝墓の東隣に分布して

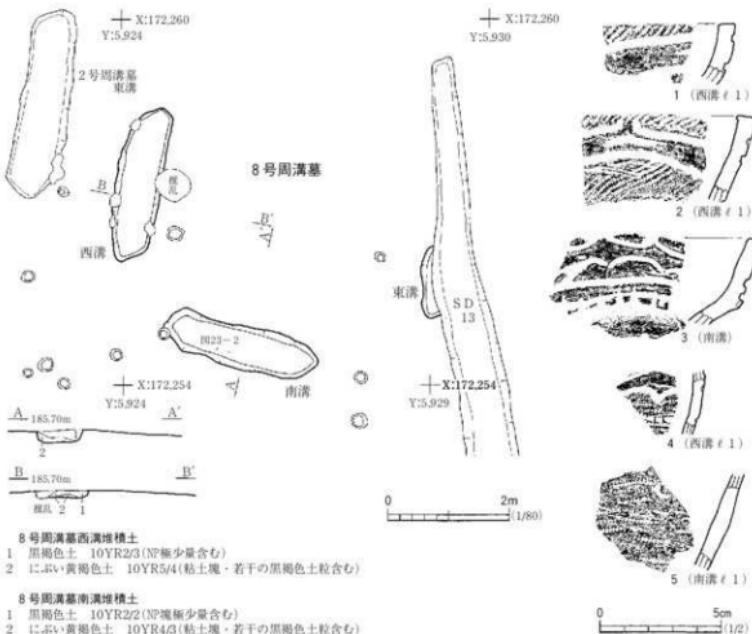


図23 8号周溝墓・出土遺物

いる。

本周溝墓は南溝、西溝、東溝で構成され、それぞれ途切れて連続しない。東溝は重複する13号溝跡に壊され、わずかに痕跡のみを確認した程度である。周溝内法の規模は、東西幅が4.4mを測る。西溝や南溝の規模は、長さが2.6m、幅が70cm前後である。深さは西溝が12cm、南溝が22cmと深い。周溝墓の主軸方向は2号周溝墓と平行し、真北に対して東に20度傾いている。

道構内堆積土は各溝とも2層に分けた。上層はNPを含む黒褐色土であり、周溝内に堆積した自然流入土と判断した。下層は褐色粘土や黒色土粒を含むにぶい黄褐色土で、墳丘の崩落土と考えている。周壁の立ち上がりは、内壁側が外壁側に比べて急峻になる傾向がある。底面はほぼ平坦であるが、各溝の端部から中央部に向かって低くなる。周溝内側から埋葬施設は確認できない。

遺物 (図23, 写真66)

本周溝墓からは弥生土器が29点出土した。西溝から7点、南溝から22点である。そのうち形状が把握できるものを図示した。遺物の出土状況は1層とした自然流入土中から出土するものがほとんどで、周溝の底面上からは出土していない。墳丘上に置かれた供獻土器が周溝内に転がり落ちたものと判断している。

1・2は壺形土器の口縁部破片で、わずかに内湾気味に立ち上がる。口唇部端部が面取りされて平らになっている。外面の文様は、地文となる単節斜縄文の上から太い沈線で連弧文を描いている。沈線の間は、縄文を磨り消して無文部を表現している。内面は丁寧にミガキが施される。3は壺形土器である。口縁部下端に軽い段があり、受け口状の口縁となる。口唇部がわずかに遺存する程度で、全容は不明であるが、低い波状口縁と推定される。外面の文様は、口縁部直下は太い沈線で面互い連弧文、その下に二重の平行沈線が描かれる。口縁部下端の段の部分には交互刺突を意識したキザミが施される。右端のキザミは円形竹管を用いた交互刺突になるが、その他はヘラ状施文具を押圧してキザミを表現している。内面ではミガキが観察できる。4は壺形土器の胴部破片である。下向きの連弧文が描かれ、その下部に押し引き文のような連続刺突が施される。5は壺または壺形土器の胴部破片である。外面に粗い単節斜縄文が地文として施されている。内面には横位のナデが観察できるが、調整痕としては粗い。

ま と め

8号周溝墓は遺存状態が極めて悪く北溝が確認できない。そのため明確な規模などは不明である。周溝墓の方向が1～3号周溝墓と同じ方向となることから、密接な関係をもって構築されたと推定できる。またこれらの周溝墓とは重複関係がなく、周溝墓群全体での新旧関係は不明である。年代は出土遺物などから弥生時代後期後半と推察している。

第4節 壇穴状遺構

今回の調査では壇穴状遺構を4基確認した。調査当初の検出作業中から大量の土器が出土することから、カマドや柱穴などの住居施設を伴う壇穴住居跡として扱っていた。調査の結果、住居内の施設が全く確認できないため壇穴状遺構とした。なお3号住居跡は弥生時代の壇穴住居跡と確認できたため、本章第2節に掲載している。

1号壇穴状遺構 S I 1

遺 構（図24、写真21・22）

本遺構は調査区中央から南寄りの調査区際に接している。F 8-B 6グリッドに位置し、周囲は標高185.5mほどの平坦面に位置している。本遺構の周囲は掘立柱建物跡や土坑、小柱穴などが密集して分布する範囲で、北西側には9・13号建物跡、18・22・25号土坑など、東側には1号周溝墓が分布している。1号建物跡・10号溝跡と重複するが、いずれよりも本遺構のほうが古い。遺構検出面はL III aとしたNPを含む黄褐色粘質土の上面で確認した。

本遺構の平面形は、南北方向に長い隅丸長方形をなす。長軸方向はほぼ真北を向き、13号建物跡の主軸方向とほぼ一致している。規模は長軸が4.35m、短軸は3.5mを測り、検出面からの深さは44cmである。周壁は北壁の下端が垂直気味になり、上端部はわずかに崩れているが比較的急峻な立

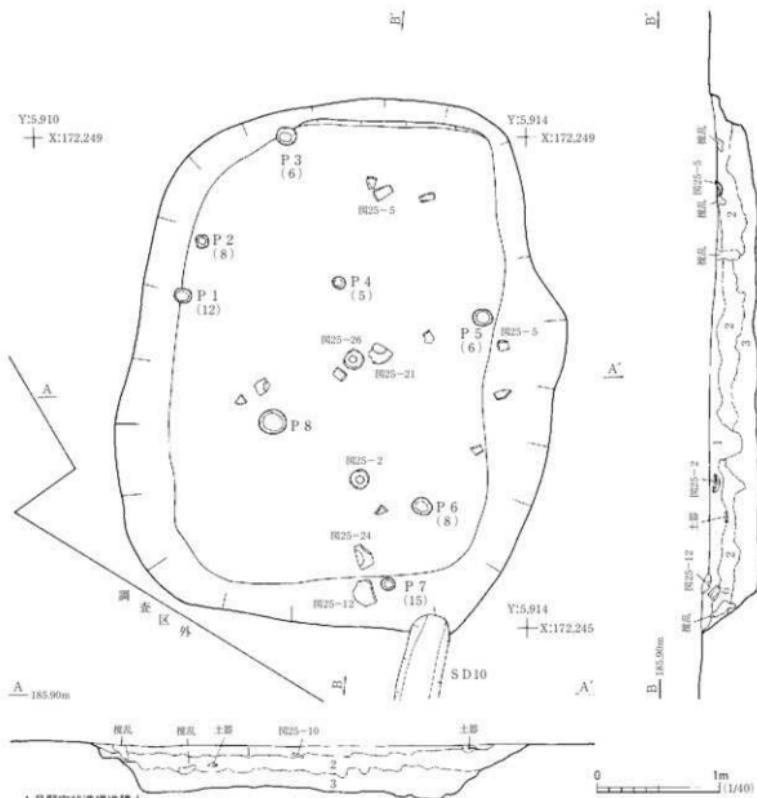


図24 1号竖穴状道構

立ち上がりになる。その他の壁は崩落のためか、立ち上がりは緩やかになる。底面は微細な凹凸があるが、ほぼ平坦である。底面の中央部に比べて、東西の壁際がわずかに低くなる。底面の規模は、長軸が3.75m、短軸が2.5mを測る。

底面上に小穴を8基確認した。P1～P3が北西隅の壁際、P5～P7が東壁の中央から南東隅の壁際に位置する。P4・P8は底面の中央部付近で、P4は中央から北寄り、P8は中央から西寄りに位置している。小穴の平面形はいずれも円形である。その規模は10～22cmで、P8が最も大きく、P4が最も小さい。底面からの深さは6～15cmで、P5が最も浅く、P7が最も深い。柱穴の土層観察でも明確な柱痕跡は確認できない。いずれの柱穴も底面上で規則的な配置にならず、上

屋を支えるほどのしっかりした構造でないことから、堅穴住居などの上屋を構成する柱穴とは考えにくく、簡易的な上屋構造と推定される。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は炭化物と焼土を大量に含む暗褐色土で、上層部分を薄く覆うように認められる。1層中には土師器・須恵器が大量に含まれる。2層は黒褐色土で、黄褐色土と黒色土がブロック状に多量に混入する。本遺構の上半部を厚く覆うように堆積する。2層の下部は微細な凹凸が顕著である。遺物は1層に比べれば極端に少なく、それぞれ十数点ほどの出土である。3層は褐灰色粘質土で、黄褐色粘質土塊を多量に含む。3層は土色や含有物だけでなく、遺物が全く出土していない点で、上層の堆積土と明らかに異なる。いずれの堆積土も本遺構の廃絶に伴って人為的に埋め戻されたと判断した。

遺 物（図25・26、写真68・69）

本遺構からは弥生土器123点、石器2点、土師器770点、須恵器156点、鉄製品2点が出土している。そのうち形状が把握できるものを図25・26に示した。遺物の出土状況は、前述したように1・2層とした上層部分からのみ遺物が出土しているが、2層からは弥生土器8点、土師器12点、須恵器5点だけと少なく、1層と比べるとその出土量には明らかな相違点が認められる。

図示していない遺物として、石器は頁岩の小剥片で、2次加工痕などは観察できない。弥生時代後期の所産であろう。鉄製品は検出作業中に出土したもので、1点は断面が円形の洋釘であり、もう1点は小鉄片で、用途は不明である。これらの鉄製品は、本遺構に伴うものとは考えにくく、近年の耕作によって混ざった近現代の新しい遺物と判断した。

図25-1～13は土師器の杯で、いずれも成形にロクロが用いられている。器形は2種類に大別できる。基本的な器形は底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が小さく外反する器形であるが、1のように器高が低く体部から口縁部が直線的に開く杯と、3に代表されるやや器高が高く、体部が丸みを帯びて立ち上がるものがある。その他に8は大振りの杯となる。調整については、外面は摩滅しているが、明瞭なロクロメを残すものが多い。内面はミガキの後に黒色処理が施される。内面の口縁部には横位のミガキが密に施されている。体部から底部にかけてのミガキは、遺存状態が悪く不鮮明だが、横位から斜位のものが多い。2・6・7の底面の見込み部分では、放射状にミガキが施されるが、その他は同一方向に横位のミガキが施される。

2～8は体部中央から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。大半は体部下端にのみ認められるが、5は体部中央まで再調整が観察できる。9～13は手持ちヘラケズリによる再調整が施される。また底部の切り離しの痕跡を明瞭に残すものは少なく、1・3・12・13では回転糸切り痕を確認できた。

14～20は土師器壺の破片である。本遺構の出土遺物のなかでは、そのほとんどを杯類が占め、壺は極めて少ない特徴がある。さらに壺は小破片のみの出土で、完形になるものもない。14はロクロ成形で、内面が黒色処理された壺または瓶であろう。頸部に明瞭なくびれがなく、幅の短い口縁部が外反する。15はロクロ成形の小型壺で、短い口縁部がわずかに外反する。16はロクロ成形の壺であ

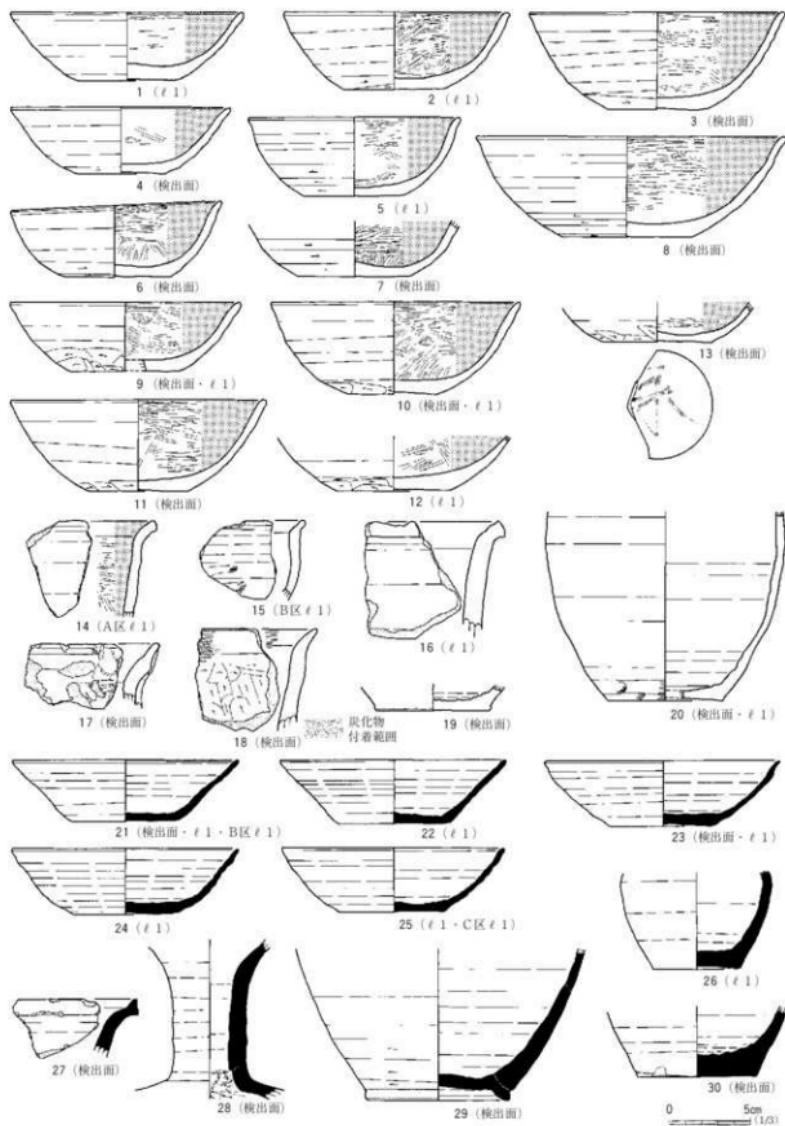


図25 1号竪穴状遺構出土遺物（1）

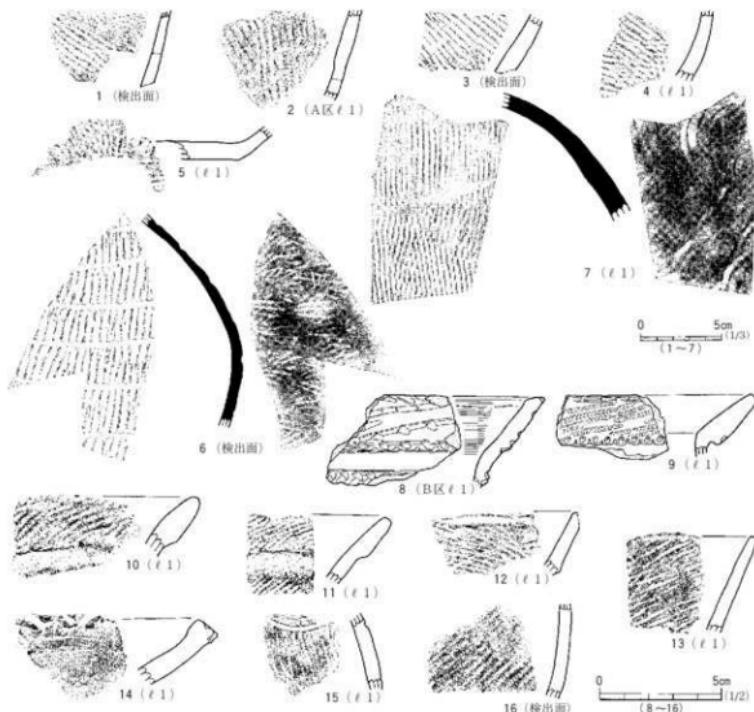


図26 1号竪穴状遺構出土遺物（2）

り、短い口縁部がわずかに外反し、その端部は平坦になる。17は口縁部破片で、製作過程でひび割れが生じたためか、焼成前に粘土が貼り付けられている。18は小型壺の破片であるが、外面に継位のケズリが観察できる。19・20は底部資料である。内外面とも明瞭なロクロメが残る。底部の切り離しは、回転糸切りである。

21~25は須恵器杯で、いずれも底部切り離しは回転ヘラキリである。21・22は体部が直線的に立ち上がる器形であり、色調は灰色である。23~25は体部がやや丸みを帯びて立ち上がる。やや軟質な焼き上がりで、色調は灰白色になる。26~28は須恵器の長頸瓶である。29・30は小型壺または瓶類の底部であろう。

図26-1~5は土師器壺の破片である。いずれも外面に平行タタキの痕跡が残る。内面は不鮮明でアテ具痕は観察できない。6・7は須恵器壺の胴部破片である。外面は平行タタキ痕、浅い沈線が数条、いわゆる螺旋沈線が確認できる。内面は、6が松葉状のアテ具痕、7は同心円文が残る。

8~16は弥生土器の壺形土器の破片である。8は口縁部下端に軽い段を持つ。口縁部には沈線の

連弧文と円形竹管の斜位からの刺突が施される。交互刺突文は口縁部下端と頸部上半にめぐる。9は口縁部が受け口状に開く器形で、口縁部下端に交互刺突が施される。10~12は口縁部に地文として単節繩文が施される。13は外面により糸文が施される。14は口縁部端にヘラ状工具によりキザミが施され、それぞれのキザミが上下から加えられ、交互刺突を意識したつくりとなる。

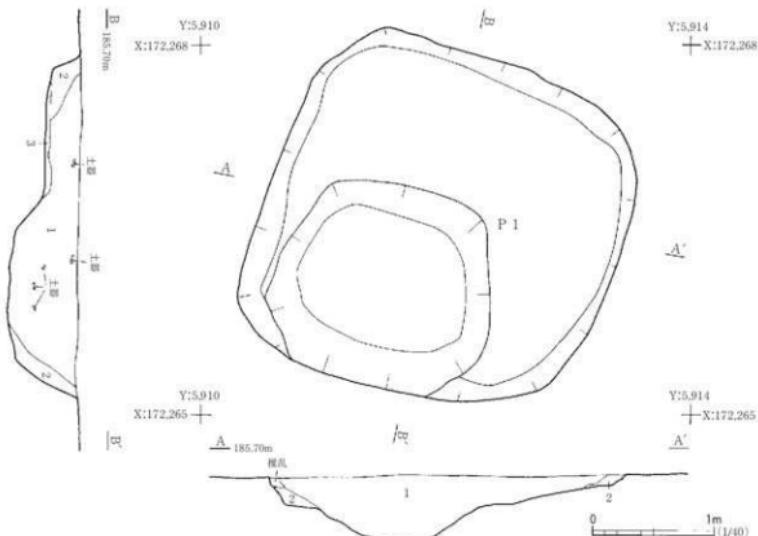
まとめ

本遺構は隅丸長方形をなす竪穴状遺構で、長軸の方向は13号建物跡と一致する。カマドなどの住居内の施設は確認できない。底面上の小穴はいずれも貧弱で不規則な配置である。本遺構の構築当初の機能は、いわゆる方形竪穴状遺構とされる半地下式の穴蔵で、これに簡易的な上屋が取り付く可能性が高い。堆積土の状態や遺物出土状況などから、本遺構が廃絶後は「ゴミ穴」として用いられたと推察している。年代は出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃と考えている。

2号竪穴状遺構 S I 2

遺構 (図27, 写真23・24)

本遺構は調査区の中央部、F 8-B 4 グリッドに位置している。周辺は標高185.5m付近の平坦面で弥生時代の周溝墓群や平安時代の建物跡などが分布する。7号周溝墓の北溝と11号溝跡と重複



- 1 褐灰色土 10YR4/1(灰褐色粘土が薄い織状に入る。黄褐色土粒・灰化物・焼土粒多量含む)
- 2 黒色土 10YR2/1(黄褐色土粒が織状に入る。灰化物・焼土粒極少量含む)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3(黄褐色土粒と黒色土の混土)

図27 2号竪穴状遺構

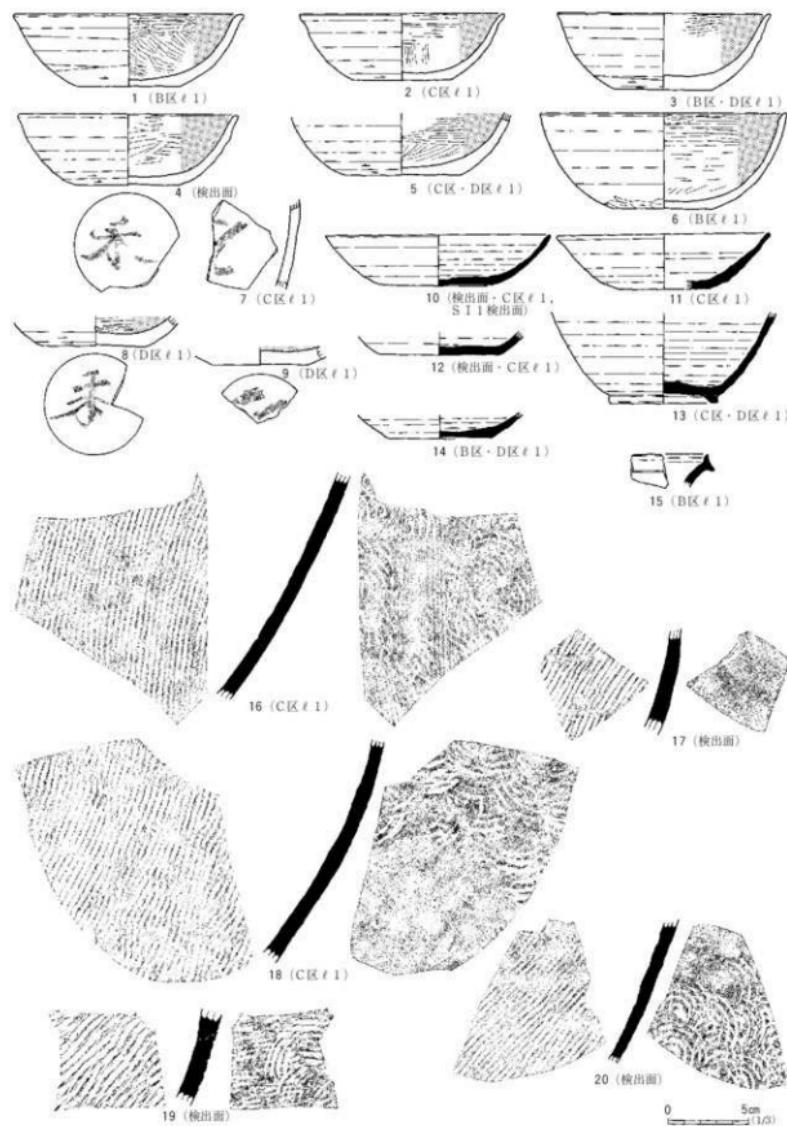


図28 2号竪穴状遺構出土遺物（1）

し、本遺構は7号周溝墓よりは新しく、11号溝跡よりも古い。遺構はL III a上面で確認した。

本遺構の平面形は隅丸方形をなす。主軸の方向は真北に対して約20度東に傾いている。規模は南北辺が2.8m、東西辺が2.85mを測る。検出面から底面までの深さは30cmであるが、P 1の底面までが58cmを測る。周壁はいずれも急峻になるが、南西隅はやや傾斜が緩やかに立ち上がる。底面は北側が平坦になるが、東側は周壁に向かって浅くなる。底面の南西隅には、楕円形を基調とするP 1が認められる。P 1は南壁と接した位置に作られている。P 1の規模は、長径1.75m、短径1.7mを測り、底面からの深さは30cmである。堆積土の観察では、廃絶時には既に開口していたと判断したが、その性格については不明である。底面上ではP 1以外に、柱穴などの施設は確認できない。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は褐灰色土で、灰褐色粘土が薄い縞状に混入し、P 1の底面を覆うように堆積している。2層は北壁際で確認した黒色土である。黄褐色土粒が遺構外から底面に向かって薄い縞状に斜めに混入している。3層はにぶい黄褐色土と黒色土との混土で、北側底面付近にのみ認められた。3層は人為的に埋められたものであるが、1・2層は黄褐色土が薄く縞状に入ることからすれば、自然堆積と推定される。

遺 物 (図28・29、写真70・87)

本遺構からは弥生土器53点、土師器351点、須恵器90点、陶磁器1点、石器剥片1点、鉄製品1点が出土している。これらの遺物はほとんど1層中から出土したものである。そのうち形状が把握できるものを図28・29に示した。また石器は頁岩の剥片で、2次加工痕などは確認できない。鉄製品は1層から出土した小鉄片で、その用途は不明である。

図28-1～9は土師器で、ロクロ成形の杯である。いずれも内面はミガキの後に黒色処理が施される。1～5はやや丸みを帯びた体部で口縁部がわずかに外反する。体部下端から底部外面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施される。底部切り離しは再調整で不明なものが多いが、1はわずかに回転糸切りの痕跡が残る。6はやや大振りな杯で、体部が丸みを帯びる器形となる。体部下端から底部は手持ちによるヘラケズリ再調整が施される。底部切り離しは不明である。内面は体部中心から下部が荒れてミガキの痕跡は不鮮明になる。4・7～9は墨書き土器である。4・8・9は底部外面、7は体部に墨書きが認められる。4・8は同様な文字で「禾」、「水」または「禾」と判読できる。

10～14は須恵器の杯である。10～12・14は無台杯で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。10・11は器高が低く、底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がる。内面の見込み中央部が小さくへこむ特徴があり、切り離し時に指で押された痕跡であろう。13は高台付きの杯である。器高が高く深いことから、深杯に分類できるであろう。15は須恵器の長頸瓶または広口瓶の口縁部破片である。16～20は須恵器壺の胴部破片である。外面は平行タタキ痕が観察でき、内面は同心円文のアテ具痕が認められる。19には内面のアテ具痕として、平行タタキ痕と同じアテ具痕の上に同心円アテ具痕が重なって確認できる。

図29には弥生土器を図示した。1は頸部で「く」の字に屈曲して開く器形で、短い口縁部下端に軽い段を持つ。内外面ともヨコナデで仕上げられる。2は口縁部直下に隆起が2段めぐり、その上

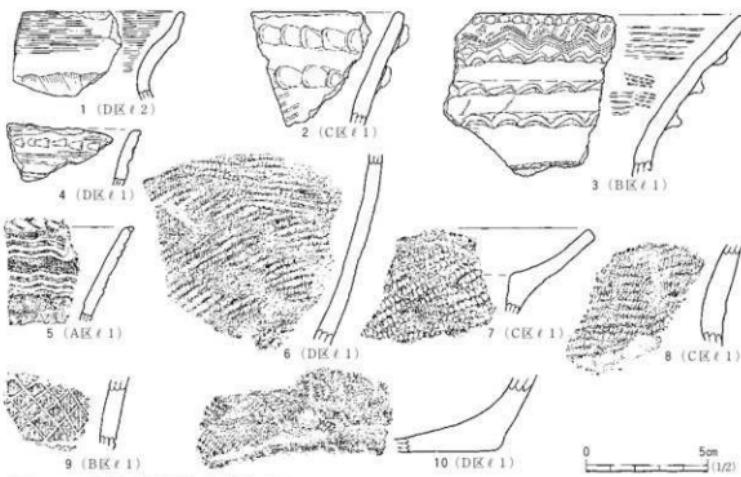


図29 2号竪穴状遺構出土遺物（2）

端部に指頭押圧によるキザミが充填される。3は口縁部が大きく開く器形である。口縁部直下は地文として単節縄文が施され、クシ歯状施文具による連続波状文がめぐる。口縁部には3段の隆帯がめぐり、その上端部には指頭押圧によるキザミが充填される。口唇部端部にはヘラ状工具を押し当てたようなキザミが施される。内面には横位のハケメ調整痕が残る。4は口縁部直下に円形竹管による押し引き文に近い連続刺突が横位にめぐる。その直下に太い沈線をめぐらせていている。5は口縁部下端にわずかに段を有する壺形土器である。口唇部にはヘラ状工具によるキザミが充填され、口縁部直下にはクシ歯状施文具による連続波状文が2段めぐる。6・8は壺形または壺形土器の胴部破片である。7は頸部から口縁部が大きく外反して受け口状に開く壺形土器である。外面は単節縄文が施される。内面には明瞭な段を持ち、垂直に落ちて頭部となる。9は外面にハケメを施した後に細い沈線で斜格子文を描いている。内面は横位のハケメ調整痕が残る。10は壺形または壺形土器の底部であり、外面には地文として単節縄文が施される。

まとめ

本遺構は隅丸方形をなす竪穴状遺構である。遺構の規模も小さく、カマドや柱穴など住居内の施設は確認できないため、居住施設とは考えにくい。P1は底面の南西隅に位置し、本遺構の廃絶時期には既に開口していたと推定される。本遺構の構築当初の機能については、1号竪穴状遺構と同じに、いわゆる方形竪穴状遺構とされる半地下式の穴蔵と考えている。また堆積土の状態や遺物の堆積状況などから、本遺構の廃絶後は、埋没途中でくぼみ状となった段階に「ゴミ穴」として用いられたと推察している。

本遺構の年代は出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃と考えている。

4号堅穴状遺構 S I 4

遺構 (図30, 写真25)

本遺構は調査区西部, E 8 - J 4, F 8 - A 4 グリッドに位置する。周囲は標高185.5mほどの平坦面に立地している。4号建物跡や小穴群と重複し、いずれよりも古い。また周辺には7・18号建物跡や土坑群が分布している。遺構検出面はL III aである。

本遺構の平面形はやや歪んだ隅丸長方形をなす。主軸の方向は、真北に対して約20度東に傾いている。規模は長辺が3.2m、短辺が2.85mである。検出面の深さは、東半部で14cm、西半部で18cmを測る。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は明黄褐色土粒を多量に含んだ黒褐色土で、人為的に埋め戻された土であろう。2層は暗褐色土と黒褐色土の混土である。底面東半の一段低くなる部分で確認

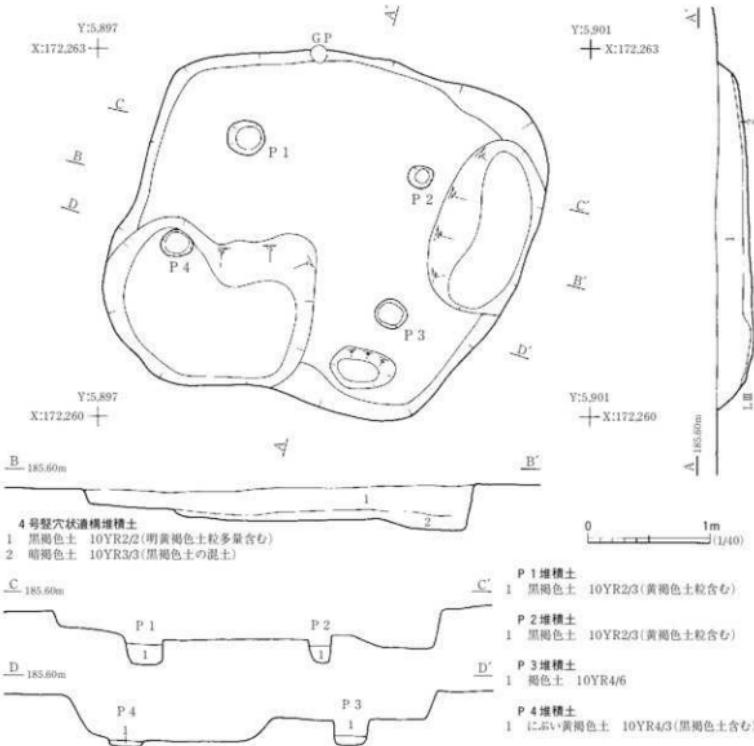


図30 4号堅穴状遺構

した。堆積土の状態から人為的に埋め戻された土と判断した。

周壁は各壁面とも急峻に立ち上がるが、北東隅と南東隅は崩落のためか、壁面の立ち上がりが緩やかになる。底面は西側が浅く、東半部は5cmほどの段差をもって低くなる。底面上では浅いくぼみを3ヶ所と小柱穴を4基確認した。くぼみは北東隅と南西隅、南東隅に存在し、いずれも梢円形を基調としている。周壁は緩やかな傾斜で立ち上がるが、底面との境は不明瞭である。底面からの深さは、北東側で10cm、南西側で20cmである。小穴は円形を基調とし、それぞれ四隅に寄った位置で確認した。規模は直径20~30cmで、底面からの深さは最大でも20cmである。小穴内の堆積土はいずれも単層で、明瞭な柱痕跡が確認できない。

遺物 (図31, 写真71・88)

本遺構からは弥生土器97点、土師器29点、須恵器30点が出土している。いずれも1層とした黒褐色土中から出土したものが多く、2層中からの出土遺物は少ない。そのうち形状が把握できるものを図31に示した。

1は須恵器杯である。底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がる器形である。底部切り離しは回転ヘラキリで、底部の再調整は施されていない。内面見込み中央に小さいくぼみが観察できる。底部切り離しの段階に指で押された痕跡であろう。2は土師器杯である。内外面ともロクロメを明瞭に残している。内面に黒色処理は施されていない。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整は施されていない。3・4は須恵器壺の底部である。3は外面に平行タタキ痕が観察できる。内面は横位のナデ痕が見られる。4は格子目タタキ痕が観察できる。内面はナデの他に、同心円文とアテ具

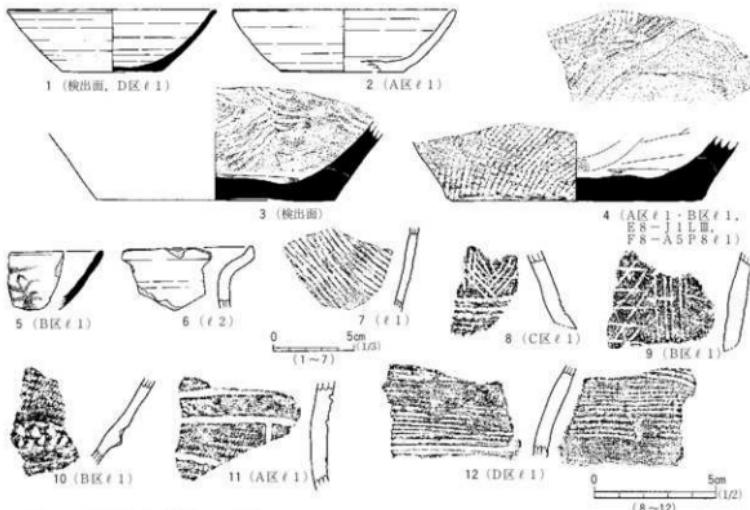


図31 4号竪穴状遺構出土遺物

痕が認められる。5は須恵器杯の破片である。体部の外面には墨書が確認でき、不鮮明であるが、「永一」と判読できよう。6は土師器壺の破片である。口クロ成形であり、全体的に摩滅しているが、頭部で屈曲し大きく外反して開く器形である。7は土師器壺の胴部破片である。外面には平行タタキ痕が認められる。タタキ痕内部を詳細に観察すると木目が観察できる。

8～12は弥生土器である。8は壺形土器の頭部破片である。クシ歯状施文具を用いた文様で、縦位に区画した内部に鋸歯文が描かれ、その下部には押し引き文に近い連続刺突によって横位に区画される。9は壺形土器の頭部破片で、クシ歯状施文具を用いて縦位に区画し、その内部に細い沈線で斜格子文を施す。10は壺形土器の口縁部破片であろう。口縁部の下端に軽い段を持ち、その部分に円形竹管を斜めに押し当てた交互刺突文がめぐる。口縁部は地文の単節繩文が施される。11は壺形土器の胴部破片であろう。地文に単節繩文を施し、やや太めの沈線によって文様が描かれる。平行沈線と連弧文からなる文様で、平行沈線の間は地文の繩文が磨り消されている。12は壺形土器の口縁部から頭部にかけての破片であろう。内外面とも横位のハケメが認められる。

ま　と　め

本遺構は平面形が隅丸長方形になる堅穴状遺構である。底面上で小柱穴を4基確認したが、各柱穴の間隔が狭く、遺構の規模が小さいことからも明確な上屋構造を復元できない。構築当初の性格は不明であるが、廃絶後は人為的に埋め戻されている。また遺物の出土状態から、埋没過程において本遺構がくぼみになった時点で、当時の生活ゴミとともに土器類が廃棄されたことが推察できる。

年代は出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃と考えている。

5号堅穴状遺構 S I 5

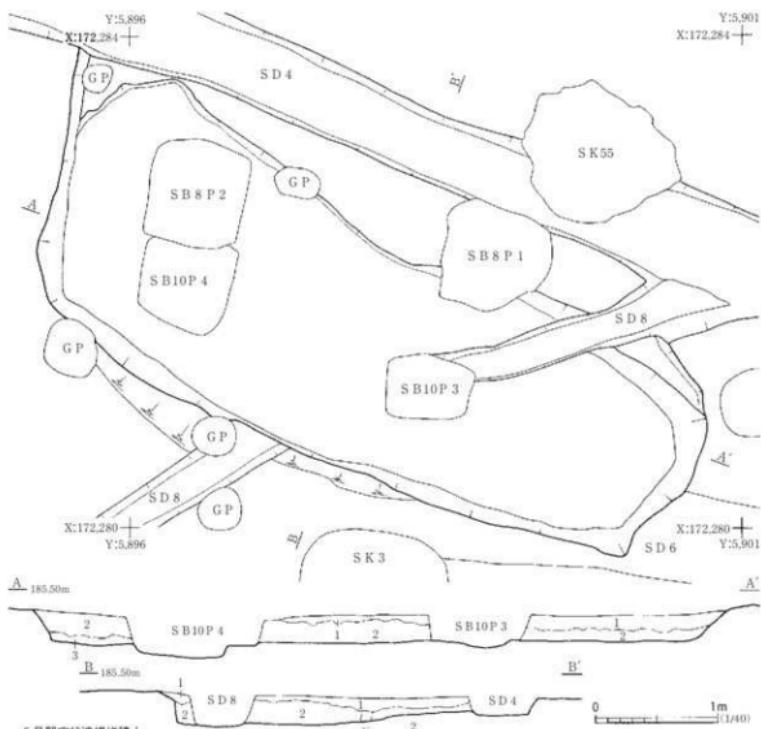
遺構（図32、写真26）

本遺構は調査区の西部、E 8-J 2グリッドに位置する堅穴状遺構である。標高185.3mの平坦面に立地している。周辺は調査区内でも最も遺構が重複する範囲で、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などがそれぞれ重複している。その重複関係の詳細は、8・10・14・16号建物跡、4・6・8号溝跡、55号土坑、柱穴群と重複しており、本遺構はそのいずれよりも古い。遺構はL III a上面で確認した。

本遺構の平面形は、重複する遺構に埋されて細部は不明瞭だが、南北方向に細長い隅丸長方形と推定される。長軸の方向は真東に対して約20度南に傾いている。規模は長軸が5.7m、短軸が2.65mを測る。検出面からの深さは24cmである。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は焼土や炭化物を含む黒褐色土で、本遺構の上層部を薄く覆うように確認された。2層は黄褐色粘土塊を多量に含む暗褐色土で、本遺構の下半部に厚く堆積する。3層はにぶい黄褐色砂質土で、東壁際にのみ確認できた。いずれも黄褐色土が混入する堆積土で、人為的に埋め戻されたものと判断した。また遺物は、1層とした上層付近と2層から出土するものがほとんどである。

本遺構の西壁は比較的急峻に立ち上がる。南壁と東壁の上端部は崩落のために周壁の傾斜が緩や



- 5号竪穴状遺構土
 1 黒褐色土 10YR2/2(塊土・炭化物少量。黄褐色土粘板少量含む。土器多量出土)
 2 短褐土 10YR3/3(塊土・炭化物少量。黄褐色土塊多量含む)
 3 に赤い黄褐色砂質土 10YR5/4(黄褐色粘土板少量含む)

図32 5号竪穴状遺構

かになるが、下半部は垂直気味に立ち上がる。北壁は4・8号溝跡に壊され遺存していない。底面は南西側に向かって低くなり、最大5cmほどの段差が確認できる。また底面上にカマドや柱穴などの施設は確認できない。

遺 物 (図33, 写真71)

本遺構からは弥生土器104点、石器2点、土製品1点、土師器340点、須恵器70点が出土している。そのうち形状が把握できるものを図33に示した。これらの遺物はほとんどが1・2層から出土している。図示していない出土遺物として石器があるが、いずれも頁岩の細かい剥片で、2次加工痕などは確認できない。

図33-1～5は土師器杯である。ロクロ成形で、内面は黒色処理が施される。1・2は内外面ともに磨滅しているが、体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施される。底部切り離し

は回転糸切り痕が確認できる。3は体部が丸みを帯びる器形で、やや器高が高く深い杯である。体部中央付近まで回転ヘラケズリ再調整が施される。底部がほとんど遺存していないため、切り離しは不明である。4は体部から口縁部にかけての小破片である。回転ヘラケズリ再調整が施される。5は底部の破片である。回転糸切りによる切り離し痕を明瞭に残す。体部下端の再調整は認められず、底部の外縁にのみ手持ちヘラケズリが観察できる。

6は土師器の小型甕または小型鉢の底部であろう。内外面ともにロクロメを明瞭に残す。底部の切り離しは回転糸切りである。

7～10は須恵器杯である。いずれも底部切り離しは回転ヘラキリである。7～9は体部から直線的に立ち上がり、口縁部が小さく外反する器形である。いずれも硬質な焼き上がりで、青灰色をなす。10は体部がやや丸みを帯びて立ち上がる器形で、外面のロクロメが明瞭に観察できる。やや軟質な焼き上がりで、色調は灰白色をなす。

11・12は須恵器の長頸瓶である。12は頸部にリング状の凸帯がめぐる。頸部はわずかに開きながら立ち上がり、口縁部が上方に向かってつまみ上げられている。内外面とも自然釉が付着し、灰オーリーブ色をなす。

13は須恵器の円面鏡である。約20%しか遺存していない。硬質な焼き上がりで、青灰色をなす。口縁部端部の断面形は長方形をなし、長頸瓶などの高台部と同じつくりである。口縁部下端には明瞭な段が取り付き、ロクロの回転を利用して、鋭く引き出されている。上面部はわずかに遺存する程度であるが、使用により磨耗している。脚部は端部に向かってやや丸みを帯びて広がる。脚端部の断面形は三角形になる。脚部には細い沈線により斜格子文が描かれるが、一部は沈線間に短い斜沈線を充填させて格子目文を描いている。その脚部中央付近に円形のスカシ穴が確認できる。脚部表面の格子目文を施した後に開けられたものである。内部部は穿孔の際に生じたバリを丁寧に取り除いている。スカシ穴は、全体で4～6ヶ所開けられていたものと推定できる。

14～16は須恵器甕の胴部破片である。いずれも硬質な焼成で、色調は青灰色を呈する。14は胴部中央付近の破片で、外面は平行タタキ痕、内面はナデが観察できる。15は肩部付近の破片であろうか。外面は浅い平行タタキ痕で、内面はカキメが観察できる。16は胴部中央から下半部の破片であろう。外面の平行タタキ痕には木目が認められる。内面は同心円文のアテ具痕があり、その上からナデが施されている。

17～27は弥生土器である。17は高杯の脚部で、端部にかけて大きく広がる。外面はハケメの後にナデを施している。18～20は壺形土器の口縁部破片である。18は口縁部下端に段を持ち、斜縄文が施される。19は太い沈線と円形竹管による刺突によって文様が描かれ、口唇部にはキザミが施されている。20は地文に単節縄文を施し、口縁部直下にクシ歯状施文具による連続波状文が施される。21は口縁部下端に段を持ち、キザミが充填されており、内外面ともにミガキが施されている。22・25はクシ歯状施文具により文様帶が描かれる。25は内外面ともハケメ調整が認められる。26・27は壺形土器の底部で、26は外面の地文に単節縄文が施されている。27はハケメが残っている。

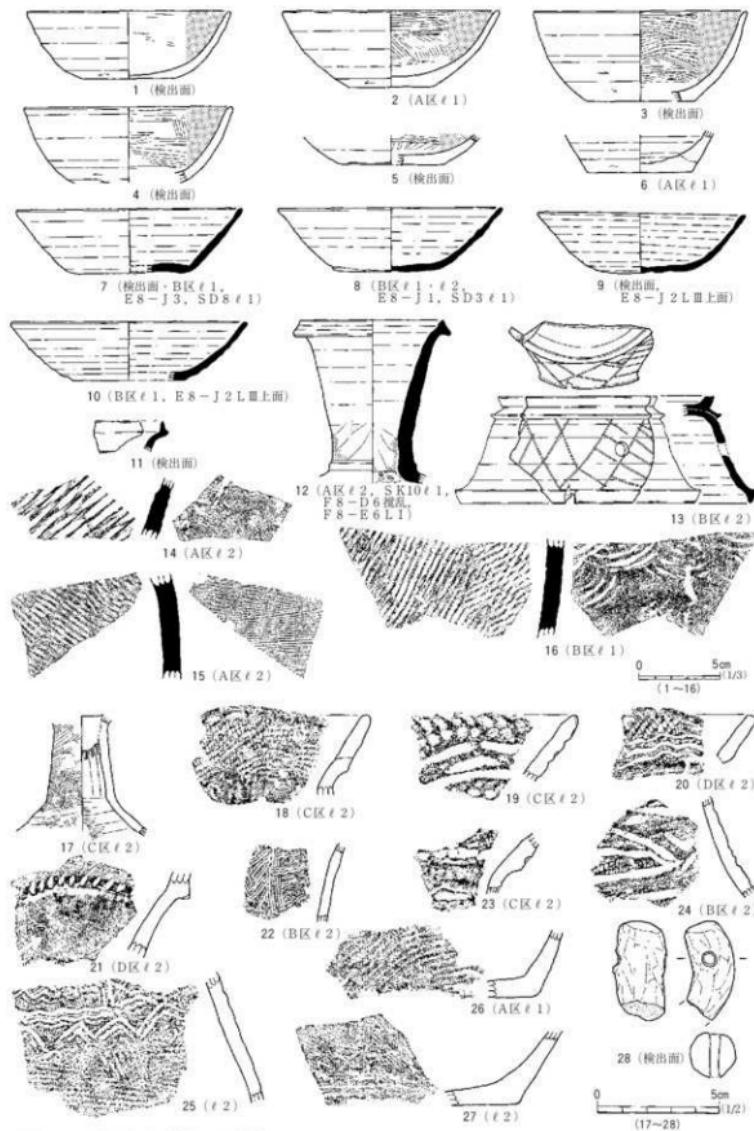


図33 5号竪穴状遺構出土遺物

28は土製品で、尾部を欠損して不明であるが、頭部から腹部にかけてやや湾曲し、勾玉形になるものであろう。

ま と め

本遺構は平面形が細長い隅丸長方形をなす竪穴状遺構である。調査区内でも遺構が最も重複する範囲に位置することから、遺構の遺存状態は極めて悪い。他の竪穴状遺構は平面形が方形を基調としたもので、底面上に小穴を伴う場合があり、本遺構とはその構造に違いが認められる。また堆積土では人為的に埋め戻された土層で、上層部には遺物を多量に含んだ黒褐色土が認められるなどの共通点が見られる。

本遺構の構築当初の機能については、それを示す施設や出土遺物がなく不明である。本遺構の廃絶後は、他の竪穴状遺構と同様に、半ば埋まりくぼみとなった部分を「ゴミ穴」として使用されたと判断している。本遺構の年代は、重複する8号建物跡よりも古く、9世紀の中葉頃には既に埋没していたと推察している。

第5節 挖立柱建物跡

今回の調査では掘立柱建物跡を18棟確認した。調査区の西半部に集中して分布する傾向が見られる。8・10・16号建物跡は南北2間、東西3間の建物で、同じ場所で建て替えが行われた建物跡である。柱穴も直径1m前後と大きく、柱材は直径20cmの丸太材を用いている。また周辺の土坑内からは墨書き器や須恵器円面鏡が出土することから、平安時代の集落内において、その中心的な建物跡となる可能性が高い。また15号建物跡は5・12号溝跡の内部に位置する小型建物跡で、6号周溝状遺構と類似している。弥生時代の平地式住居跡の可能性も指摘できる。

1号掘立柱建物跡 S B 1 (図34、写真27)

遺構 本建物跡は調査区の中央部南寄り、F 8-B 6グリッドに位置する。標高185.5m前後の平坦面に立地している。1号竪穴状遺構と重複し、本遺構のほうが新しい。周辺は建物跡や土坑、小柱穴群が集中する範囲で、北側に5・9・13号建物跡が位置している。遺構検出面はL III a上面である。

本遺構南側は調査区外へと続くため、建物の全容は不明である。調査区内で確認できた部分から、東西2間、南北2間以上の側柱建物跡であろう。主軸方向は東側柱列を基に、真北に対して4度西に傾いている。規模は東西軸のP 1-P 4が3.8mを測り、各柱間はP 1-P 5が1.6m、P 4-P 5が2.2mである。南北軸の全容は不明であるが、P 1-P 2は1.6m、P 2-P 3は1.1mである。

本建物跡を構成する柱の平面形はいずれも円形をなす。その直径は40~48cmである。検出面からの深さは10~40cmで、P 3が最も浅く、P 5が最も深い。柱穴の掘削内堆積土は、柱材の痕跡と埋土に大別される。柱痕跡はP 1・P 2・P 4・P 5で確認でき、直径12~14cmの細い柱材が用いら

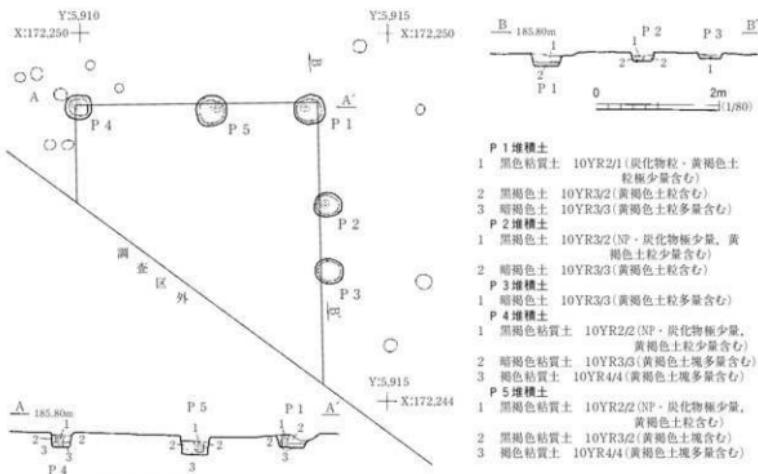


図34 1号掘立柱建物跡

れていることが分かる。埋土は黄褐色土塊を多量に含む暗褐色を基調とする土で硬くしまっている。本建物跡のP 1から弥生土器5点、土師器4点、須恵器7点が出土しているが、いずれも小破片であるため図示していない。P 1は1号竪穴状造構と重複し、その遺物が混入したものと判断した。まとめ 本建物跡は調査区間に位置するため、その全容は不明である。南北方向に主軸を持つ2間×2間以上の建物と推定される。年代を特定できる出土遺物がなく、不明である。

2号掘立柱建物跡 S B 2 (図35・36、写真28・29・72)

遺構 本建物跡は調査区の南東側、F 8-E 7-E 8グリッドに位置する。周囲は調査区内では最も高い場所で、標高185.8mの平坦面に立地している。4・5号周溝幕、1号溝跡と重複し、本建物跡は4・5号周溝幕より新しく、1号溝跡よりも古い。周辺には建物跡や小柱穴群が全く確認できない。また調査区西側で確認された建物群と主軸方向も異なるため、その関連性については不明である。本建物跡に関連する建物群は、南側の調査区外へ続くものと判断される。遺構検出面はL III aとしたNPを含む黄褐色粘質土の上面である。

本遺構は東西2間、南北2間の側柱建物跡で、平面形はほぼ正方形となる。主軸は南北方向を基に、真北に対して10度西に傾く。規模は北側柱列(P 1-P 7)が4.7m、南側柱列(P 3-P 5)が5.0m、東側柱列(P 1-P 3)が5.4m、西側柱列(P 5-P 7)が5.15mを測る。各柱列の柱間は東西柱列では約2.6m間隔であり、南北柱列では東側の柱間が狭く2.2m、西側の柱間2.5mと長い。

本建物跡を構成する柱穴の平面形は、P 4・P 5に代表されるとおり隅丸方形を基調とするもの

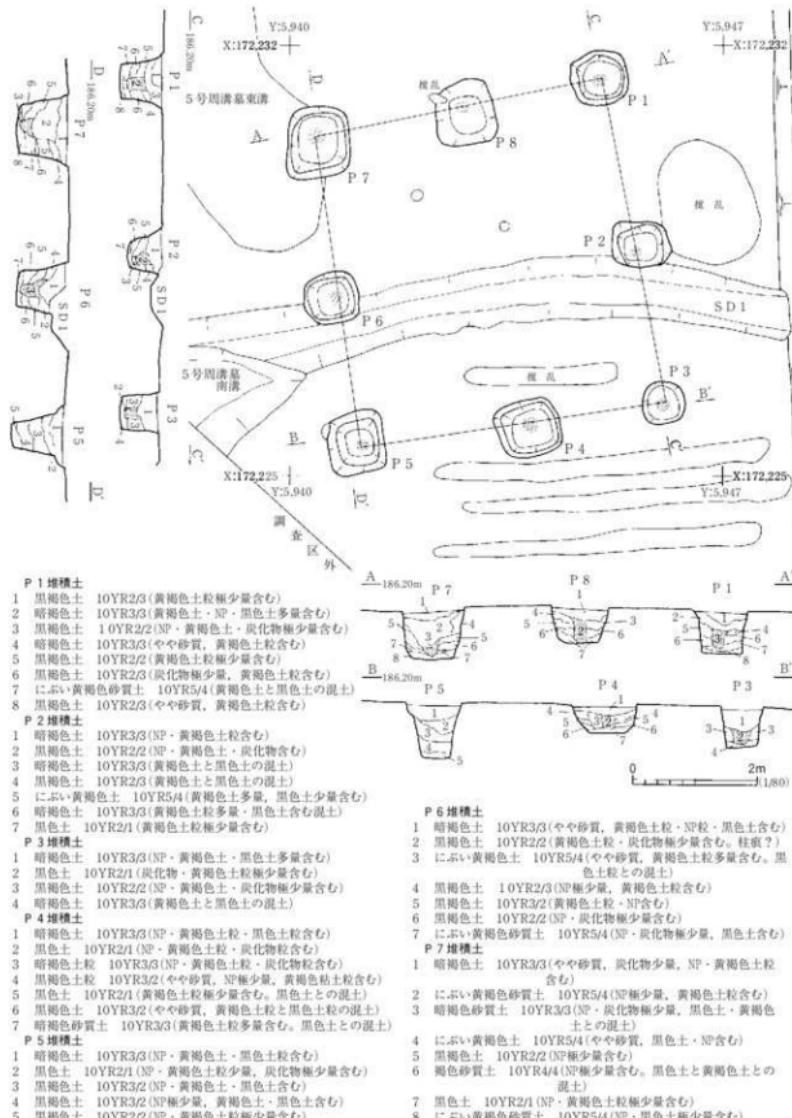


図35 2号掘立柱建物跡

が多いが、P 3 は整った円形となる。柱穴の規模は、一辺が0.9~1.0mのものがほとんどである。P 3 の規模は直径0.7mで、他の柱穴と比べ2周りほど大きい。

柱穴底面の平面形は上端と同様に隅丸方形を基調とするが、P 1・P 3・P 6 は円形を基調とするものである。柱穴底面の規模は、上端部に比べ小さく、0.45~0.6mである。検出面から柱穴底面までの深さは、四隅に位置する柱穴が深くなる傾向が見られ、0.62~0.9mを測る。P 4・P 8 に代表される各柱列の中央に位置する柱穴は浅く、その深さは0.5~0.8mである。

柱穴の掘形内堆積土は柱材の痕跡と埋土、柱を抜き取ったあとに堆積する土の3つに大別できる。柱痕跡はP 5以外のすべての柱穴で認められた。黒褐色土を基調とする土で、炭化物を含んでいるものが多い。柱材は直径20cm前後の丸太材が用いられたものと推察している。埋土は柱材を取り巻くように認められ、黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積して硬くしまっている。柱材の抜き取り後に堆積する土は、いずれも柱痕跡の上層を覆うように認められる。黄褐色砂を含む暗褐色を基調とする土で、柱を抜き取った後に、柱穴に流入した土と判断した。

遺物 本建物跡からは弥生土器、土師器や須恵器が出土している。P 1 は弥生土器6点、須恵器1点、P 2 は弥生土器1点、P 3 は弥生土器4点、土師器2点、須恵器1点、P 4 は弥生土器2点、土師器2点、P 5 は弥生土器13点、土師器18点、須恵器1点、P 6 は弥生土器2点、土師器2点、P 7 は弥生土器4点、土師器1点、須恵器2点である。そのうち形状が把握できるものを図36

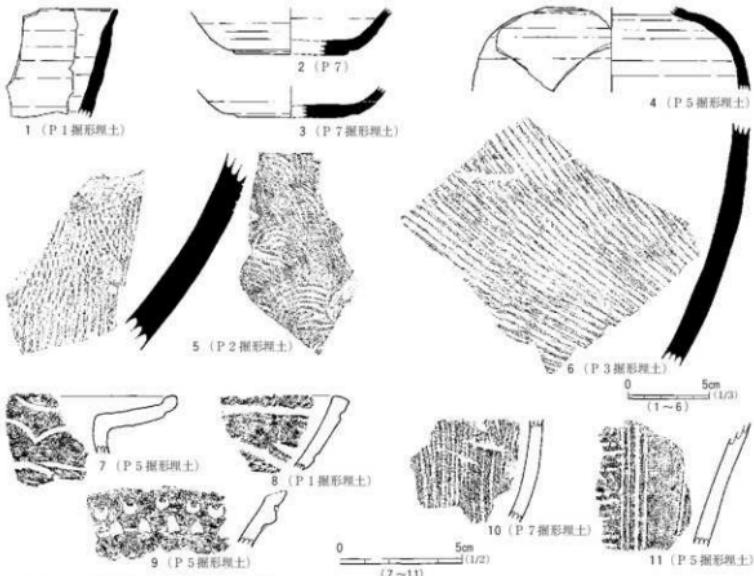


図36 2号掘立柱建物跡出土遺物

に示した。

1～6は須恵器である。1は鉢の口縁部破片である。体部から直線的に立ち上がり、短い口縁部がわずかに外反する。2・3は杯で、底部切り離しは回転ヘラキリである。4は長頸瓶の体部上半である。頸部との境にリング状の凸帶がめぐる。5・6は壺の胴部破片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文のアテ具痕が認められる。

7～11は弥生土器で、壺形土器の破片であろう。7は口縁部が受け口状に大きく開く。外面は沈線による連弧文が描かれる。内面はミガキが施されている。8は口縁部端が平坦に面取りされている。口縁部直下に横位沈線がめぐり、その下部に連弧文が描かれる。9は口縁部直下に隆帯がめぐり、その上部に円形竹管状工具による交互刺突文が施される。10は外面に条の細かいより糸文が観察できる。11はクシ歯状施文具により縦位に区画され、その間に連続波状文が施される。縦位のクシ歯文の間が赤彩されている。

まとめ 本建物跡は調査区の南東側に位置する2間×2間の側柱建物跡である。周囲に同様な建物跡がなく、調査区西側の建物群との関連は不明である。建物跡の年代を特定する出土遺物がなく、詳細な所属時期は不明であるが、平安時代前半に属するものと考えている。

3号掘立柱建物跡 S B 3 (図37、写真30)

遺構 本建物跡は調査区の北西端、E 8-I 1グリッドに位置する。標高185.3mほどの平坦面に立地している。重複する遺構はないが、南東側に11号建物跡などが所在している。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は東西1間、南北2間の側柱建物跡である。主軸方向は真北に対して12度東に傾く。規模は、南北の柱列が2.3m、東西の柱列が3.6mを測る。東西柱列の柱間は、それぞれ北側の柱間が1.7mと狭く、南側の柱間は1.9mとなる。



図37 3号掘立柱建物跡

本建物跡を構成する柱穴は、いずれも円形をなす。その規模は直径20cm前後と小さく、検出面からの深さは20~32cmと浅い。掘削内堆積土はP 6でのみ柱痕跡が確認できた。直径5cm前後の細い柱材が用いられたと考えられる。埋土は黒色土と黄褐色土の混土で、硬くしまっている。その他の柱穴は、焼土や炭化物をわずかに含む黒色土を基調とする。

本建物跡のP 2から弥生土器2点、土師器3点が出土している。いずれも小破片のため図示していない。

まとめ 本建物跡は南北2間×東西1間の小規模な側柱建物跡である。周囲に主軸方向と同じくする建物跡もなく、出土遺物からも所属時期を特定することができない。

4号掘立柱建物跡 S B 4 (図38、写真31)

遺構 本建物跡は調査区西側、E 8-J 4・J 5、F 8-A 4・A 5グリッドに位置する。4号竪穴状遺構と重複し、本建物跡の方が新しい。周囲には7・13号建物跡、土坑群、柱穴群が分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本遺構は南北2間、東西2間の側柱建物跡で、平面形はほぼ正方形になる。主軸方向は東西柱列を基に真北に対して2度東に傾き、東側に近接する13号建物跡の主軸方向と一致する。規模は北側柱列(P 1-P 3)が3.25m、南側柱列(P 5-P 7)が3.4m、東側柱列(P 3-P 5)が3.0m、西側柱列(P 1-P 7)が2.8mである。南北柱列の各柱間はそれぞれ一定せず、北側柱列のP 1-P 2が1.45m、P 2-P 3が1.8mで、南側柱列のP 5-P 6が1.5m、P 6-P 7が1.9mである。東西柱列の柱間はほぼ一定し、東側柱列のP 3-P 4、P 4-P 5が1.5mで、西側柱列のP 1-P 8、P 7-P 8が1.4mをはかる。

本建物跡を構成する柱穴の平面形は、いずれも円形を基調とする。その規模はP 4が最も大きく

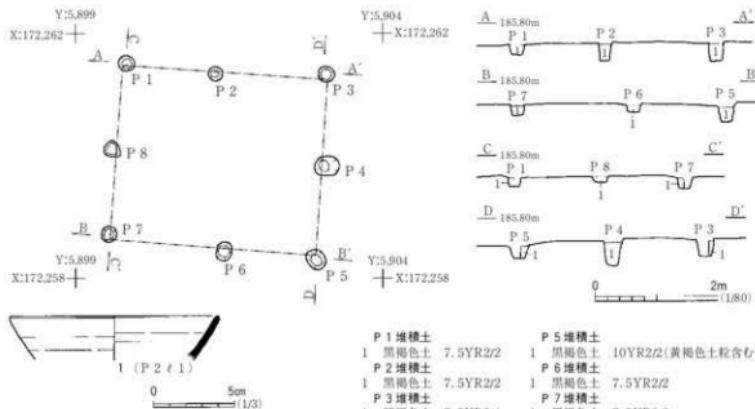


図38 4号掘立柱建物跡・出土遺物

38cm、P 2 が最も小さく22cmである。検出面からの深さは10~44cmと一定しない。P 4 が最も深く、P 8・P 6 は浅い柱穴である。

掘形内の堆積土は、いずれも黒褐色土を基調とする単層である。明確な柱痕跡などは確認できなかった。本建物跡のP 4・P 7・P 8からは土器片が各1点出土しているが、摩滅した小破片のため図示していない。P 2 から出土した須恵器杯を図示した。9世紀中葉頃に属する。

まとめ 本建物跡は2間×2間の小型建物であり、柱穴などは小さく貧弱である。主軸方向が近接する13号建物跡と一致し、同時期に機能した可能性が高い。詳細な年代を示す出土遺物はないが、平安時代に属すると判断している。

5号掘立柱建物跡 S B 5 (図39、写真32)

遺構 本建物跡は調査区のはば中央、F 8-A 4・B 4グリッドに位置する。標高185.5m付近の平坦面に立地している。本建物跡は7号周溝墓と11号溝跡と重複し、前者より新しく、後者よ

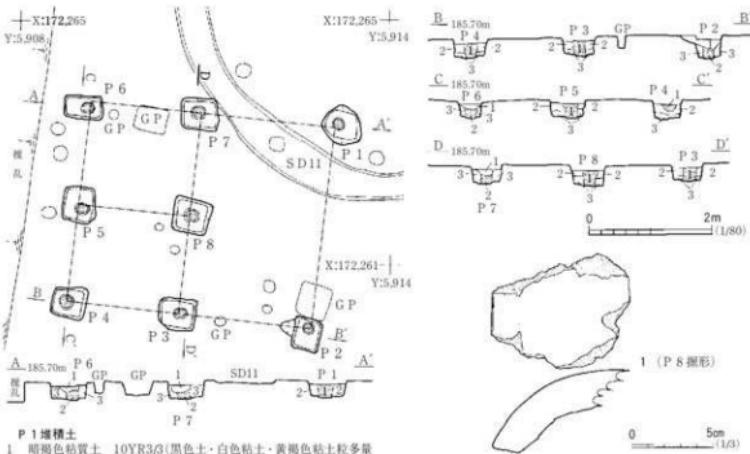


図39 5号掘立柱建物跡・出土遺物

り古い時期に該当する。周辺には建物跡や土坑群が散在し、南側には9・13号建物跡、北側には2号窓穴状遺構が分布している。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は南北2間、東西2間の純柱建物であるが、東側柱列は中央に柱穴が認められず1間になる。平面形はやや東西に長い長方形である。主軸方向は東側柱列を基準に、真北に対して10度東に傾き、南側に位置する9号建物跡の主軸方向と一致する。規模は北側柱列（P 1-P 6）が4.1m、南側柱列（P 2-P 4）が4.0m、東側柱列（P 1-P 2）が3.3m、西側柱列（P 4-P 6）が3.2mを測る。柱間の距離は、南北の柱列では1.8~2.1mで、東側の柱間がいくぶん広い特徴がある。西側柱列では1.65mとほぼ一定している。

本建物跡を構成する柱穴は、比較的整った方形を基調とする。P 2・P 6の平面形は長方形となる。柱穴の規模は、一辺が55~60cmを測る。P 6は長辺が60cm、短辺が40cmである。検出面からの深さは、30~40cmであり、P 3が最も深い。各柱穴の底面には柱材の痕跡が残り、それぞれの底面中央部に直径20cmほどで、深さ2~3cmの浅い円形のくぼみが認められる。周壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。P 2の西側上端部は大きく広がり、その部分の傾斜が緩くなる。堆積土の観察からも柱材を抜き取った痕跡と判断している。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に分けられる。柱痕跡は炭化物をわずかに含む黒色土を基調とする。柱材として、底面に残る浅いくぼみなどからも、直径20cm前後の丸太材が用いられたと推定される。埋土は黒褐色土とぶい黄褐色粘質土が交互に堆積し、硬くしまっている。

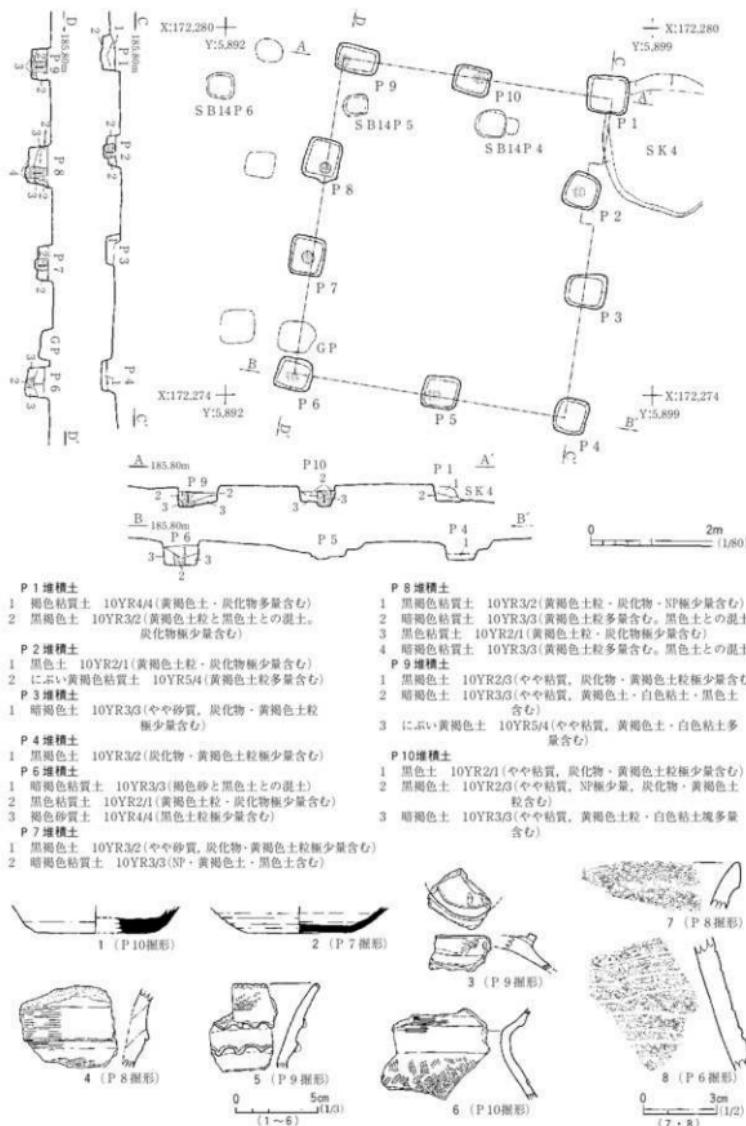
遺物 本建物跡のP 1から須恵器片2点、P 8から瓦片1点が出土している。図39-1は丸瓦の破片であろう。外面の調整痕はナデである。内面は摩滅著しく不鮮明で、布目の痕跡は確認できない。図示していないが須恵器はいずれも胴部破片で、外面に平行タタキ痕跡が認められる。

まとめ 本建物跡は南北2間、東西2間の純柱建物跡で、今回の調査では唯一の純柱建物である。東側柱列中央の柱穴が欠落しており1間となる特徴がある。倉庫として機能していたのであろう。また近接する9号建物跡や1号窓穴状遺構とその主軸方向が一致することから、同時期に機能していた可能性が高い。出土遺物に丸瓦片が1点あり、これが古代に属するならば、会津郡衙との関連も指摘される資料であろう。年代については、遺物が少なく詳細な年代は不明であるが、概ね平安時代に属すると推察している。

6号掘立柱建物跡 S B 6 (図40、写真33・72)

遺構 本遺構は調査区の西端、E 8-J 3グリッドに位置する建物跡である。周辺は最も遺構が密集する範囲で、本遺構と重複する遺構も多い。その重複関係を整理すると、3号住居跡・8号溝跡は本遺構より古く、2・3・7号土坑は新しい時期に属する。また直接的な重複関係はないが、14号建物跡は8号建物跡よりも新しい。本遺構は8号建物跡と主軸方向が一致することから、14号建物跡の方が本遺構よりも新しいと判断している。

本建物跡は南北3間、東西2間の側柱建物跡で、その平面形はP 2がやや西側にずれた位置にあ



るが、南北方向に長い長方形をなす。主軸方向は西側柱列を基準に、真北に対して8度東に傾いており、8号建物跡や12号建物跡とはほぼ一致している。規模は南北の柱列が4.5m、東西の柱列が5.2mを測る。柱間の距離は南北柱列では2.2~2.3mである。東西柱列では1.5~2.0mと一定せず、中央の柱間の間隔が狭くなる特徴が認められる。

柱穴の平面形は、その多くは比較的整った方形であるが、P 9・P 10は長方形である。柱穴の規模は、一边が55~70cmを測り、平均して60cm前後である。P 9・P 10は長辺が70~60cm、短辺が46cmを測る。検出面からの深さは、P 6・P 8・P 9が40cmで深く、P 3・P 4が22cmを測り最も浅い。柱穴の周壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。柱穴の底面には、直径20cm前後で、深さ3~5cmの円形の浅いくぼみが認められ、柱材が建物の重量で沈下した痕跡と判断した。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に大別した。柱痕跡は黒褐色土を基調とする。柱材は、底面に残るくぼみからも直径20cm前後の丸太材が用いられていたと判断した。埋土は黒褐色土と黄褐色を基調とする粘質土が交互に堆積し、硬くしまっている。

遺物 本建物跡の柱穴からは弥生土器23点、土師器33点、須恵器7点が出土している。弥生土器は3号住居跡と重複するP 8から出土量が多い。土師器、須恵器はP 6~P 9からの出土量が多い。そのうち形状が把握できるものを図40に示した。

1・2は須恵器杯の底部で、底部切り離しは回転ヘラキリである。3は弥生土器の蓋であろうか。蓋の上面から貫通孔が2つ認められる。4は壺形土器の口縁部で、下端に明瞭な段を持つ。5は壺形土器の口縁部破片である。口縁部直下に隆帯が2段めぐり、その隆帯上部に指頭押圧による小波状のキザミが施されている。口唇部にもキザミが充填されている。6は壺または壺形土器の破片である。体部にハケメ調整痕を残し、体部上半にヘラ状工具による刺突がめぐる。口縁部はヨコナデで仕上げられている。7は壺形土器の口縁部破片である。口縁部が肥大し下端部に段を持つ。外面には幅の狭いクシ歯状施文具を用いた波状文が施されている。8は壺形土器の頸部破片であろう。半裁竹管による平行沈線の連弧文が施される。

まとめ 本建物跡は南北3間、東西2間で南北方向に主軸を持つ建物跡である。周辺の8・12・18号建物跡と主軸方向が一致することから、これらの建物は密接な関係をもって建てられた可能性が高い。詳細な年代を特定できる出土遺物がないが、概ね平安時代と考えている。

7号掘立柱建物跡 S B 7 (図41、写真34)

遺構 本建物跡は調査区の西側、E 8-J 5グリッドに位置する。建物の南半は調査区外へと続いている。その全容は把握できない。18号建物跡、19・20・24号土坑と重複する。20号土坑はP 3と重複し、本遺構が古い。しかしP 5の周辺は、近年の擾乱により明確な切り合いを捉えることができなかった。周辺には4号竪穴状遺構、18号建物跡などが近接している。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は調査区外へと続くため、北側柱列と東側柱列を確認したのみである。さらに北側柱列

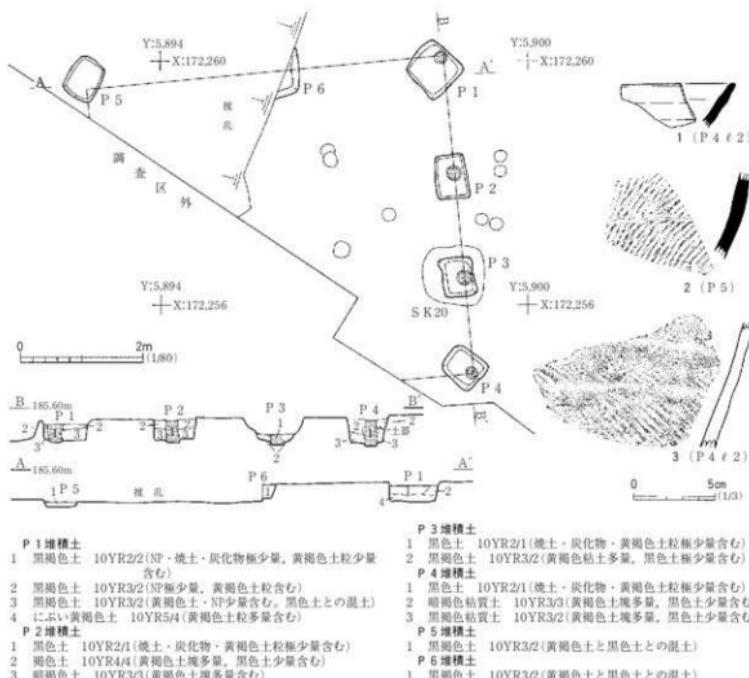


図41 7号掘立柱建物跡・出土遺物

は擾乱により、わずかに柱穴の痕跡を確認した程度である。東側柱列のP1・P4は、建物の隅に位置する柱穴と推定され、柱穴の方向が斜めになる特徴が見られた。このことによりP4より南には柱穴が続かず、建物の規模は南北3間、東西2間と推定される。その主軸方向は、東側柱列を基準に真北に対して5度西に傾いている。規模は北側柱列が5.8m、東側柱列が5.2mと東西方向に長い建物跡である。柱間の距離は北側柱列が2.8m前後と広い。東側柱列では1.6~1.9mである。

本建物跡を構成する柱穴は、P1・P4が方形を呈し、一辺の規模は60~76cmである。P2・P3は長方形を基調とし、その規模は長辺が64~70cm、短辺が52cmを測る。検出面からの深さは40~50cmである。柱穴の底面には直径20cm前後で、深さ2~3cmの円形の浅いくぼみが確認できる。柱材の痕跡と判断した。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は焼土や炭化物を含む黒褐色土を基調とする。埋土は黄褐色土塊を含む黒褐色土と暗褐色土が互層をなして堆積し、硬くしまっている。明確な抜き取り痕跡は確認できない。

遺物 本建物跡のP4・P5・P7から土師器片・須恵器片が数点出土し、そのうちの3点を

図41に示した。1は須恵器杯の口縁部である。2は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行タタキ痕のうえに浅い沈線がめぐる。内面は同心円文のアテ具痕が観察できる。3は土師器甕の胴部破片で、外面に平行タタキ痕跡が残っている。

まとめ 本建物跡は調査区外へと延びるので全容は不明であるが、南北3間、東西2間の側柱建物跡と推定される。建物隅に位置する柱穴が斜めに傾く特徴があり、これは今回の調査区の建物跡の中で唯一確認したものである。年代については出土遺物が少なく、詳細まで特定できないが、平安時代に属するものと考えている。

8号掘立柱建物跡 S B 8 (図42・43、写真35・37・72)

遺構 本建物跡は調査区の西端、E 8-J 2グリッドに位置する。本建物跡は2回の建て替えの痕跡が確認され、都合3時期に渡り同所で継続的に建てられた建物跡である。新しい順に8号・10号・16号建物跡となる。周囲は標高185.3m付近の平坦面で、調査区内で最も建物跡などが密集する部分である。本建物跡の柱穴と直接的に重複する5号竪穴状遺構・51号土坑よりは新しく、4・8号溝跡よりは古い時期と判断している。また14号建物跡とは柱穴同士の直接的な重複はないが、周囲の遺構群との関係から本建物跡の方が古いと考えている。南に6号建物跡、南西に12号建物跡が分布しており、本建物跡の主軸方向と一致する。さらに東側には井戸跡と推定される6号土坑、当時のゴミ穴として利用されていた5号土坑をはじめとする土坑群が点在している。遺構はLⅢaとしたN Pを含む黄褐色粘質土の上面で確認した。

本建物跡は東西3間、南北2間の側柱建物跡で、3時期に渡り継続的に建てられた建物跡のうち最も新しい時期の建物跡である。建て替えの特徴として北側柱列に重複する柱穴が見られないことがあり、この部分は3時期とも共有していた可能性が高い。その他の柱穴は同所で重複し、南北方向に桁幅を伸縮させている。8号建物跡は桁幅を狭め、東西柱列の柱間も狭くなる特徴がある。

本建物跡の平面形は東西方向に長い長方形をなし、その主軸方向は東側柱列を基準として、真北に対し12度東に傾く。規模は北側柱列(P 6-P 9)が7.2m、南側柱列(P 1-P 4)が7.15mを測り、東側柱列(P 1-P 10)が4.6m、西側柱列(P 4-P 6)が5.1mと西側が広いつくりとなる。柱間の距離は2.1~2.55mであるが、各柱列によって柱間距離は一定しない特徴がある。北側柱列3間の距離は東から2.3m、2.4m、2.5mを測る。南側柱列3間の柱間距離は2.3m、2.35m、2.55mである。南北柱列では東側に柱間が狭まる特徴が認められる。東側柱列は北から2.45m、2.15mである。西側柱列は北から2.6m、2.5mとほぼ等間隔を測る。

柱穴の平面形は、北側柱列は整った方形であるが、他の柱穴は円形を基調とする。規模は北側柱列では一辺が60~66cmを測り、検出面からの深さは25~60cmである。他の柱穴は直径60~75cmで、P 3が最も大きい。深さは28~56cmで、北側柱列が浅く南側柱列が深い特徴がある。柱穴の周壁はいずれも垂直気味に立ち上がるが、P 1・P 9は上方部分がわずかに開いて立ち上がる。多くの柱穴で底面上に直径20cm前後、深さ2~5cmの円形のくぼみが認められる。これは柱材の痕

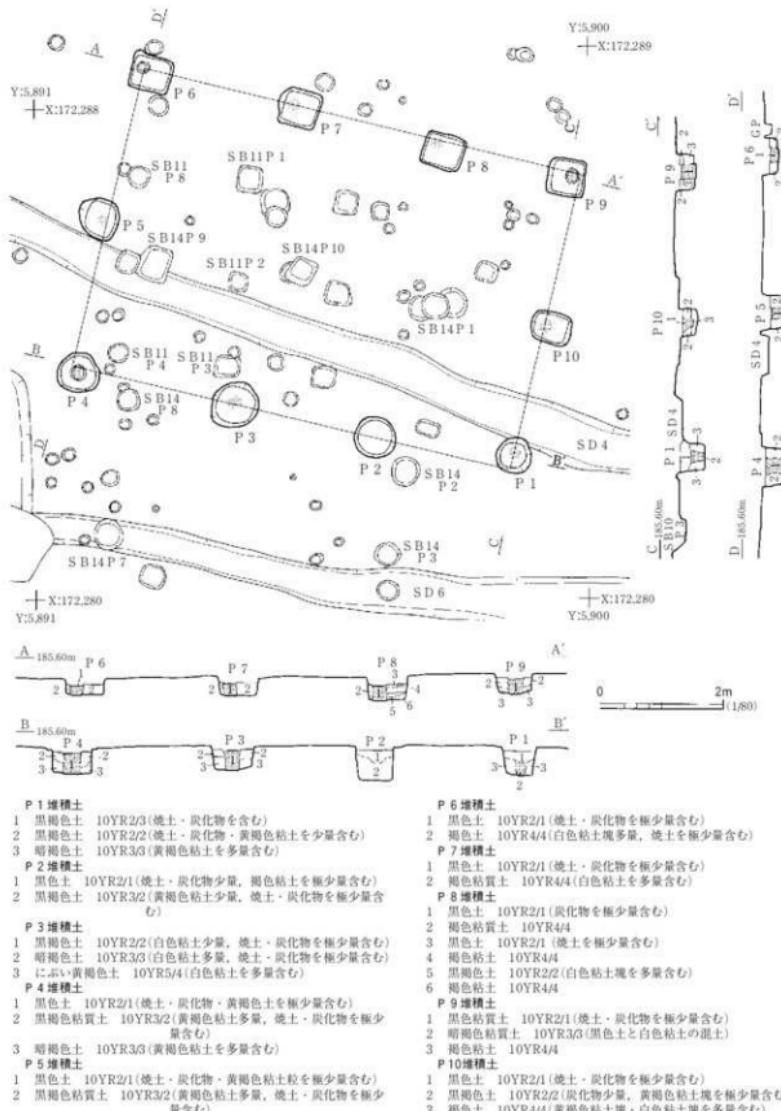


図42 8号掘立柱建物跡

跡と判断している。また北側柱列は平面形が方形で、柱穴の据え替えの痕跡が認められない。柱の据え替えの痕跡がない点から、建物構築当初の柱材がそのまま継続して利用されていた可能性が高い。このことから、本建物跡では柱穴の形状が方形から円形へ変遷したと考えられる。

掘形内堆積土は柱痕跡と掘形埋土に大別できた。柱痕跡は黒色土を基調とし、焼土や炭化物を極少量含んでいる。柱痕跡はP 2を除きすべての柱穴で確認できた。本建物跡の柱材として直径20~25cmの丸太材が用いられていたと推察している。掘形埋土は黒褐色土と褐色粘土を基調とする土が交互に堆積している。埋土は黄褐色粘土や白色粘土を多量に含み固くしまっている。

遺物 本建物跡の柱穴からは弥生土器、石器、土師器、須恵器が出土している。その内訳はP 1が弥生土器1点、土師器44点、須恵器1点、P 2が弥生土器3点、土師器17点、須恵器7点、P 3が土師器7点、P 4が弥生土器1点、土師器6点、須恵器2点、P 5が土師器3点、P 8が弥生土器2点、土師器1点、P 10が弥生土器5点、石器1点、土師器9点である。これらはすべて掘形埋土から出土したもので、掘形を充填する土とともに混入したものと判断した。

図43-1は須恵器杯である。青灰色をなし、硬質な焼き上がりである。底面はヘラケズリによる丁寧な再調整が施され、底部切り離し痕を残していない。2は土師器の高台付杯である。内外面とも摩滅して調整痕などは不鮮明だが、体部外面は回転ヘラケズリ再調整が認められる。内面は口縁部付近に横位ミガキが観察でき、黒色処理が施されている。3は土師器杯の小破片で、体部下端から底面は回転ヘラケズリ再調整が施されている。4~6は手づくねの筒型土器で、いわゆる製塙土器とされるものである。外面には粘土紐巻上げ痕跡を残している。口縁部には指頭圧痕が認められる。内面の成形痕は不鮮明なものが多いため、4は横位の指ナデ痕が観察できる。7は土師器壺の胴部破片である。外面には平行タタキ痕が残っている。

8~10は弥生土器である。8は壺形土器の口縁部破片で、口縁部に明瞭な段を持つ。9は壺形土器の頸部付近の破片である。外面はハケメ調整を施した後に、クシ歯状施文具による横位の連続波状文を2段描いている。口縁部にはヨコナダゲが施され、これがハケメを消している。内面は横位のミガキが施されている。10は壺形土器の底部で、外面には地文として単節縄文が施されている。

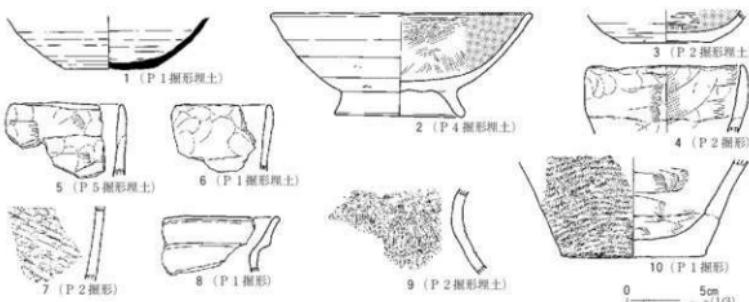


図43 8号掘立柱建物跡出土遺物

まとめ 本建物跡は南北2間、東西3間の側柱建物跡である。2回の建て替えが確認され、都合3時期に渡り継続的に同一場所に建てられた建物跡と推察している。本建物跡と主軸方向を一致させて6・12号建物跡が分布していることから、企画的に配置された建物群を構成する可能性が高い。本建物跡に近接するゴミ穴と考えられる5号土坑からは須恵器の円面鏡が4点出土している。これは本建物跡の性格を特徴付ける遺物と考えられ、本建物跡が集落の維持経営に関わる中心的な役割を担うために設置された建物であったことを示唆している。

年代については柱穴から出土した遺物などから9世紀後半頃と判断している。

9号掘立柱建物跡 S B 9 (図44、写真39・72)

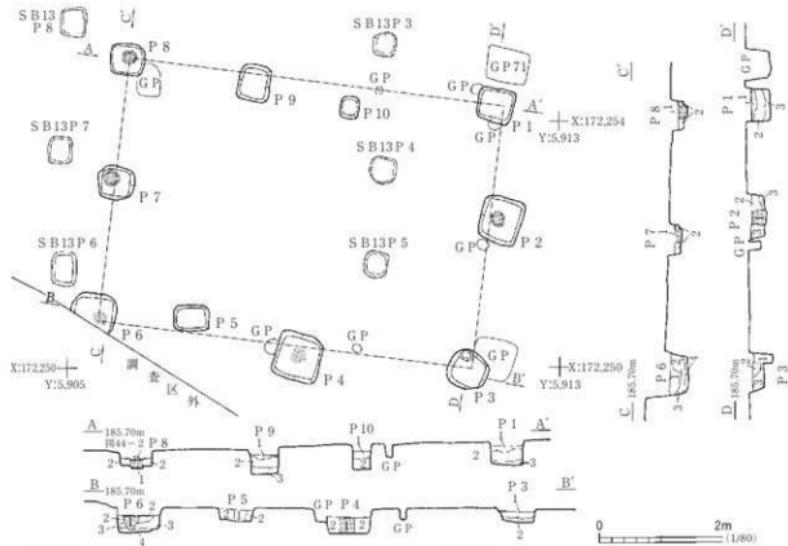
遺構 本建物跡は調査区の中央部、F 8-A 5・B 5グリッドに位置する。標高185.5mの平坦面に立地し、周辺には竪穴状遺構や建物跡、土坑群・小柱穴群などが密集して分布している。本建物跡を構成する柱穴は、柱穴群以外の遺構との直接的な重複関係がなく、周囲の建物群・土坑群との関係は不明な部分が多い。また13号建物跡との構築順序であるが、調査区全体の建物跡については主軸方向が東に向くものから真北に近くなるものへの変遷がたどれる。このことを積極的に評価するならば本建物跡の方が古い時期に属すると考えられる。本建物跡と主軸方向を一致させて、北側には5号建物跡が並び、南側には1号竪穴状遺構が近接している。

本建物跡は南北2間、東西3間の側柱建物跡で、その平面形は東西幅が長い長方形をなす。主軸方向は東側柱列を基準に真北に対して約10度東に傾く。規模は南北柱列が6.0~6.1m、東西柱列が4.2~4.3mと東西方向に長い建物跡である。東西柱列では各柱穴が一直線上に配置するが、特に北側柱列のP 9・P 10、南側柱列のP 5は隅柱に比べ内部に入り込んだ位置にある。そのため各柱間の距離も一定しない。北側柱列は1.6~2.4mであり、南側柱列では1.5~2.8mである。東西柱列では北側の柱間が2.0m、南側が2.3mとなる。

本建物跡を構成する柱穴は隅丸形を基調とし、一辺の規模は65~72cmである。P 2・P 4は長方形を基調とし、その規模は長辺が55~60cm、短辺が40~50cmを測る。検出面からの深さは40~50cmである。柱穴の底面には直径20cm前後で、深さ2~3cmの円形の浅いくぼみが確認できる。柱材の痕跡と判断した。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に大別できた。柱痕跡は黒褐色を基調とした土で、焼土・炭化物をわずかに含んでいる。柱材は直径20cm程の丸太材が用いられたと判断している。埋土は暗褐色土と黄褐色粘質土を基調とし、それぞれが互層をなしている。いずれの土層も黄褐色粘土や白色粘土と黒色土が混ざった土で、硬くしまっている。

遺物 本建物跡からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。その内訳はP 1が土師器8点、P 2・3が土師器1点、P 4が土師器10点、P 5が弥生土器5点、土師器12点、須恵器1点、P 6が弥生土器2点、土師器6点、P 7が土師器5点、須恵器1点、P 8が土師器6点、P 9が土師器4点、須恵器1点である。これらの多くは掘形埋土から出土したものである。柱痕跡から出土



P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(黄褐色土壤・NP極少、炭化物・焼土極少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土粒多量、黒褐色土少量、NP極少量含む)
- 3 黑褐色土 10YR3/2(黄褐色土粒少量含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(燒土・炭化物・NP極少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR3/3(炭化物・NP・黄褐色粘土粒少量含む)
- 3 にぶい黄褐色粘土 10YR5/4(黄褐色粘土粒極少量含む)

P 3 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(燒土・炭化物極少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・黄褐色土粒極少量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物・極少量、黄褐色粘土粒多量含む)

P 4 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・燒土粒少量含む)
- 2 にぶい黄褐色粘土 10YR5/4(NP極少、黄褐色粘土粒多量含む)

P 5 堆積土

- 1 黑色土 10YR2/1(炭化物・燒土含む)
- 2 黑褐色土 10YR3/2(黄褐色土粒含む)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(燒土・炭化物極少量、黄褐色土粒含む)
- 2 明黄褐色砂質土 10YR6/6
- 3 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色粘土と黒色土との混土)
- 4 にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4(黄褐色粘土と黒色土との混土)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/1(燒土・炭化物含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/3(炭化物・NP・黄褐色粘土粒極少量含む)
- 3 にぶい黄褐色粘土 10YR5/4(黄褐色粘土粒極少量含む)

P 8 堆積土

- 1 黑色土 10YR2/1(燒土・炭化物含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR5/4(黒色土との混土)

P 9 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色粘土と黒色土との混土)
- 2 黑褐色土 10YR4/4(白色粘土粒多量含む)
- 3 黑褐色土 10YR3/2(白色土と黒色土との混土)

P 10 堆積土

- 1 黑色土 10YR2/1(燒土・炭化物・NP・黄褐色土粒極少量含む)
- 2 梅色砂質土 10YR4/4(黒色土粒極少量含む)

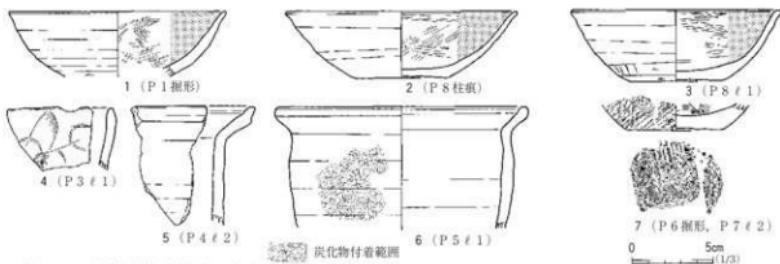


図44 9号掘立柱建物跡・出土遺物

したものもあり、柱材を抜き取った後に流入した土に混入していたものと判断した。

図44-1～3は土師器杯である。2はP 8の柱痕跡から出土したもので、柱材の抜き取り後に流入したものと判断した。1～3はいずれも軟質な焼き上がりで内外面とも摩滅が著しい。1・3の外面には体部中位から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施される。3は再調整の際にロクロの回転に合わせてヘラ状工具が連続してあたった痕跡が確認できる。内面はいずれも摩滅して不鮮明だが、口縁部付近は単位幅の狭い横位ミガキが観察できる。

4は筒型土器の口縁部破片である。外面は指頭圧痕が観察でき、内面は横位のナデが認められる。また胎土は軟質で砂を多量に含んだ赤橙色をなす。その中に海綿骨針が観察でき、他の土師器の胎土とは明らかに異なっている。いわゆる製塙土器と判断している。

5・6は土師器壺の口縁部破片である。5は中型壺であろう。直線的に立ち上がる体部から大きく外反して開く口縁部となる。6は胴部が丸みを帯びる小型壺である。体部上半部に炭化物が付着する。7は土師器壺の底部片である。底径が小さい平底の長胴壺であろう。外面には平行タタキ具痕が残る。内面は摩滅して不鮮明だが、指ナデが認められる。

まとめ 本建物跡は東西3間、南北2間と東西方向に主軸を持つ側柱建物跡である。その主軸方向は北側に近接し、総柱建物跡で倉庫と推定される5号建物跡の主軸とほぼ一致していることからも、本建物跡がこれらと密接な関係を持って機能していた可能性が高い。

詳細な年代を示す出土遺物はないが、柱痕跡内から出土した土師器杯の特徴から、9世紀中葉頃には本建物跡は廃絶したものと判断している。

10号掘立柱建物跡 S B 10 (図45・46、写真35・36・72)

遺構 本建物跡は調査区の西端、E 8-J 2グリッドに位置する。本建物跡は2回の建て替えの痕跡が確認され、都合3時期に渡り同所で継続的に建てられた建物跡である。本建物跡は8号建物跡の次に建て替えられた2時期目の建物跡である。周囲は標高185.3m付近の平坦面で、調査区内で最も建物跡などが密集する部分である。本建物跡との重複関係を整理すると、5号竪穴状遺構・51号土坑よりは新しく、4・8号溝跡よりは古い。また14号建物跡とは柱穴同士の直接的な重複はないが、周囲の遺構群との関係から本建物跡の方が古いと考えている。本建物跡と主軸方向を一致させて南に6号建物跡、南西に12号建物跡が分布する。さらに東側には井戸跡と推定される6号土坑、当時のゴミ穴として利用されていた5号土坑などの土坑群が点在している。遺構はL III aとしたNPを含む黄褐色粘質土の上面で確認した。

本建物跡は東西3間、南北2間の側柱建物跡で、3時期に渡り継続的に建てられた建物跡のうち2時期目の建物跡である。本建物跡の主軸方向は東側柱列を基準として、真北に対し12度東に傾く。北側柱列に重複する柱穴は見られずこの部分は3時期とも共有していた可能性が高い。その他の柱穴は南側に幅50～60cm延ばしている。規模は北側柱列（P 1-P 8）が7.2m、南側柱列（P 3-P 6）が7.3mを測り、東側柱列（P 1-P 3）が5.4m、西側柱列（P 6-P 8）が5.6mで

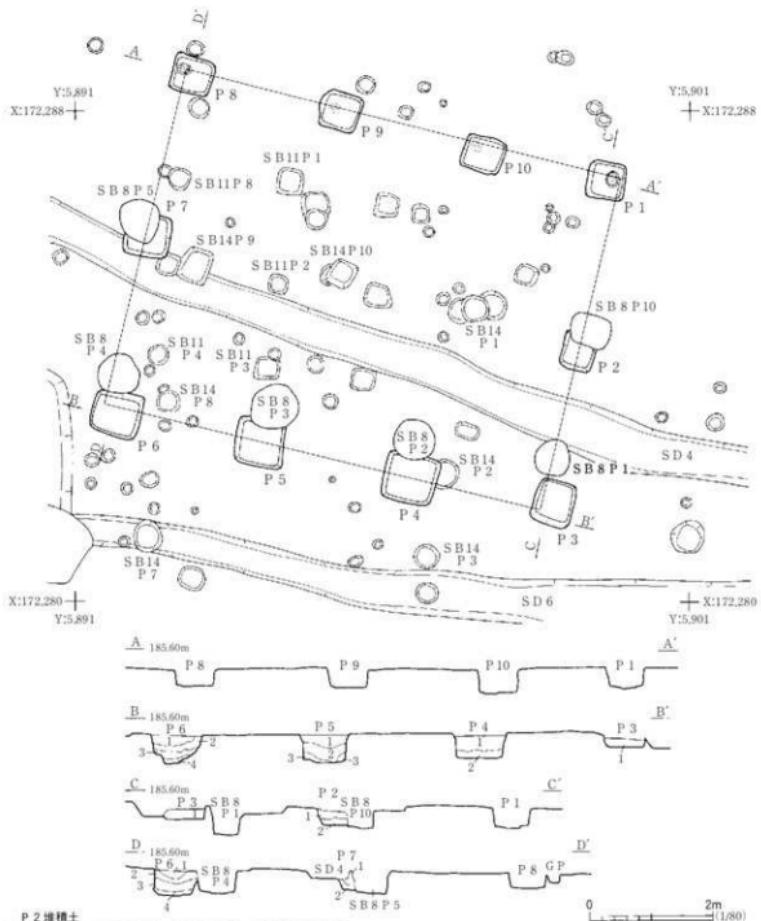


図45 10号掘立柱建物跡

ある。柱間の距離は2.1~2.8mであるが、各柱列によって柱間距離は一定しない特徴がある。南側柱列3間の柱間距離は東から2.2m、2.6m、2.5mで、東端の柱間が狭くなる。東側柱列は北から2.7m、西側柱列は各2.8mとほぼ等間隔を測る。

柱穴の平面形は、重複する8号建物跡の柱穴により遺存状態は悪いが、いずれも整った方形である。規模は一辺が60~90cmを測り、南側柱列のP 4・P 5が最も大きく、東西柱列のP 2・P 7が小さい。検出面からの深さは25~48cmで、北側柱列が浅く南側柱列P 4-P 6が深くなる特徴がある。柱穴の周壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。P 6は上端部分がわずかに開いて立ち上がる。柱穴の底面上は平坦なものが多いが、北側柱列の柱穴とP 5・P 6は、底面上に柱材の痕跡を示す直径20cm前後、深さ2~5cm程の円形のくぼみが認められる。

東西柱列の柱穴の掘形内堆積土は、重複する8号建物跡の柱穴により削平され、既に遺存する部分が少ない。南側柱列が比較的良好に遺存している。東西柱列のP 2・P 7はいずれも掘形埋土の一部で、柱痕跡は確認できない。埋土は黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒を多量に含み硬くしまっている。南側柱列のP 3-P 6は、いずれも明確な柱痕跡が認められない。底面の柱材の痕跡から25~30cm程の丸太材が用いられていたと推察できる。埋土は他の堆積土と同様に、黄褐色粘土や白色粘土を含む黒褐色土を基調とし、P 6ではにぶい黄褐色粘土と黒色土が交互に堆積する状況が確認できた。

遺物 10号建物跡の柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。その内訳はP 1が土師器19点・須恵器1点、P 2が弥生土器7点・土師器49点、P 3が弥生土器2点・土師器23点・須恵器2点、P 4が弥生土器14点・土師器44点・須恵器10点、P 5が弥生土器2点・土師器18点・須恵器3点、P 6弥生土器1点・土師器3点・須恵器2点、P 7が弥生土器2点・土師器10点、P 8が土師器3点・須恵器1点、P 10が土師器8点である。これらの土器はいずれも掘形埋土内から出土したもので、埋土内に混入したものと判断している。

1は土師器杯で丸みを帯びた体部で、口縁部が小さく外反する。内面は摩滅して不鮮明だが体部

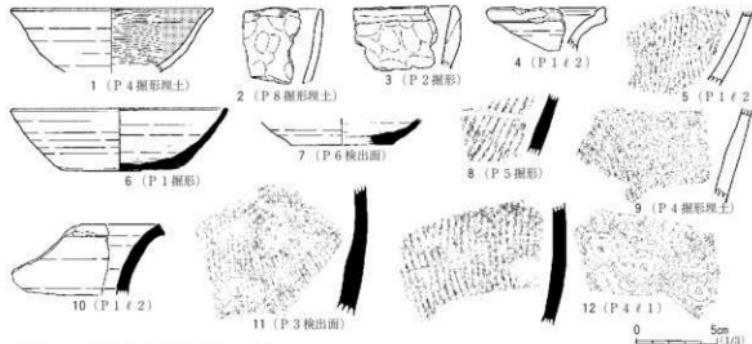


図46 10号掘立柱建物跡出土遺物

中央から口縁部にかけては横位のミガキが認められる。2・3は手づくねの筒型土器で、製塩土器と考えている。いずれも摩滅が著しく成形痕は不鮮明であるが、口縁部付近に指頭圧痕が残る。内面には横位の指ナデが観察できる。2は器厚が薄く、色調が灰白色である。3は厚手で、胎土は赤褐色を呈する。4・5・9は土師器壺の破片である。4は口縁部破片で、頭部から大きく開く器形である。5・9は胴部破片で、外面に平行タタキ具痕が残る。内面はロクロナデが認められる。

6・7は須恵器杯である。6は底部から直線的に口縁部まで立ち上がる器形で、底部の切り離しは回転ヘラキリである。内面見込み部分にくぼみが見られ、ロクロを回転させて底部を切り離した際に指で押された痕跡と判断した。10は須恵器壺の口縁部破片である。口唇部が平らに面取りされている。8・11・12は須恵器壺の胴部破片である。8・12の外面は平行タタキ具痕が観察でき、タタキ痕の内部には木目が認められる。さらに外面にはいわゆる螺旋状沈線文と称される浅い平行沈線がめぐる。8の内面には松葉状アテ具痕が残り、12では同心円文のアテ具痕が観察できる。

まとめ 本建物跡は南北2間、東西3間の隅柱建物跡である。同一場所において3時期に渡って継続的に建てられた建物のうち、8号建物の次に建てられた2時期目の建物に該当する。また本建物跡に近接する5号土坑からは、須恵器の円面鏡4点が出土している。このことから、集落の維持經營に関わる中心的な役割を担う建物だったのではないかと推察される。

年代については、柱穴から出土した遺物や重複する建物跡の存続期間などを勘案して、9世紀中葉を中心とした時期と判断している。

11号掘立柱建物跡 S B11 (図47, 写真38)

遺構 本建物跡は調査区西端、E 8-J 2グリッドに位置する。周囲は調査区内で最も遺構が

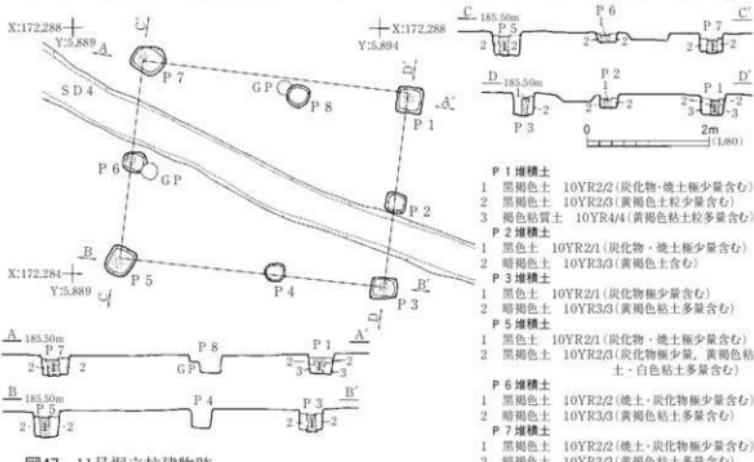


図47 11号掘立柱建物跡

集中する場所である。本建物跡のP 4は16号建物跡のP 6と重複し、これよりも新しい時期と判断した。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は南北2間、東西2間の掘立柱建物で、平面形はやや東西に長い長方形をなす。主軸方向は東側柱列を基準にして真北に対して3度東に傾く。規模は、南北柱列で4.2~4.3m、東西柱列で3.2~3.3mを測る。各柱列の柱間は、南北柱列では西側が広く2.5m、東側は1.7mである。東西柱列では1.6mとほぼ一致している。

本建物跡を構成する柱穴の平面形は円形で、その規模は直径0.4~0.5mを測る。深さは20~40cmである。掘形内堆積土は掘形内の埋土と柱痕跡に分けられる。柱痕跡は黒褐色土を基調とし、炭化物粒を含んでいる。柱材は直径15cmほどの丸太材が用いられている。埋土は黄褐色土塊を多量に含み、硬くしまっている。明確な柱材の抜き取り痕は確認できない。

本建物跡から遺物は出土していない。

まとめ 本建物跡は南北2間、東西2間の小型の建物である。10・13号建物跡などと重複するが、最も新しい時期の建物跡である。年代については、柱穴などから遺物が出土していないため、詳細な所属時期は不明である。

12号掘立柱建物跡 S B12 (図48、写真40・72)

遺構 本遺構は調査区の西端、E 8-I 2-I 3グリッドに位置する建物跡である。周辺は標高185.3mの平坦面で、調査区内で最も遺構が密集して分布する範囲である。本建物跡のP 1は29号土坑と重複し、29号土坑のほうが新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は調査区外へと続くため、その全容は把握できない。現状では建物跡の北東隅を確認し

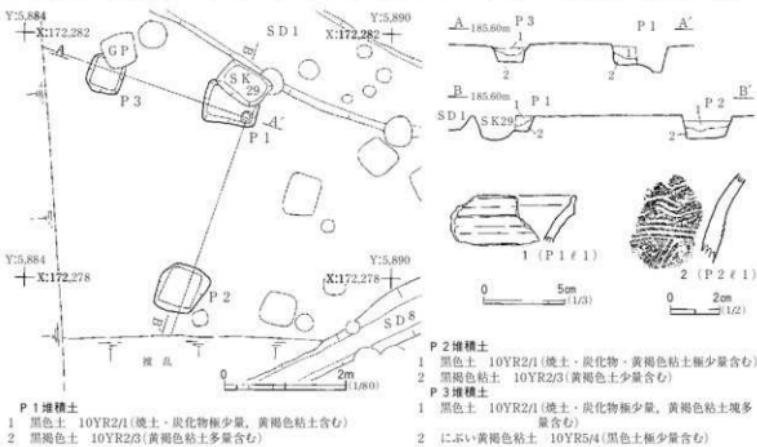


図48 12号掘立柱建物跡・出土遺物

たに止まる。遺存しているのは、北側と東側の柱列が各1間のみであり、その柱間はP1-P2間が3m、P1-P3間が2.4mを測る。

柱穴の平面形は長方形を基調とする。P1・P2は隅丸長方形で、P3は隅丸方形となる。柱穴の規模は、P1・P2が大きく長辺が0.8~0.9m、短辺が0.75mを測る。P3は一辺が0.4~0.6mと小さい。検出面からの深さは30~45cmで、P1が最も深い。P1では底面の南東隅で直径20cm前後、深さ10cmの円形の浅いくぼみが確認できる。柱材の痕跡と判断した。

掘形内の堆積土は黒褐色土と黄褐色粘質土を基調とする。いずれの堆積土も炭化物や焼土、黄褐色土粒を含み、互層をなして硬くしまっている。またいずれの柱穴でも明確な柱痕跡を確認することができなかった。

遺物 本建物跡からは弥生土器4点、土師器7点、須恵器2点が出土している。その多くは掘形の埋土に混入していたものである。そのうち形状が把握できるものを図48に図示した。1は土師器の壺である。ロクロ成形で口唇部がわずかに外反する。2は弥生土器の壺形土器である。地文として単節斜繩文が施され、クシ菌状施文具により横位・波状文・鋸歯文が描かれている。

まとめ 本建物跡は北東隅部分を確認したのみで、その規模は不明である。建物跡の主軸方向が近接する8号建物跡などと一致し、これらと密接な関係を持って機能していた可能性が高い。年代についても平安時代を中心とした時期と考えている。

13号掘立柱建物跡 S B13 (図49、写真41・72)

遺構 本建物跡は調査区のはば中央部、F8-A5グリッドに位置する。周囲は標高185.5mほどの平坦面で、建物跡や土坑群などが密集して確認された。本建物跡と22号土坑は、直接的な重複関係にあり、22号土坑の方が新しい。9号建物跡と土坑群とは直接的な重複関係にないが、22号土坑との関係から本建物跡の方が新しいと推察している。また北側に7号建物跡、南側には1号竪穴状遺構などが近接している。西側には本建物跡と主軸方向を同じくする4号建物跡が位置している。遺構検出面はN Pを極少量含む黄褐色粘質土の上面である。

本遺構は南北4間、東西2間の側柱建物跡で、南北方向に主軸を持つ。主軸方向は東側柱列を基準として4度東に傾いている。建物跡の北西隅は近年の耕作により大きく削平され、柱穴の底面付近をわずかに確認したに止まる。規模は東側柱列(P1-P5)が7.7m、西側柱列(P6-P10)が8.0mを測り、北側柱列(P1-P10)が5.2m、南側柱列(P5-P6)が5.0mと東西幅が大きい。柱間の距離は、東西柱列が1.6~2.0mであり、南端の柱間が狭くなる特徴がある。南北柱列では柱間が一定しない。北側柱列の柱間は1.3m間隔である。

柱穴の平面形は、いずれも方形を基調とする。柱穴の上端部は隅丸になるものも多いが、底面の形状は整った方形となる。P9は円形の柱穴であるが、削平でわずかに底面付近が遺存するだけである。柱穴の規模は、いずれも一辺が40cm前後である。検出面からの深さは、遺存状態のよい東側柱列では30~42cmを測る。柱穴の底面には、直径20cm前後で、深さ3~5cmの円形の浅いくぼみが



図49 13号掘立柱建物跡・出土遺物

認められ、柱材が建物の重量で沈下した痕跡と判断した。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は炭化物を含む黒色土を基調とし、柱穴底面で確認できた浅いくぼみから上方に延びる。埋土は黒色土と黄褐色土の混土であり、それぞれが互層をなして堆積する。柱材を固定するために黒色土と黄褐色土を交互に掘形内に入れ、硬くつき固められている。またP 2・P 5・P 9・P 11では柱痕跡を確認できない。

遺物 本建物跡のP 6からは、弥生土器2点、土師器3点、須恵器1点が出土した。そのうち形状が把握できるものを図49に図示した。その他の柱穴からは遺物が出土していない。

まとめ 本建物跡は南北方向に主軸を持つ側柱建物跡である。東西柱列のうち南端1間分の間隔が狭い特徴が認められる。北側柱列は柱間距離が1.3mと、東西柱列より間隔が狭くなる。南側柱列では中間の柱穴は確認できない。また本建物跡の西側2.4mには4号建物跡が接する。4号建物跡の規模は2間×2間と小型で、柱穴も小さく貧弱であるが、本建物跡と主軸方向が一致する特徴がある。このことを積極的に評価すれば、同時期に機能した可能性が高く、4号建物跡は本建物跡に付随する倉庫などとも考えられる。詳細な年代を示す出土遺物はないが、平安時代に属すると判断している。

14号掘立柱建物跡 S B 14 (図50, 写真35・42)

遺構 本遺構は調査区西端、E 8-J 2・J 3グリッドに位置する側柱建物跡である。周囲は標高185.3mほどの平坦面で、調査区内でも最も建物跡が密集して分布する範囲である。本建物跡は3号竪穴住居跡、5号竪穴状遺構、8・10・16号建物跡、42号土坑、4・6・8号溝跡と重複し、8号溝跡よりも古く、その他の遺構よりは新しいと判断した。また本建物跡の南側には主軸方向を一致させて18号建物跡が分布している。遺構検出面はL III aとしたNPをわずかに含む黄褐色粘質土の上面で確認した。

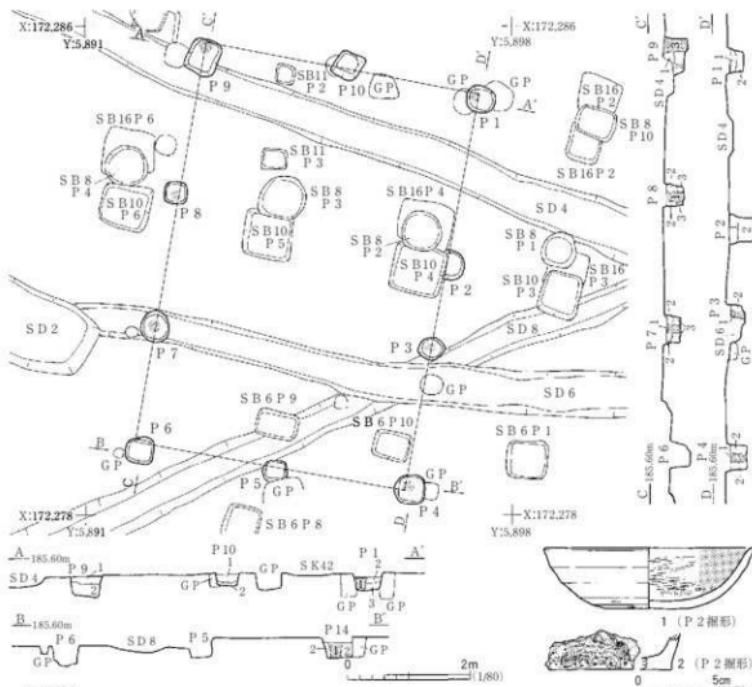
本建物跡は南北3間、東西2間の側柱建物で、南北方向に主軸を持つ。主軸方向は東側柱列を基準として10度東に傾いている。規模は東側柱列(P 1-P 4)が6.5m、西側柱列(P 6-P 9)が6.4mを測り、北側柱列(P 1-P 9)が4.6m、南側柱列(P 4-P 6)が4.5mである。柱間の距離は、東西柱列が2.0~2.6mであり、南端の柱間が狭くなる特徴がある。南北柱列では2.3~2.4mと柱間がほぼ一定する。

柱穴の平面形は隅丸方形を基調とするが、P 1~P 3は円形になる。柱穴の規模は、いずれも一辺が38~46cmである。検出面からの深さは、30~45cmを測る。柱穴の底面には、直径20cm前後で、深さ3~5cmの円形の浅いくぼみが認められ、柱材が建物の重量で沈下した痕跡と判断した。

掘形内堆積土は柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は炭化物を含む黒褐色土である。埋土はほとんどが黄褐色粘土を多量に含む暗褐色土で、硬くしまっている。

遺物 本建物跡からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。その内訳はP 1から弥生土器7点、土師器2点、P 2が弥生土器4点、土師器11点、須恵器2点、P 8から土師器3点、P 9が弥生土器1点、土師器13点、須恵器3点、P 10から土師器6点である。いずれも掘形埋土に混入した小破片である。そのうち形状が把握できるものを図50に示した。

1はP 2から出土した土師器杯で、約30%の遺存である。底部からやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が小さく外反する器形である。体部下半から底部にかけては回転ヘラケズリ再調整が施される。内面は底面が放射状のミガキ、体部中央から口縁部にかけては横位のミガキが施され、その後に黒色処理されている。2はP 2から出土した弥生土器で、小型壺形土器の底部破片である。外面は地文として単節斜縞文が施される。内面は底部との接合部付近にナデが観察できる。



- P 1 堆積土**
- 1 黒色土 10YR2/1(燒土・炭化物含む)
 - 2 黄褐色土 10YR2/3(燒土・炭化物・黄褐色粘土板少量含む)
 - 3 黄褐色土 10YR3/3(黄褐色土板少量含む)
- P 2 堆積土**
- 1 黄褐色土 10YR3/3(燒土・炭化物・黄褐色粘土板少量含む)
 - 2 黄褐色土 10YR3/3(黄褐色粘土板多量含む)
- P 3 堆積土**
- 1 黄褐色土 10YR3/2(燒土・炭化物板少量含む)
 - 2 黄褐色土 10YR3/3(黄褐色土板・燒土・炭化物板少量含む)
- P 4 堆積土**
- 1 黑色土 10YR2/1(燒土・炭化物板少量含む)
 - 2 黄褐色土 10YR3/3(燒土・炭化物板少量含む)
- P 5 堆積土**
- 1 黑色土 10YR3/2(燒土・炭化物板少量含む)
 - 2 黄褐色土 10YR3/3(燒土・炭化物板少量含む)
 - 3 黄褐色土 10YR4/4(燒土・炭化物・黄褐色粘土板少量含む)
- P 6 堆積土**
- 1 黑色土 10YR2/2(燒土・炭化物多量含む)
 - 2 黄褐色土 10YR2/3(黄褐色土板多量含む)
 - 3 黑色土 10YR2/1(燒土・炭化物少量含む)

図50 14号掘立柱建物跡・出土遺物

まとめ 本建物跡は南北4間、東西2間と南北に長い側柱建物である。その主軸方向は近接する6・9・18号建物跡などと一致し、規則的な建物の配置が見られるところから、これらの建物跡と同一時期の建物群を構成するものと推察している。また建物跡の年代を特定できる出土遺物がなく不明であるが、周辺の建物群と同時期で平安時代に属するものと判断している。

15号掘立柱建物跡 S B 15 (図51・78, 写真43・58・77)

遺構 本遺構は、5号溝跡と12号溝跡が途切れながら続く円形周溝内で確認された小型建物跡

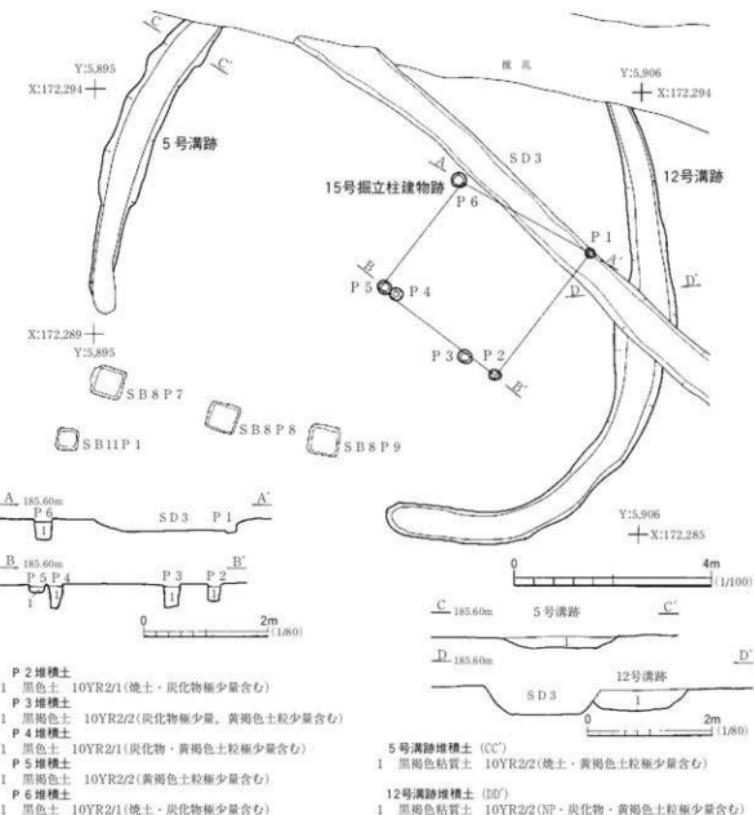


図51 15号掘立柱建物跡, 5・12号溝跡

である。調査区の中央部北側, E 8-J 1・J 2グリッド, F 8-A 1・A 2グリッドに位置し, 標高185.3mの平坦地に立地している。3号溝跡と重複し, それよりも古い。本建物跡の東隣には6号周溝状遺構が分布している。6号周溝状遺構とは円形周溝とその内部に小型建物跡を伴う点で共通している。遺構検出面はL III aである。

5・12号溝跡は本建物跡を取り囲む周溝であるが, 北端が擾乱により失われ, 南側が途切れて全周しない。平面形はやや歪んだ楕円形になると推定される。周溝内法の規模は, 東西幅が約10mを測る。周溝の幅は, 東側の12号溝跡が最も広く1mである。周溝の深さは最大でも10cmと極めて浅い。底面は小起伏があるが, ほぼ平坦であり, 周壁と明瞭な境はなく検出面へと続く。

周溝内堆積土は黒褐色土を基調とし, 黄褐色土粒や炭化物を極少量含んでいる。遺構が浅く, 堆

積状況は不明であるが、人為的に埋め戻したような痕跡も確認できなかった。

周溝内の15号建物跡は、周溝の内部でも東側に寄った位置で確認した。やや歪んだ正方形をなし、その主軸方向は、真北に対して約30度東に傾く。本建物跡は四隅の柱穴を確認しただけの1間×1間の構造である。規模は南北長が2.2~2.4mで、東西長が2.3~2.4mである。

本建物跡を構成する柱穴の平面形は円形であり、その直径は20~25cmである。検出面からの深さは、P 5が最も浅く15cm、P 4が深く40cmである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できない。掘形内堆積土はいずれも黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒を含んでいる。

遺物 本建物跡のP 6からは弥生土器が1点出土しているが、摩滅した小破片であり図示していない。また建物跡の周縁をめぐる溝跡のうち、12号溝跡からは弥生土器が約50点出土している。本建物跡との関連性が高いことから本項で記述し、実測図は図78に示した。

12号溝跡の遺物は、いずれも底面からわずかに浮いた位置から出土している。図78-2は口縁部下端に段を持ち、この部分に指頭押圧による小波状のキザミが充填される。3は高杯であり、杯部下端に明瞭な段を持ち口縁部が大きく外反して開く。内外面ともミガキが施される。4は壺形土器で、波状口縁となる。太い沈線で連弧文が施される。5・6は壺形土器の底部である。

まとめ 本建物跡は円形周溝とその内部の小型建物跡からなる。東側に隣接する6号周溝状遺構と類似し、平地式建物跡の可能性が高い。年代は本建物跡を取り巻く12号溝跡から出土した遺物のみからではあるが、円筒状の脚部を持つ高杯が含まれる点から、周溝より若干新しく弥生時代終末から古墳時代初頭頃と考えている。

16号掘立柱建物跡 S B 16 (図52, 写真35・44・72)

遺構 本建物跡は調査区の西端、E 8-J 2グリッドに位置する。本建物跡は2回の建て替えの痕跡が確認され、都合3時期に渡り同所で継続的に建てられた建物跡である。新しい順に8号・10号・16号建物跡となる。周囲は標高185.3m付近の平坦面で、調査区内で最も建物跡などが密集する部分である。本建物跡の柱穴と直接的に重複する5号竪穴状遺構・51号土坑よりは新しく、4・8号溝跡よりは古い時期と判断している。また14号建物跡は柱穴同士の直接的な重複はないが、周囲の遺構群との関係から本建物跡の方が古いと考えている。本建物跡と主軸方向を一致させて南に6号建物跡、南西に12号建物跡が分布する。さらに東側には井戸跡と推定される6号土坑、当時のゴミ穴として利用されていた5号土坑をはじめとする土坑群が点在している。遺構はL III aとしたNPを含む黄褐色粘質土の上面で確認した。

本建物跡は東西3間、南北2間の側柱建物で、3時期に渡り継続的に建てられた建物のうち最も古い時期の建物跡である。本建物跡の平面形は東西方向に長い長方形をなし、その主軸方向は東側柱列を基準として、真北に対し12度東に傾く。北側柱列に重複する柱穴が見られずこの部分は3時期とも共有していた可能性が高い。その他の柱穴は同所で重複し、南北方向に桁幅を伸縮させていく。規模は北側柱列(P 1-P 8)が7.2m、南側柱列(P 3-P 6)が7.4mを測り、東側柱列

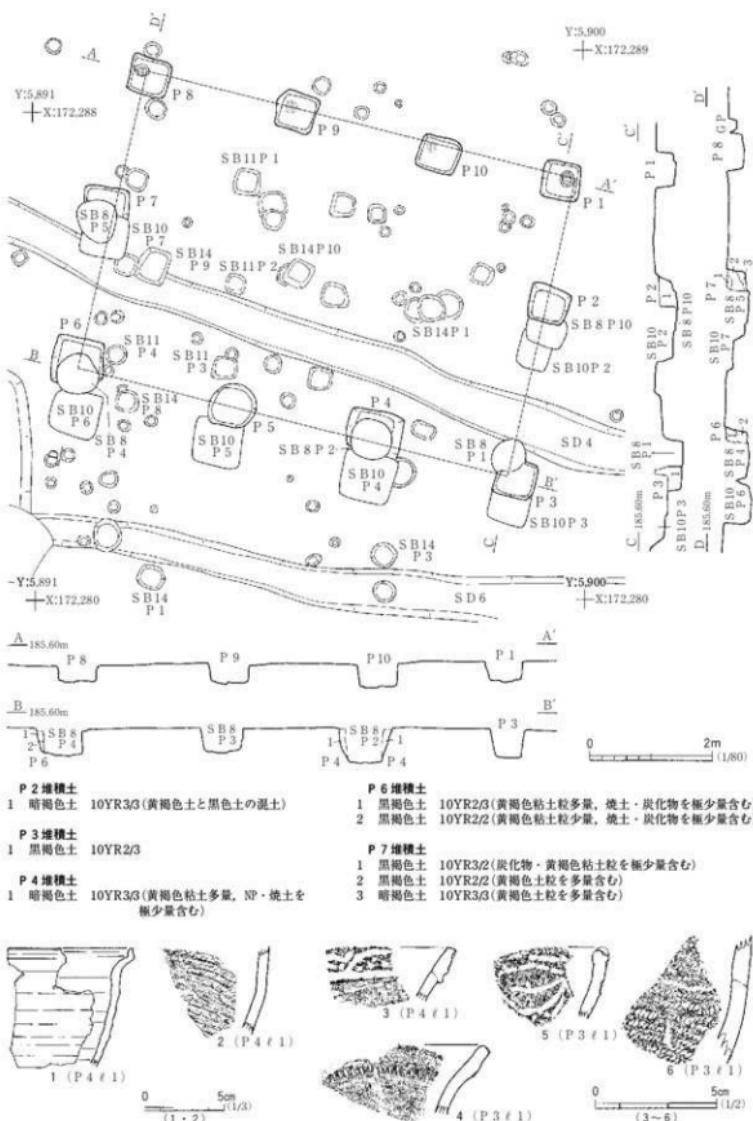


図52 16号掘立柱建物跡・出土遺物

(P 1 - P 3) が4.9m, 西側柱列 (P 6 - P 8) が5.0mである。柱間の距離は2.1~2.8mであるが、各柱列によって柱間距離は一定しない特徴がある。南側柱列3間の柱間距離は東から2.5m, 2.3m, 2.6mで、西端の柱間が広い。東側柱列は北から2.1m, 2.8mと南側の柱間が広い。西側柱列は北から2.5m, 2.5mとほぼ等間隔を測る。

柱穴の平面形は、重複する柱穴のため遺存状態は悪いが、いずれも整った方形である。P 5のみが8号建物跡のP 3に墻されて遺存していない。規模は一辺が60~90cmを測り、南側柱列のP 4・P 6が最も大きい。検出面からの深さは25~55cmである。北側柱列が浅く南側柱列が深い特徴がある。柱穴の周壁はいずれも垂直気味に立ち上がるが、P 2・P 4は上端部分がわずかに開いて立ち上がる。柱穴の底面上は平坦なものが多く、北側柱列以外では8号建物跡の底面で見られる円形の浅いくぼみは認められない。

掘削内堆積土は重複する8・10号建物跡の柱穴により既に遺存する部分が少なく、P 2・P 3・P 4・P 6・P 7でわずかに確認したに止まる。堆積土はいずれも掘形埋土の一部で、柱痕跡は確認できない。埋土は黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒を多量に含む。P 7は比較的遺存する部分が多く、黄褐色土粒を多量に含む黒褐色土と暗褐色土で硬くしまっている。柱痕跡は確認できないが、8号建物跡の柱痕跡から25~30cm程の丸太材が用いられていたと推察できる。

遺物 16号建物跡の柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器・石器が出土している。その内訳はP 2が土師器3点、P 3が弥生土器6点・土師器7点・須恵器2点、P 4が弥生土器4点・土師器22点・須恵器3点・石器1点、P 6が土師器7点・須恵器2点である。これらはいずれも掘形埋土から出土したもので、摩滅した小破片である。そのうち形状が把握できるものを図52に示した。

1は土師器の小型壺の破片である。やや丸みを帯びた胴部で頸部で屈曲する。口縁部の端部は口クロの回転を用いて上方に引き上げられる。内外面とも明瞭なロクロメを残している。2は土師器壺の胴部破片である。外面には平行タキ具痕が観察できる。

3~6は弥生土器の壺形土器である。4は口縁部に軽い段を持ち、大きく開く器形になるであろう。口縁部直下に凹線状の沈線がめぐり口縁部下端にキザミが充填される。3・5は沈線と円形竹管の連続刺突によって文様帶が構成される。3は口縁部下端に横位の沈線がめぐり、その上部に連弧文が描かれ、その交点部分に円形竹管の垂直刺突が施される。5は口縁部端がわずかに内湾する。口縁部直下に押し引き文状の連続刺突により文様が描かれる。6は胴部破片で、外面には地文として単節斜綱文が施される。

まとめ 本建物跡は南北2間、東西3間の側柱建物である。同一場所において3時期に渡って継続的に建てられた建物のうちで、最も古い時期の建物に該当する。本建物跡には近接する建物群があり、「ゴミ穴」と推定される土坑群が周辺に点在する。中でも5号土坑から須恵器の圓面鏡が4点出土している点から、集落の維持経営に関わる中心的な役割を担った建物と推定される。

年代については、柱穴から出土した遺物や重複する建物跡の存続期間などを勘案して、9世紀前半から中葉を中心とした時期と判断している。

17号掘立柱建物跡 S B 17 (図53, 写真45)

遺構 本建物跡は調査区の中央部, F 8-A 2 グリッドに位置する。周囲は最も遺構が密集して分布する範囲で、本遺構は4・6号溝跡、5・6号土坑と重複する。本建物跡の柱穴と直接的に重複する遺構ではなく新旧関係は明確でないが、周辺の遺構との関連からすれば、4・6号溝跡より古く、5・6号土坑とはほぼ同時期のものと判断できる。遺構検出面はL III a上面である。

本建物跡は6号土坑を取り囲むように分布する。平面形は東西方向に長い長方形をなし、主軸方向は、ほぼ真北を向く。規模は、北側柱列が3.4m、南側柱列が4.0m、東西柱列が2.5mを測る。本建物跡の柱穴は不規則な配置で、その柱間も一定しない。

各柱穴の平面形は円形を基調とする。規模は直径20~50cmで、P 3が最も大きい。深さは20~35cmで、P 3が最も浅い。掘形内堆積土はいずれも単層で、炭化物や焼土を含む黒色土である。明確な柱痕跡は認められない。

本建物跡を構成する柱穴からは遺物が出土していない。

まとめ 本建物跡は柱間も一定しない貧弱な建物跡であるが、6号土坑を取り囲むように配されている。6号土坑は平安時代に機能していた井戸跡と考えられ、本建物跡はその覆屋とも推察できる。また遺物が出土していないため年代は不明であるが、6号土坑との関係を積極的に評価すれば、9世紀中葉から10世紀代まで機能していた可能性が高い。

18号掘立柱建物跡 S B 18 (図54, 写真46)

遺構 本建物跡は調査区西端、E 8-I 4・J 4 グリッドに位置する。周囲は標高185.4mの平坦面に立地している。遺構検出面はL III a上面である。7号溝跡、24・45・49号土坑と重複し、そのいずれよりも本建物跡のほうが新しい。また柱穴との直接的な重複はないが、本建物跡の内部に位置する土坑群についても、45号土坑と同様に土坑群の方が古い時期に属するものと推定される。

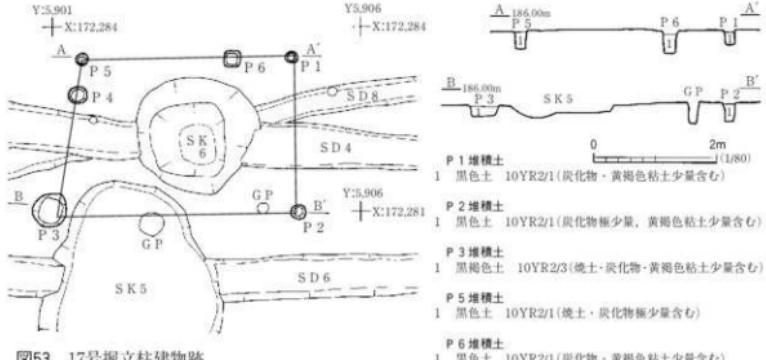


図53 17号掘立柱建物跡

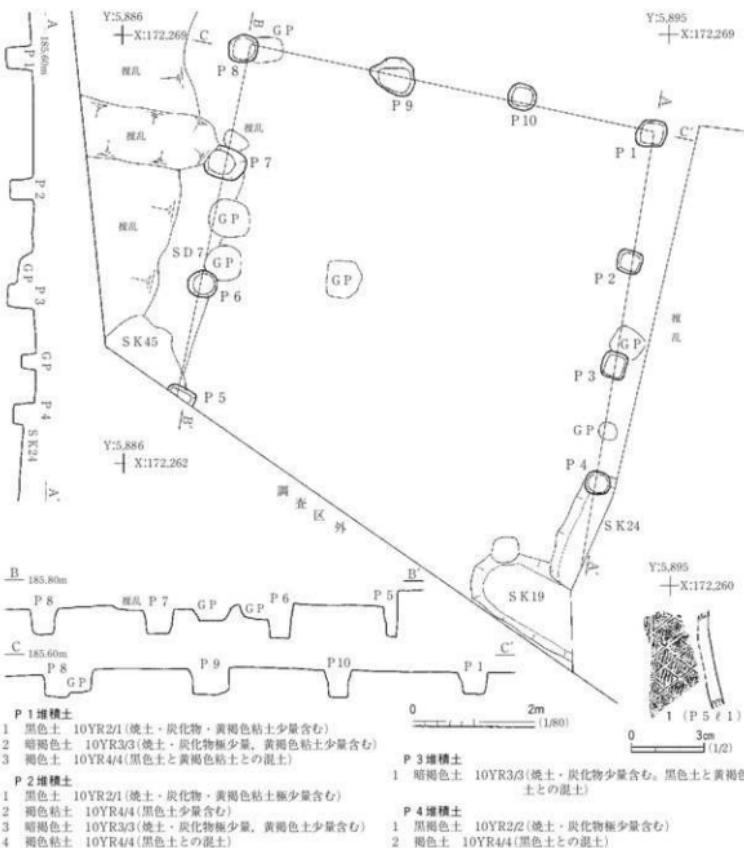


図54 18号掘立柱建物跡・出土遺物

本建物跡は南端部が調査区外へと続いたため、その全容は不明である。本建物跡の主軸方向は、東側柱列を基準に真北に対して10度東に傾いている。調査区内では東西3間、南北3間以上で南北に長い長方形をなすと推定される。規模は北側柱列（P1-P8）が6.8m、東側柱列（P1-P4）が5.8m、西側柱列（P5-P8）が5.8mである。柱間の距離は各柱列ともほぼ一定で、2.0~2.2mである。

柱穴の平面形は方形を基調としたものが多く、P1~P3は上端部では隅丸方形であるが、底面は整った方形をなす。P4~P6の平面形は円形をなす。柱穴の規模は、方形基調のものが一辺40cm前後で、円形基調の柱穴は直径36~42cmである。深さはP1が最も浅く36cm、P5が最も深く46

cmを測る。

掘形内堆積土については、部分的に記録しているが、その多くは柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は黒色土を基調とし、炭化物粒などを含む。埋土は暗褐色土と黄褐色粘質土が互層をなして堆積し、いずれも硬くしまっている。

遺物 本建物跡のP 5からは弥生土器3点、土師器1点、須恵器1点が出土している。その他の柱穴からは遺物が出土していない。遺物の多くは摩滅した小破片であったが、そのうち文様がわかる弥生土器を図54に示した。

1は壺形土器の頸部付近の破片である。縦位のハケメ調整を残している。細い沈線により縦位に区画し、その内部に斜格子文を描いている。内面は摩滅し不鮮明だがナデの痕跡が確認できる。

まとめ 本建物跡は調査区外へと続いたため、その全容は不明であるが南北に長い側柱建物と推定される。主軸方向が6・9・14号建物跡などと一致するなど、規則的な建物の配置が見られ、同一時期の建物群を構成するものと推察している。建物跡の年代は特定できる出土遺物がなく不明であるが、周辺の建物群と同時期で平安時代に属するものと判断している。

第6節 土 坑

今回の調査では、土坑を62基確認した。土坑の年代は、弥生時代と平安時代に属するものと考えている。弥生時代の土坑は2・13・40・41号土坑を中心に数基程度であるが、その性格は特定できない。平安時代の土坑は掘立柱建物跡周辺に位置し、当時の生活ゴミとともに土器類を投棄した穴で、いわゆる「廃棄坑」と推定されるものが最も多い。8号建物跡に近接する5号土坑からは、須恵器円面鏡が数点と墨書き土器が出土した。その他に6号土坑は井戸跡と考えられ、土器類の他に木質遺物なども出土している。

1号土坑 SK 1 (図55・67、写真47)

本土坑は調査区の西端部、E 8-I 2-J 2グリッドに位置する。11号土坑・2号溝跡と重複し、本土坑は11号土坑より新しく2号溝跡より古い。周囲は調査区内で最も遺構が密集する範囲で、建物群や土坑群が点在する。遺構はL III a上面で確認した。

本土坑は南半部を2号溝跡に埋され不明であるが、平面形は南北方向に長い楕円形と推定される。規模は、長軸が2.1m以上、短軸が1.35mを測る。深さは0.14mと浅い。周壁は西側が垂直気味で、西側がなだらかに立ち上がる。底面から周壁にかけての断面形は、浅い皿上をなす。遺構内堆積土は炭化物を含む黒色土の単層であるが、均質な土質であるため自然堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器7点、土師器86点、須恵器18点が出土している。多くの土器は摩滅した小破片であるが、形状が把握できた須恵器を図67に示した。1は須恵器の杯で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形である。底部切り離しは回転ヘラキリである。2は須恵器甕の底部破

片である。内外面とも指ナデが認められる。

本土坑は北半部分を確認したに止まる。土坑の性格は建物跡に付隨し、当時の生活ゴミと共に土器類を投棄した廃棄坑と考えている。年代は出土した土器の特徴から9世紀中葉頃と判断している。

2号土坑 SK2 (図55・67, 写真47・73)

本土坑は調査区のはば中央部、F 8-A 3・B 3グリッドに位置する。6号溝跡と重複し、本土坑の方が古い。また南東側5mには3号周溝墓が分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は長楕円形をなし、主軸方向は真北に対して80度西に傾く。規模は長軸4.0m、短軸が1.7mを測り、検出面からの深さは0.3mである。遺構内堆積土は黒色土の単層である。

本土坑からは弥生土器78点、石錐1点、土師器36点が出土した。図67-3~11は壺形土器の破片である。3~5は口縁部と頸部に交互刺突文がめぐる。6は幅広の口縁部をクシ歯状施文具により縦位に区画し、その間に横位の連続波状文を描いている。頸部には指頭押圧によるキザミが施されている。12はガラス質ディサイトの石錐である。形状は長三角形をなし、逆刺が浅い。

本土坑は弥生時代後期に属すると考えているが、その性格を特定する所見は得ていない。

3号土坑 SK3 (図55, 写真47)

本土坑は調査区の北西部、E 8-J 3グリッドに位置する。本土坑は遺構が密集する範囲に分布し、6号建物跡のP 1よりは新しく、6号溝跡よりは古い。遺構はL III a上面で確認した。

本土坑の平面形は楕円形をなす。規模は長軸が1.2m、短軸が0.96m、深さが0.2mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。いずれも焼土・炭化物や黄褐色粘土を含む黒褐色土を基調とし、堆積状況から人為的に埋め戻されたものと判断している。土坑自体浅いため、底面から周壁にかけての断面形は浅い皿上をなす。

本土坑から弥生土器8点、土師器1点が出土しているが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑は形状や堆積土などの特徴から、周間に分布する土坑と同様に廃棄坑と考えている。詳細な年代を示す出土遺物はないが、建物跡と同時期で平安時代に属すると判断した。

4号土坑 SK4 (図55・67, 写真47)

本土坑は調査区の北西部、E 8-J 3グリッドに位置する。6号建物跡のP 1と重複し、本土坑の方が新しい。北西側には3号土坑が近接している。遺構検出面はL III aである。

本土坑の平面形はやや歪んだ隅丸長方形をなす。規模は長軸が2.32m、短軸が1.92mを測り、検出面からの深さが0.33mである。周壁は北側が崩落のためかやや緩やかな立ち上がりであるが、そのほかの周壁は垂直気味になる。底面は南側が浅く北側に向かって小さな段差をもって深くなる。遺構内堆積土は2層に分けた。2層は北側の周壁のみに認められた褐色土で、黒色土との混土である。堆積状況や含有物などから人為的に埋め戻したものと判断した。

本土坑からは弥生土器8点、土師器183点、石器剥片1点が出土している。図67-13・14は土師器の無台杯であり、底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。14は底部の切り離しが回転糸切りで、再調整が施されていない。内面はミガキが施されずに黒色処理されている。15は土師器の高台付杯で、底面に接して出土した。内面は黒色処理されず、ミガキもまばらである。16・17は土師器壺で、16は口縁部端部が上方に引き上げられている。18は筒型の製塙土器で、外面に粘土紐積み上げ痕を残す粗雑なつくりである。外面は指頭圧痕、内面は指ナデが認められる。19・20は須恵器壺の胴部破片で、外面は平行タタキ具痕が見られる。20の内面には格子目文のアテ具痕が観察できる。

本土坑は形状や堆積土などの特徴から、周間に分布する土坑と同様に廃棄坑と考えている。年代は出土土器の特徴から、9世紀中葉から後葉頃と判断した。

5号土坑 SK5 (図56・67・68、写真47・74)

本土坑は調査区の北西側、F8-A2・A3グリッドに位置する。6号溝跡と重複し、本土坑の方が古い。周囲は調査区内で最も遺構が密集する範囲であり、北側には6号土坑が近接し、西側に6・8・14号建物跡などが分布する。

本土坑の平面形は、東側が張り出した不整な楕円形である。規模は長軸が3.32m、短軸が2.92mを測る。検出面から底面までの深さは0.26mと浅い。周壁は南側が緩やかになる他は急峻な立ち上がりである。底面は微細な凹凸があり、西側に向かって深くなる。

遺構内堆積土は3層に分けた。黒褐色土と黒色土を基調とし、いずれも焼土、炭化物や黄褐色土粒を含んでいる。堆積状況は人為堆積と判断した。また1層は土坑の上層を覆う土で、多量の土器類が混入していた。

本土坑からは弥生土器104点、土師器455点、須恵器58点、石器剥片1点が出土した。そのうち形状が把握できるものを図67・68に示した。図67-21~24は土師器杯である。21・22は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。23・24は手持ちヘラケズリ再調整で、23は回転糸切り離しの痕跡をわずかに残している。25は両面が黒色処理された土師器碗である。内外面ともミガキが施されているが、外面はロクロメをわずかに残している。28・29は筒型土器で、いわゆる製塙土器である。31は土師器の壺または鉢で、胴部下半にはケズリ調整が施されている。内面は横位ミガキの後に縦位のミガキが施され、黒色処理もされている。図68-1・2は土師器壺で、体部下半に平行タタキが施されている。3は須恵器杯で、底部から直線的に口縁部へと立ち上がる器形である。4~7は須恵器の円面硃破片である。いずれも脚部に細沈線による斜格子文が描かれている。7の上面は使用により摩滅し、平滑になる。8は須恵器壺の破片で、外面には平行タタキ痕といわゆる羅上沈線文が見られる。

本土坑は建物群の周辺に造られた廃棄坑と考えている。出土した須恵器の円面硃4点が特筆に値する。周辺の8・10・16号建物跡の性格を暗示する遺物となるであろう。年代は出土遺物の特徴から9世紀中葉頃を中心とした時期と判断している。

6号土坑 SK 6 (図56・68, 写真47・74・76)

本土坑はF 8-A 2グリッドに位置する。4・8号溝跡と重複し、いずれよりも古い。また南側には5号土坑、西側には8・10・16号建物跡が分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は、上端部が円形で、中位から底面にかけては隅丸方形を呈する。規模は上端部が直径1.9~2.0mで、底面は一辺0.6mを測る。検出面から底面までの深さは1.5mである。壁面の中位より上部にかけては崩落の痕跡と考えられる明瞭な段が形成される。底面はほぼ平坦で、L IVとした砂礫層の上面まで達している。

遺構内堆積土は7層に分けた。1~6層は焼土・炭化物や黄褐色土粒を含む黒色土・黒褐色粘質土で、堆積状況や土質などから人為的に埋め戻された土層と判断した。6層はややグライ化した土層で、7層との層理面付近では木製品の他にも木葉や木枝、草木類など木質遺存体が多量に見られた。7層は褐灰色土で、グライ化した粘土とL III cを起源とする褐色砂の混土である。均質な堆積状況から自然堆積と判断し、本土坑の機能時に堆積した土層と考えている。

本土坑からは弥生土器2点、土師器160点、須恵器27点、その他に木挽の小破片1点、ヘラ状木製品2点、トチ1点、ヒヨウタン1点が出土している。図68-9・10は、土師器杯で内面黒色処理されている。12は土師器の小皿で、体部外側に明瞭な段が形成されている。底部は回転糸切りで切り離されている。13は土師器甕で、体部が直立気味に立ち上がり、口縁部は軽く広がる。内面は横位のカキメが施されている。

本土坑は堆積土などの特徴から井戸跡と推定される。年代は、出土遺物から9世紀中葉頃から10世紀代まで機能していたと考えている。

7号土坑 SK 7 (図57, 写真47)

本土坑は調査区西端、E 8-J 3グリッドに位置する。6号建物跡・3号住居跡と重複し、本土坑の方が新しい。東側には3・4号土坑などが分布する。遺構検出面はL III aである。

本土坑の平面形は円形を呈する。規模は直径1.35~1.5mを測り、深さは0.1mである。遺構内堆積土は焼土や炭化物を多量に含む暗褐色土である。堆積土の性状から人為的に埋められた土坑と判断した。遺構自体が浅く周壁の遺存が悪い。底面から周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑からは弥生土器1点、土師器21点、須恵器4点が出土しているが、いずれも摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑は建物跡周辺に分布する廃棄坑と推定しているが、周囲の建物跡とのセット関係は不明である。出土遺物が少なく詳細な年代は不明であるが、平安時代に属すると考えている。

8号土坑 SK 8 (図57・69, 写真48)

本土坑は調査区西側、F 8-A 5グリッドに位置する。重複する遺構はないが、東側に9・13号

建物跡、西側に7号建物跡が分布する。南西側には16号土坑が位置する。

本土坑の平面形は梢円形をなす。その規模は長径が1.25m、短径が1.05m、深さ0.22mを測る。周壁は南側が崩落のため傾斜が緩やかになるが、その他の部分は急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央部はわずかに深くなる。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は褐色土粒を含む土で、堆積状況から人為堆積と判断した。2・3層は周壁際にのみ確認でき、機能的に自然に堆積したものと判断している。

本土坑からは弥生土器3点、土師器14点、須恵器2点が出土し、そのうち形状が分かるものを図69に示した。1は土師器杯で、体部下端から底面に回転ヘラキリ再調整が施されている。2は弥生土器で、壺形土器の底部破片である。外面の調整痕は不鮮明だが、指ナデが観察できる。

本土坑は建物跡周辺に分布する廃棄坑と推定しているが、周囲の建物跡とのセット関係は不明である。年代は出土遺物の特徴から平安時代に属すると考えている。

9号土坑 SK9 (図57・69、写真48・73)

本土坑は調査区の西側、E 8-I 4・J 4グリッドに位置する。本土坑と直接的な重複関係をもつ遺構はなく、18号建物跡との新旧関係は不明である。周囲には10・45号土坑などが分布する。

本土坑の平面形は梢円形をなす。規模は長径が1.36m、短径が1.16m、深さは0.2mを測る。周壁は遺構自体が浅く遺存状態が悪いが、比較的垂直気味に立ち上がる。底面は南側が深く、5cmほどの段差をもって低くなる。遺構内堆積土は黄褐色土を含む黒色土を基調とする。堆積状況から人為堆積土と判断した。

本土坑からは弥生土器13点、土師器20点、須恵器2点が出土し、そのうち形状が把握できるものを図69に示した。3は須恵器の盤であろうか。体部下半に稜を持ち、口縁部が外反する。4・5は壺形土器の口縁部破片で、口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施されている。

本土坑は建物跡周辺に分布する廃棄坑と推定しているが、周囲の建物跡とのセット関係は不明である。年代は出土遺物の特徴から平安時代に属すると考えている。

10号土坑 SK10 (図57・69、写真48・73・74)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 4グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、周囲には18号建物跡、49・50号土坑などが分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は梢円形をなす。その規模は長径が2.0m、短径が1.62m、深さが0.22mである。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色土で、土坑上面を覆うように認められた。3層は周壁際に見られる黄褐色土である。堆積状況から人為的に埋め戻されたものと判断した。周壁は垂直気味に立ち上がる。底面は微細な凹凸があり、東側が深くなる。

本土坑からは弥生土器14点、土師器48点、須恵器8点が出土し、形状が分かるものを図69に示した。6は弥生土器の高杯で、口縁部と体部の境に突帯状の段を持ち、キザミが充填される。杯身

は丸みを帯びる器形で、内外面とも横位のミガキが施されている。7・8は須恵器杯で体部が直線的に立ち上がる。7の体部外面には墨書きが見られる。「末」であろうか。9・10はロクロ成形の土師器壺で、口縁部が上方に引き上げられている。11は須恵器壺の底部で、外面にタタキ痕が認められる。12は筒型土器で、製塙土器と推定される。

本土坑は建物跡周辺の廃棄坑と推定している。年代は出土遺物の特徴から概ね平安時代に属すると考えている。

11号土坑 S K11 (図57・69, 写真48・73・74)

本土坑は調査区の西側、E 8-I 2・J 2グリッドに位置する。1号土坑、2・6号溝跡と重複し、そのいずれよりも古い。

本土坑の平面形は長楕円形である。その規模は長さが4.4m、幅が1.48m、深さが0.32mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたと判断した。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが、西側には小さいくぼみが3ヶ所認められる。

本土坑からは弥生土器15点、土師器7点、須恵器13点が出土し、そのうち形状が分かるものを図示した。図69-18~20は須恵器杯で、底径が広く体部が直線的に立ち上がる器形である。21は須恵器壺の口縁部破片である。頸部から口縁部が直線的に立ち上がる。22は弥生土器の壺形土器である。口縁部下端に軽い段を持ち、わずかに外反して立ち上がる。体部はハケメ調整が残り、口縁部はヨコナデで仕上げられている。

本土坑の性格を特定する所見は得られていないため不明である。年代は出土した土器の特徴から9世紀前半頃と考えている。

12号土坑 S K12 (図58・69, 写真48・75)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 4グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、南側には4号竪穴状遺構、7号建物跡、西側には18号建物跡が分布する。

本土坑は擾乱により上端部が乱れるが、その平面形は楕円形をなす。規模は長径が2.25m、短径が1.82m、深さが0.44mを測る。周壁は上端部が崩落により傾斜が緩やかになるが、下半部は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黄褐色土を含む黒褐色土で、2層は黒褐色土と黄褐色土の混土である。堆積状況から人為堆積と判断した。

本土坑から弥生土器6点、土師器21点、須恵器5点が出土し、形状が分かるものを図69に示した。24~27は土師器杯で、24~26は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。27は体部下端の再調整が施されず、底部切り離しの回転糸切り痕が残っている。

本土坑は建物跡周辺の廃棄坑と考えている。年代は出土した土器の特徴から、9世紀中葉頃と推察している。

13号土坑 S K13 (図58・69, 写真48・73)

本土坑は調査区の中央部, F 8-B 2 グリッドに位置する。本土坑は3・8号溝跡と重複し, そのいすれよりも古い。遺構検出面はL III a 上面である。

本土坑は東西方向に延びる溝状の土坑で, その規模は長さが1.95m, 幅が0.65m, 深さ0.12mを測る。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒色土で, 単層であるため堆積状況は不明である。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦で, 周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑から弥生土器4点が出土している。図69-28は広口の壺形土器である。直立する頸部から口縁部が大きく開く器形である。口縁部直下と下端にクシ歯状施文具による連続波状文が描かれ, 下端部には円形竹管の刺突が施されている。刺突文の下部は無文部となり, その直下に連続波状文がめぐる。体部は単節斜縄文が地文として施されている。29は高杯で, 杯身部が小さく, 細い脚部から段を持って開く。地文として縄文が施され, 口縁部下端と脚部の段に交互刺突が施されている。

本土坑は出土遺物から弥生時代後期に属する土坑と推察しているが, その性格や機能を特定する所見は得られていない。

14号土坑 S K14 (図58, 写真48)

本土坑は調査区の北側, F 8-B 2 グリッドに位置する。9号溝跡と重複し, 本土坑のほうが古い。西側には6号周溝状遺構が分布している。遺構検出面はL III a 上面である。

本土坑の平面形は円形を呈する。規模は直径0.74m, 深さ0.16mを測る。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色土の単層であるため, 堆積状況は不明である。周壁は北側が緩やかなものの, 他は急峻に立ち上がる。

本土坑からは遺物が出土していないため, その性格や年代については不明である。

15号土坑 S K15 (図58・70)

本土坑は調査区の南西側, F 8-E 7 グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが, 南側には4号周溝墓, 北側には39号土坑が分布する。遺構検出面はL III c 上面である。

本土坑は細長い溝状の土坑である。規模は長さが2.62m, 幅が0.53m, 深さは0.18mを測る。遺構内堆積土は暗褐色砂質土で, L III c を起源とする褐色砂を多量に含む。単層であるため, その堆積状況は不明である。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦で, 両端部に比べ中央部がわずかに深くなる。

本土坑からは土師器13点, 須恵器1点が出土した。図70-1は土師器杯で, 体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。

本土坑の性格を特定する所見は得られていない。年代は平安時代に属すると推察している。

16号土坑 S K16 (図58・70, 写真49・75)

本土坑は調査区中央の南側, F 8-A 5 グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、東側には9・13号建物跡、西側には8号土坑が分布する。

本土坑の平面形は円形をなす。規模は直径1.12mを測り、検出面から底面までの深さは0.4mで、小穴の底面までは0.55mである。周壁は、東壁と西壁はほぼ垂直気味に、北壁と南壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央部からやや東側による部分に小穴が認められる。その規模は直径0.3m、深さ0.15mを測る。遺構内堆積土は黄褐色土を含む黒褐色土の単層である。その堆積状況と土質から人為堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器5点、土師器46点、須恵器15点が出土した。そのうち形状が把握できたものを図70に示した。2・3は須恵器杯で、いずれも底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、底部の切り離しは回転ヘラキリである。

本土坑は建物跡の周辺に分布する廃棄坑と推定しているが、建物跡との明確なセット関係は不明である。年代は出土遺物の特徴から9世紀中葉頃と考えている。

17号土坑 S K17 (図59・70, 写真49)

本土坑は調査区中央の南側、F 8-A 5 グリッドに位置する。26号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。北側には23号土坑、東側には22号土坑が接するように分布している。

本土坑の平面形は不整な円形である。規模は直径1.35~1.45m、深さ0.16mを測る。遺構自体が浅く周壁の遺存状態が悪いが、底面から周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黄褐色土と黒褐色土の混土で、人為堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器4点、土師器1点、須恵器2点が出土し、そのうち形状が分かるものを図70に示した。4は須恵器杯で、底部外面に墨書が見られる。文字の一部分であるが、「禾」または「永」であろう。

本土坑は建物跡の周辺に分布する廃棄坑の可能性が高い。年代は建物跡と同時期で9世紀代を中心とした時期に属すると考えている。

18号土坑 S K18 (図59, 写真49)

本土坑はF 8-A 5 グリッドに位置する。25号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。周辺には建物跡や土坑が密集している。遺構検出面はL III a 上面である。

本土坑の平面形は円形である。規模は直径1.4~1.45m、深さ0.15mを測る。遺構が浅く周壁の遺存状態は悪い。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが、堆積状況や土質から人為堆積と判断した。

本土坑から弥生土器7点、土師器22点、須恵器12点が出土したが、いずれも摩滅した小破片であ

り、図示していない。

本土坑は建物跡の周辺に分布する廃棄坑の可能性が高い。年代は建物跡と同時期で9世紀代を中心とした時期に属すると考えている。

19号土坑 S K19 (図60・70, 写真49)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 5 グリッドに位置する。本土坑は7・18号建物跡、24号土坑と重複し、そのいずれよりも古い。遺構検出面はL III a 上面である。

本土坑は中央部が近年の耕作により失われているが、細長い溝状の土坑である。規模は、長さが5.52m、幅が1.23mを測り、検出面からの深さは0.32mである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は遺構全体を覆う黒褐色土で、黄褐色土を含んでいる。2層は底面上を薄く覆うにぶい黄褐色土である。堆積状況と土質から人為堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器16点、土師器35点、須恵器2点が出土した。形状の分かるものを図70に示した。5は土師器甕の口縁部である。6は弥生土器の底部である。

本土坑は中央部が失われ、遺構の性格を特定する所見は得られていない。年代は出土遺物の特徴から概ね平安時代に属すると考えている。

20号土坑 S K20 (図59, 写真49)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 5 グリッドに位置する。7号建物跡のP 3と重複し、本土坑の方が新しい。北側には4号竪穴状遺構が分布する。

本土坑の平面形は不整な円形をなす。規模は長径が1.15m、短径が1.0m、深さが0.28mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。2層とも黄褐色土粒を含み、1層は黒褐色土で、2層は黒色土である。堆積状況と土質から人為的に埋め戻された土坑と判断した。周壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。底面は平坦であるが、南側に向かってわずかに深くなる。

本土坑からは遺物が出土していないため、その性格や年代を特定できない。

21号土坑 S K21 (図59, 写真49)

本土坑は調査区の南東側、F 8-E 8 グリッドに位置する。重複する遺構はないが、北側には2号建物跡が分布する。遺構検出面はL III a である。

本土坑は細長い溝状の土坑である。規模は長さが1.98mであり、幅が0.33~0.58mと北西側から南東側に向かって狭くなる。検出面からの深さは0.1mである。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む黒褐色土で、単層であるため堆積状況は不明である。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦で、周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑からは遺物が出土していないため、その性格や年代を特定できない。

22号土坑 S K22 (図60・70, 写真49)

本土坑は調査区の中央部, F 8-A 5 グリッドに位置する。13号建物跡と重複し, 本土坑の方が新しい。北側には5号建物跡, 南西側には17・23・26号土坑が分布している。

本土坑の平面形は, ほぼ南北方向に主軸を持つ長方形である。規模は長軸が2.65m, 短軸が2.02m, 深さが0.2mを測る。東壁から南壁にかけては垂直気味, 北壁と西壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが, 中央部に直径20cmほどの小穴が1基確認できる。また北西隅には, 基盤土に混入する石が露頭していた。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黄褐色土塊を多量に含む黒褐色粘質土, 2層は黄褐色土粒を多量に含む褐灰色粘質土で, 堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは弥生土器13点, 土師器34点, 須恵器20点が出土した。図70-7は土師器の杯であり, 底部切り離しの回転糸切り痕が残っている。8は須恵器蓋で, 端部が垂直に垂下する器形をなす。9は須恵器の杯で, 底部切り離しは回転ヘラキリであることが確認できる。

本土坑は人為的に埋め戻されていることから, 建物跡周辺に分布する廃棄坑と考えているが, 建物跡とのセット関係については言及できない。年代は9世紀中葉頃に属すると判断している。

23号土坑 S K23 (図59, 写真50)

本土坑は調査区の中央部, F 8-A 5 グリッドに位置している。本土坑は26号土坑と重複し, 本土坑の方が新しい。南側には17号土坑, 東側には22号土坑が近接して分布する。

本土坑は西半が搅乱により失われているが, 平面形は円形になると推定される。規模は直径1.6m, 深さ0.22mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。2層とも暗褐色を基調とする土で, 炭化物・焼土・黄褐色土粒を含んでいることから, 人為的に埋め戻されたと判断している。周壁は急峻に立ち上がる。底面は微細な凹凸が認められるが, ほぼ平坦である。本土坑からは土師器1点, 須恵器1点が出土しているが, 小破片のため図示していない。

本土坑は近接する17号土坑と同様な特徴が見られ, 建物跡周辺の廃棄坑と考えている。年代についても周辺の建物跡との関係から, 9世紀中葉頃に属すると判断している。

24号土坑 S K24 (図61・70, 写真50・88)

本土坑は調査区の西端, E 8-J 4 グリッドに位置している。18号建物跡・19号土坑と重複し, 本土坑の方が古い。西側には9号土坑, 東側には7号建物跡が分布している。

本土坑は東半が近年の耕作により失われているが, その平面形は長方形をなすと推定される。規模は長辺が1.82m, 檜出面からの深さが0.22mを測る。遺構内堆積土は焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土と焼土・炭化物を少量含む黒色土の2層に分けた。堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたものと判断した。底面は南北両端部が中央部に比べわずかに深くなる。

本土坑からは土師器2点、須恵器1点が出土した。図70-10は西壁の中央付近から出土した須恵器杯で、底面から5cm程浮いた状態で出土した。体部下端から底部にかけて回転ヘラキリ再調整が施されている。体部には墨書きが認められ、「永一」と判読できる。

本土坑の性格を特定できる所見は得られていない。年代は出土した土器の特徴から9世紀中葉頃と判断している。

25号土坑 S K25 (図59, 写真50)

本土坑は調査区の中央部、F 8-A 5グリッドに位置する。18号土坑と重複し、本土坑の方が古い。本土坑の周囲には建物跡や土坑が密集して分布する。

本土坑の平面形は不整な円形をなす。規模は直径1.05~1.12m、深さは0.2mを測る。周壁は南西側が遺存するだけであるが、その立ち上がりは急峻である。底面は平坦である。遺構内堆積土は焼土・炭化物を多量に含む黒色土で、底面を灰が薄く覆っている。本土坑からは土師器7点が出土しているが、小破片のため図示していない。

本土坑は重複する18号土坑と同様な特徴を持ち、建物跡に伴う廃棄坑と判断している。年代も18号土坑とほぼ同時期で9世紀代を中心とした時期と考えている。

26号土坑 S K26 (図59, 写真50)

本土坑はF 8-A 5グリッドに位置する。17・23号土坑と重複し、そのいずれよりも本土坑の方が古い。東側には22号土坑が近接している。

本土坑の平面形は梢円形と推定される。規模は長径1.25m、短径1.13mを測る。深さは0.26mを測る。周壁は重複する土坑によって壊され、遺存する部分が少ない。底面から周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは弥生土器5点、土師器6点、須恵器1点が出土した。小破片のため図示していない。

本土坑は重複する17・23号土坑との関係から、建物跡周辺の廃棄坑と考えている。年代は重複する土坑とそれほど時間差がなく、9世紀中葉頃と推察している。

27号土坑 S K27 (図60・70, 写真50・73)

本土坑は調査区中央の北寄り、F 8-A 2グリッドに位置する。28・43号土坑、3号溝跡と重複し、3号溝跡より古く、28・43号土坑よりは新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は長方形をなす。その規模は長辺が1.73m、短辺が0.92m、深さが0.26mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。いずれも黒褐色を基調とし、黄褐色土粒を含む。堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたと判断した。周壁は急峻に立ち上がるが、南壁がわずかに緩やかになる。底面は平坦である。

本土坑からは弥生土器14点、土師器97点、須恵器6点が出土し、そのうち形状が分かるものを図70に示した。11・12は弥生土器の壺形土器である。口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施され、口縁部端部にもキザミが充填されている。13・14は弥生土器で、高杯の脚部である。外面は継ぎのミガキが施され、14は赤彩されている。15は須恵器杯で、底部から直線的に口縁部が立ち上がる。16は土師器で、小型鉢であろうか。底部の切り離しは回転糸切り痕が明瞭に残っている。

本土坑の平面形は長方形を基調とし、28・43号土坑が同一場所に連続して造られているが、性格を特定する所見は得られず不明である。出土遺物の特徴から9世紀代に属すると判断している。

28号土坑 S K28 (図60, 写真50)

本土坑はF 8 - A 2 グリッドに位置し、6号周溝状遺構、27・43号土坑、3号溝跡と重複している。27号土坑・3号溝跡より古く、6号周溝状遺構・43号土坑よりは新しい。

本土坑の平面形は長方形をなす。その規模は長辺が1.42m、短辺が0.73m、深さが0.28mを測る。底面は中央部が深く、周壁との境は不明瞭である。

遺構内堆積土は黒色土の単層で、焼土・炭化物・黄褐色土粒を含んでいる。堆積状況と土質から人為堆積と判断した。本土坑からは土師器5点、須恵器1点が出土しているが、いずれも摩滅した小破片であり図示していない。

本土坑の性格については不明である。年代は重複する27号土坑よりは古く、9世紀代に属すると判断している。

29号土坑 S K29 (図61, 写真50)

本土坑は調査区の西端部、E 8 - I 2 グリッドに位置する。11号土坑・12号建物跡のP 1と重複している。本土坑は11号土坑よりは古く、12号建物跡よりは新しい。

本土坑の平面形は楕円形をなす。規模は長軸が0.92m、短軸が0.7m、深さが0.13mを測る。遺構自体が浅く、周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。

遺構内堆積土は暗褐色土の単層で、炭化物や焼土、黄褐色土を少量含んでいる。遺構自体が浅く、堆積土も単層であるため、堆積状況は不明である。

本土坑からは弥生土器1点、土師器18点、須恵器6点、近代陶磁器1点が出土している。いずれも小破片のため図示していない。

本土坑は性格や年代を特定する所見は得られていない。

30号土坑 S K30 (図61, 写真50)

本土坑は調査区の北西端、E 7 - I 9 グリッドに位置する。周囲は近年の圃場整備により大きく削平された部分に立地し、その標高は184.9m付近である。遺構検出面はL III cである。

本土坑の平面形は隅丸長方形をなす。規模は長軸が1.02m、短軸が0.82mを測り、検出面から底

面までの深さは0.14mである。遺構内堆積土は3層に分けた。黄褐色土と黒色土が互層をなして堆積し、人為堆積と判断した。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。本土坑からは弥生土器2点、土師器8点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑は削平されて浅いため、その性格や年代を特定できる所見は得られていない。

31号土坑 S K31 (図61, 写真50)

本土坑は調査区の北西端、E 7 - J 9 グリッドに位置する。周囲は圃場整備により削平された場所に立地する。遺構検出面はL III c 上面である。

本土坑の平面形は北端が調査区外に続くが、不整な長方形を基調とする。調査区内で確認できた規模は、長軸が3.4m、短軸が3.25m、深さが0.48mである。周壁は基盤土が砂質のため崩落し、立ち上がりが緩やかである。底面の東側には高さ15cm程度の段差が見られ平坦面となる。西側の底面は平坦で北側に向かってわずかに高くなる。

遺構内堆積土は4層に分けた。1・2層は白色粘土塊を多量に含む。3層は周壁際にのみ確認できた褐色砂で、周壁の崩落に起因する堆積土と判断した。4層は底面を厚く覆う堆積土で、黒色土と黄褐色土の混土である。堆積状況については、3層は周壁の崩落土と考えられ、自然堆積であろう。1・2・4層は堆積土の土質から人為的に埋め戻されたものと判断している。

本土坑は弥生土器3点、土師器40点、須恵器2点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑は性格や年代を特定する所見は得られていない。

32号土坑 S K32 (図62, 写真51)

本土坑は調査区の北西端、E 7 - J 10 グリッドに位置する。周囲は削平により、30cm程低い場所に立地する。遺構検出面はL III c 上面である。

本土坑の平面形は不整な隅丸方形である。その規模は長軸が0.87m、短軸が0.68m、深さが0.2mを測る。遺構内堆積土は3層に分けた。黄褐色土と黒褐色土が互層をなして堆積し、人為堆積と判断した。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑からは遺物が出土していないため、その性格や年代を特定できる所見は得られていない。

33号土坑 S K33 (図61, 写真51)

本土坑は調査区中央部、F 8 - C 4 グリッドに位置し、標高185.4mの平坦面に立地する。検出面はL III a 上面である。

本土坑の平面形は円形をなし、その規模は直径1.03mを測り、検出面から底面までの深さが0.5mと深い。周壁は垂直気味に立ち上がり、北西側が部分的にオーバーハングする。底面は平坦である。遺構内堆積土は8層に分けた。いずれも黒褐色土を基調とし、褐色砂を含んでいる。堆積状況

から自然堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器2点、土師器13点、須恵器1点が出土したが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑は出土遺物の特徴から平安時代に属すると考えられるが、その性格については不明である。

34号土坑 S K34 (図62, 写真51)

本土坑は調査区の南東側、F 8 - F 9 グリッドに位置する。近年の圃場整備により大きく削平された場所に立地し、その標高は185.0m付近である。遺構検出面はL III cである。

本土坑の平面形は上端部では円形で、底面は方形を基調とする。規模は上端部の直径が1.88m、深さは1.14mと深い。本土坑は砂質土を掘り込んで構築されるため、その周壁は崩落が顕著に認められる。上端部は立ち上がりが緩やかで、南部はオーバーハングする。周壁の中位以下は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央部がわずかに深くなる。

遺構内堆積土は12層に分けた。いずれも黒褐色土と褐色砂質土が交互に堆積する。遺構外から土坑内に向かって自然に流入し、周壁から土坑中央に向かって深くなるレンズ状堆積が認められることから自然堆積と判断した。本土坑からは弥生土器2点、土師器21点、須恵器5点が出土したが、小破片のため図示していない。

本土坑は出土遺物の特徴から平安時代に属すると考えられるが、その性格については不明である。

35号土坑 S K35 (図62, 写真51)

本土坑は調査区の中央部、F 8 - C 5 グリッドに位置し、標高185.5mの平坦面に立地する。重複する遺構はないが、南には13号溝跡、37・38号土坑などが分布する。

本土坑の平面形は円形をなす。その規模は直径0.86~0.98m、深さは0.85mを測る。本土坑の上端部は崩落のため緩やかな傾斜になるが、周壁の中位以下はほぼ垂直気味になる。底面は平坦でL III cを掘り込んでいる。

遺構内堆積土は5層に分けた。1~4層は黒褐色粘土を基調とし、黄褐色土塊と灰褐色砂を含んでおり、人为的に埋め戻されたものと判断した。5層は褐灰色砂で、底面をわずかに覆う堆積土である。本土坑の機能時に堆積したものであろう。本土坑からは弥生土器4点、土師器46点、須恵器7点が出土しているが、小破片のため図示していない。

本土坑は円形で深い特徴がある。33号土坑と共に通する特徴が見られるが、その性格は特定できず不明である。年代は出土遺物から平安時代に属すると考えている。

36号土坑 S K36 (図62, 写真51)

本土坑は調査区の西側、E 8 - J 2 グリッドに位置する。重複する遺構はないが、南側に8・10・16号建物跡、北側には15号建物跡が分布している。

本土坑の平面形は円形をなす。その規模は直径1.12m、深さ0.26mを測る。周壁の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦で、周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とする。いずれも黄褐色土粒を含み、人為的に埋め戻されたものと判断した。本土坑からは弥生土器2点、土師器34点、須恵器2点が出土したが、小破片のため図示していない。

本土坑はその特徴から建物跡の周囲に分布する廃棄坑と考えている。年代は周囲の建物との関係から9世紀中葉頃を中心とした時期であろう。

37号土坑 S K37 (図63、写真51)

本土坑は調査区の中央部、F 8-D 5グリッドに位置する。38号土坑・13号溝跡と重複し、本土坑は13号溝跡より古く、38号土坑よりは新しい。

本土坑の平面形は、重複する13号溝跡により南東部を壊されてはいるが、長方形をなすと推定される。規模は長辺が2.2m以上、短辺が1.0mを測る。深さは0.22mと浅い。遺構自体が浅いため、周壁も遺存する部分がわずかである。底面は平坦になるが、東側に向かって低くなる。遺構内堆積土は黒褐色土で、黄褐色土粒を多量に含み、人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは遺物が出土していないため、年代や性格は不明である。

38号土坑 S K38 (図63・70、写真51)

本土坑は調査区の中央部、F 8-D 5グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構のうち、13号溝跡より新しく、37号土坑よりも古い。

本土坑の平面形は不整な梢円形である。その規模は長径が1.45m、短径が1.26m、深さが0.36mを測る。周壁は東側が緩やかになるが、その他は垂直気味に立ち上がる。底面は南側が深くなる。遺構内堆積土は2層に分けた。堆積状況と土質から人為堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器4点、土師器25点、須恵器4点、鉄製刀子1点が出土し、形状が分かるものを図70に示した。17はロクロ成形の土師器甕である。口縁部端部が上方に引き上げられている。18は鉄製刀子である。刃部長が5.3cm、柄部長が6.5cmである。

本土坑は形状や堆積土の特徴から、廃棄坑と考えている。年代は出土遺物から9世紀代の所産と判断している。

39号土坑 S K39 (図63、写真51)

本土坑は調査区の南東部、F 8-E 7グリッドに位置する。重複する遺構はないが、北側には40号土坑、南側には15号土坑・4号周溝墓が分布する。遺構検出面はL III bである。

本土坑は西端部が搅乱により失われているが、南東方向に延びる溝状の土坑である。その規模は全長が3.48m、最大幅が0.98mを測る。検出面から底面までの深さが0.2mである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は焼土・炭化物を含む黒褐色土で、2層はにぶい黄褐色砂である。堆積状況

から自然堆積と判断した。本土坑からは弥生土器3点、土師器17点が出土したが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑の性格や年代を特定できる所見は得ていない。

40号土坑 S K40 (図63・70, 写真52・73)

本土坑は調査区の南東側、F 8-E 6グリッドに位置する。重複する遺構はないが、南側に39号土坑が分布する。遺構検出面はL III b上面である。

本土坑の平面形は長方形を基調とする溝状の土坑である。規模は全長が2.6m、幅は西側が0.72m、東側が0.32mであり、東側に向かって幅が狭くなる。検出面から底面までの深さが0.1mと浅い。遺構自体が浅く、周壁も遺存する部分が少ない。底面は平坦で、周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は炭化物や焼土などを含む黒褐色土の単層であるため、堆積状況は不明である。

本土坑からは弥生土器3点が出土した。いずれも底面からわずかに浮いた位置から出土したものである。図70-19は弥生土器で、高杯または器台の脚部である。外面は綾位のミガキが施され、ベンガラにより赤彩されている。

本土坑は出土遺物の特徴から弥生時代後期に属すると考えている。土坑の形状が浅い溝状をなし、その方向が1号周溝墓の南溝と一致することから、方形周溝墓を区画する溝の一つになる可能性がある。しかし本土坑の周囲は大きく削平され、周溝墓を構成する溝跡は確認できない。

41号土坑 S K41 (図63・70, 写真52・73)

本土坑は調査区の南東側、F 8-D 7グリッドに位置する。直接的に重複する遺構はないが、5号周溝墓の区画内に分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は梢円形をなす。規模は長径が1.12m、短径が0.6m、深さが0.14mを測る。遺構が浅く、周壁上端部が乱れているため、周壁の遺存状態が悪い。周壁から底面にかけての断面形は、浅い皿状をなす。

遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色砂質土である。遺構自体が浅く、堆積土も単層であるため堆積状況は不明である。

本土坑からは弥生土器33点が出土し、形状が分かるものを図70に示した。20は壺形土器の口縁部で、口唇部にキザミが充填されている。21・22は壺形土器の底部破片である。23は底部外面に木葉痕が観察できる。23は地文として单節斜繩文が施され、太い沈線により波状文が描かれている。

本土坑は弥生時代後期に属すると考えているが、その性格については不明である。

42号土坑 S K42 (図63・71, 写真52・73)

本土坑は調査区の西端部、E 8-J 2グリッドに位置する。周囲は標高185.4mの平坦面で、遺

構が最も密集する範囲である。本土坑と直接的な重複関係にある遺構は少ないが、周囲には8・13号建物跡などが分布する。

本土坑の平面形は梢円形である。規模は長径が1.48m、短径が1.12mであり、深さが0.08mと極めて浅い。周壁はわずかに遺存し、底面は平坦である。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒色土で、浅く単層であるため堆積状況は不明である。本土坑からは土師器6点、須恵器9点が出土した。図71-1は、壺形土器の頸部破片である。体部はハケメによって調整され、クシ歯状施文具による文様が描かれる。頸部の鋸歯文状に区画された内部には、連続波状文が描かれている。

本土坑は浅く遺存状態も極めて悪いため、性格については不明である。年代は出土遺物から、平安時代に属すると考えている。

43号土坑 S K43 (図60・71、写真52)

本土坑は調査区北部のF 8-A 2グリッドに位置する。6号周溝状遺構、3号溝跡、27・28号土坑と重複し、3号溝跡、27・28号土坑より古く、6号周溝状遺構より新しい。

本土坑は平面形の西側上端部が崩落により乱れるが、隅丸長方形になると推定される。規模は長辺が1.47m、短辺が1.25m、深さが0.22mを測る。周壁は西壁を除き急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦になる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層である。黄褐色粘土塊・焼土・炭化物を含み、人為的に埋め戻されたものと判断した。

本土坑からは弥生土器7点、土師器21点が出土し、形状の把握できた土器を図示した。図71-2は土師器杯で、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。

本土坑は重複する27・28号土坑と同様な機能が推定されるが、その詳細を特定することができない。年代は27・28号土坑よりは古く、概ね9世紀代に属すると考えている。

44号土坑 S K44 (図62、写真52)

本土坑は調査区の西端部、E 8-I 2グリッドに位置する。4号溝跡と重複し、本土坑の方が古い。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の平面形は梢円形を呈する。規模は長径が1.8m、短径が1.2m、深さが0.26mを測る。遺構内堆積土は白色粘土を含む黒褐色土である。堆積状況と土質から人為堆積と判断した。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。本土坑からは弥生土器11点、土師器5点が出土したが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の性格については不明であるが、出土遺物の特徴から概ね9世紀代に属すると推定される。

45号土坑 S K45 (図64、写真52)

本土坑は調査区の西側、E 8-I 4グリッドに位置する。7号溝跡・18号建物跡と重複し、そのいずれよりも新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本土坑の南側が調査区外へと延びるため、その全容は不明である。平面形は橢円形と推定され、規模は長径が1.9mを測り、深さは0.26mである。周壁は急峻に立ち上がるが、東側は緩やかである。底面は西側が深くなる。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む暗褐色土で、単層であるため堆積状況は不明である。

本土坑からは遺物が出土していないため、その性格や年代は不明である。

46号土坑 S K 46 (図64, 写真52)

本土坑は調査区の中央部、F 8-C 6 グリッドに位置する。F 8-G P 1と重複し、本土坑の方が新しい。本土坑の北西側に1号周溝墓が分布する。

本土坑の東側が搅乱により失われているが、平面形は円形と推定される。規模は直径0.85m、深さは0.18mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色土で、焼土・炭化物を含む。2層は底面付近にわずかに確認された褐色粘土である。堆積状況から人為堆積と判断した。周壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、底面は平坦になる。本土坑からは弥生土器9点、土師器11点、須恵器7点が出土しているが、小破片のため図示していない。

本土坑は形状と堆積土などの特徴から、廃棄坑と考えている。年代は出土遺物から9世紀代と推察している。

47号土坑 S K 47 (図64, 写真52)

本土坑は調査区の中央、F 8-B 5 グリッドに位置する。東側に2号周溝墓、西側には5・13号建物跡などが分布している。

本土坑の平面形は橢円形を呈する。規模は長径が0.96m、短径が0.77mを測り、深さは0.18mである。周壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。底面は南半部を掘りすぎてしまったが、断面観察では底面中央がわずかに深くなっている。遺構内堆積土はにぶい黄褐色土と黒色土の混土で、人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からの出土遺物がないため年代は不明である。性格については、形状と堆積土などの特徴から廃棄坑と考えている。

48号土坑 S K 48 (図64・71, 写真53・88)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 4 グリッドに位置する。重複する遺構はないが、周囲には4号竪穴状遺構・12号土坑・4号建物跡などが分布している。

本土坑の平面形は隅丸長方形をなす。規模は長辺が0.77m、短辺が0.63mを測る。深さが0.1mと浅い。遺構自体が浅く周壁もわずかに遺存する程度である。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黄褐色粘土を多量に含む暗褐色粘土である。浅く単層であるが、堆積土の性状から人為堆積と判断した。

本土坑からは弥生土器2点、土師器4点、須恵器3点が出土している。そのうち完形で出土した土師器杯を図71に示した。3は底面からわずかに浮いた位置から出土した。器形は丸みを帯びた体部から、口縁部が小さく外反している。体部下端から底部にかけては回転ヘラケズリ再調整が施されている。底部には墨書きが見られる。「歪」であろうか。

本土坑は浅く遺存状態が悪いが、廃棄坑と推定される。年代は出土した土器から9世紀中葉頃と考えている。

49号土坑 S K49 (図65, 写真53)

本土坑は調査区西部、E 8-J 4グリッドに位置する。18号建物跡・50号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。本土坑の北側には52号土坑が分布する。

本遺構は南北方向に主軸を持つ溝状の土坑である。規模は長軸が2.0m、短軸が0.85mを測り、深さは8cmと浅い。遺構自体が浅く周壁もわずかに遺存する程度で、いずれも垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で北側に向かって深くなる。遺構内堆積土は黄褐色粘土を多量に含む黒色土である。遺構が浅く、堆積土も単層であるが、その性状から人為堆積と判断している。本土坑からは弥生土器4点、土師器2点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑の性格は、特定する所見が得られていないため不明である。年代は平安時代に属する18号建物跡より新しいとしか分からない。

50号土坑 S K50 (図65, 写真53)

本土坑は調査区の西部、E 8-J 4グリッドに位置する。49号土坑と重複し、本土坑の方が古い。周囲には18号建物跡・10号土坑などが分布している。

本遺構は東西方向に長い溝状の土坑である。規模は長軸が1.8m、短軸が0.68mを測る。深さは0.12mと浅い。周壁はわずかに遺存する程度であるが、いずれも垂直気味に立ち上がる。底面は西側が搅乱により深くなるが、平坦なるものと推定される。

遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが、堆積土の含有物の性状から、人為堆積と判断した。本土坑からは弥生土器11点、土師器15点、須恵器1点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑の性格や年代を特定する所見は得られていない。

51号土坑 S K51 (図65)

本土坑は調査区の西端部、E 8-J 2グリッドに位置する。8・10・16号建物跡と重複し、本土坑の方が古い。周囲は標高185.3mほどの平坦面で、調査区内で最も遺構が密集する範囲である。

本土坑の東半は重複する建物跡の柱穴で壊されているが、平面形は隅丸長方形をなすと推定している。遺存する規模は、長軸が0.9m以上、短軸が0.88mを測る。検出面から底面までの深さは0.14

mと浅い。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるため、堆積状況は不明である。周壁は垂直気味に立ち上がる。底面から周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑からは遺物が出土していないため、性格や年代は不明である。

52号土坑 S K52 (図65, 写真53)

本土坑は調査区の西部、E 8 - J 4 グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、南側には18号建物跡、49・50号土坑が分布する。

本土坑は南北方向に主軸を持つ溝状の土坑である。規模は長軸が1.65mで、短軸は北側が0.57m、南側が0.33mと南に向かって狭くなる。深さは0.18mと浅い。周壁はわずかに遺存する程度であるが、いずれも垂直気味に立ち上がる。底面は平坦になる。

遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが、堆積土の含有物の性状から、人為堆積と判断した。本土坑からは弥生土器11点、土師器2点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑の性格や年代を特定する所見は得られていない。

53号土坑 S K53 (図65)

本土坑は調査区の中央付近、F 8 - A 3 グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はなく、西側には56~59号土坑が分布する。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂が露頭する範囲で確認した。

本土坑は南側が耕作により削平されるが、その平面形は隅丸方形を呈する。規模は一辺が0.7mを測り、深さは0.4mである。周壁は北側が比較的緩やかになるが、その他の周壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は暗褐色砂質土の単層である。単層であるため堆積状況は不明である。

本土坑からは出土遺物がなく、その性格や年代は不明である。

54号土坑 S K54 (図65, 写真53)

本土坑は調査区の中央付近、F 8 - A 4 グリッドに位置する。本土坑に重複する遺構はないが、南側には60号土坑が位置する。遺構は耕作の搅乱を掘り上げた後、L III bとした黄褐色粘質土の上面で確認した。

本土坑の平面形は方形を基調とする。規模は長辺が1.05m、短辺が0.9m、深さが0.47mを測る。周壁はいずれも垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、わずかに中央部が深くなる。

遺構内堆積土は4層に分けた。黒色土と黄褐色砂が交互に堆積する状況があり、人為的に埋め戻されたと判断した。本土坑からは弥生土器3点、土師器5点が出土したが、小破片のため図示していない。

本土坑は方形を基調とし、堆積土の特徴から建物跡の柱穴と類似するが、周囲に本土坑と同様な遺構もないため土坑と判断した。年代を特定する出土遺物がなく不明である。

55号土坑 S K55 (図65・71)

本土坑は調査区の中央付近、F 8-A 2 グリッドに位置する。4号溝跡と重複し、本土坑の方が古い。本土坑の周囲は標高185.3m程の平坦面で、調査区内で最も遺構が密集する範囲で、東側には建物跡・土坑・溝跡が多数分布する。

本土坑は不整な楕円形を呈する。その規模は長径が1.38m、短径が1.1mを測る。深さが0.22mと浅い。周壁は南半部が溝跡に壊されて遺存しないが、北側はなだらかになる。底面は凹凸があり、底面中央部には約3cmの段差が認められる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが、堆積土の性状から人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは弥生土器10点、土師器65点、須恵器15点が出土した。そのうち形状が分かるものを図71に示した。4は土師器杯である。体部外面に墨書きがみられるが、摩滅して判読できない。5は須恵器杯で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。また底部には墨書きが認められる。「禾」であろうか。6は弥生土器の壺形土器の底部破片である。内外面ともハケメ調整痕が認められる。

本土坑は平面形や堆積土の特徴から廃棄坑と考えている。年代は出土遺物から9世紀代と判断している。

56号土坑 S K56 (図66・71、写真53・73)

本土坑は調査区の西側、E 8-J 3 グリッドに位置する。重複する遺構はないが、西側には6号建物跡と、北側には4号土坑が位置する。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂の上面である。

本土坑の平面形は楕円形を基調とする。規模は長径が1.15m、短径が0.75m、深さが0.22mを測る。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とし、L III cを起源とする褐色砂を含む。堆積状況から自然堆積と判断した。周壁はいずれも急峻に立ち上がる。底面は平坦である。

本土坑からは弥生土器3点、土師器35点が出土している。そのうち形状が把握できたものを図71に示した。8は弥生土器の壺形土器の口縁部破片である。頸部が垂直に立ち上がる器形で、短い口縁部に直角気味の明瞭な段が形成されており、口縁部の断面形は三角形になる。口縁部には单節斜縄文が施されている。9は土師器の甕で、成形にロクロが用いられていない。短い口縁部が頸部で「く」の字状に屈曲し、胴部がやや丸みを帯びる。胴部外面には粘土積み上げ痕が残り、口縁部にはヨコナデが観察できる。内面の調整痕は、胴部に横位のヘラナデが施されている。

本土坑は、周辺に分布する57~59号土坑と平面形や堆積土などの特徴が共通する。しかし、その性格を特定するだけの所見は得られていない。年代については、近接する遺構群との年代観から概ね平安時代に属すると考えている。

57号土坑 S K57 (図66、写真53)

本土坑は調査区の西側、F 8-A 3 グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、東側

には58・59号土坑が近接し、西側には56号土坑・6号建物跡などが分布する。遺構はL III cとした黄褐色砂が露頭する部分で確認した。

本土坑の平面形はやや不整な隅丸方形を呈する。規模は長辺が0.82m、短辺が0.8mを測り、検出面から底面までの深さは0.35mである。周壁は東壁の上端部が崩落により外側に大きく開き、立ち上がりも緩やかになる。その他の壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央部がわずかに深くなる。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は土坑の上半部を覆う黒褐色砂質土で、炭化物や焼土を含む。2・3層はL III cを起源とする褐色砂を含んでおり、堆積土の状態から自然流入土と判断した。

本土坑は弥生土器8点、土師器9点、須恵器3点が出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

本土坑の平面形や堆積土などは近接する58・59号土坑などと共に通している点が認められるが、その詳細な性格については不明である。年代は出土遺物や周辺の遺構群の年代観などから平安時代に属すると考えている。

58号土坑 S K 58 (図66・71、写真53・75)

本土坑は調査区の西側、F 8-A 3グリッドに位置する。59号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。また北側には5号土坑、西側には56・57号土坑・6号建物跡などが分布している。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂の上面で確認した。

本土坑の平面形はやや不整な楕円形をなす。その規模は長軸が1.4m、短軸は北側が0.5m、南側は0.8mと南に向かって幅が広くなる。検出面からの深さは0.18mを測る。周壁は南側が近年の耕作により削平されて、その立ち上がりは確認できない。その他の周壁はいずれも急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが、南側に向かって深くなる。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は炭化物や焼土を含む黒褐色砂質土である。2層は西側周壁際にのみ認められる暗褐色砂質土で、L III cを起源とする褐色砂を含んでいる。堆積土の状態から自然堆積より埋没したと判断した。

本土坑からは弥生土器5点、土師器58点、須恵器13点が出土した。遺物はいずれも堆積土中から出土した。そのうち形状が把握できるものを図71に示した。13は須恵器の蓋で、端部に明瞭なかえりはなく、端部の断面形は丸くなる。また外面に墨書が認められるが、文字の一部のみで判読できない。14は土師器の杯である。器形は底部からやや丸みを帯びる体部で、口縁部で小さく外反する。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。内面は口縁部に横位のミガキが、体部下半から底部にかけて横位・斜位のミガキが観察できる。15は須恵器の壺である。器形はややなで肩の胴部から頸部でくびれ、口縁部が垂直気味に立ち上がる。外面には平行タタキ具の痕跡が残り、内面には同心円文のアテ具痕が観察できる。

本土坑は形状や堆積土などが近接する56号土坑などと共に通する特徴が認められる。性格について

は不明である。年代は出土遺物から9世紀中葉頃と考えている。

59号土坑 S K59 (図66, 写真54)

本土坑は調査区の西側, F 8 - A 3 グリッドに位置する。58号土坑と重複し, 本土坑の方が古い。南側には57号土坑, 西側には56号土坑が分布する。遺構検出面はL III c 上面である。

本土坑は南側を58号土坑に壟されているが, その平面形は橢円形になると推定される。規模は長軸が1.03m, 短軸が0.63mを測り, 検出面からの深さは0.15mと浅い。周壁はいずれも急峻に立ちあがる。底面は平坦で, 周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。

遺構内堆積土は焼土や炭化物を極少量含む黒褐色砂質土である。遺構自体が浅く, 堆積土も単層であるが, 堆積土の性状から自然堆積と判断した。

本土坑からは土師器39点, 須恵器3点, 近代陶磁器1点が出土したが, いずれも堆積土中から出土した小破片であるため図示していない。陶磁器については検出時に出土したもので, 南側に広範囲に認められる耕作痕に関連する遺物と判断した。

本土坑は形状や堆積土などから周辺に分布する56~58号土坑と共通する特徴が見られるが, その性格を特定する所見は得られず不明である。年代は出土遺物や重複する58号土坑との関連から9世紀中葉頃を中心とした時期に属すると判断した。

60号土坑 S K60 (図66・71, 写真54・75)

本土坑は調査区の中央付近, F 8 - A 4 グリッドに位置する。F 8 - A 4 G P 1 と重複し, 本土坑の方が古い。本土坑の北側には54号土坑, 東側には3号周溝墓・2号竪穴状遺構などが分布する。遺構検出面はL III c とした褐色砂の上面で確認した。

本土坑は周囲が近年の耕作によって搅乱された部分に立地し, 西側と南半が大きく削平されて, 確認できない状態である。平面形は隅丸方形をなすと推定される。確認できた規模は長軸が1.8m, 短軸が1.55mを測る。遺構検出面から底面までの深さは, 最大で0.25mである。周壁は北側と東側に遺存する。東壁では下半部が垂直気味になるが, 上端部は崩落のためか緩やかに立ち上がる。北壁は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが, 微細な凹凸が見られる。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は土坑の上半部を覆う暗褐色土で, 焼土や炭化物のほかに黄褐色粘土塊を少量含む。2層は底面を薄く覆う褐灰色粘質土で, 黄褐色粘土塊を多量に含む。堆積土の特徴から人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは弥生土器4点, 土師器51点, 須恵器9点が出土した。そのうち形状が把握できたものを図71に示した。10~12は土師器の杯である。10は口縁部が小さく外反する器形である。11は底部の径が大きく, 体部から口縁部にかけて内湾気味になる。12は体部が直線的に立ち上がる器形である。外面には墨書きが認められる。文字の一部分であるが, 「禾」または「永」と判読できる。

本土坑は削平されて, その全容は不明である。その性格は, 近接する5号建物跡と関連する廃棄

坑であろう。年代は出土遺物の特徴から9世紀中葉頃と判断している。

61号土坑 S K61 (図66・71, 写真54・73)

本土坑は調査区の南東端, F 8—G 9グリッドに位置する。周囲は近年の圃場整備により大きく削平された部分に立地する。標高は185.0m付近で、わずかに東側に向かって低くなる平坦面となる。本土坑の西側には14—16号溝跡が北西方向に延びている。遺構検出面はL III c上面である。

本土坑の平面形は梢円形を呈する。規模は長径が2.05m, 短径が1.9mを測り、検出面からの深さは0.3mと浅い。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、周壁と底面の境は不明瞭である。底面は平坦であるが、わずかに東側が深く傾いている。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本土坑の遺構内堆積土は褐色土の単層である。焼土や炭化物を極少量含み、黒褐色土塊を多量に含んでいる。堆積状況と土質から人為的に埋め戻されたと判断している。

本土坑からは弥生土器2点、土製紡錘車1点が出土した。遺物は堆積土中から出土し、そのうち土器は摩滅が著しい小破片であったので、図示していない。図71—7は土製紡錘車で、中央に円孔が認められる。紡錘車の平面形は円形を基調とし、その直径は5.8~6.2cmとわずかに歪んでいる。断面形は中心部から周縁部に向かって薄くなり、周縁部がわずかに肥大する。中心部の厚さが2cm、周縁部の厚さが1.2cmであり、中央の円孔の直径が0.8cmである。紡錘車の表面と側面には装飾が施される。いずれも円形竹管を用いた刺突文で、器面に対して垂直方向に刺突を加えている。表面は円孔を中心に二重の刺突文がめぐる。二重の刺突文が乱れる部分もあり、刺突の間隔が一定しない。側面はやや刺突列が左右にぶれて乱れるが、ほぼ等間隔に刺突文がめぐる。裏面には刺突による装飾が認められず、製作時の指頭圧痕が認められる。

本土坑は調査区内の南東部で、近年の圃場整備により削平された部分で確認された。そのため周囲には本土坑と関連する遺構が確認できない。また性格を特定する所見も得られていないため、不明である。年代については、出土遺物の特徴や調査区で確認した遺構群の年代観から弥生時代後期頃と判断している。

62号土坑 S K62 (図66, 写真54)

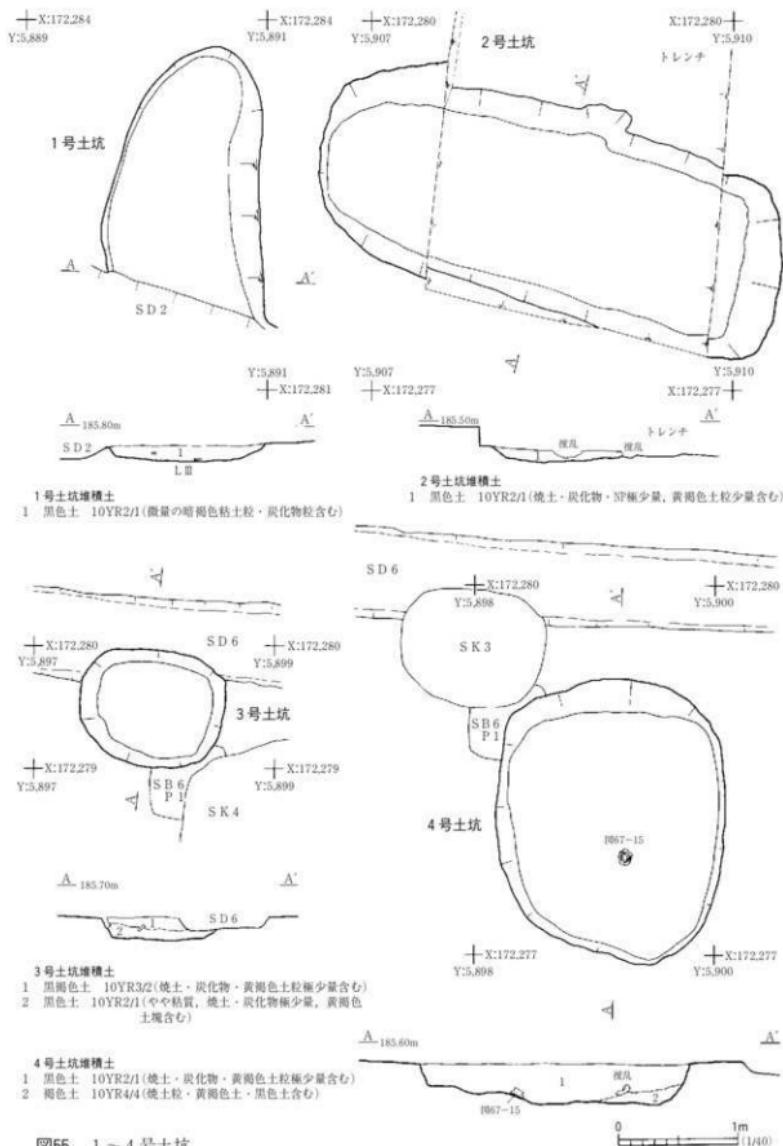
本土坑は調査区の中央部から南寄りの部分、E 8—J 5グリッドに位置する。北側には7・18号建物跡、19・20号土坑などが分布している。遺構検出面はL IIIとした黒色土の上面である。

本土坑は調査区外へと続くため、全体の約4分の1を確認したに止まる。平面形は円形または隅丸方形を呈すると推定される。検出面から底面までの深さは0.32mを測る。周壁は急峻な立ち上がりである。底面はわずかに認められるが、ほぼ平坦である。

遺構内堆積土は黒色土の単層で、炭化物・焼土・黄褐色土粒を極少量含んでいる。堆積状況は単層のため不明であるが、土質や含有物から人為的に埋め戻されたものと判断している。

本土坑からは遺物が出土していないため、その性格や年代については不明である。

第2編 桜町道路



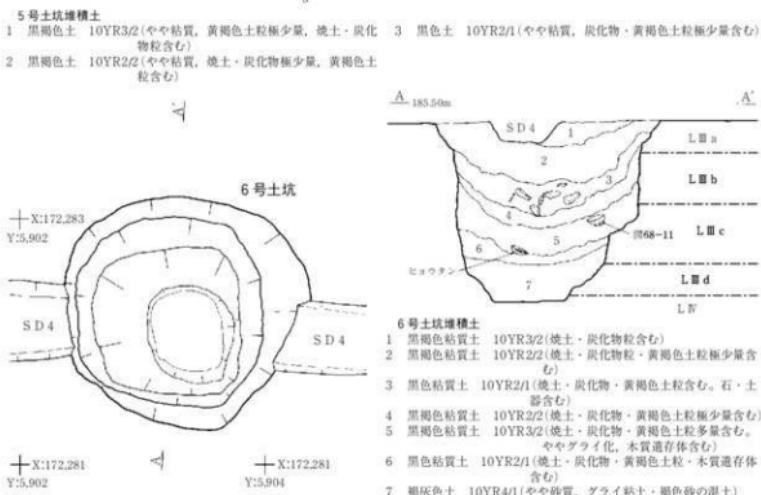
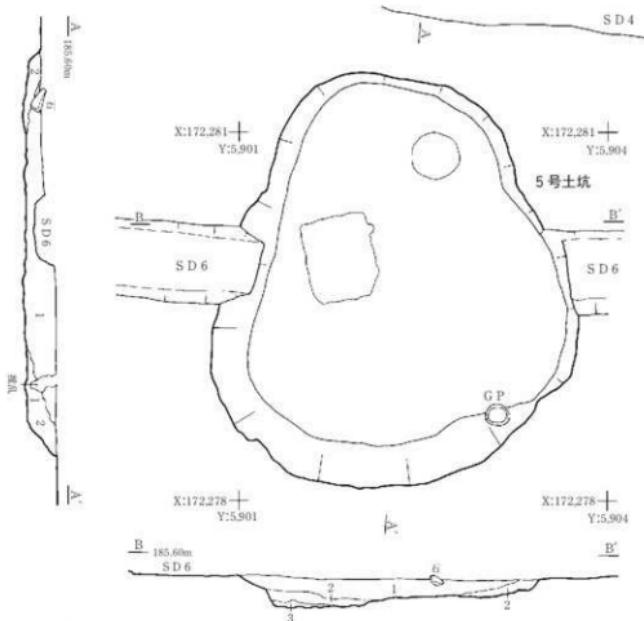
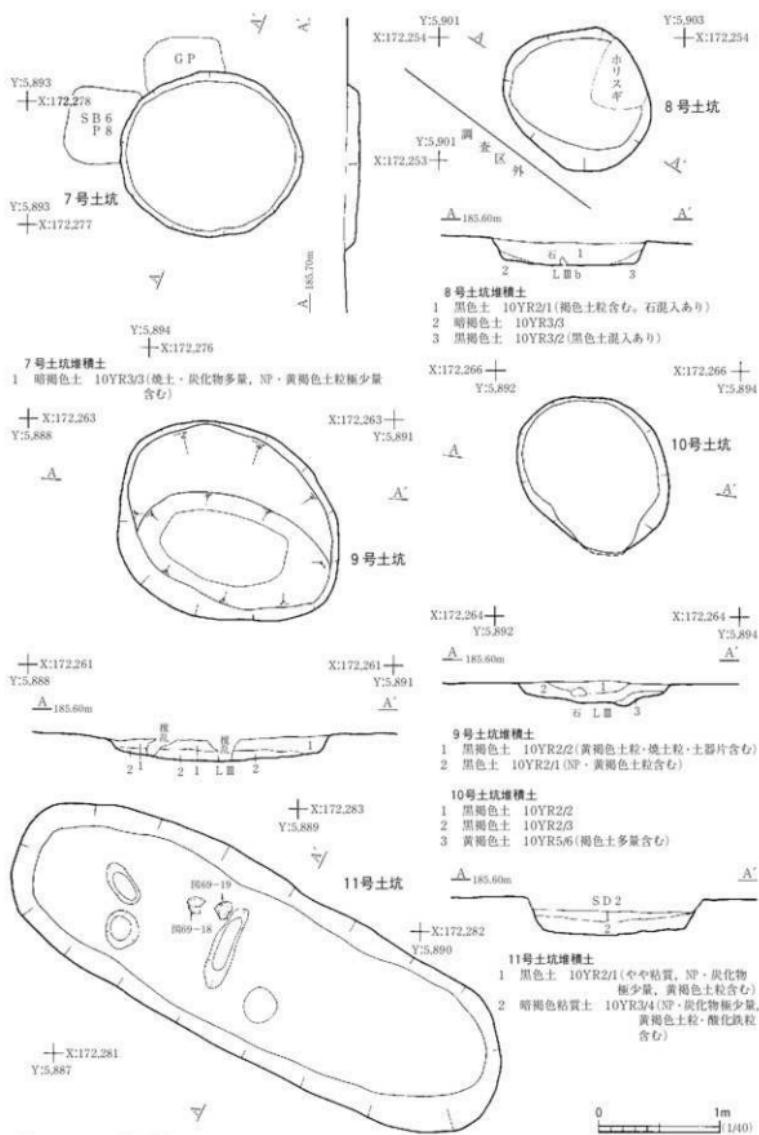


図56 5・6号土坑





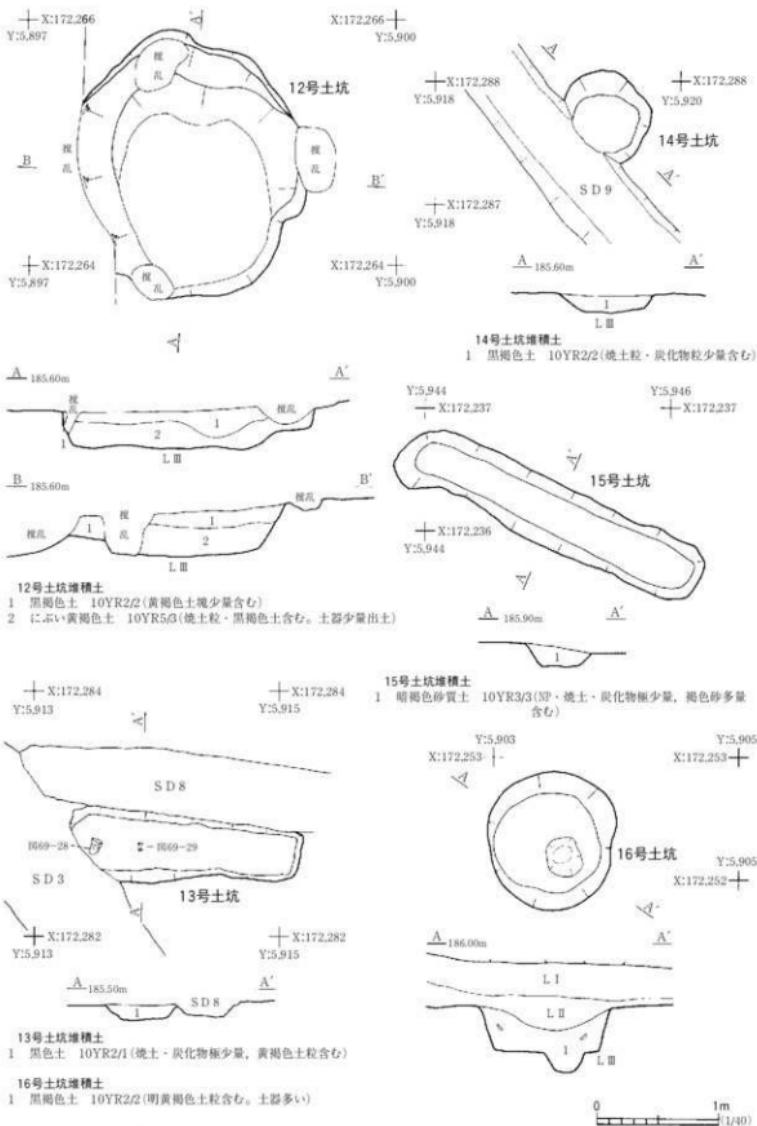


図58 12~16号土坑

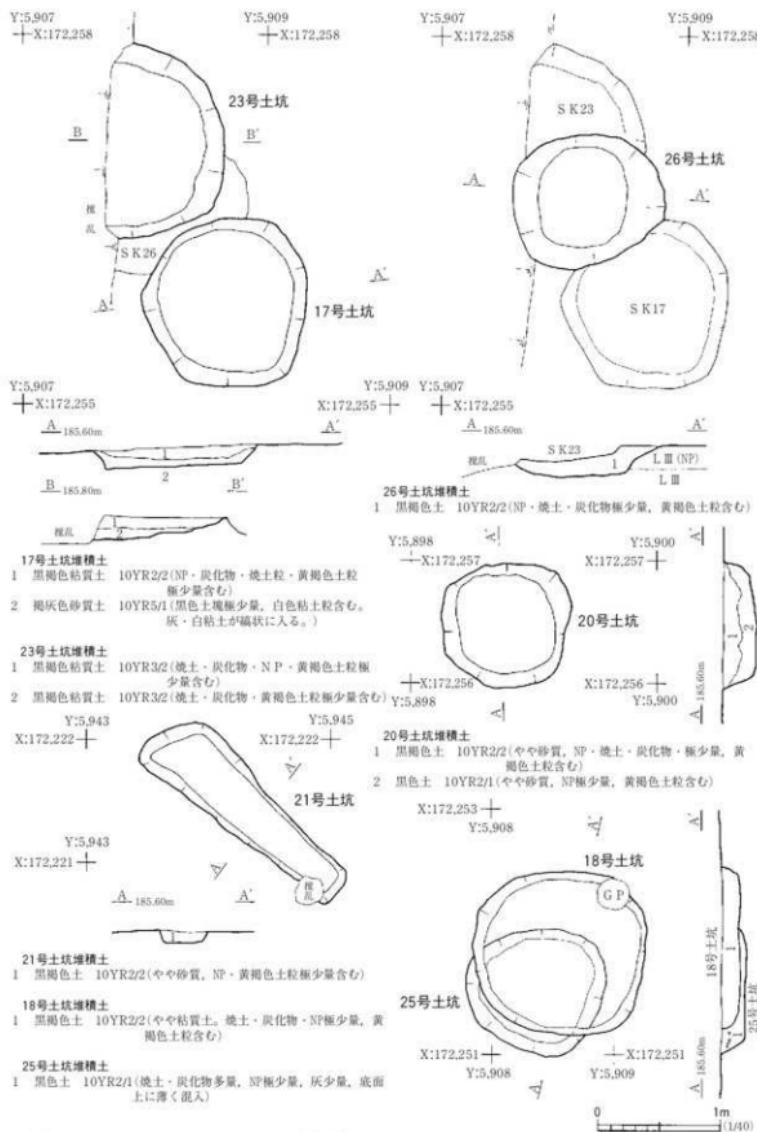


図59 17・18・20・21・23・25・26号土坑

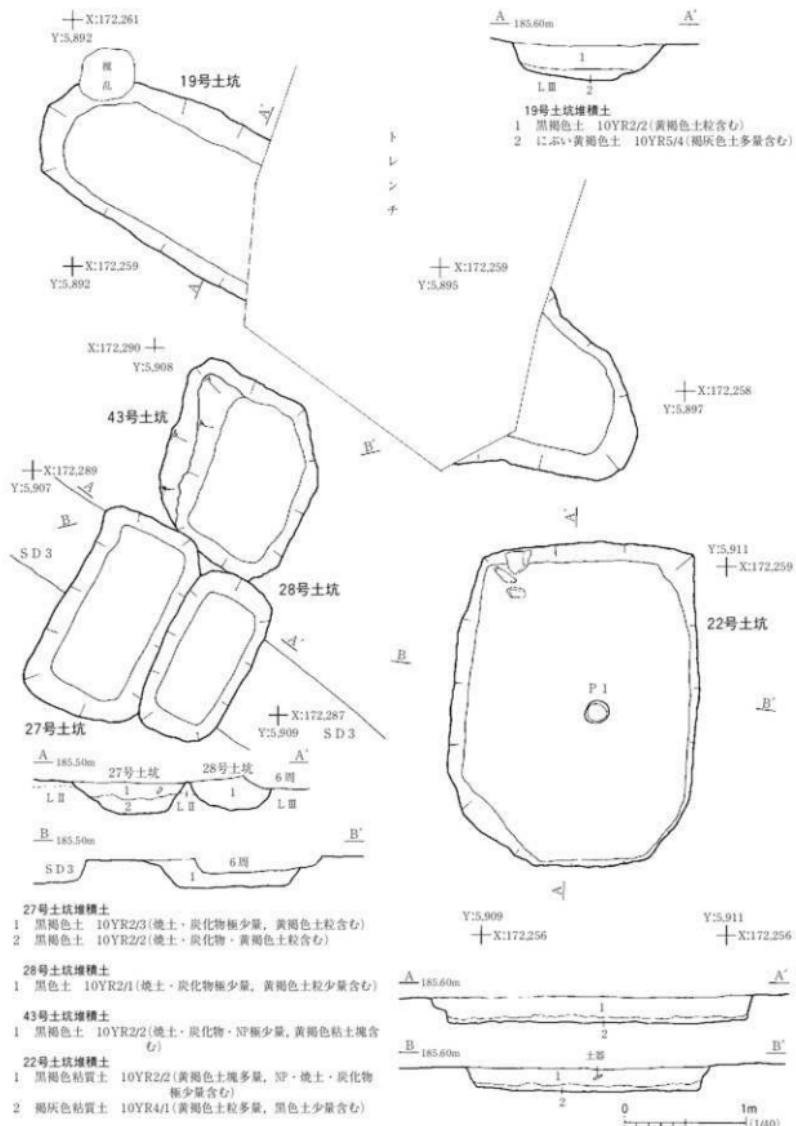


図60 19・22・27・28・43号土坑

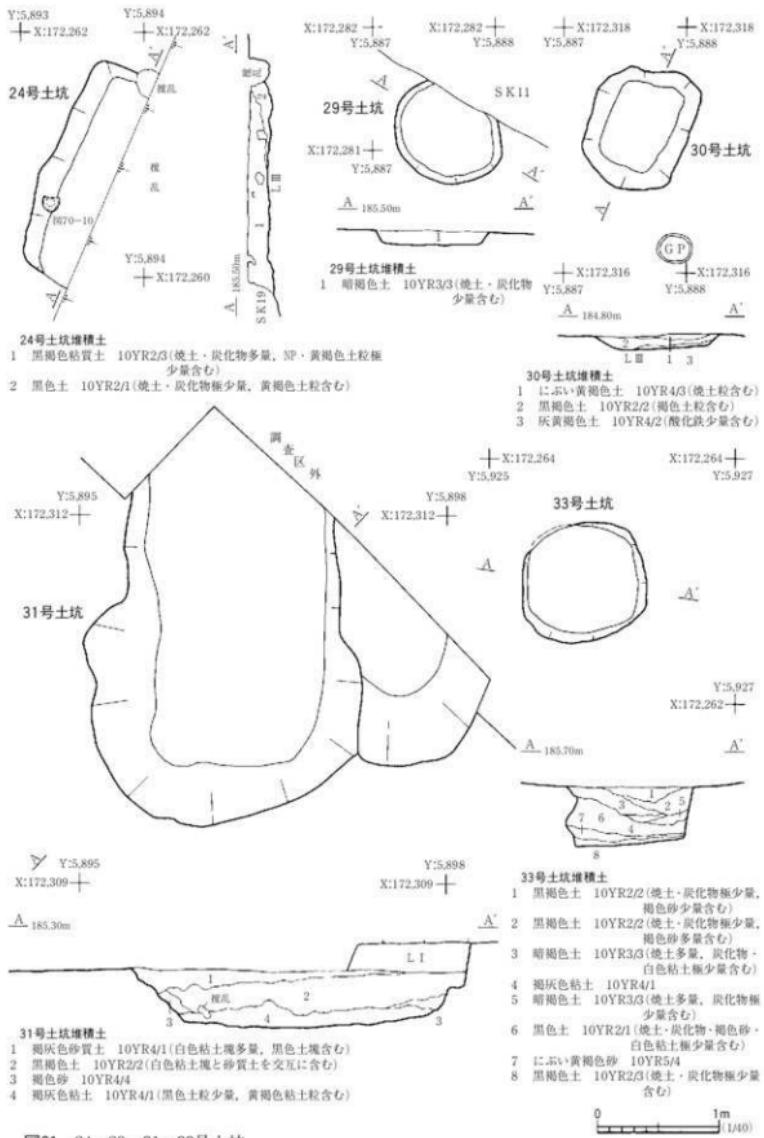


図61 24・29~31・33号土坑

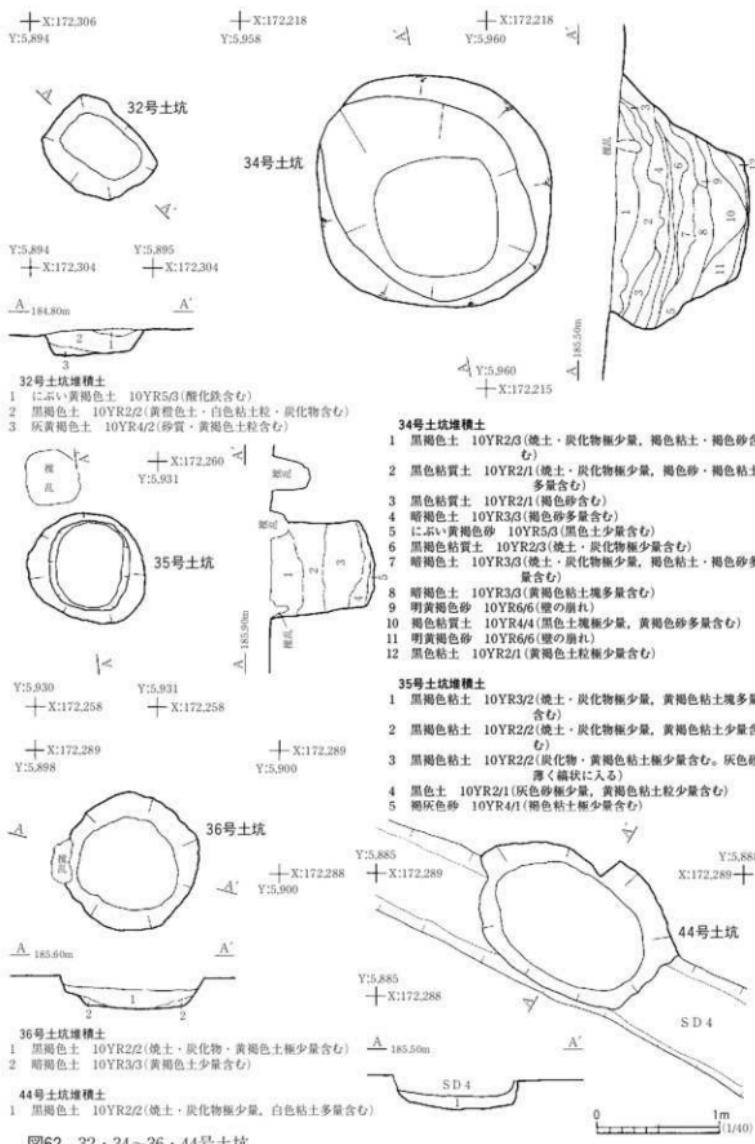


図62 32・34~36・44号土坑

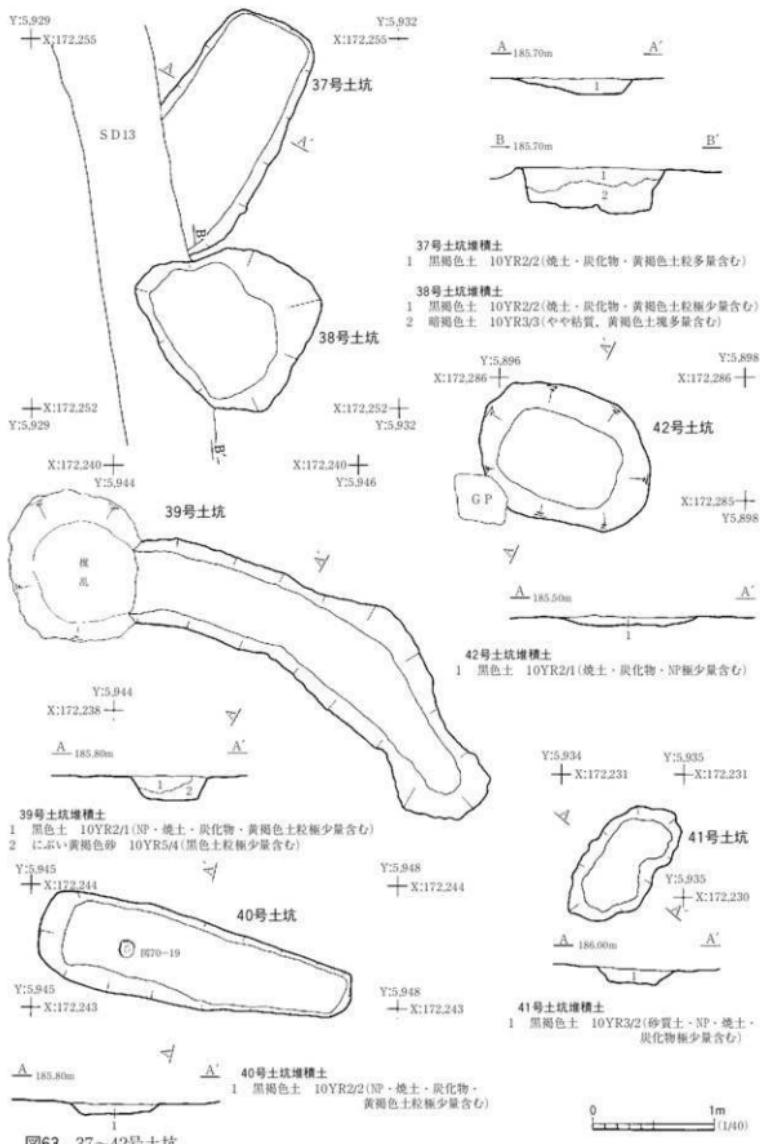


図63 37~42号土坑

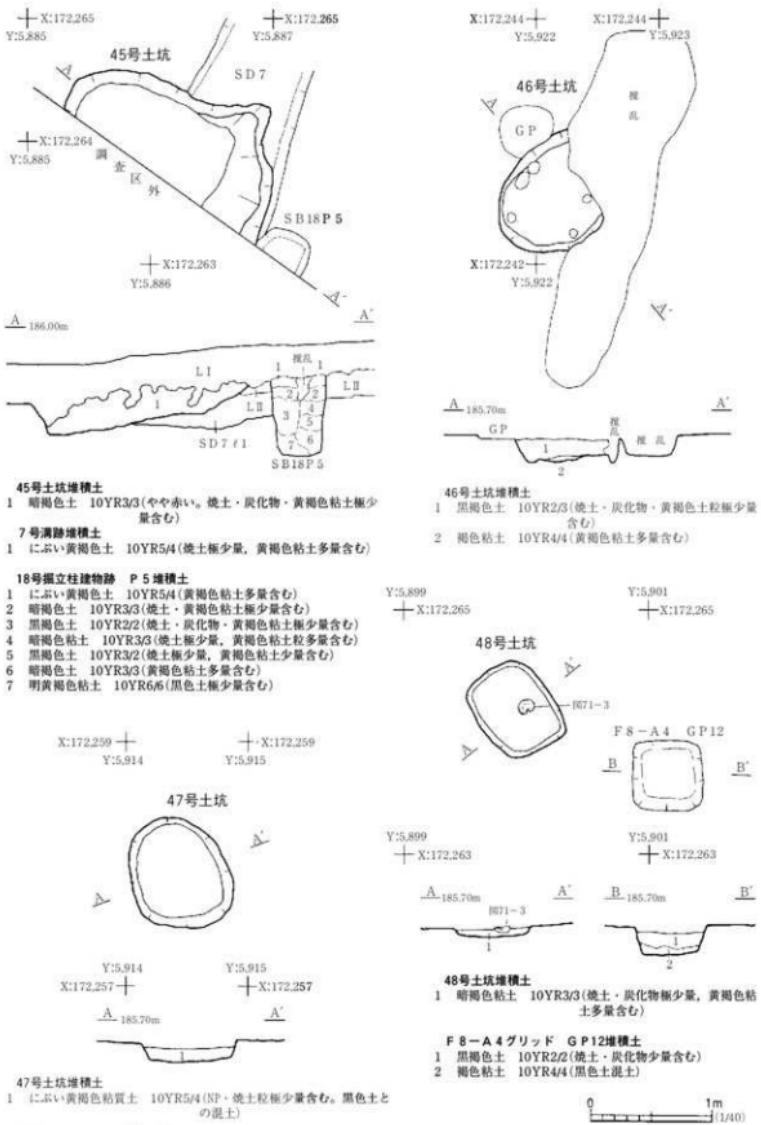
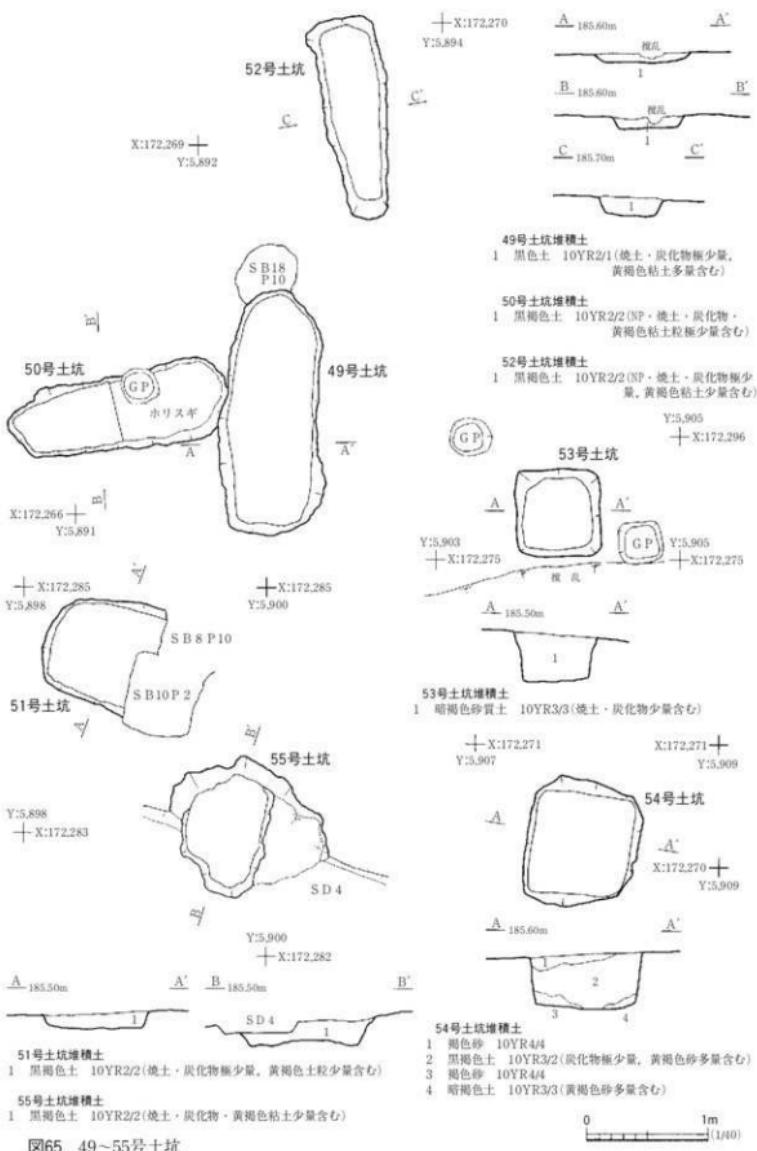


図64 45~48号土坑



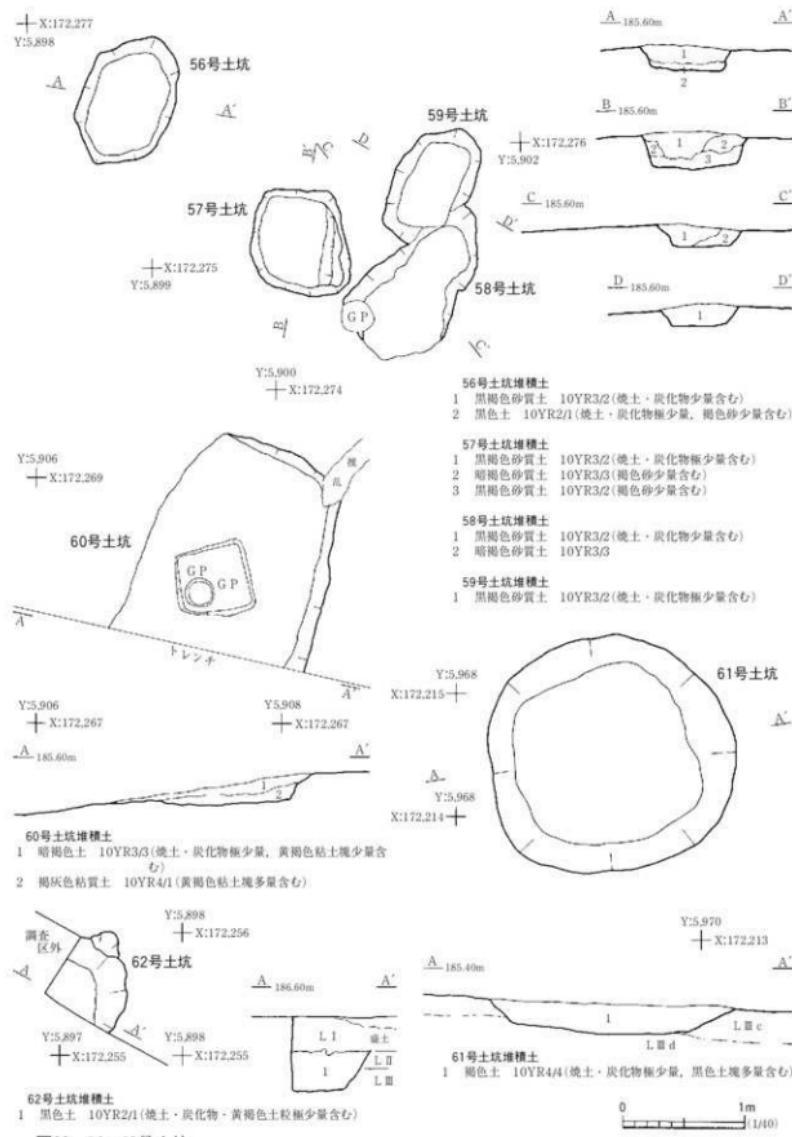


図66 56~62号土坑

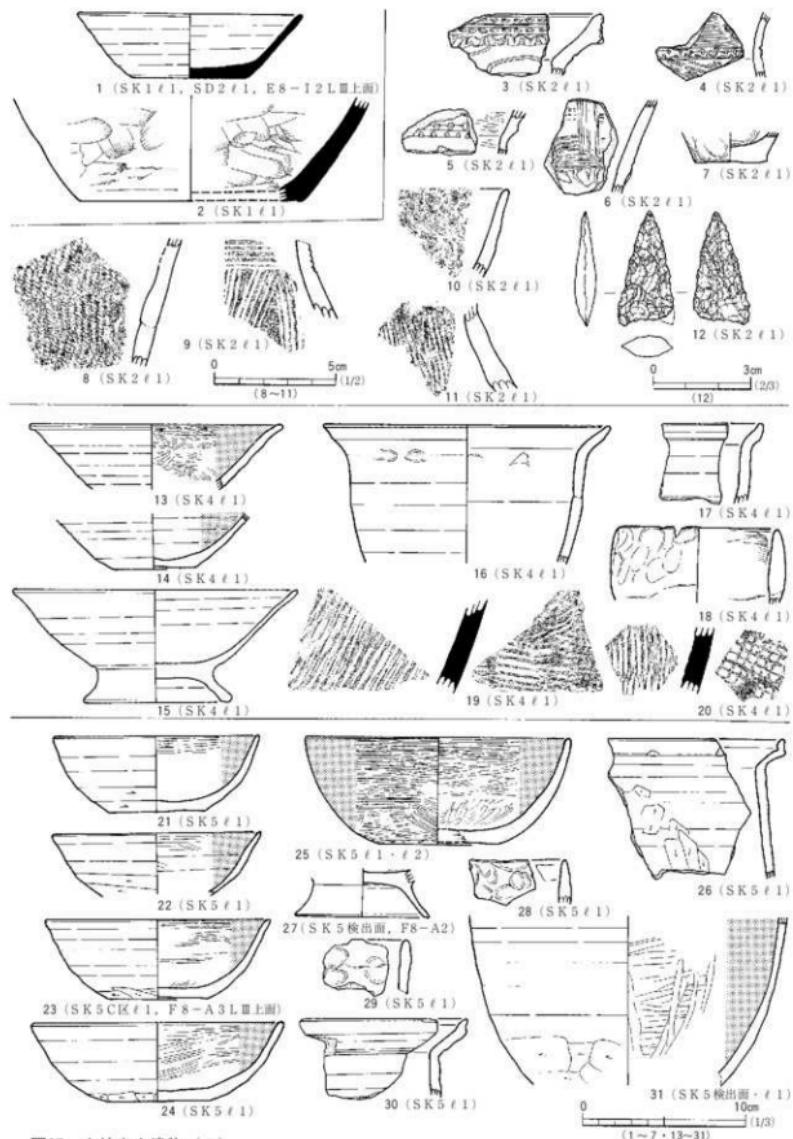


図67 土坑出土遺物（1）

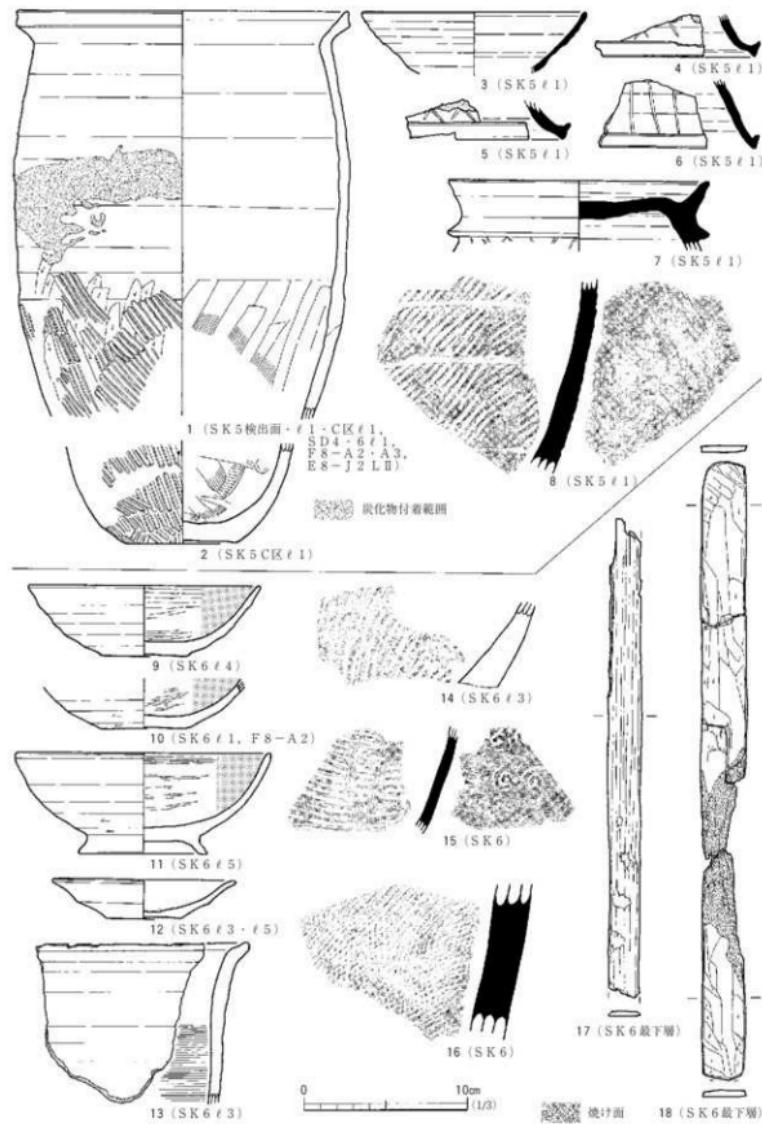


図68 土坑出土遺物（2）

第2編 桜町遺跡

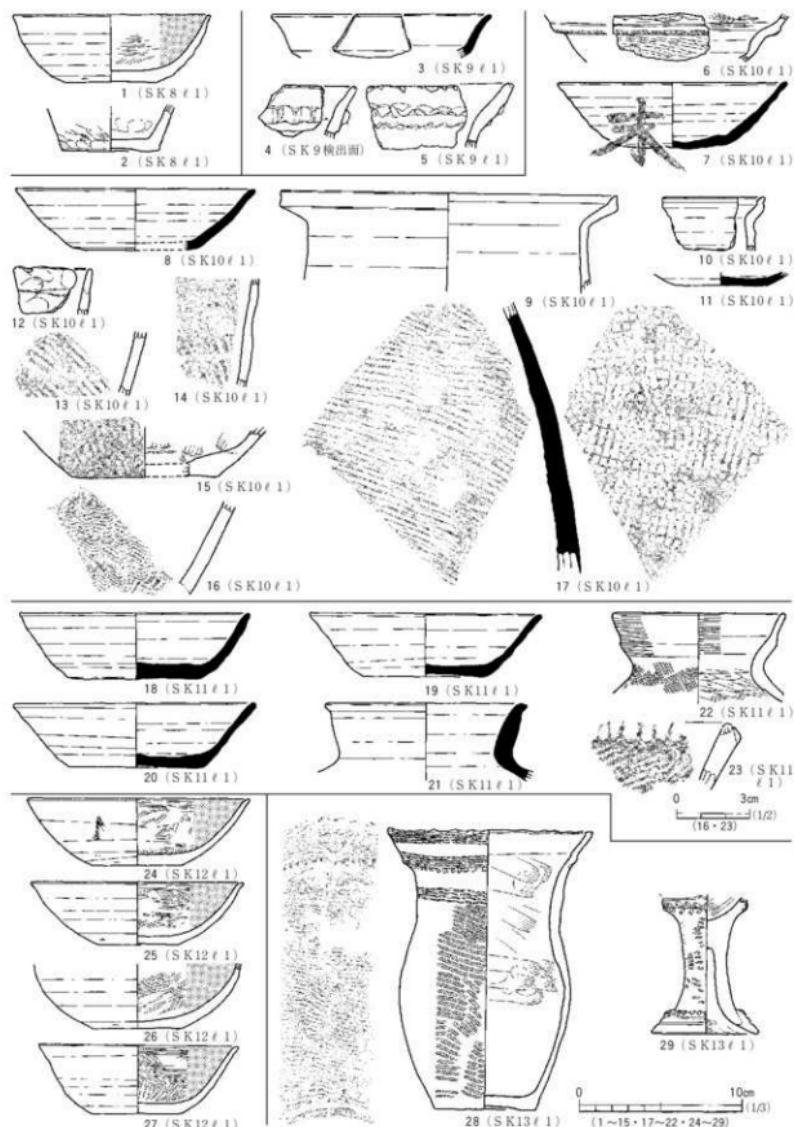


図69 土坑出土遺物（3）

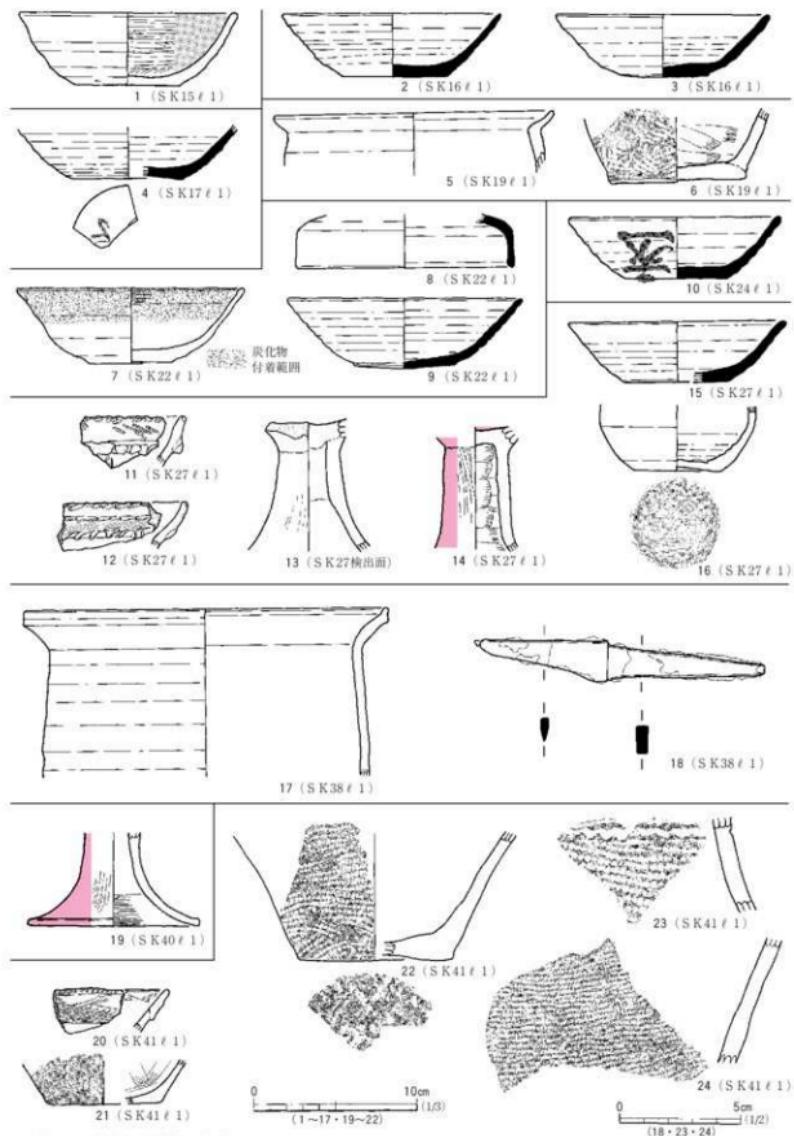


図70 土坑出土遺物（4）

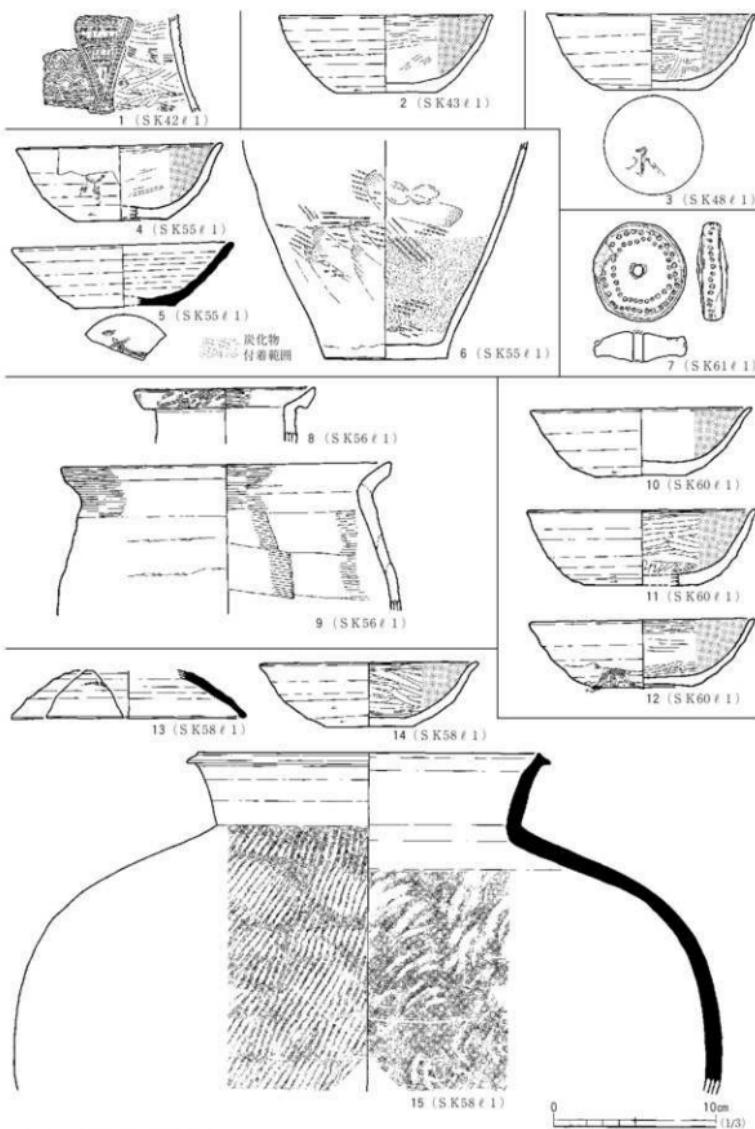


図71 土坑出土遺物（5）

第7節 溝跡

今回の調査では、溝跡を18条確認した。溝跡の性格や年代が分かるものは少なく、多くは平安時代よりも新しい時期に属する。5・12号溝跡は楕円形をなし、その内部に15号建物跡が分布する。近接する6号周溝状遺構と極めて類似し、弥生時代後期の平地式住居の可能性が指摘される。また15・17・18号溝跡は明治時代の丈量図に記された水路と一致し、江戸時代に遡る可能性がある。

1号溝跡 S D 1 (図74・76, 写真55)

1号溝跡は調査区の南東側、F 8-D 8-E 8グリッドに位置する。5号周溝墓・2号建物跡と重複し、そのいずれよりも新しい。遺構検出面はL III aである。

本溝跡はほぼ東西方向に延び、西側は調査区外、東側は近年の耕作により削平されて遺存していない。本来は長く延びる溝跡と推定される。調査区内で確認できた規模は全長12m、溝幅は東端が1.0m、西端が1.2mを測る。深さは0.1~0.2mで、西側が深い。周壁は急峻な立ち上がりで、底面にかけての断面形は逆台形をなす。底面は平坦で西側に向かって低くなる。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色土で、溝自体が浅く堆積土も単層であるため、堆積状況は不明である。

本溝跡からは弥生土器22点、土師器19点、須恵器1点がいずれも堆積土中から出土している。図76-1は土師器杯である。体部外面に墨書きが見られるが、判読できない。

本溝跡は東西方向に延びる溝跡であるが、その性格は不明である。年代は重複する2号建物跡よりも新しい平安時代以降に造られた溝跡である。

2号溝跡 S D 2 (図72・73・76, 写真55)

本溝跡は調査区の西端、E 8-I 2-J 2グリッドに位置する。1・11・29号土坑、6号溝跡と重複し、6号溝跡よりは古く1・11・29号土坑より新しい。遺構検出面はL III a上面で確認した。

本溝跡は東西方向に延びる。規模は全長6.2m、溝幅1.3mを測る。検出面からの深さは最大でも0.15mである。底面は平坦で、周壁にかけての断面形は浅い皿上をなす。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色土である。遺構自体が浅く、堆積土も単層のため堆積状況は不明である。

本溝跡からは弥生土器20点、土師器80点、須恵器34点が出土している。これらの遺物は堆積土中から出土したもので、そのうち形状が把握できるものを図76に示した。2は弥生土器の壺形土器であろうか。3は弥生土器の頸部破片である。クシ歯状施文具により鋸歯文状の文様が描かれている。4・5は須恵器杯である。4の底部は回転ヘラキリにより切り離され、線刻が認められる。6は須恵器高台付杯であろうか。底部下半に明瞭な稜が認められ、口縁部が直線的に立ち上がる。

本溝跡は東西方向に延びるが、その性格を特定できる所見は得られていない。年代は重複する遺構群との関係から平安時代以降の溝跡と判断した。

3号溝跡 SD 3 (図72・73・76, 写真56・77)

本溝跡は調査区の北西側, E 8-I 1 ~ F 8-B 2 グリッドに位置する。本溝跡は6号周溝状遺構, 15号建物跡, 13・27・28号土坑, 8・6・12号溝跡と重複し, そのいずれよりも新しい。

本溝跡は北西から南東方向へ延びる溝跡で, 北側7mには9号溝跡が平行するように延びる。その方向は真北に対して45度西に傾く。調査区内で確認できた規模は, 全長が31m, 溝幅が最大で1mを測る。検出面からの深さは16cmである。周壁は急峻に立ち上がり, 底面にかけての断面形は逆台形をなす。底面は平坦で, 南東に向かって低くなる。遺構内堆積土は黒色土の単層である。

本溝跡からは弥生土器28点, 土師器31点, 須恵器2点が出土し, そのうち形状が把握できるものを図76に示した。10・11は弥生土器の壺形土器で, 太い沈線により平行沈線・連弧文・連続波状文が描かれる。13は壺形土器であろう。内外面ともハケメ調整が観察でき, 体部上半にヘラ状工具によるキザミが施される。15は胴部破片で, 外面は単節斜縄文, 内面はハケメ調整が観察できる。

本溝跡は南東方向に延びる溝で, 北側7mの位置に平行するように延びる9号溝跡と関連して機能していた可能性が高い。年代は重複する遺構との関係から平安時代以降の溝跡と判断した。

4号溝跡 SD 4 (図72・73・76, 写真56・77)

本溝跡は調査区の北西側, E 8-I 1 ~ F 8-B 2 グリッドに位置する。周囲は調査区内で最も遺構が密集する範囲である。重複関係は, 本溝跡が最も新しい時期に属すると判断した。

本溝跡は北西から南東方向に延びる溝跡である。調査区内で確認できた規模は, 全長が31.5m, 溝幅が最大で0.8mを測る。深さは0.2mである。周壁はいずれも急峻に立ち上がる。底面は中央部が深く断面形が鍋底状をなす部分もある。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色土の単層であり, 堆積状況は不明である。

本溝跡からは弥生土器47点, 土師器137点, 須恵器19点が出土し, そのうち形状が分かるものを図76に示した。16は土師器壺の底部破片である。底径が小さい長胴壺であろう。外面には平行タタキ具, 内面は無文アテ具痕が観察できる。17は須恵器壺の破片で, 外面に平行タタキ具痕が観察できる。

本溝跡は南東方向に延びる溝跡であるが, その性格を特定できる所見は得られていない。年代については重複する遺構の関係から平安時代以降の溝跡と考えている。

6号溝跡 SD 6 (図72・73・76, 写真56・77)

本溝跡は調査区の北西側, E 8-I 2 ~ F 8-B 2 グリッドに位置する。本溝跡の周囲は調査区内で最も遺構が密集する範囲で, 重複する遺構を整理すると3・4号溝跡より古く, 14号建物跡や5号土坑・2号溝跡よりは新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本溝跡は西端が調査区外へと延び, 東端が近年の圃場整備により削平されているが, 本来はかな

り長い溝跡と推察される。E 8 - J 2 グリッドまでは南東方向に延び、それから東側はほぼ東西方向に延びる。調査区内で確認できた規模は、全長が37.5m、溝幅が最大で0.8mを測る。深さは0.15mである。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦で東に向かって低くなる。

本溝跡からは弥生土器25点、土師器46点、須恵器6点が出土し、形状が分かるものを図76に示した。18は土師器壺で、内面にはミガキ、黒色処理が施されている。19~21は弥生土器である。19は壺形土器で、口縁部が受け口状に大きく開く。口唇部直下には横位沈線が施され、その上下に円形竹管による刺突がめぐる。口縁部下端には交互刺突文が施される。20は高杯の脚部であろう。21は壺形土器の頸部破片で、クシ歯状施文具により縦位に区画され、その間に連続波状文が描かれる。

本溝跡は性格や年代は不明である。重複する遺構との関係から平安時代以降に造られた溝跡と判断している。

7号溝跡 S D 7 (図4・77, 写真57・77)

本溝跡は調査区の西端、E 8 - I 4 グリッドに位置する。18号建物跡、45号土坑と重複し、そのいずれよりも古い。

本溝跡の方向は、真北に対して12度東に傾く。溝跡の南端は調査区外に延びるため、その全容は不明である。調査区内で確認できた規模は、全長4.6m、溝幅0.9~1.0mを測る。検出面からの深さは0.3mである。遺構内堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色土である。単層であるためその堆積状況は不明である。

本溝跡からは弥生土器34点、土師器98点、須恵器12点が出土している。そのうち形状が把握できたものを図77に示した。1は土師器壺で、体部下半にはケズリの後に平行タタキ具痕が観察できる。体部上半はロクロ成形時のカキメ痕が残る。2は土師器杯で体部下端から底部には手持ちヘラケズリ再調整が観察できる。3は須恵器杯で底部切り離しは回転ヘラキリである。4は土師器壺の底部であろう。外面は平行タタキ、内面はナデ痕が認められる。5~8は弥生土器で、壺形土器の破片である。7・8はクシ歯状施文具による文様が描かれる。8には連続波状文が描かれている。

本溝跡は調査区外へと続き、その全容は不明である。詳細な年代を示す出土遺物がなく、18号溝跡よりも古い時期と考えている。

8号溝跡 S D 8 (図72・73・77, 写真56・77)

本溝跡は調査区の西側、E 8 - I 3 ~ F 8 - B 2 グリッドに位置する。周囲は調査区内で最も遺構が密集する範囲で、3号住居跡、5号竪穴状遺構、6・10号建物跡、6・13号土坑、3・4・6号溝跡と重複する。本溝跡は6号建物跡、3・4・6号溝跡より古く、その他の遺構より新しい。

本溝跡は西端が調査区外へと続き、東端は削平により途切れているが、本来はかなり長い溝跡と推定される。調査区内的規模は、全長が38.5m、溝幅が0.5~0.9mを測る。底面は平坦であるが、西側に向かって低くなる。

本溝跡からは弥生土器226点、土師器155点、須恵器18点が出土している。そのうち形状が把握できたものを図77に示した。9は土師器杯の破片である。外面に墨書が見られるが判読できない。10・11は口縁部下端に交互刺突文がめぐる。12～15は口縁部下端に指頭押圧によるキザミが充填される。16～18は口縁部に段を持ち、ヨコナデによって仕上げられる。17は口縁部に浅い沈線状の凹線が2条めぐる。21は高杯または器台であろう。脚部から大きく開く口縁部となる器形で、口縁部が短く直立する。22は小型壺形土器で、内面にナデが見られる。24～28はクシ歯状施文具により文様が描かれる。29・30はハケメ調整が施され、体部上半部にはヘラ状工具によるキザミがめぐる。

本溝跡は西に向かって延びる溝跡で、6号建物跡より古く5号竪穴状遺構より新しい。詳細な年代を特定する出土遺物はないが、概ね平安時代に属すると判断している。

9号溝跡 S D 9 (図72・73, 写真57)

本溝跡は調査区の北側、F 8-A 1～B 2グリッドに位置する。6号周溝状遺構、14号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。

本溝跡は3号溝跡と平行して南東方向へ延びる。南東端は近年の圃場整備により削平されて途切れるが、本来は14号溝跡に連続する溝跡と推定される。調査区内で確認できた規模は、全長が24.1m、14号溝跡を含めると104.5mを測る。溝幅は最大でも0.8mである。検出面からの深さは0.2mである。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦で、南東側に向かって低くなる。本溝跡からは土師器5点、須恵器1点が出土したが、摩滅した小破片であり図示していない。

本溝跡は南東方向に延びる溝で、南側7mの位置に平行するように延びる3号溝跡と関連して機能していた可能性が高い。年代は重複する遺構との関係から平安時代以降の溝跡と判断した。

10号溝跡 S D10 (図4・78, 写真58)

本溝跡は調査区の中央部、F 8-B 4～B 6グリッドに位置する。1号竪穴状遺構、11号溝跡と重複し、そのいずれよりも新しい。本溝跡はほぼ南北方向に延びる溝跡であるが、その中央部は深さが1cm程度と極めて浅く、その痕跡をわずかに確認したに止まる。南端部は調査区外へと続く。規模は全長が23.3m、溝幅が0.4～0.5mを測る。深さは南に向かって深くなり、北側が1～3cm、南側調査区際では10cmである。底面は平坦で、周壁にかけての断面形は浅い皿状をなす。

本溝跡からは弥生土器6点、土師器7点、須恵器1点が出土している。図78-1は土師器杯で、体部外面に墨書が見られる。文字の一部であるが、「禾」または「永」であろう。

本溝跡は南北方向に延びる溝跡であるが、その性格を特定する所見は得られなかった。出土遺物も少なく、年代についても不明である。

11号溝跡 S D11 (図4, 写真58)

本溝跡は調査区の中央部、F 8-B 4グリッドに位置する。7号周溝墓、2号竪穴状遺構、5号

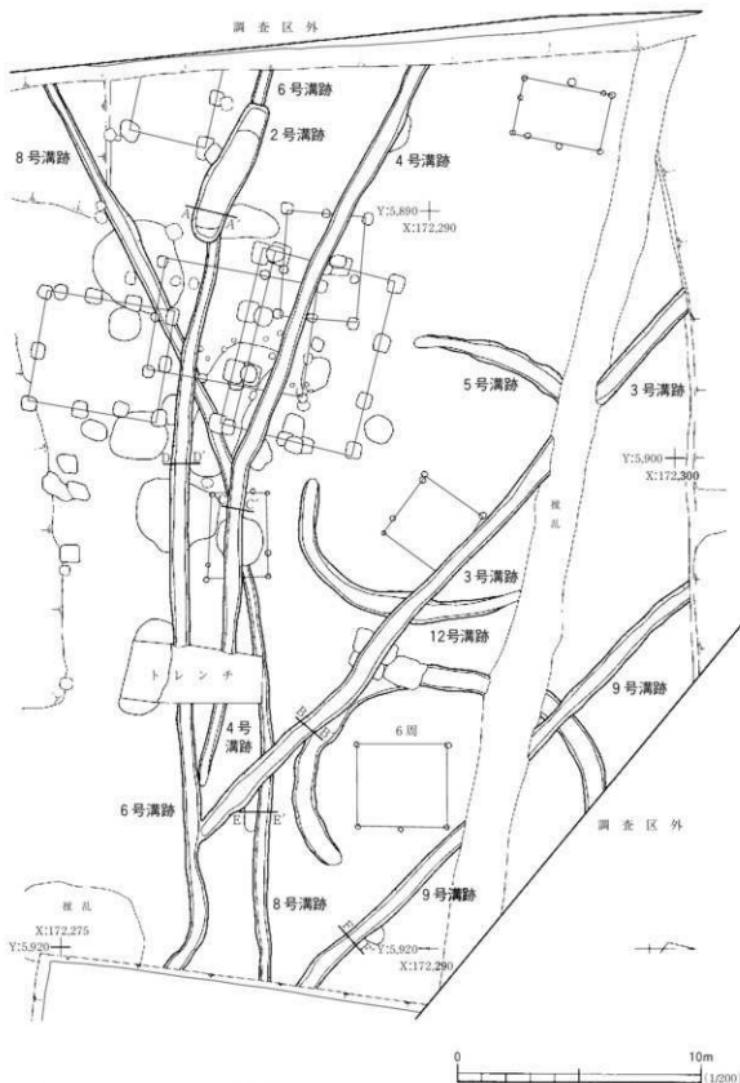


図72 2~6・8・9・12号溝跡

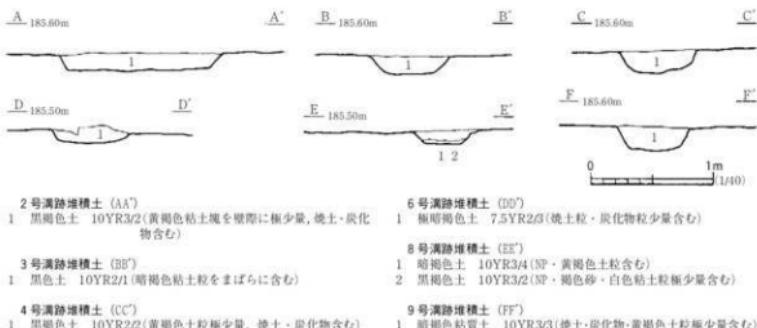


図73 2～4・6・8・9号溝跡土層断面

建物跡、10号溝跡と重複する。10号溝跡よりは古いが、その他の遺構よりは新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本溝跡は円弧状に延びるが、削平のため全周しない。規模は全長が6.5m、溝幅が最大で0.7mを測り、深さは0.1mと極めて浅い。底面は平坦で、東側に向かって浅くなる。

本溝跡からは出土遺物もなく、その性格や年代は不明であるが、平安時代の遺構群よりは新しい時期に属すると判断した。

13号溝跡 S D13 (図74)

本溝跡は調査区の中央部、F 8-C 5～D 6グリッドに位置する。5・8号周溝幕、37・38号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。遺構検出面はL III a上面である。

本溝跡は南北方向に延びる溝跡で、真北に対して約10度西に傾く。規模は全長が19m、幅が最大で0.8mを測る。深さは北端部が0.1m、南端部が0.3mで、南に向かって深くなる。周壁はいずれも急峻に立ち上がり、底面から周壁にかけての断面形は逆台形を呈する。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、含有物が均質になることから自然堆積と判断した。

本溝跡からは弥生土器7点、土師器100点、須恵器11点、陶磁器1点が出土したが、いずれも小破片のため図示していない。

本溝跡は南北方向に延びる溝跡である。周辺に関連する遺構もなく、その性格を特定できる所見は得られていない。詳細な年代は不明であるが、重複関係から平安時代以降の溝跡と判断した。

14号溝跡 S D14 (図4・75、写真59)

本溝跡は調査区の東側、F 8-C 3～G 9グリッドに位置する。15号溝跡と重複し、本溝跡のほうが古い。遺構検出面は西端部のF 8-C 3グリッド付近ではL III aであるが、それより東部は削平されて30cm程低くなりL III c上面が検出面となる。

本溝跡はわずかに蛇行しながら南東方向に延び、その方向は真北に対して約35度西に傾く。本溝跡と北西側に位置する9号溝跡の方向が一致し、その間の部分が削平されて連続することはないが、本来は連続して一体をなす溝跡と考えている。南東端は削平により途切れ、その延長部分は確認できない。溝跡の規模は全長が65.5mで、9号溝跡を含めると104.5mとなる。溝幅はF 8-C 3グリッドが最も広く0.9mを測る。周壁はいずれも急峻に立ち上がり、周壁から底面にかけての断面形は逆台形をなす。底面は平坦であり、南東方向に向かって深くなる。

本溝跡からは弥生土器3点、土師器56点、須恵器8点が出土した。いずれも摩滅が著しい小破片のため図示していない。

本溝跡は南東方向に延び、9号溝跡と連続すると考えている。また9号溝跡の南側に位置する3号溝跡と平行して延びることから、これらの溝跡が関連して機能していた可能性が高い。年代は重複する道構との関係から平安時代以降の溝跡と判断した。

15号溝跡 S D15 (図74・75・78、写真59・60・77)

本溝跡は調査区の東側、F 8-C 2~H10グリッドに位置する。14号溝跡と重複し、本溝跡のほうが古い。道構検出面はL III c上面である。

本溝跡は南東から北西方向に向かって延びる。南北両端とも調査区外へと続くため、その全容は不明である。本溝跡はF 8-E 5・G 9グリッド付近の2ヶ所で屈曲する部分が見られ、全体的に17号溝跡と接するように延びている。また調査区際のH10グリッド付近では2股に別れる。溝跡の方向は、G 9グリッド以南は真北に対して約30度西に傾き、これより北側部分からE 5グリッドまでは西に約12度の方向に傾く。E 5グリッドでは、その流れを全体的に西に移動させ、真北に対して約30度西に戻している。規模は全長が96m、溝幅は2.5~3.2mを測る。

本溝跡の周壁は急峻に立ち上がるが、西側の壁面の傾斜が緩くなる特徴がある。特にG 9グリッド付近は溝跡の屈曲部となり、周壁は上端部が崩落し緩やかな立ち上がりとなる。底面は全体的には平坦で、北西側に向かって低くなる。D 3グリッドの南部では底面上に大きな穴が認められ、その南側は底面幅が狭く、溝跡を遮断するように木杭が打ち込まれていることから、堰跡になるものと推定される。堰跡の北側は深い穴となり、堰からオーバーフローした水を溜めておく施設と考えられる。その深さは底面から1.2mを測る。またこの穴を境に底面の標高に違いが認められ、南側の底面に比べて、北側が約20cm高くなる。

溝跡の西側壁面と底面が接する部分に木杭が打ち込まれている。この杭は西壁の護岸のためと推定され、溝跡が屈曲する部分を中心に打ち込まれている。特にG 8・9グリッド付近では西壁に接して、1ヶ所に2~3本の杭が打ち込まれた頑丈な構造の護岸が確認される。木杭は上端部が既に腐食して遺存していないが、地中に打ち込まれた先端部分を中心に全長50~30cm程遺存していた。木杭は直径15cm前後の丸太杭で、樹種はマツであろう。わずかに1本だけが製材されて断面四角形となる角材であった。先端部分は防腐のために焼かれている。

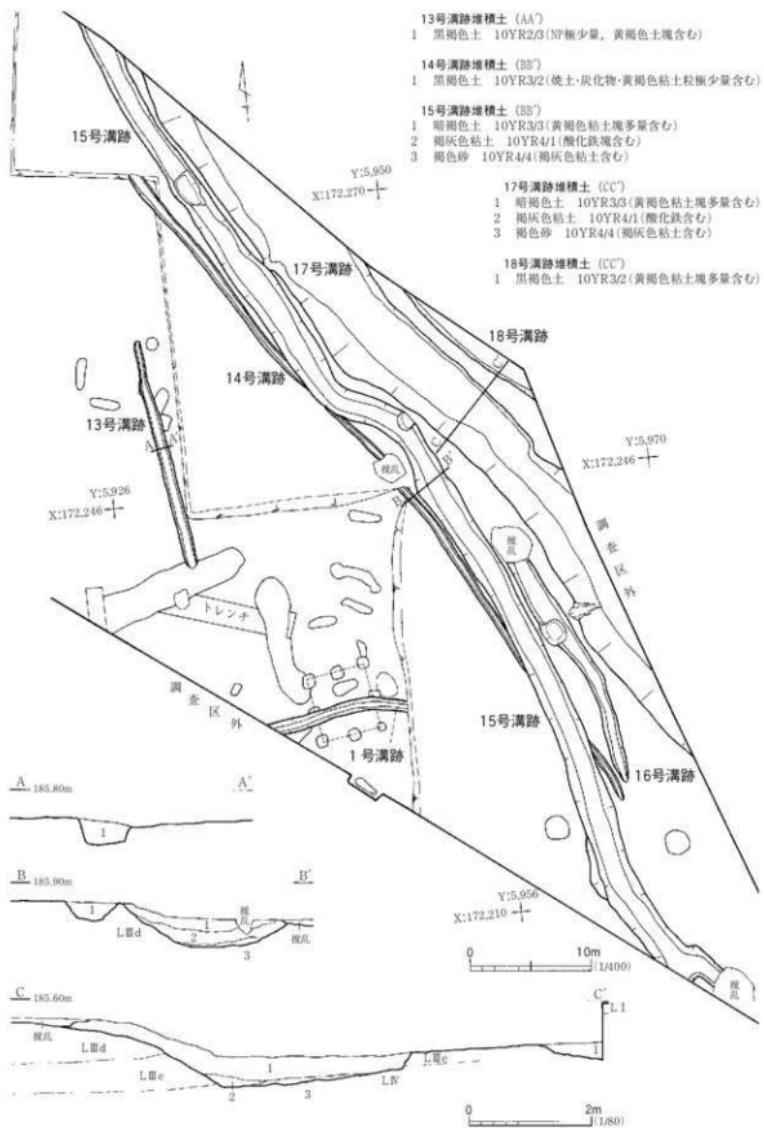


図74 1・13~18号溝跡

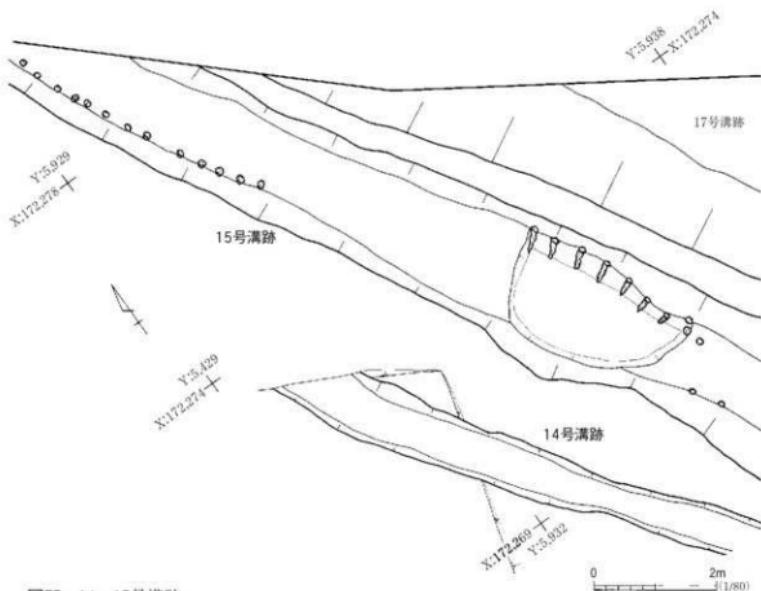


図75 14・15号溝跡

道構内堆積土は3層に分けた。1層は溝の上部を覆う暗褐色土で、黄褐色粘土塊を多量に含んでいる。2層は褐灰色粘土で、酸化鉄が集積する部分が見られる。1・2層の堆積状況は、堆積土の土質と含有物などから、本溝跡の廃絶時に人為的に埋め戻されたものと判断した。3層は溝跡底面を薄く覆う褐色砂である。水性堆積を示し、本溝跡の機能時に水が流れているものと判断した。

本溝跡からは弥生土器12点、土師器194点、須恵器24点、ガラス製品3点が出土し、そのうち形状が分かるものを図78に示した。7は高杯である。杯身の下端に明瞭な段を持ち、口縁部が直線的に大きく開く。脚部は細く下端に向かってわずかに開くように伸びる。また円形のすかし穴が4ヶ所確認できる。8は壺形土器の口縁部破片で、短い口縁部の下端に明瞭な段を形成し、その断面形は三角形を呈する。外面の文様は地文として縄文が施され、口唇部直下には縦方向の刺突が充填され、下部には交互刺突文がめぐる。9は壺形土器の頸部破片である。半裁竹管状の施文具により平行沈線が描かれる。沈線の断面は三角形になる。

10はロクロ成形の土師器壺の破片である。頭部から大きく開いた口縁部となり、口唇部が直立する。11・12は須恵器壺の破片である。12は外面には平行タタキ具、内面には松葉状のアテ具痕が観察できる。13~15はガラス製品である。13は透明なガラス瓶で、その形状からインク瓶であろう。底部には「M」の陽刻が確認できる。14は茶褐色のガラス瓶で、体部外面には「組合赤チンキ」、裏面下部には「ZENKOREN」とある。これは農業協同組合全国購買連合会を表している。15はガラス

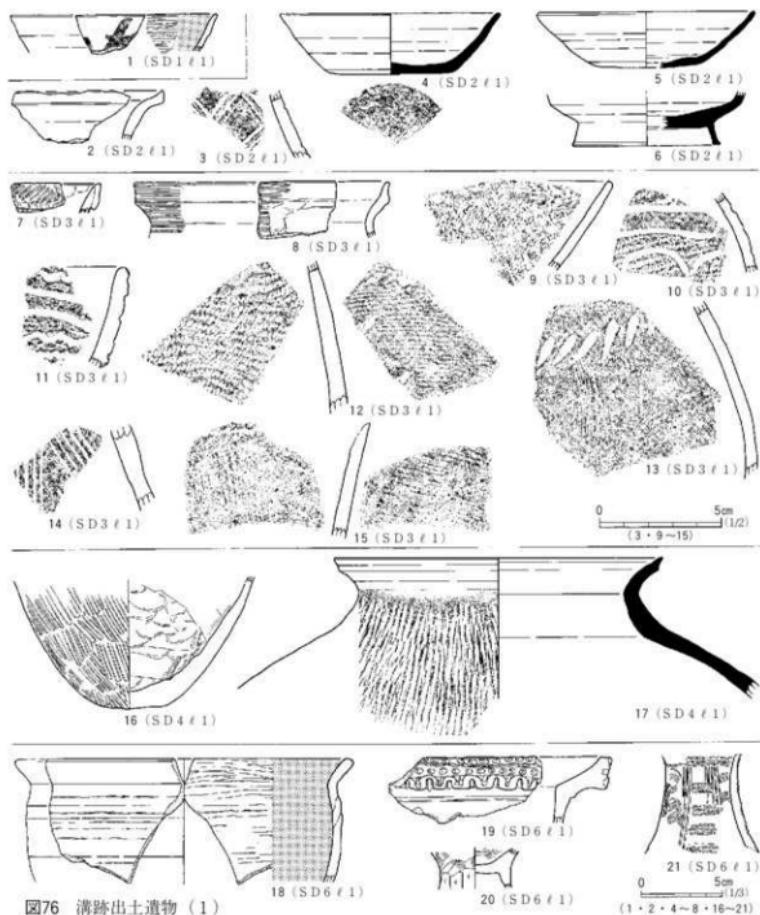


図76 溝跡出土遺物（1）

製おはじきである。透明度の高い薄い水色のガラスで、内部に細かい気泡が確認できる。

本溝跡は南東から北西方向に延びる溝跡である。底面上に壠跡が確認できることから、水路と考えている。西側壁面を中心とする護岸を目的とした木杭が打ち込まれている部分を確認できた。また明治時代の丈量図には瀬川を堰きとめ、現在の八日町集落へと延びる水路2条が描かれている。本溝跡と平行する17号溝跡がこれに該当するであろう。水路の明確な開削時期を示す資料はないが、江戸時代には機能していた可能性が高い。本溝跡の廃絶は昭和40年代に圃場整備が行われ、その際に埋め立てられた。

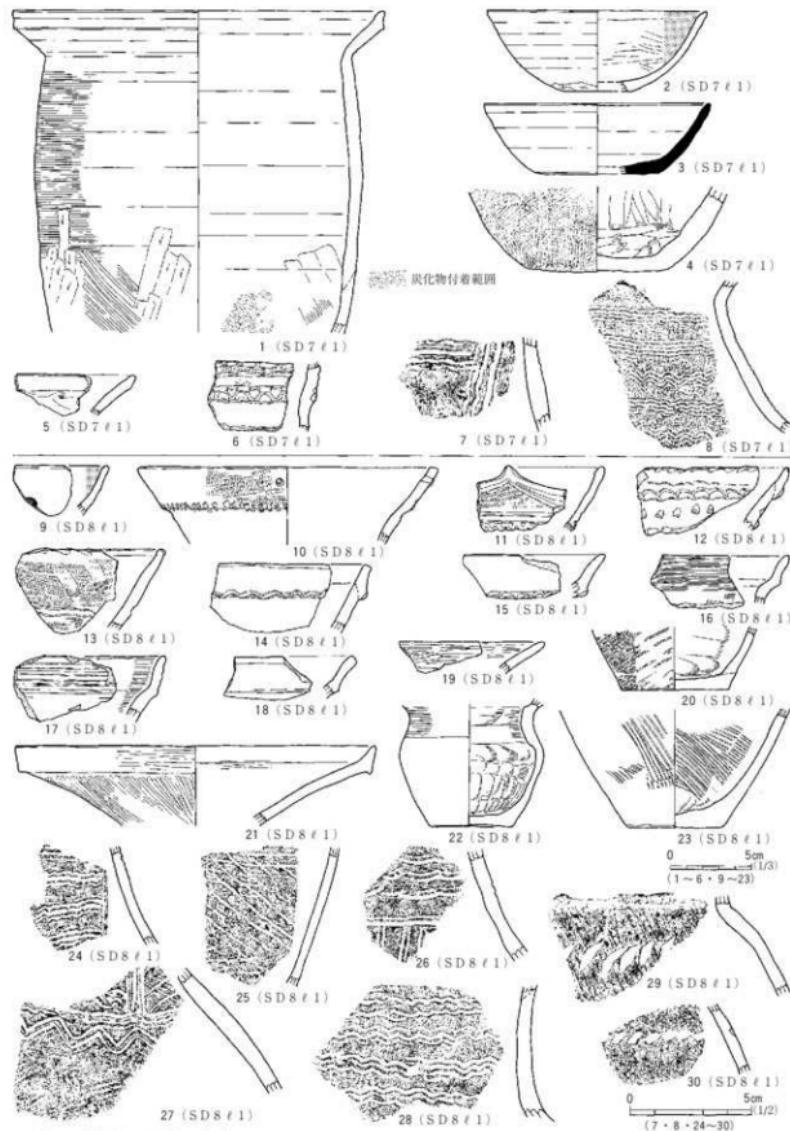


図77 溝跡出土遺物（2）

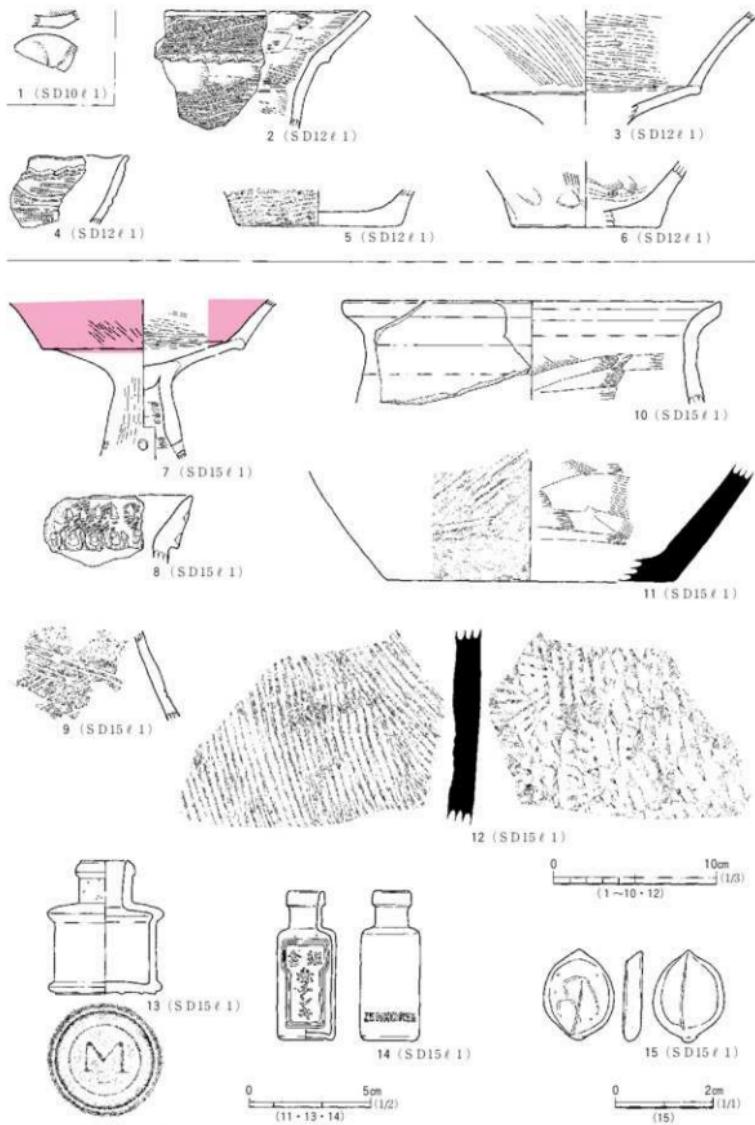


図78 溝跡出土遺物（3）

16号溝跡 S D 16 (図74, 写真59)

本溝跡は調査区の東端, F 8 - F 7 - G 8 グリッドに位置している。重複する遺構はないが, 14・15号溝跡と17号溝跡との間に位置している。遺構検出面はL III c 上面である。

本溝跡は南東から北西方向に延び, 真北に対して約25度西に傾く。北西端は擾乱によって途切れ, 南東端は徐々に浅くなり遺存していない。規模は全長21mである。溝幅は北側が1.8m, 南側が1.0mで, 南側に向かって狭くなる。遺構内堆積土は, 黄褐色土をわずかに含む暗褐色土の単層である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。

本溝跡からは弥生土器5点, 土師器25点, 須恵器16点, 陶磁器1点が出土した。いずれも小破片のため図示していない。

本溝跡は年代や性格を特定できる所見がなく不明である。

17号溝跡 S D 17 (図74・79, 写真59・60・77)

本溝跡は調査区の東側, F 8 - D 2 - H 8 グリッドに位置する。重複する遺構はないが, 本溝跡と平行するように15・18号溝跡が分布する。遺構検出面はL III 上面である。

本溝跡は南東から北西方向に向かって延びる。南北両端とも調査区外へと続くため, その全容は不明である。調査区内で確認できた規模は全長73m, 溝幅が7mを測る。検出面からの深さは1.2mと深い。底面は平坦であり, L V aとした砂礫層に達している。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土で, 人為的に埋め戻された土層と判断した。3層は底面上を薄く覆う褐色砂で, 溝跡の機能時に堆積した土層と考えている。

本溝跡からは弥生土器35点, 土師器96点, 須恵器25点, 陶磁器21点, ガラス製品1点が出土した。図79-1は高杯である。杯身部分が深く, 口縁部が外反して大きく開く。内外面とも丁寧なミガキが施される。2は蓋のつまみ部で, 上端部に円孔が1ヶ所穿たれている。3・4は壺形土器で, 短い口縁部の下端に明瞭な段が付く。3は口縁部下端と頸部に交互刺突文が施されている。4は口縁部下端に指頭押圧によるキザミが充填され, 頸部にはクシ歯状施文具により縦位に区画した内部に斜格子文と鋸歯状文が描かれている。5は壺形土器の口縁部で, 口縁部に段が付かず直線的に開く器形である。クシ歯状施文具により縦位に区画し, 斜格子文と押し引き文状の連続波状文が描かれる。7は内面が黒色処理された土師器杯で, 体部下端から底部にかけて回転ヘラキリ再調整が施されている。8は須恵器長頸瓶または広口壺であろう。9は透明なガラス瓶で, アルミ製のキャップが遺存しており, キャップ上面には帆船のマークが描かれている。「オーシャンウヰスキー」のボケット瓶で, ガラス瓶の体部にはブドウの実と葉の模様が施される。頸部には「DAIKOKUBUDOU SHU」と社名があり, 現在の「メルシャンワイン」の前身となる酒造会社である。

本溝跡は明治時代の丈量図に記された水路に該当し, 15号溝跡と平行して延びる。開削された年代は不明であるが, 江戸時代に遡る可能性がある。廃絶時期については, 堆積状況や出土遺物の特

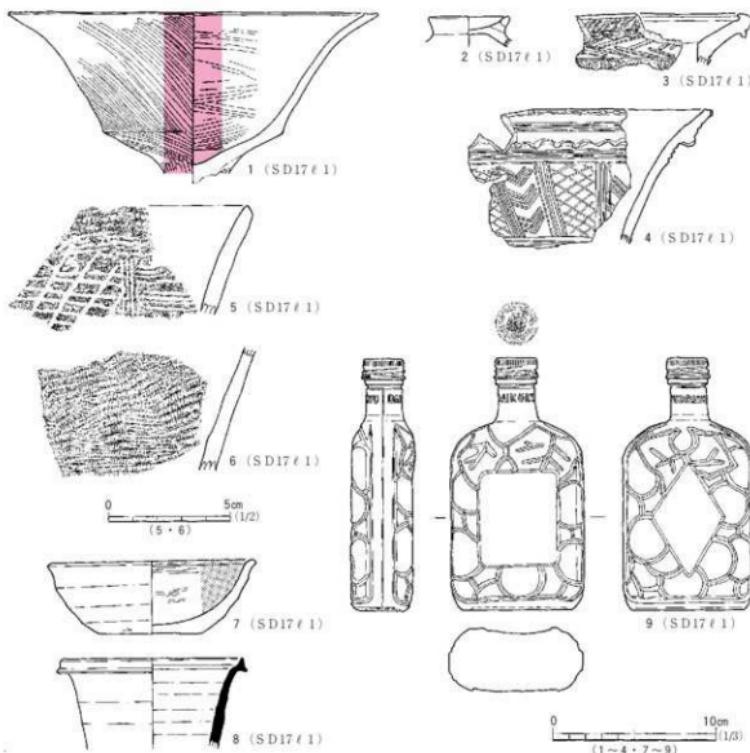


図79 溝跡出土遺物（4）

微などから、昭和40年代の圃場整備により埋め立てられたと判断している。

18号溝跡 S D18 (図74, 写真59・60)

本溝跡は調査区の東端、F 8-E 4~6グリッドに位置する。重複する遺構はなく、南西側に17号溝跡が平行するように延びる。遺構は表土直下でL III dとした黄褐色粘土の上面で確認した。

本溝跡は調査区際に位置し、溝跡の南側壁面をわずかに確認したに止まる。調査区内で確認できた規模は、全長14.3m、溝幅は不明である。周壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦でL IVとした褐色砂礫層まで達している。遺構内堆積土は黒褐色土の単層である。黄褐色土と黒色土の混土であり、人為的に埋め戻されたと判断した。

本溝跡から遺物が出土していないため詳細な年代は不明であるが、近年の圃場整備で埋め立てられた溝跡の可能性が高い。

第8節 その他の遺構と遺物

本節では、その他の遺構として調査区内に点在する柱穴群、遺構外から出土した遺物を報告する。柱穴群は建物跡を構成しない不規則な分布である。柱穴の出土遺物は少なく、詳細な年代を示す所見が得られていない特徴がある。遺構外からは調査区内で確認できた遺構群と同様に弥生時代や平安時代に属する遺物が出土している。

1. 柱穴群

調査区内で確認された柱穴群は、建物跡を構成する柱穴のように企画的に配置しないものを総称する。グリッド毎に通し番号を付し（G P 1など）、グリッド名と組み合わせて F 8-A 1 G P 1 などと呼称している。柱穴群の分布状況は、調査区内では北西端と東側の削平地以外の場所で確認され、調査区内では8号建物跡周辺（A群）と1号周溝墓周辺の調査区中央部（B群）に比較的まとまる傾向が見られた。

柱穴群A（図80）

柱穴群Aは調査区内で最も遺構が密集する範囲である。各遺構と柱穴の重複関係を整理すると、弥生時代とした3号堅穴住居跡よりは新しく、溝跡群より古いことは確実である。さらに平安時代の建物跡との関係では、建物跡より古い柱穴も一部確認できる。

柱穴の規模は、直径20cm前後のものが最も多く、これらの平面形は円形になる。柱痕跡が確認できるものは少ない。次に多い柱穴は、直径25~40cmの中規模な一群である。これらの平面形は円形の他に方形を基調とする柱穴も見受けられる。柱痕跡が確認されたものでは、直径10cm前後の丸太材が用いられたと推察している。直径50cmを超える大型の柱穴は最も少なく、その柱痕跡は直径20cm程の丸太材と推定される。これらの柱穴は6・8号建物跡の柱穴と同様な特徴が見られ、概ね平安時代に属するものと推定される。

柱穴の分布状況については、小規模の柱穴は柱穴群A全体に散発的に確認できる。これらの柱穴の中には、6号周溝状遺構のように弥生時代の平地式住居を構成する柱穴と明確な区別が付かないものがある。そのため弥生時代に属する柱穴も存在することが考えられるが、柱穴群Aでは明確な年代は不明である。大中規模の柱穴は6・8号建物跡周辺に確認でき、北側のE 8-J 1 グリッド周辺では確認できない。6・12号建物跡の南部は近年の耕作により削平されている。この部分に建物跡を構成する柱穴が展開する可能性はある。

柱穴群B（図81）

柱穴群Bは調査区中央から南部にかけて、F 8-B 5~B 6, C 5~C 6 グリッド周辺に位置する。周囲には1・2号周溝墓、9・13号建物跡などが分布している。柱穴群と各遺構の重複関係を整理すると、弥生時代の周溝墓よりは新しく、平安時代の建物跡より新しいものがほとんどである。

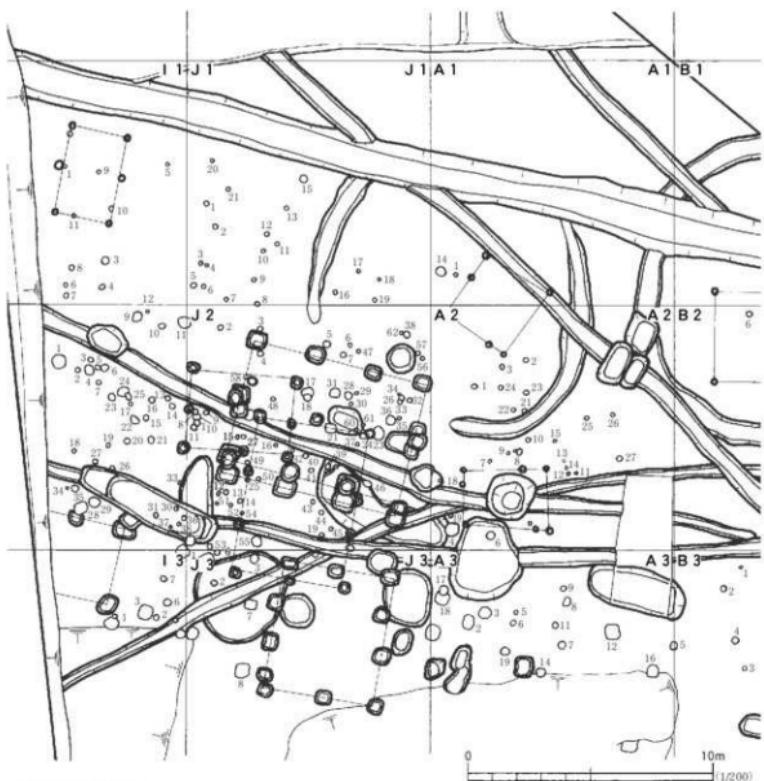




図81 柱穴群B

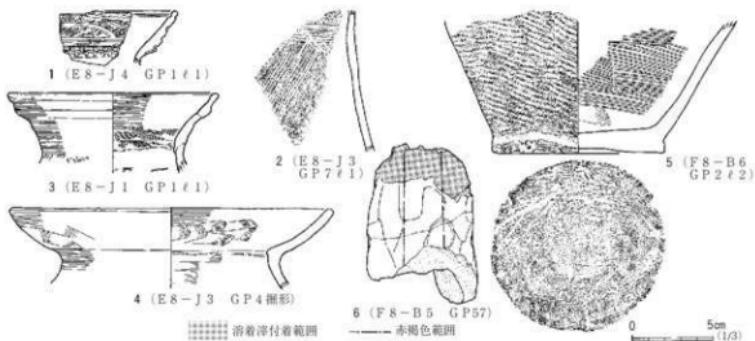


図82 柱穴群出土遺物

部から出土したもので、柱穴群の年代を直接的に示すものではない。そのうち形状が分かるものを図82に示した。土師器と須恵器は、杯や壺の小破片で図示していない。また石器はいずれも剥片で、二次的加工痕などは認められない。

1～5は弥生土器である。1は壺形土器の口縁部破片で、頸部でくびれ口縁部が開く器形である。口縁部には地文として単節繩文が施され、幅広の沈線で連弧文が描かれている。口縁部下端には明瞭な段が付き、交互刺突文が施されている。2は壺形土器の頸部破片で、クシ歯状施文具により文様帯が描かれている。3は壺形土器の口縁部である。口縁部下端に軽い段が認められ、浅い沈線状の凹線がめぐる。口縁部から頸部のくびれ部までヨコナデが観察でき、体部のハケメ調整痕を消している。4は頸部で「く」の字状にくびれ、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。内面は横位の指ナデが施され、口縁部端部がヨコナデで仕上げられている。5は壺形土器の底部破片である。外面は地文として単節斜縄文が施され、内面にはハケメが観察できる。

6は羽口破片である。先端付近に溶着漆が付着し、その周囲は赤褐色に変色している。外面には製作時の痕跡として指ナデと指頭圧痕が観察できる。遺跡周辺で製鉄関連遺跡が確認されていないことから、鍛冶に関わる羽口と推定される。

2. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生土器1,590点、土師器7,608点、須恵器695点、灰釉陶器1点、石器20点、近代陶磁器101点、ガラス製品2点である。そのうち形状が把握できるものを図83～92に示した。

弥生土器（図83～88、写真78～83・85・86）

遺構外から出土した弥生土器の出土位置は、調査区全域に渡り確認されているが、特に調査区の中央部から西半部にかけて集中する傾向が見られる。調査区内で確認された弥生時代の遺構は、調査区中央部から東側に広がる方形周溝墓群と調査区西端部の3号竪穴住居跡だけである。遺構の分

布に比べ土器群の分布範囲は広い。これは近年の削平だけでなく、平安時代に集落が營まれるなど土地改変が古くから行われた結果、弥生時代の遺構群が削平され、土器類が搅拌されたと考えられる。出土層位は表土中の他に、遺構検出面を薄く覆うLⅡとした黒褐色土中も含まれている。この土層は旧表土層と考えられ、平安時代の遺物も大量に包含している。弥生土器の器種は、そのほとんどが壺形土器で、わずかに甕形土器・高杯・器台・蓋などが見られる。

弥生土器の文様や製作技法などの特徴から大まかに3つに分類した。1つは地文に縄文を施し、沈線や交互刺突により文様を構成する一群で、天王山式土器の特徴を残す在地の土器群である。2つ目はクシ歯状施文具を用いて文様を描く土器群で、北関東地域の十王台式土器や博式土器の影響がうかがえる土器群である。3つ目は器面に文様が施されず、製作過程の器面調整痕であるハケメを残す土器、主に北陸地域で顯著に見られる土器群である。また各土器群の特徴が混ざった文様が施されるなど、在地化した土器の存在が確認できる。さらに胎土は在地土器と同様な特徴を示し、他地域からの搬入品が主体を占めるとは考えにくく、在地化した土器群と推察している。弥生土器の出土量は、在地土器が最も多く、北陸系土器群、北関東系土器群の順である。

[在地土器] 図83は壺形土器の口縁部を中心とする破片を図示した。1は口縁部が大きく外反する。体部上半部に縄文の結束部がわずかに観察できる。2~5は有段口縁に縄文が施される壺形土器である。2は口縁部上端にキザミが充填されている。3・4は口唇部が面取りされて平坦になる。4は頸部上端に押し引き状の連続波状文が施されている。5は口縁部下端に太い沈線で波状文が描かれ、口唇部にはキザミが施されている。

6~21・24・25は交互刺突を施す壺形土器である。特徴は突帯状に貼り付けた粘土紐に円形竹管を用いて上下から刺突を加える加飾であるが、粘土紐の大きさと刺突の方向により彫りの深い立体的な交互刺突になるもの(14・16・19~21)、斜め方向の刺突で浅く平面的になるもの(6・8・10・11・13・17・18)が見られる。6~12は口縁部に沈線による連弧文が施されている。6~8は低い波状口縁である。13~15は口縁部に地文の他に文様が施されていない。13は口縁部上端付近に貫通孔が穿たれ、浅い交互刺突が2段めぐっている。16は内外面ともにハケメが観察でき、口縁部には地文縄文が、平行沈線の内部に押し引き文状の横位刺突が施されている。17~21は口縁部の幅が短く、その下端部を中心に交互刺突文がめぐっている。19は口縁部が受け口状に大きく開く器形である。短い口縁部の中央に横位沈線がめぐり、垂直方向の刺突が施され、口縁部下端には立体的な交互刺突文を取り付けている。20は口縁部中央の横位沈線の上下に交互刺突が2段めぐる。

22は軽い段を持つ口縁部で、円形竹管を用いて垂直方向に刺突を加えている。24・25は体部上半の破片で、頸部との境に交互刺突がめぐっている。体部の文様は24が連弧文を主体とし、その交点に刺突を加えている。25は鋸歯状の沈線文が描かれる。26~28は頸部から体部上半にかけての破片である。26は突帯を貼り付け、その上端部にキザミが施されている。27・28は頸部と体部の境に平行沈線を施し、その下部に押し引き文が施されている。

29~35は口縁部下端に指頭押圧によるキザミがめぐる壺形土器である。これは粘土紐を突帶上に

貼り付け、その粘土紐を指で押さえて凹凸をつまみ出す加飾である。貼り付けた粘土紐の上に沈線を引き、キザミに立体感を持たせている35のようなものもある。29は地文として条の細かい縄文が施され、口縁部下端にキザミがめぐる。30~34は口縁部が無文となり、その下端部に指頭押圧によるキザミがめぐる。30・32は口縁部上端にキザミが認められ、半裁竹管をもちいて上方から刺突を加えている。31は内外面ともに成形時のハケメを残している。34は指頭押圧のキザミが2段めぐり、3号住居跡でも同様な特徴を持つものが見られる。35は指頭押圧によるキザミの下部に押し引き文状の籠状文が施されている。36は口縁部下端に軽い段を持ち、口縁部が聞く器形である。口縁部下端の段部分にヘラ状工具によるキザミがめぐり、頭部上端は指ナデにより地文となる縄文を消している。37是有段口縁となる部分に棒状工具を押し当てたようなキザミがめぐる。38は小型土器の胴部破片であろうか。胴部には連弧文や刺突文が描かれ、指頭押圧によるキザミがめぐっている。

39~41は壺形土器の底部破片であり、いずれも平底である。40は底部外面に地文と同様な縄文が施されている。

図84-1~10は太い沈線によって文様が描かれる土器で、壺形土器の頭部から体部上半にかけての破片を図示した。文様の基本的な要素に、頭部と体部を平行沈線で区画し、上半部には矢羽根形や長方形をモチーフとする文様を描き、平行沈線の下部に連弧文をめぐらす特徴がある。1は頭部下半から体部上半の破片である。頭部と体部の境に平行沈線を施し、上部には矢羽根形の沈線文を描き、その内部を押し引き文状の沈線で区画する。下半部は下側に開放する連弧文が描かれている。2は頭部下半の破片で、平行沈線の上部には長方形の文様が描かれ、下半部は連弧文となる。3・4・8・9は平行沈線間を縱位の短沈線により区画し、その内部に押し引き文状の横位沈線を描いている。下半部は連弧文がめぐり、連弧文間に刺突が加えられている。この刺突文半裁竹管を用いて左右交互に刺突を施している。5~7・10は平行沈線と波状沈線を主体とする文様である。6は頭部と体部の境に平行沈線が施され、上半部は長方形の文様で、その内部に押し引き文状の波状沈線が描かれている。10は体部下半を中心とする破片で、平行沈線の下部に波状沈線が描かれている。

図84-11~13は頭部が無文となるものである。11は縄文原体の結束部が観察できる。14の外面は単節縄文が施されているが、内面にはハケメが観察できる。

図85は地文として縄文が施された土器を図示した。ほとんどは壺形土器の体部下半部の破片である。地文となる縄文は単節L Rの原体がほとんどである。施文方法では横位から斜位にかけて施文する傾向が見られるが、特段の規則性が認められない。11・12は条の細かいより糸文が施されている。今回の調査区ではより糸文を施す土器は極めて少ない特徴がある。

図85-13は断面が「V」字状をなす2本同時施文具を用いて、三角形を描く文様である。沈線間は地文となる縄文が磨り消されている。文様などの特徴から弥生時代中期に属すると判断した。

【北関東系の土器群】 図86はクシ歯状施文具を用いて波状文・斜格子文などの文様を描く土器群を図示した。いずれも壺形土器の破片が多いが、全体的な器形は復元できない。文様構成などは北関東地域を中心とした「十王台式土器」や「樽式土器」に類似しているが、胎土や文様の細部な

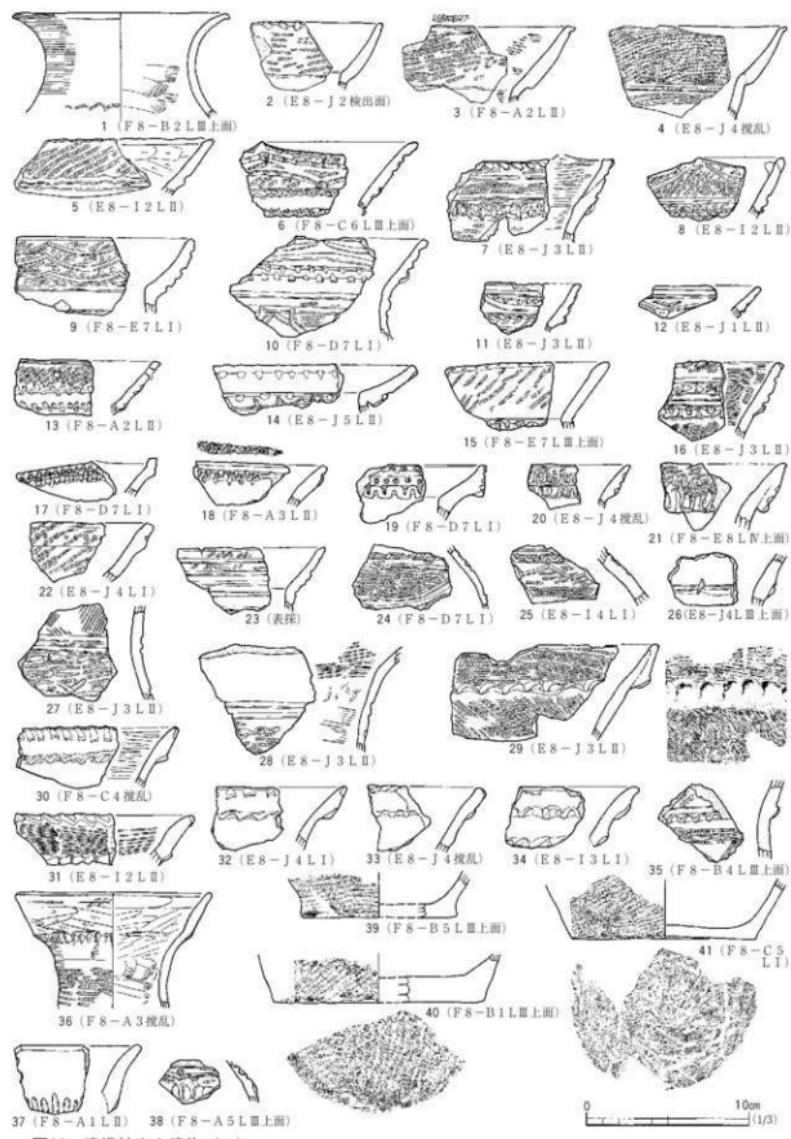


図83 遺構外出土遺物（1）

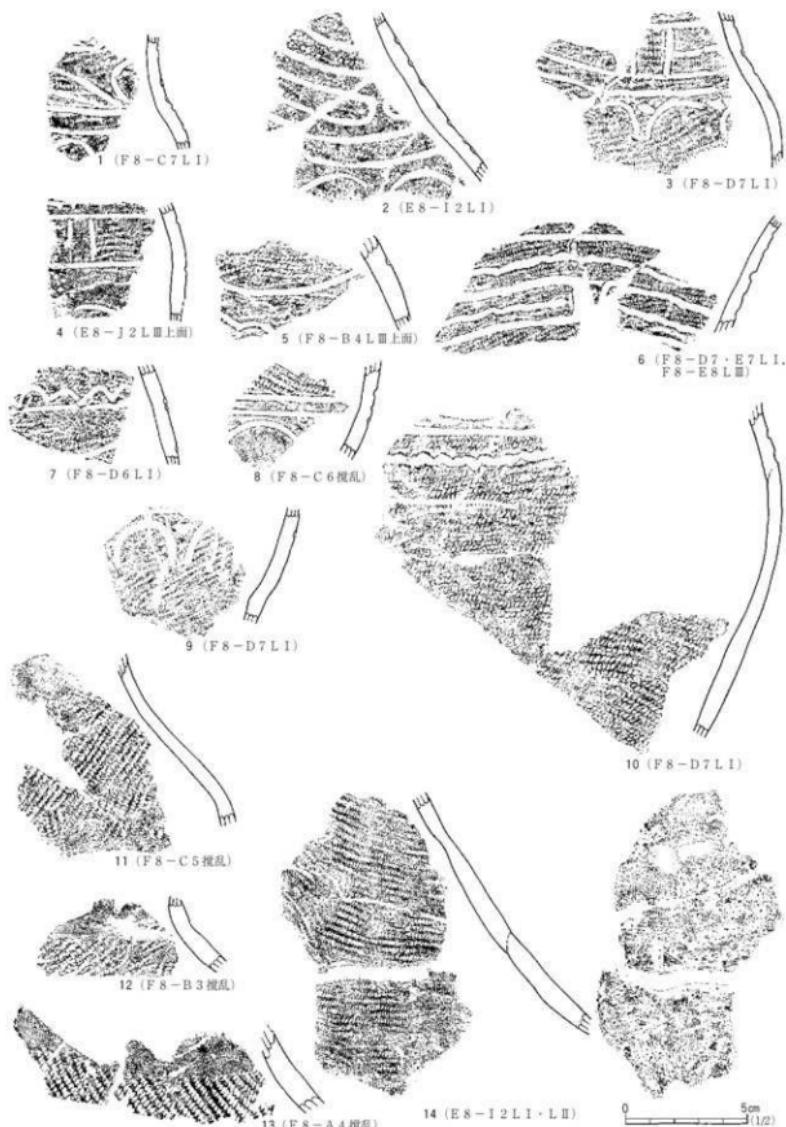


図84 遺構外出土遺物（2）



図85 遺構出土遺物（3）

どは在地土器の影響が強く残り、搬入品ではないと考えている。

4～6は口縁部に指頭押圧によるキザミが施されている。4・5は口縁部中央に波状面がめぐる。6は頸部に文様帶が描かれ、縦位に区画した内部に斜線または鋸歯状文が施されている。7は壺形土器の頸部で、成形痕としてハケメ痕が観察でき、その後に3本1組のクシ歯状施文具による文様が施されている。頸部は方形に区画された内部に波状文と細い沈線による細かい斜格子文が交互に描かれ、体部上半にはクシ歯状施文具による斜格子文が描かれている。8～11は縦横に区画された内部に波状文や鋸歯状文が描かれている。8は成形痕にハケメが観察できる。12・13は縦位に区画

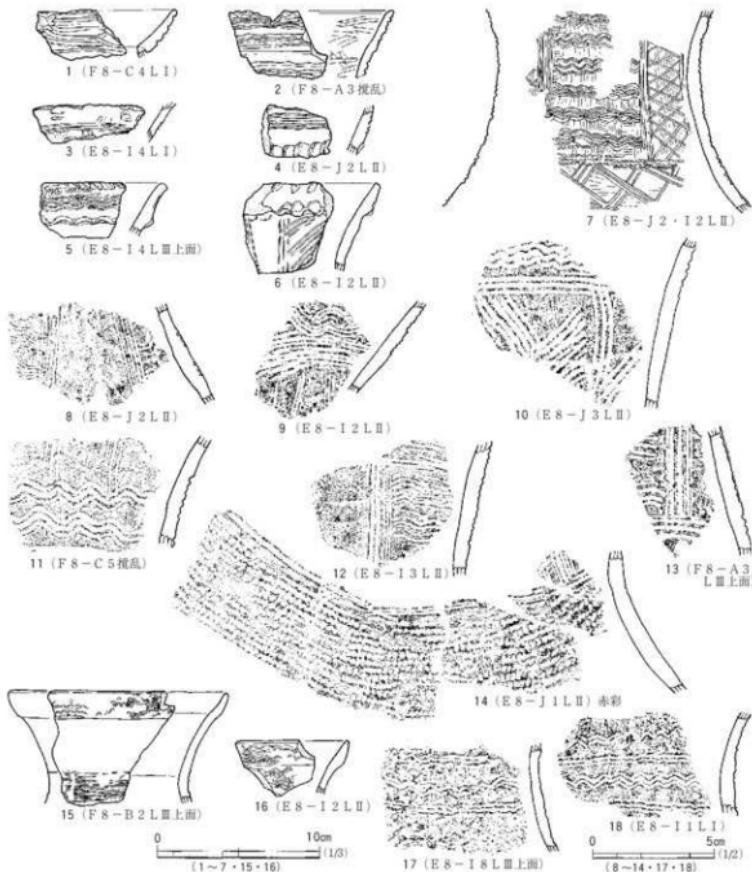


図86 遺構出土遺物（4）

された内部に波状文が密に施される土器で、5号周溝墓などに同様な特徴を持つものが見られる。

14は壺形土器の体部上半部の破片で、外面には地文として単節縄文が施されている。頸部と体部の境にはクシ歯状施文具により文様帯が描かれ、外面はベンガラを用いて赤彩している。茨城県を中心とするいわゆる十王台式土器に見られる綾杉状の糸文は全く含まれていない特徴がある。

15・16は連続波状文を施す土器で、他のクシ歯状施文具に比べ、幅が狭く浅い特徴が見られる。これらの特徴から、群馬県などを中心とした北関東地域に見られる樽式土器に類似した文様と考えられる。15は頸部が無文となり、口縁部には連続波状文、体部上半にはクシ歯状施文具を横位に引いた巻状文が施される。16は口縁部と頸部に連続波状文が描かれている。17・18は頸部破片で、横位に区画した内部に波状文が描かれている。

【北陸系土器群】 図87は有段口縁に浅い凹線がめぐり、器面調整にハケメを用いるなどのいわゆる北陸地域の弥生土器の特徴を持つ土器群を図示した。いずれも壺または壺形土器であるが、破片資料が多く、器形全体を復元できるものは出土しなかった。

1・2は口縁部の幅が短く、下端部に明瞭な段を持つ。2は口縁部に沈線状の凹線がめぐる。3・4は頸部から口縁部にかけて直線的に開き、短い口縁部が大きく開く壺形土器である。口縁部にヨコナデが施され、頸部にはハケメが観察できる。5は口縁部から体部上半にかけて遺存する壺形土器である。短く直立する頸部から、大きく外反する口縁部となる。体部は丸みを帯びる球形をなし、上半部にキザミがめぐる。内面の調整は、口縁部がミガキで仕上げられ、頸部から体部には横位のナデが施されている。6～10は短い口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、口縁部に浅い凹線が1～3条めぐる。11・12は口縁部の幅が短く、その下端部がわずかに垂下する特徴を持つ。12は口縁部から頸部にかけてヨコナデにより仕上げられている。体部ではハケメが観察できる。13・14は凹線がめぐる口縁部の下端に指頭押圧によるキザミが施されている。15は壺形土器の口縁部破片で、二重口縁状の突帶がめぐる。外面には縦位のミガキが密に施され、内面はヨコナデを施した後、口唇部付近を細かいミガキにより仕上げている。内外面ともに赤彩されている。18～20は壺形土器の体部上半部の破片で、外面にはヘラ状工具によるキザミがめぐっている。

【その他の器種】 図88は蓋・器台・高杯、その他の器種を図示した。1～6は蓋である。7・8は小型器台であろう。9～18は高杯と考えられるが、杯身と脚が接合して全容が分かるものはないため、中には器台となるものも含まれていると推察できる。

1～4は蓋と考えられる。2・4は円盤状のつまみが貼り付けられている。5・6はリング状のつまみである。5はつまみ部に2ヶ所1組の刺突が観察できる。6はつまみ部に2ヶ所一対の貫通孔が穿たれている。これらは細木または紐などを用いて、蓋の持ち手にしたと推定している。

7は小型の器台であろう。内面は赤彩されている。8は小型器台の脚部破片で、小さな受け皿が取り付くと推定される。脚部が「ハ」の字状に直線的に開き、脚部上部に円孔が1ヶ所確認できる。桜町遺跡の試掘調査においても同様な器形の器台が出土している（『県内遺跡分布11』）。

9～13は高杯または器台の杯部であろう。9・10は体部と口縁部との接合部に明瞭な段を持ち、

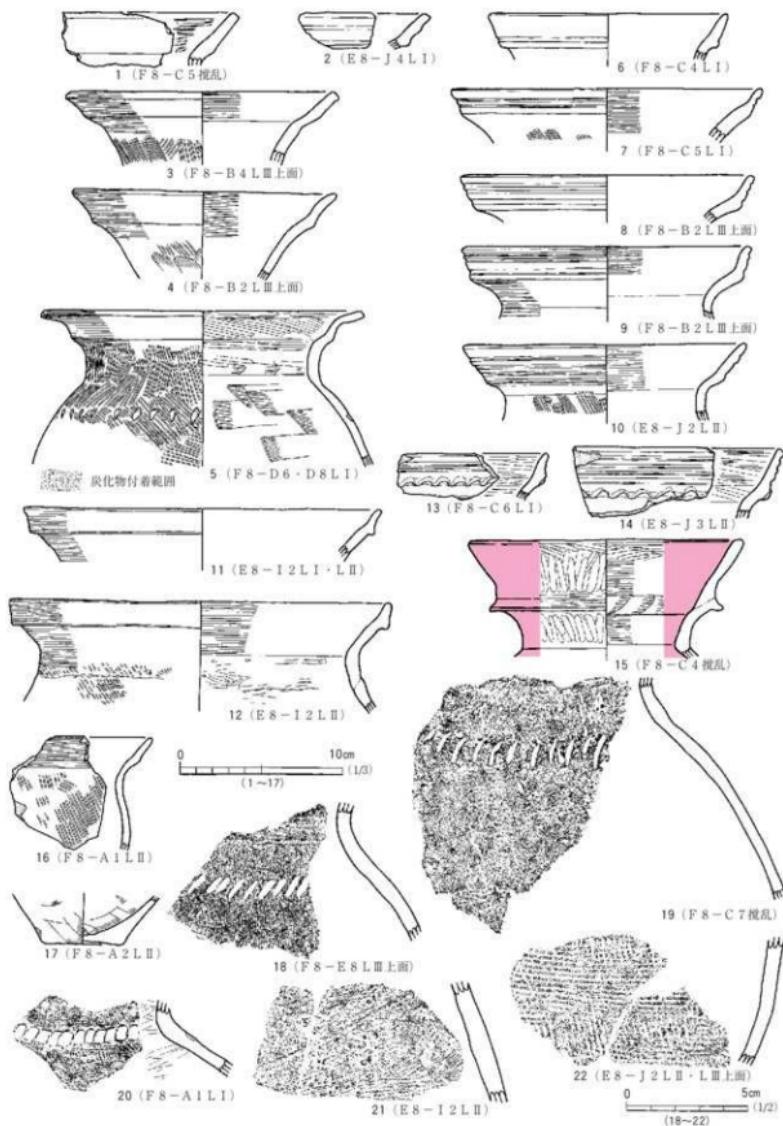


図87 遺構外出土遺物（5）

口縁部が大きく外反して開く器形である。いずれも口縁部の端部が厚く肥大し、沈線状の凹線がめぐる。9は外面に成形時のハケメを明瞭に残し、口縁部の上端部のみがヨコナデで仕上げられている。体部下半はハケメの後に部分的なミガキが施されている。内面はハケメを残し、ミガキは施されておらず、口縁部と体部の接合部分にカキトリ痕が観察できる。杯部の底面にはミガキが密に施されている。10は口縁部と体部の接合部分にキザミが施され、内外面ともミガキにより仕上げられている。11～13は杯身の中央部に明瞭な段を持ち、体部が丸みを帯びる器形である。調整痕は内外面とともにミガキを施して仕上げられている。12は段の部分にキザミが充填されている。

14～17は高杯の脚部で、細く円筒状に延びる脚から端部が大きく開く器形と推定される。14・15は継位のミガキが施されている。15は円筒状の脚部端部にキザミが確認でき、杯身の底部を取り付

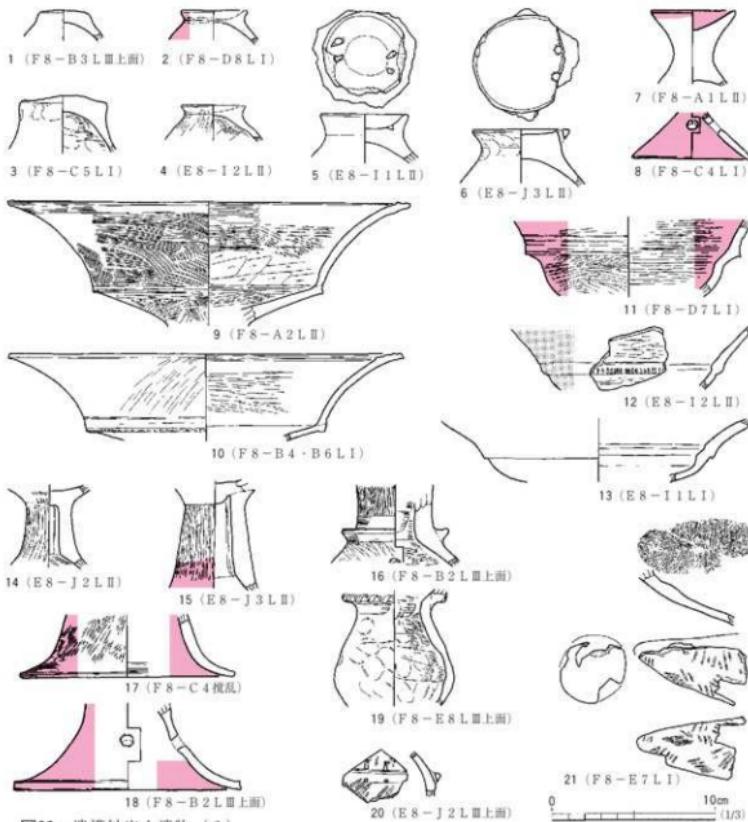


図88 遺構出土遺物（6）

ける際の接合痕と考えられる。16は円筒状の細い脚部から端部に向かって大きく開く器形であり、その屈曲部に断面が台形をなす突帯がめぐる。また脚部には円孔が3~4ヶ所確認できる。17・18は高杯または器台の脚部である。いずれも脚部の直径が大きく、「ハ」の字状に開き、外面はベンガラにより赤彩されている。17は外面にハケメを残し、端部はヨコナデで仕上げられている。18は器面が摩滅して調整痕が観察できないが、円孔が穿たれている。

19は小型の壺形土器である。器形はやや下彫れの体部から、頸部でくびれて口縁部となる。口縁部の下端部に明瞭な段を持ち、指頭押圧による交互刺突文風のキザミがめぐっている。体部外面は成形時の指頭痕を残し、頸部では横位の指ナデが観察できる。内面には指頭痕と指ナデが施されている。20は胴部の小破片であり、器形は不明である。横位に突帯が貼り付けられ、この部分に上下に貫く貫通孔が2ヶ所穿たれている。

21は円錐状に先端部が尖っている。小破片のため全体的な器形は不明であるが、ミニチュア土製品の一部、または皮袋形土器である可能性が高い。外面は摩滅のため不鮮明であるが、粒の細かいより糸文が施されている。内面には指頭痕が観察できる。

土師器（図89・90、写真84・87・88）

今回の調査で最も出土量が多いのは土師器である。土師器の出土位置は調査区全域に渡るが、特に調査区の中央部から西半部にかけて建物群や廐棄坑が密集している部分に集中する傾向が見られる。出土層位は表土中の他に、遺構検出面を薄く覆うように確認できたLIIとした黒色土中も含まれている。器種は杯・高台付杯・小甕・長胴甕・小皿などである。年代は8世紀末から10世紀代にかけての資料とみられるが、主体となる時期は9世紀中葉頃と考えられる。

図89-1は杯で、成形にロクロは用いられていない。口縁部のみの破片であるが、底部は丸底になると考えられる。外面は体部にケズリが施され、口縁部はヨコナデで仕上げられている。内面には横位のミガキが観察でき、黒色処理が施されている。今回の調査では、本遺物に見られるよう、成形にロクロが使用されていない丸底杯は極めて少なく、該期の明確な遺構も確認していない。

2~21は杯である。いずれも内面はミガキの後に黒色処理が施されている。杯では、切り離し後の体部下半から底面にかけての再調整痕に大きな違いが見られ、2~9は回転ヘラキリ、10~12・14は手持ちのヘラケズリである。基本的な器形の差異はわずかであるが、体部が丸みを帯びるものが多い。11は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。12は体部中央に小さな稜を持ち、深い杯となる。9・12・13・15~21は、体部または底部の外面に墨書きが認められる。判読できた文字では、16が大に○、9・17・18・20・21は「禾」または「水」であろう。

22は高台付杯である。体部がわずかに丸みを帯びて立ち上がり、底部に高台が貼り付けられる器形である。内面はミガキの後に黒色処理が施されている。23は高台付の皿であろう。底部に高台が貼り付けられている。内面は口縁部付近に横位ミガキ、体部に放射状のミガキが観察できる。内面には黒色処理が施されている。

24・25は内外面ともに黒色処理が施される杯で、いずれも口縁部の小破片である。24は丸みを帶

びて立ち上がる器形である。内外面とも横位ミガキが密に施されている。25は口縁部と体部の境に軽い稜を持ち、口縁部が外反して開く。体部外面にはケズリの後にミガキが見られる。口縁部はヨコナデにより仕上げられるが、成形時の指頭痕が残る。内面は成形時の指ナデ痕を消すようにミガキが施されている。口縁部は横位、体部は放射状にミガキが観察できる。

26は高台付の椀であろうか。器形は半球形の体部で、丸みを帯びて立ち上がる。底部には高台が貼り付けられ、その断面形は三角形をなす。体部の外面は横位のミガキが観察できる。体部内面には放射状のミガキの後に黒色処理が施されている。

27・28は土師質土器である。27は小皿に分類される。棒状の粘土塊からロクロの回転を利用して成形されている。底部の切り離しは回転糸切りである。28は杯である。体部の器形は丸みを帯び、中央部に軽い稜が見られる。口縁部は小さく外反する。底部は回転糸切りにより切り離されている。内面にはミガキや黒色処理が施されていない。

29・30は小型壺である。いずれも口縁部が大きく開き、口唇部が上方に引き上げられる。体部の器形は、29が胴部中央に最大形を持ち丸みを帯び、30は胴部が直線的に立ち上がり筒型をなす。

図90は土師器の長胴壺である。1は口縁部から底部にかけて約半分が遺存している。器形は体部上半から底部にかけてすぼまる。口縁部の幅は短く、頸部で「く」の字にくびれて開く。口縁端部は垂直に上方に引き出されている。調整痕は内外面とも指ナデで、それぞれ縦位に施されている。

2は口縁部の端部が上方に引き上げられるが、器厚が厚くなる特徴がある。内外面ともロクロメを明瞭に残す。3は口縁部幅が比較的長く、頸部で大きく外反する。口縁部の内外面とも中央付近に軽い稜が認められる。調整痕は内外面とも指ナデが縦位に施されている。外面には炭化物がわずかに付着している。4・5は体部上半から口縁部にかけての破片で、体部外面にタタキ具痕が、内面には横位のヘラナデが施されている。器形は体部上半がすぼまり、頸部で「く」の字にくびれている。5の口唇部は四角形に面取りされている。6は底部破片である。体部外面は縦位のケズリで整形され、内面は指ナデが観察できる。底部外面には窓印であろうか、「×」の線刻が確認できる。

灰釉陶器（図91）

今回の調査で出土した灰釉陶器は、本遺物のみである。調査区西側のE 8 - J 2グリッドから出土した。周囲は平安時代の建物群が密集する部分であり、本遺物もこれら建物跡に間連するものと考えられる。1は口縁部付近の小破片であるが、体部がやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。内外面とも釉薬が確認できる。

須恵器（図91・92、写真84）

須恵器の出土位置は、土師器の出土位置と同様に調査区西側を中心に、平安時代の建物群や廃棄坑が密集する部分に集中する傾向が見られた。出土層位は表土除去作業中に出土したものに、遺構検出面上を薄く覆うL IIとした黒色土中にも多く含まれていた。須恵器の器種は、杯・壺の破片が最も多く、蓋や長頸瓶または広口壺などの器種も見られる。

図90-2・3は蓋の口縁部端部の小破片で、全体的な器形やつまみ部の形状が分かるものは出土

していない。口縁端部が垂直的に落ちる形で、その断面形は丸く肥大するものと三角形になるものがある。4～6は杯である。器形は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、器高が比較的低くなる。底部の切り離しは、すべて回転ヘラキリである。6は底部外面に墨書きが見られ、「禾」と判読できる。7は口縁部破片のみの遺存である。杯に比べ器高が高い特徴があり、器種は深杯に分類できる。全体的な器形を復元できないが、高台が取り付くものと推定される。

8～14は長頸瓶である。8～10は口縁部から頸部にかけての破片である。8・9は口縁部下端に明瞭な段を持ち、口唇部が受口状に垂直に立ち上がる。10は頸部と体部の接合部分にリング状突帯がめぐる。このリング状突帯は大戸窯の製品に特徴的に見られるものである。11～14は体部下半から底部の破片である。体部は底部から直線的に立ち上がる。底部には高台が貼り付けられ、ロクロの回転を利用して整形されている。高台の断面形は四角形である。

15～17は壺の口縁部である。15は口縁部が短く、体部が垂直気味に立ち上がり頸部で大きく開く器形である。口縁部の断面形は三角形状に引き出されている。16・17は口縁部が長く、頸部が「く」の字状にくびれている。18は小瓶である。口縁部を欠損するが、体部の約半分が遺存している。底部は平底で、体部から頸部にかけては下膨れ気味に立ち上がる。頸部は体部にくらべてかなり細く、「く」の字状にくびれている。19は壺の底部破片で、平底のものである。

図92-1～6は須恵器壺の破片である。器面に残るタタキ具痕と内面のアテ具痕の特徴を基に分類し、その代表的なものを図示した。内面のアテ具痕の観察では、外面と同じような平行アテ具痕が最も多く、次に同心円文が多い。格子目文や松葉状文のアテ具痕は最も少ない。また外面のタタキ具痕はいずれも平行タタキ具痕であるが、中には本目が観察できるものもあった。その他にタタキ具痕の後に、いわゆる蝶状沈線文を施す破片も見られる。これらの特徴は会津若松市の大戸窯跡の製品にも観察できる。

ガラス製品（図92、写真84）

7はガラス玉で、外面に12個の房が刻まれる形状から切目玉に分類される。5号周溝墓北溝の検出作業で、F8-D7グリッドの表土中から出土した。外面には細かい列点状の気泡が紐孔を取り巻くように観察できることから、鉄芯に溶けたガラスを巻きつけて造られたと判断した。外面の房は、ガラスが冷え固まる前に鉄製ヘラなどを押し当てて刻みを加え、再び過熱して整形している。小口面に研磨痕は観察できない。ガラスの色調は透明度の低いや青みがかった緑色である。蛍光X線による成分分析の結果、鉛ガラスであることが判明した。本遺物は出土事例が少ない遺物というだけでなく、年代を特定できるような出土状況でもない。そのため本遺物の所属時期については不明であるとしかいえない。しかし弥生時代のガラス遺物をまとめた藤田等氏の研究によれば、弥生時代に属する切目玉の出土事例が指摘されている。本遺物の所属時期については、今後の類例の増加を待って改めて評価したい。

8はガラス製のおはじきである。形状は不整な椭円形を呈し、ヘラ状工具でプレスされている。ガラスの切り離し痕跡を明瞭に残すものである。

(福田)

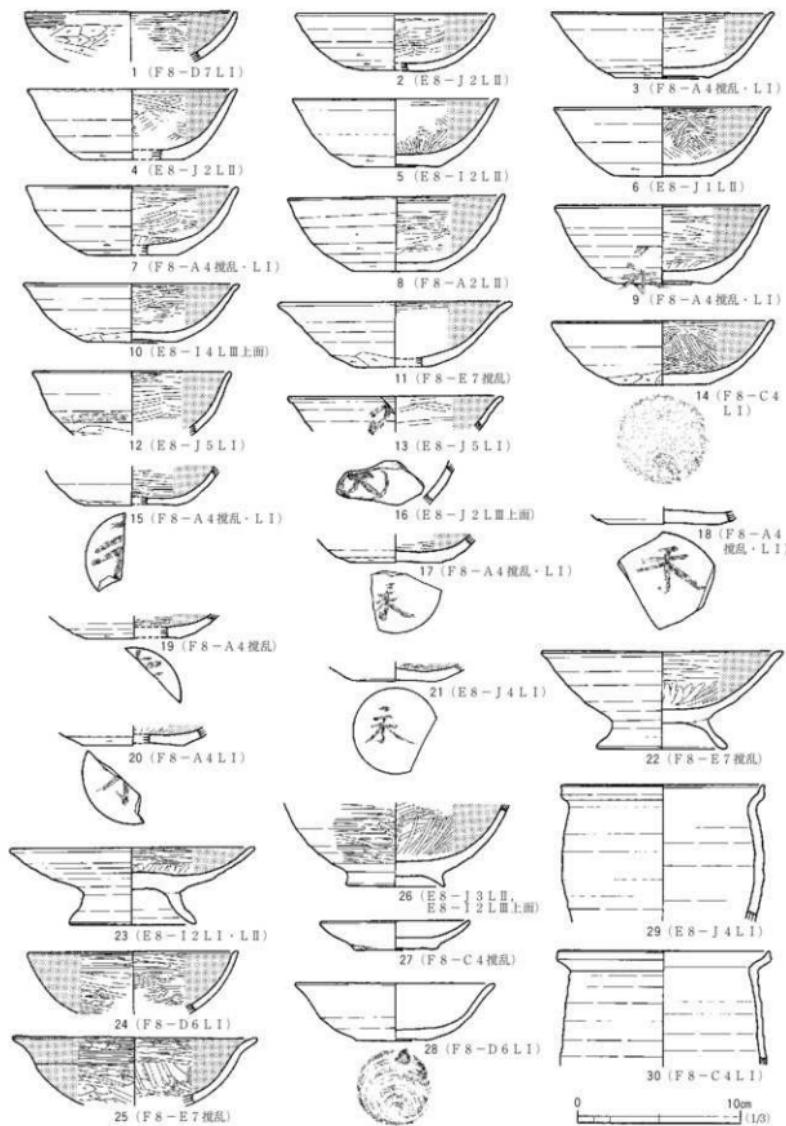


図89 遺構外出土遺物（7）

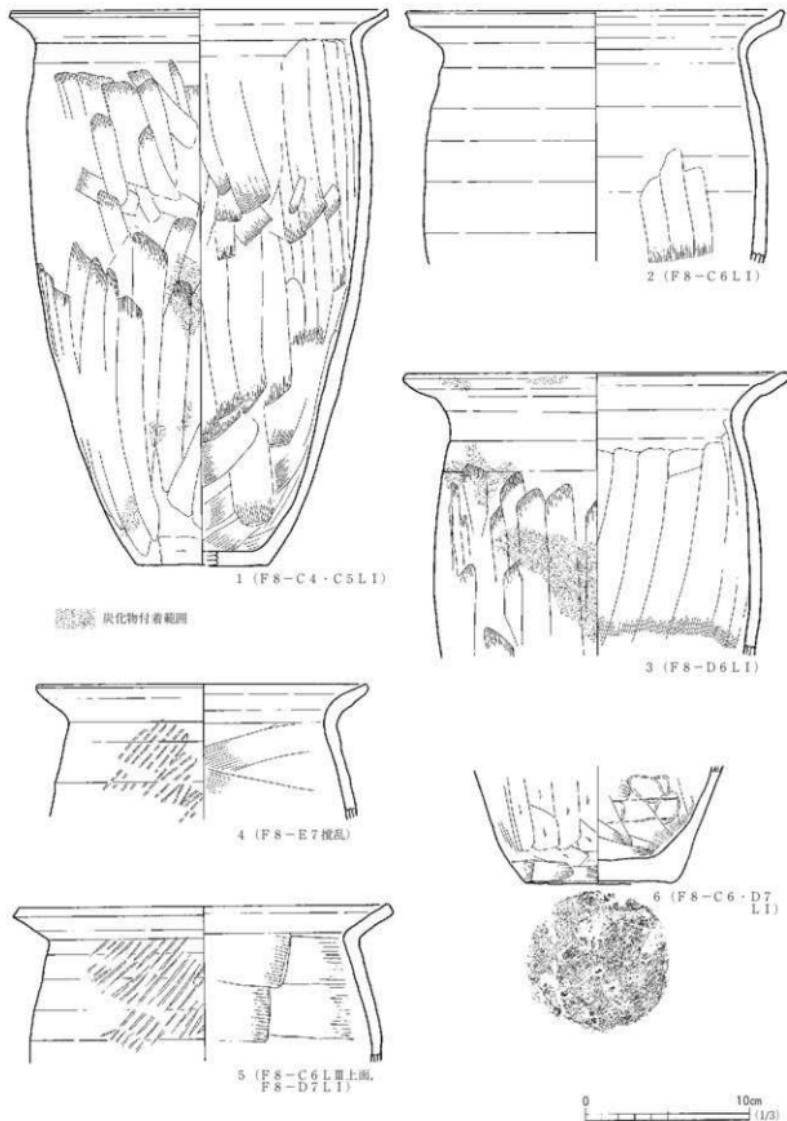


図90 遺構外出土遺物（8）

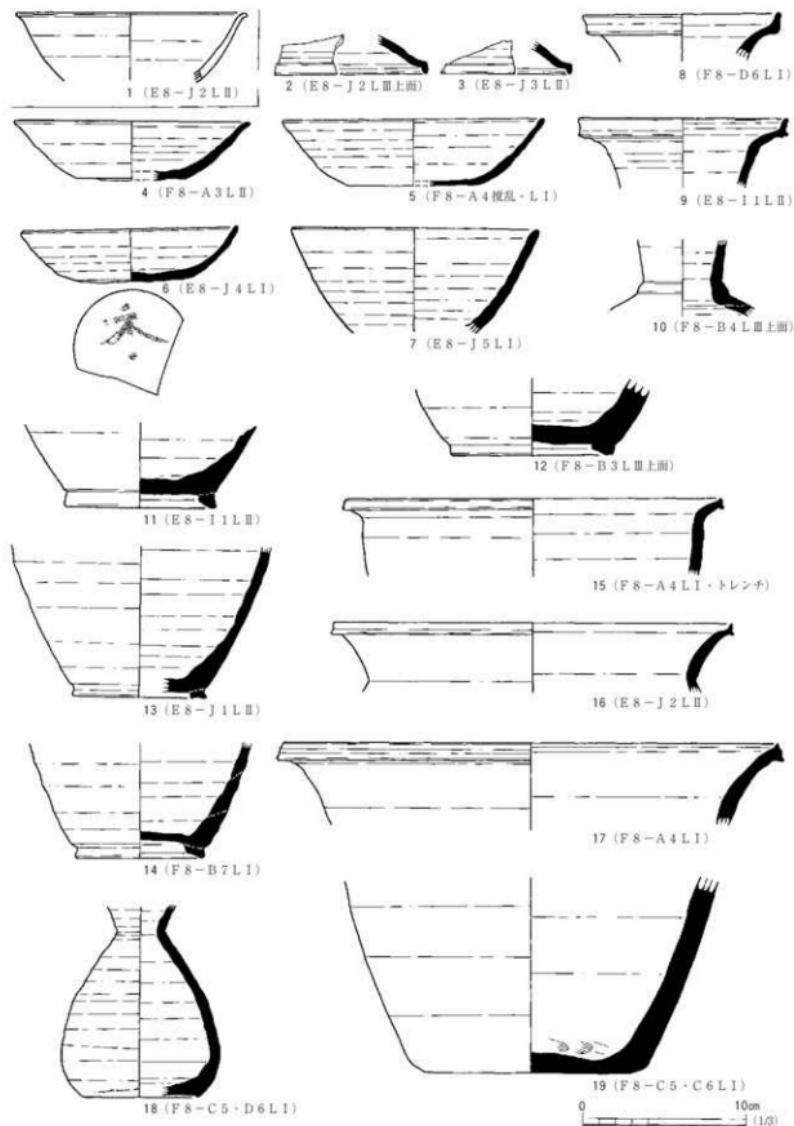


図91 遺構外出土遺物（9）

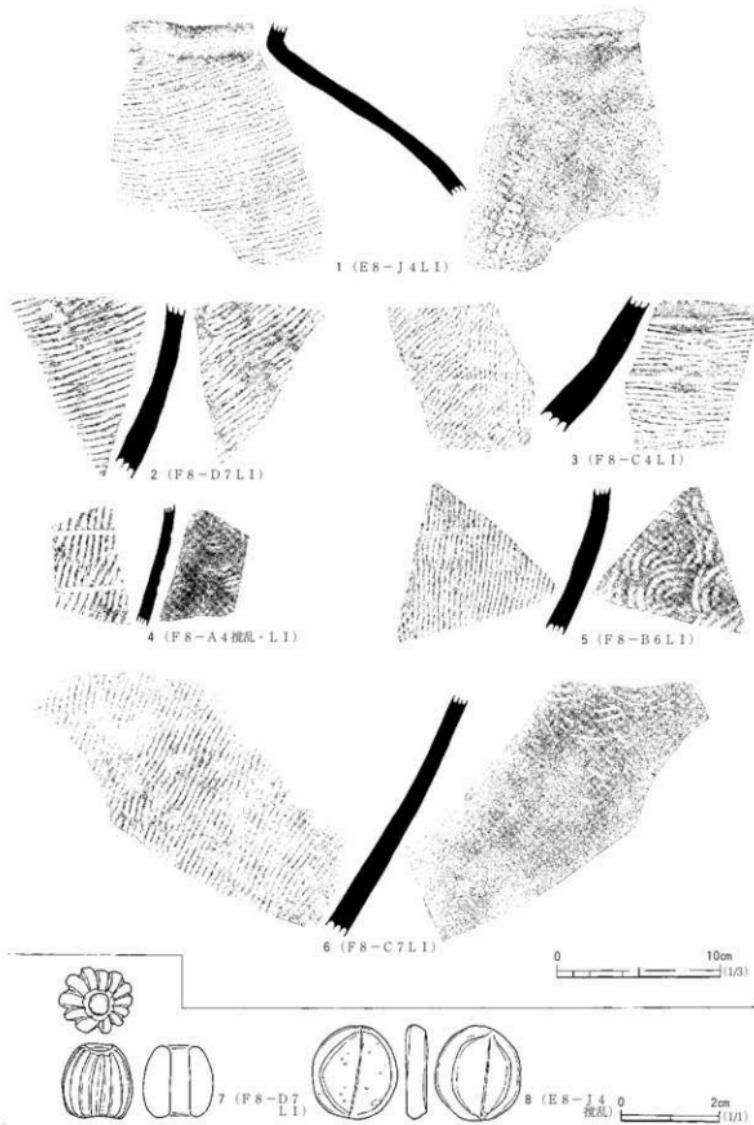


図92 遺構外出土遺物 (10)

第3章 まとめ

桜町遺跡の調査では、弥生時代後期と平安時代に属する遺構・遺物が発見された。弥生時代後期に属する遺構は、堅穴住居跡1軒、方形周溝墓7基、周溝状遺構1基と土坑が数基確認された。平安時代では堅穴状遺構4基、掘立柱建物跡17棟とその周囲に多数分布する廃棄坑が発見された。

本章では、弥生時代と平安時代の遺構や遺物についてまとめる。

1. 弥生時代の遺構と遺物について（図93～96）

弥生時代に属する遺構・遺物には、3号住居跡、方形周溝墓、周溝状遺構、2・13号土坑を確認している。その他に調査区内で弥生土器が多数出土している。ここでは上記の遺構の特徴や遺物の出土状況などをまとめる。

弥生土器の特徴

桜町遺跡から出土した弥生土器の特徴を概観すると、大きくA～C群の3つに分けることができ、その他の器種として高杯・台付壺・鉢などを括してD群とした。

A群土器：器種は壺形土器を主体とする。文様は一本引きの太い沈線、交互刺突文や指頭押圧によるキザミによって飾られたものである。地文には繩文が施される。またベンガラによって赤彩される土器も含まれる。全体的な器形が分かるものは少ないが、口縁部の形状に特徴が見られ細分できる。頸部の径が細く直立気味に立ち上がり、体部上半では肩が張り底部に向かってすぼまる器形で、口縁部が大きく開くもの。文様は口縁部下端に交互刺突文が施され、頸部や体部は連弧文・矢羽状の沈線文が描かれ、その沈線の交点に円形竹管の刺突が加えられる。体部下半は平行沈線により上半部との文様帯を区分し、その下部に下向きに開放する連弧文がめぐる。また連弧文の交点部分から底部に向かって垂下する波状沈線が描かれる（5号周溝墓）ものも認められる。

口縁部下端に軽い段を持ち、体部中央に最大径を持って頸部にいたる器形（5号周溝墓）。口唇部にキザミを施すものもある。口縁部下端には繩圧痕や指頭押圧によるキザミが充填される。沈線文による文様ではなく、地文となる繩文が施されるものを主体とする。

口縁部下端に指頭押圧を加える壺形土器の中には、B・C群土器の特徴を併せ持つものも確認できる。頸部にクシ歯状施文具により波状沈線がめぐるB群土器との折衷するもの（1号周溝墓）。口縁部に凹線状の平行沈線がめぐり、頸部にクシ歯状施文具による波状文が施されるB・C群土器との特徴と折衷するもの（2・5号周溝墓）が認められる。しかし、各群土器の特徴を併せ持つものは、出土量としては極めて少ないことを付け加えておく。

B群土器：クシ歯状施文具により文様が施される土器群である。全体的な器形が分かるものはないが施文具の特徴から大きく2つに細分できる。1つは3本以上のクシ歯状施文具を用い、クシ歯

の幅が広く、彫りが深い特徴がある。文様は頸部を縦位に区画し、その内部に連続波状文・斜格子文・鋸歯文が描かれるもの。2つは幅が狭く彫りが浅いクシ歯状施文具を用いて横位の連続波状文、押し引き文状の簾状文が施される。全体的な器形が分かることはないが、体部からすばまる頸部となり、折り返し口縁となる壺形土器と推定される。

C群土器：文様や装飾が施されずに、製作過程におけるハケメ調整痕を残す土器群である。全体的な器形を判別できるものは少ないが、口縁部の形状を中心にいくつかに細分できる。器種では壺形土器のはかに甕形土器も含まれる。

1号周溝墓の壺形土器は、口縁部下端に段を持ち、頸部がすばまる器形であり、口縁部に縄文が施されるものもある。胴部の形状は胴部中央に最大径を持ち、器形からはA群土器にも同様な特徴を持つものが認められる。甕形土器は胴部中央に最大径を持ち、やや丸みを帯びる器形で、底部直径が大きい。口縁部は幅が短く直立気味に立ち上がり、下端部に明瞭な段が形成される。

5号周溝墓の資料は破片で、壺または甕かは不明である。口縁部の形状から大きく2つに細分できる。1つは1号周溝墓の甕形土器と同様に口縁部の幅が短く、その下端部に段を持ち、わずかに垂下するものもある。2つは口縁部に段が形成され、直立気味に立ち上がる器形である。

C群土器の製作技法では、外面は器面調整時のハケメを残し、頸部などは指ナデを施しハケメを消す部分も観察できる。内面の調整痕については、体部は指ナデを主体とし、ハケメを残すものは少ない。口縁部は外面ともヨコナデで仕上げられるものが多いが、ハケメやケズリ状のカキトリ痕を残すものもある。また胎土は砂粒の他に、白色の石英粒や赤褐色微粒子を多量に含む特徴が観察できる。この含有物はA～C群のいずれにも認められ、各土器群での胎土に違いは認められない。

会津若松市屋敷遺跡の弥生土器でも同様な含有物が確認され、地元産の粘土を用いて製作されていると判断している。

D群土器：台付甕・高杯・鉢・蓋などの器種を一括した。破片資料のみで全体的な器形が分かるものはない。上記のA～C群土器に比べ出土量は極めて少ない特徴がある。

高杯は脚部の形状から2つに細分できる。短脚で、脚端部に向かって「ハ」の字状に開く器形（6号周溝状遺構）。脚部が円筒状に細長く直立するもの（4号周溝墓）。杯身は体部下端に明瞭な段を持ち、口縁部が外反して開く。口縁部の内面端部が肥大し、凹線がめぐる（5号周溝墓）。脚部に円孔が穿たれているもの（6号周溝状遺構）も認められる。長脚となる高杯の製作技法としては、円筒状の脚部に杯部を接合し、杯部の底面が脚部内面に押し込まれている。高杯は外面ともミガキにより仕上げられ、赤彩されるものもある。

台付甕は脚部のみの遺存で、脚部はハの字に開く。外面ともナデで仕上げられる。鉢は4号周溝墓から出土したものである。丸みを帯びた体部から口縁部が軽く外反して開く。調整痕にハケメを残し、口縁部はヨコナデで仕上げられる。

D群については、A～C群土器以外の器種を一括したもので、A～C群のセット関係は明確ではない。しかし、製作技法の特徴から、高杯類はC群とのセットとしてとらえられる。

遺構の特徴と遺物の出土状況

桜町遺跡の弥生時代に属する遺構群の特徴と上記したA～D群土器の出土状況をまとめ、各群土器のセット関係を確認することにする。

3号竪穴住居跡 調査区の北西側に位置し、本年度の調査では竪穴住居跡と推定されるものは3号住居跡1軒のみである。竪穴住居跡の平面形は、重複する平安時代の遺構によってかなりの改変を受けているため詳細な部分は遺存していないが、楕円形を基調とすると推定される。床面では明確な炉跡は確認できないが、床面中央部付近で焼土粒が分布し、炉跡の可能性が高い部分も確認できる。竪穴住居跡の上屋構造については、柱穴をわずかに数基確認している程度である。その配置は周壁際の近くに不規則な配置である。柱穴の深さも浅いことから、明確な上屋構造を復元することはできない。

遺物の出土状況は、いずれも床面から2～3cmほど浮いた状態で出土し、床面に明確に張り付いた状態で出土したものはない。また竪穴住居跡の堆積土は浅く単層であるが、堆積状況などから自然に埋没したものと判断した。遺物の分布状況においても、生活痕跡を残すような出土状態ではなく、小破片となった土器が散らばったような出土状況を示し、埋没過程において堆積土と共に弥生土器が混入したものと考えられるが、明確に時期をたがえる土器群が少ないとからすれば、住居跡の廃絶とそれほどの時間差なく一気に埋没したものと考えている。

3号住居跡からの出土遺物については、A～C群土器のいずれも確認できる。出土量からすればA群が最も多く、C群、B群の順で確認できる。いずれも破片資料だけであるため、明確な器種組成などを示すとは考えにくい。A群土器では交互刺突文や指頭押圧によって装飾されたものを含み、一本引きの太い沈線により連弧文などを描く。C群土器は口縁部が外反して開くものと口縁部が直立気味に立ち上がるものが見られる。周溝墓出土のC群土器に比べ壺形土器の他に、壺形土器が含まれる特徴が見られる。B群土器は資料数が少ないが、折り返し口縁となる壺形土器を含んでいる。クシ歯状施文による連続波状文などが施される。

方形周溝墓 方形周溝墓は調査区の中央部で7基確認した。その特徴は方形区画の周溝で、その四隅部が連続しないで途切れ、陸橋部となる。方形周溝墓の平面形は、東西方向が長い長方形を基調とする。規模は5号周溝墓が一辺12～14mを測る大型周溝墓で、その他の周溝墓は一辺が5～7mを測る。周溝墓の方向は、調査区中央部に位置する1～3・7・8号周溝墓、調査区東側の4・5号周溝墓の方向もそれぞれ一致している。いずれも周溝が遺存しているだけで、周溝の内部に埋葬施設や墳丘盛土は確認できない。

大型周溝墓となる5号周溝墓の東溝は、南北端となる四隅部が外側に張り出して「コ」の字形になる特徴が見られる。小型の周溝墓はいずれも直線的に延びる周溝で、四隅部が外に張り出す特徴がない。2・3・8号周溝墓は、四隅部となる周溝の端部が外側に向かって「ハ」の字状に広がるように整えられる特徴がある。周溝の壁面については、各溝とも内壁側が垂直気味に立ち上がり、外壁側は比較的緩やかな傾斜となる。

弥生土器の出土状況では、いずれも周溝内の堆積土中から出土したもので、底面から5cm程浮いた位置から出土した。底面上に張り付いた状態や底面に入為に置かれた状態で出土したものはない。周溝内の堆積土の観察から、墳丘上の置かれた葬送儀礼に用いられた土器が墳丘崩落土とともに混入したものと考えている。次に周溝内での遺物の分布状況については、1～3号周溝墓などの小型周溝墓では、明確な偏在が認められず、周溝内に土器が散乱している状況が見られる。一方大型周溝墓となる5号周溝墓は、周溝が途切れる陸橋部、特に北西隅と南東隅にまとまって出土する傾向が見られ、北東隅となる部分では遺物が極端に少なくなるなど、出土遺物の分布に偏在が見られる。

出土土器の特徴は、各周溝墓ともにA～C群土器が見られるが、出土量はA群土器がその大半を占める。土器の器種組成としては、周溝墓の遺存状態が悪く出土遺物が少なく不明な部分が多いが、比較的出土遺物が多い1・5号周溝墓を中心にその傾向を見ることにする。各群土器とも壺形土器を主体とし、C群土器には甕形土器が含まれる。その他の器種として、高杯や鉢などは極めて少なく、4・5号周溝墓から出土した数点があるだけである。このことは方形周溝墓における葬送儀礼では壺形土器を主体的に用い、高杯などを多用しない傾向が指摘される。

周溝状遺構 周溝状遺構の特徴は円形を基調とする周溝とその内部に小型建物跡を伴うもので、今回の調査区では、6号周溝状遺構の他に5・12号溝跡・15号建物跡が該当するであろう。

周溝は削平を受けて浅く途切れるため、本来周溝が全周するか否かは不明である。周溝の平面形は、南北方向に長い長楕円形をなす。周溝内法の規模は、長径が11.6m、短径が8m前後と推定される。周溝内の建物跡は整った長方形をなし、1間×1間の構造である。柱間の規模は2.2～3.6mである。建物跡の配置は周溝の中央に位置することはなく、6号周溝状遺構が南側、15号建物跡が東側に寄った場所に位置する。また建物跡の主軸方向も両者は一致していない。

周溝状遺構はいずれも浅く、その痕跡を確認した程度に止まる。そのため詳細な特徴を言及するだけの所見は得られていない。会津若松市屋敷遺跡においても、同様な円形周溝とその内部に建物跡を配置する遺構群が確認され、平地式住居と指摘されている。しかし、桜町遺跡の事例では、建物跡と周溝の配置だけを見れば、建物跡が周溝内で偏在し周溝の形状とが一致していない点が挙げられる。ここでは平地式住居の可能性を指摘するだけに止めておく。

遺物の出土状況は、周溝内部の堆積土中から出土したのみで、建物跡の掘形内部からは全く出土していない。周溝の堆積土との関係から、弥生土器は埋没過程において流入土と共に混入したものと判断している。

出土土器の特徴については、出土量が極めて少なく破片資料がほとんどで、器種組成などを表すものではない点を指摘しておく。土器群の様相からすればA～C群土器が見られる。A群土器の口縁部の特徴でも周溝墓群の土器群とも明確な違いが見出せない。さらに周溝状遺構の土器を特徴付けるものは、D群土器とした高杯の形状に顕著に見られる。高杯の脚部が短脚で、脚端部に向かって「ハ」の字状に開くものに加えて、脚部が円筒状に細長く直立し、杯身は体部下端に明瞭な段を

持ち、口縁部が外反して開く高杯が含まれる。

まとめ

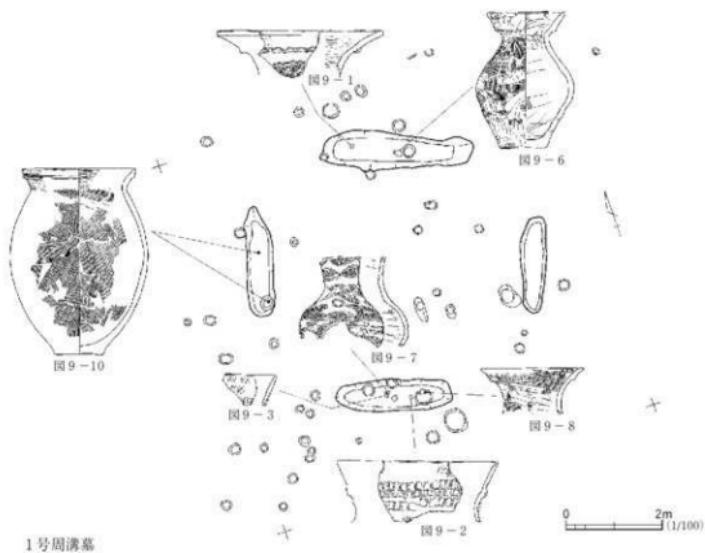
桜町遺跡で確認できた弥生時代の遺構・遺物について簡単にまとめると、①弥生土器は在地土器の他に北陸地方や北関東地方の土器の特徴を持つ、②方形周溝墓7基を確認した2点が挙げられる。

①桜町遺跡から出土した弥生土器はA～C群土器に大別できる。そのうちA群とした天王山式を受け継ぐ在地土器が主体を占める。土器の器形の特徴は、口縁部が長く直線的に開き、頸部が細く直立気味に立ち上がる壺形土器も認められる。文様では交互刺突文がくずれ、指頭押圧によるキザミが充填されるものが多く含んでいる点など、明らかに天王山式に後続する特徴を持つ。B群土器には北関東地域の十王台式に類似し、クシ描きで縱位区画、その内部に斜格子文・波状文などを施す一群がある。体部下半の地文繩文では、十王台式に見られる綾衫状に入るより糸文が見られないなどの相違点が見られる。その他に樽式に類似したクシ描きの波状文・簾状文が施されたものは会津坂下町館ノ内遺跡3号住居跡などにも見られる。C群土器の1号周溝墓出土土器で見られる器形は、A群土器に類似するが、外面調整にハケメを残す。壺形土器では、体部が丸くその中央部に最大形を持ち底径が大きい特徴がある。口縁部などの形状はいわゆる法仏式に類似したものと認められるが、北陸系土器では体部上半に最大径を持ち、底径が小さくすぼまる形状とは明らかに異なる。さらに口縁部に凹線がめぐるものに、指頭押圧のキザミが充填される土器が見られA群土器と折衷する土器もあり、B群土器と同様に在地化の影響を示している。

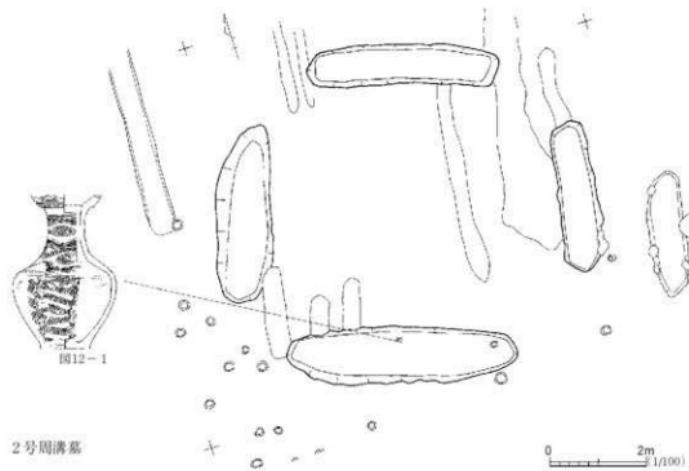
桜町遺跡の土器群の年代については、会津地域の天王山式に属する能登遺跡や和泉遺跡の土器群よりは新しい特徴を持つことから、それに統く屋敷遺跡とほぼ同時期と捉え、弥生時代後期後半頃を中心とする時期と考えている。

②方形周溝墓はいずれも周溝が全周せずに四隅部が途切れ陸橋部となる特徴があり、一辺12～14mの大型周溝墓1基を含んでいる。桜町遺跡の周辺で該期の方形周溝墓は会津若松市屋敷遺跡、塩川町館ノ内遺跡で確認されている。これらと本遺跡の方形周溝墓を比較すると、屋敷遺跡の周溝墓は、方形を基調とする平面形で、陸橋部は周溝の中央に寄った位置である。館ノ内遺跡では2基の方形周溝墓が確認され、四方をめぐる周溝が四隅部で途切れて湾曲する特徴があり、四隅突出型墳丘墓と指摘される。両遺跡ともに異なる周溝墓の形態を示している。

桜町遺跡の方形周溝墓については、出土遺物の特徴から館ノ内遺跡2号周溝墓に先行すると考えられる。おおむね会津地域でも屋敷遺跡と同様に最古段階に属する方形周溝墓と考えている。桜町遺跡の出土土器が示すように、伝統的な在地土器の他に北関東・北陸地域の土器の特徴を持つものが認められることから、会津地域との交流が十分想定できよう。このことは本遺跡で確認できた方形周溝墓の成立とも深く関わる点であり、他地域の土器に影響された土器群の出現と併せて、方形周溝墓に依拠する葬送儀礼が受容されて成立した可能性を指摘しておく。しかし今回の調査では方形周溝墓の他に集落跡の全容までは解明できていないため、方形周溝墓の成立に関わるより細密な社会的変化の状況については、次年度以降の調査の進捗を待って改めて結論付けたい。



1号周溝墓



2号周溝墓

図93 1・2号周溝墓遺物出土状況

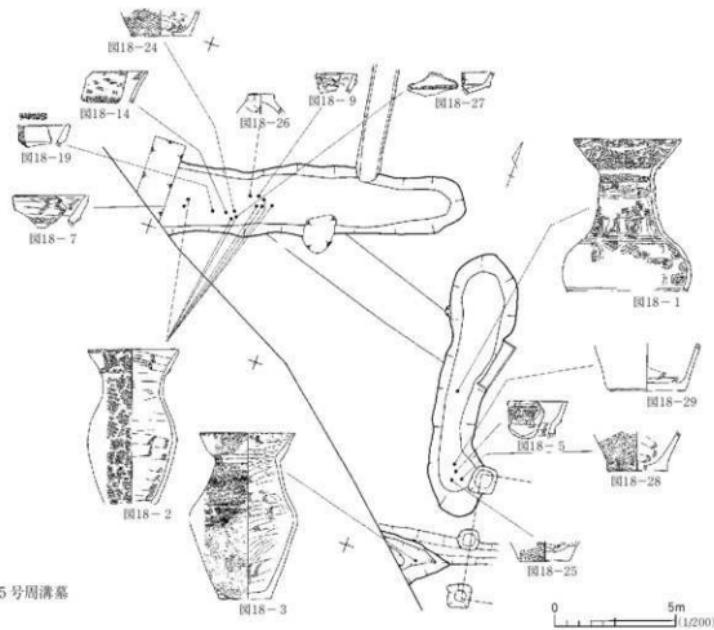
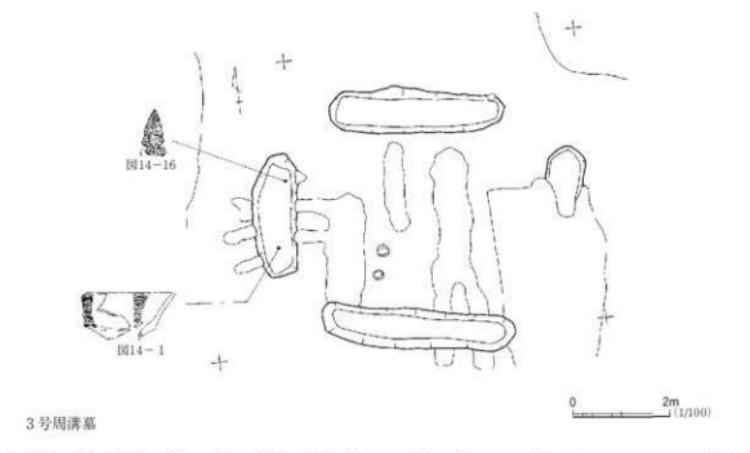


図94 3・5号周溝墓遺物出土状況

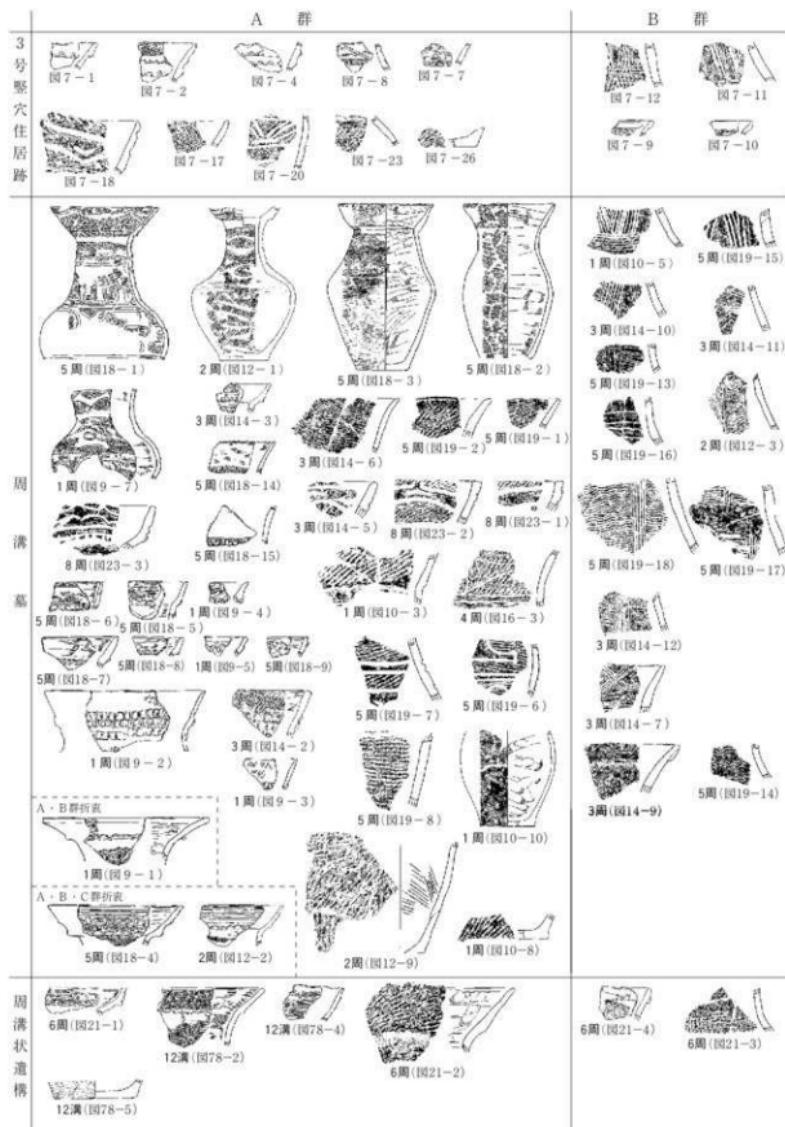


図95 桜町遺跡出土弥生土器（1）

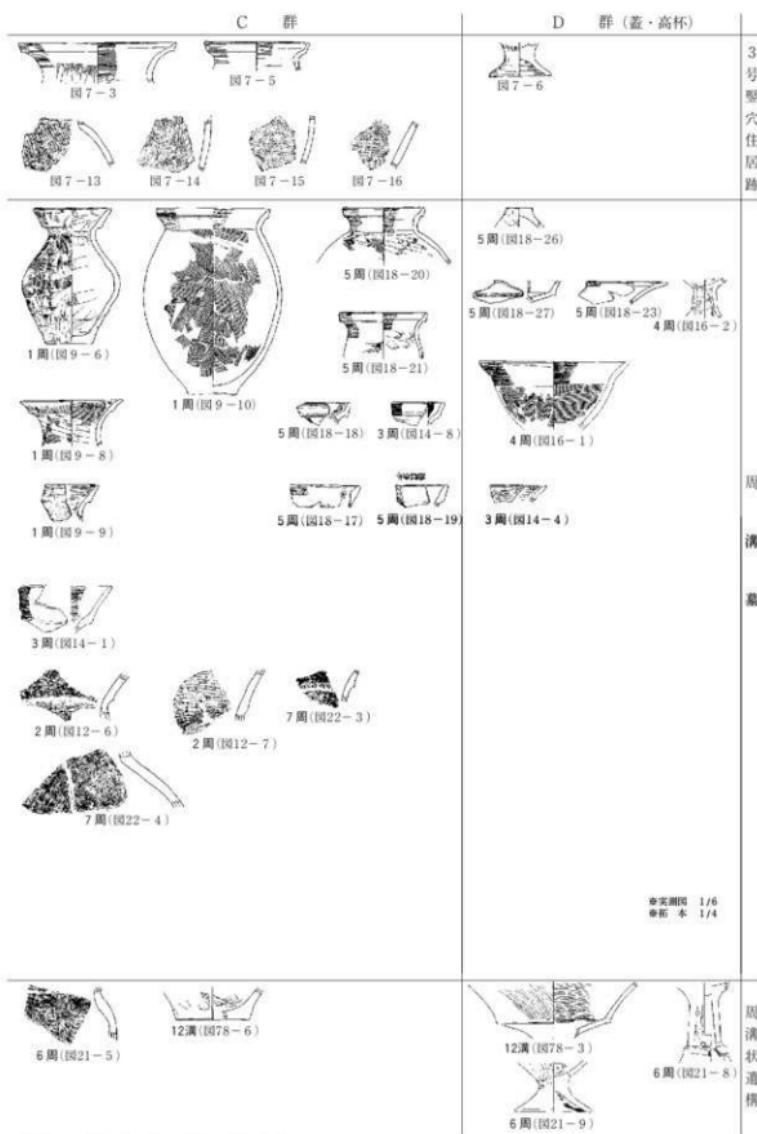


図96 桜町遺跡出土弥生土器（2）

2. 平安時代の遺構と遺物について

桜町遺跡の平安時代の遺構は、掘立柱建物を主体とした集落と考えられる。建物跡の周囲には、当時の生活ゴミ等を投棄したいわゆる廃棄坑が数多く分布し、その他には井戸跡と推定されるものも確認できた。本遺跡の建物群の時期は9世紀代を中心として10世紀前半頃まで継続すると考えられるが、建物跡の柱穴などからの出土遺物が少ないだけでなく、年代を特定するものも少ない。ここでは重複関係や建物配置などから建物群の年代を考えている。

本遺跡で中心的な建物跡は、同所で2回の建て替えが確認された8・10・16号建物跡である。規模は南北2間・東西3間で、真北から東に傾く。周辺の建物跡との関係では、これらの建物以外は建て替え痕跡がなく、同時期に存在していたかは不明であるが、南側に6・12号建物跡、東側では5・9号建物跡と方向が一致する。また建物跡の方向が西に傾く、2号・7号建物跡との関係は不明である。次の時期は柱穴の規模が小さくなる建物群で、13・14・18号建物跡が該当する。南北方向が長い建物群になる傾向が見られる。

堅穴状遺構は平面形が方形を基調としているが、底面上にカマドなどの生活痕跡がなく、柱穴が規則的に配置せずに堅穴住居跡とは考えにくい特徴がある。土層観察すると遺構廃絶時に底面付近は人為的に埋め戻されたようで、土器類はわずかに見られる程度である。一方、上層部は土器類が多量に含まれる黒色土が覆っている。堅穴状遺構の本来の性格を特定するものはないが、生活空間ではなく、簡素な上屋を伴う半地下状の倉庫のような機能をはたしていたのではないかと推定している。さらに廃絶後は土器類などを投棄する廃棄坑として利用されていたことがわかる。また建物跡周辺の土坑については、多くが円形を基調とした浅い穴で、土器類を多量に混入して人為的に埋め戻されたものが多い。性格はいわゆる廃棄坑と考えているが、建物跡との明確なセット関係は不明である。6号土坑は本遺跡で中心的な建物の一つである8・10・16号建物跡の東側に位置しており、素掘りの井戸跡と推定している。出土遺物としては9世紀中葉～後葉頃を中心として10世紀前半頃の土器も見られる。上記の建物跡とのセット関係から、おおよその存続期間が推定できよう。

遺物は堅穴状遺構・土坑から出土したものが多く、そのうち本遺跡の性格を特徴づけるものに、墨書き土器や円面鏡などがある。墨書き土器で最も多いものが「禾」であり、これは穀などの意味であろう。水田農業に依拠する集落のあり方を裏付ける根拠の一つになるであろう。

近年の周辺遺跡の発掘調査の成果から、桜町遺跡の東約1km、瀬川の対岸に位置する河東町郡山遺跡では「會」と記された墨書き土器が出土し、奈良・平安時代の会津郡衙（会津欄）の推定地とされている。また会津盆地内における集落跡の調査も進み、阿賀川とそれに注ぎ込む中小河川流域に位置し、掘立柱建物跡を中心とした集落が営まれる状況が分かってきている。本遺跡の事例では、会津郡衙を対岸に望み、瀬川流域の水田稲作に依拠する集落の一つと考えられる。

今回の調査は桜町遺跡の1次調査で、平成17年度以降の調査が予定されている。今後の調査が進むことで平安時代の集落の様相が、より明らかになるであろう。

(福 田)

写 真 図 版

第 1 編 荒 屋 敷 遺 跡 (4 次)



1 4次調査区全景



2 4次調査区遠景（北西から）

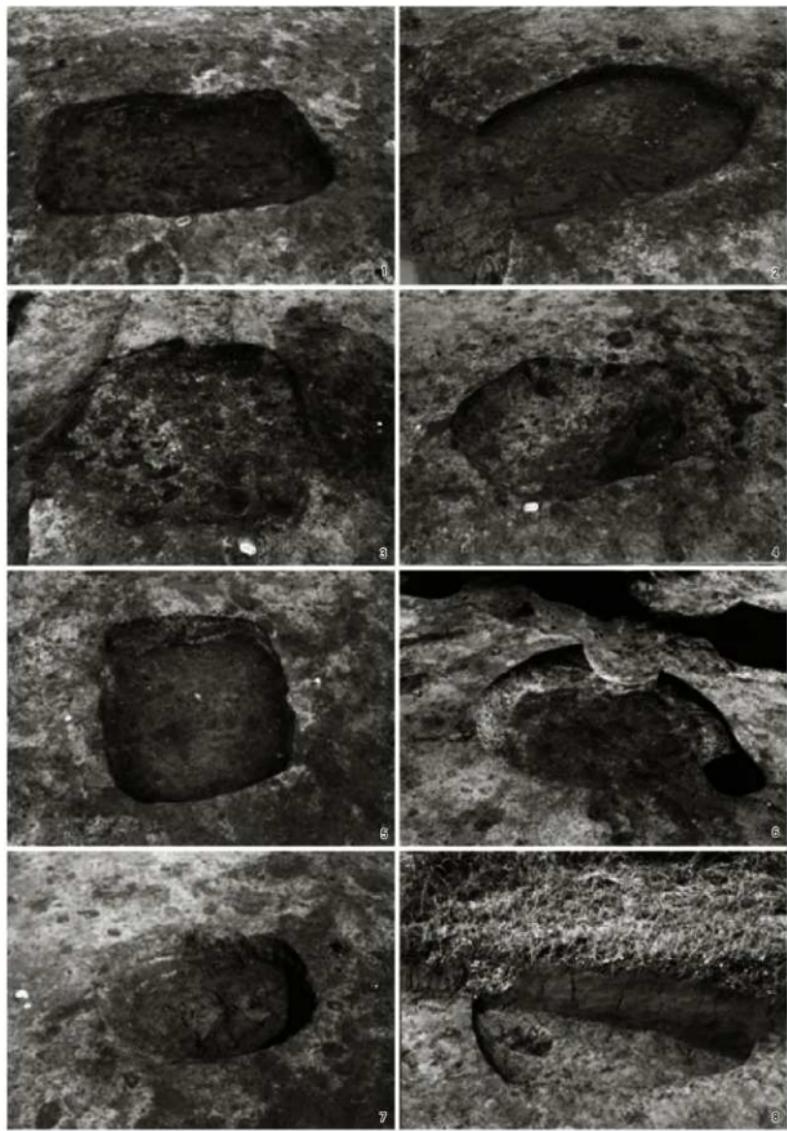


3 4次調査区遠景（南から）



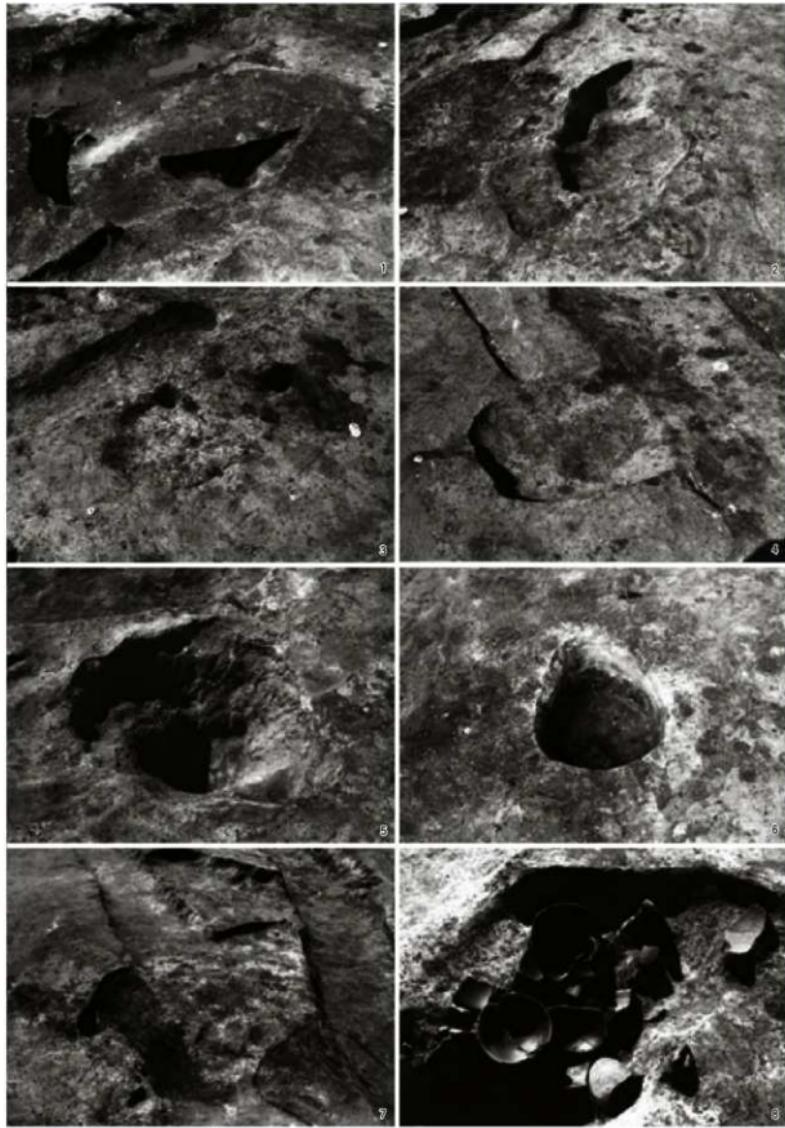
4 基本土層

1 E41グリッド周辺（西から） 2 A32グリッド周辺（東から）



5 84~91号土坑

- 1 84号土坑全貌 (南から) 2 85号土坑全貌 (南から)
3 86号土坑全貌 (南から) 4 87号土坑全貌 (南から)
5 88号土坑全貌 (南から) 6 89号土坑全貌 (北西から)
7 90号土坑全貌 (南から) 8 91号土坑全貌 (東から)

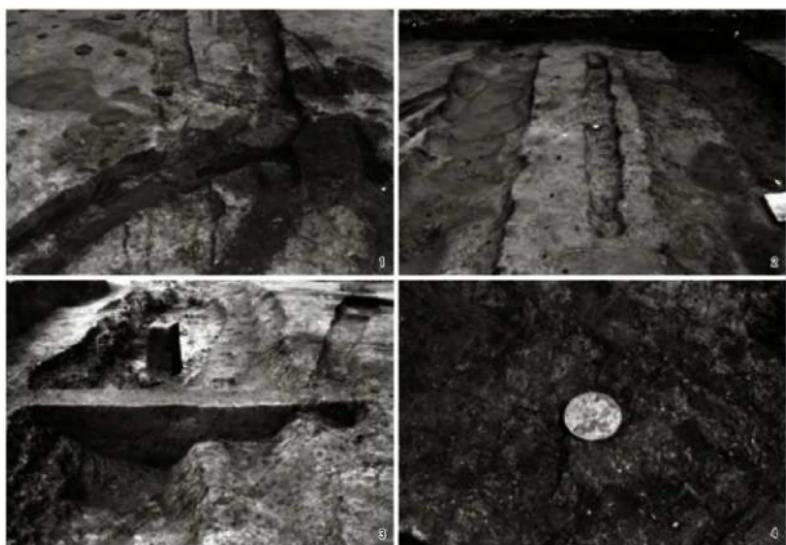


6 92~98号土坑

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 92号土坑全貌（南から） | 2 93号土坑全貌（南から） |
| 3 94号土坑全貌（東から） | 4 95号土坑全貌（南西から） |
| 5 96号土坑全貌（南東から） | 6 98号土坑全貌（南から） |
| 7 97号土坑全貌（北東から） | 8 97号土坑出土器出土状況（北から） |



7 59~65号溝跡全景



8 59~63号溝跡

1 59号溝跡全景（南から）
2 60号溝跡全景（南から）
3 61号~63号溝跡土層断面（南から）
4 63号溝跡銅鏡出土状況（南から）



9 61・64号溝跡

1 61号溝跡北半全景（南から）
2 61号溝跡南半全景（南から）
3 64号溝跡全景（西から）
4 64号溝跡土層断面（東から）



10 3号性格不明遺構全景（南から）

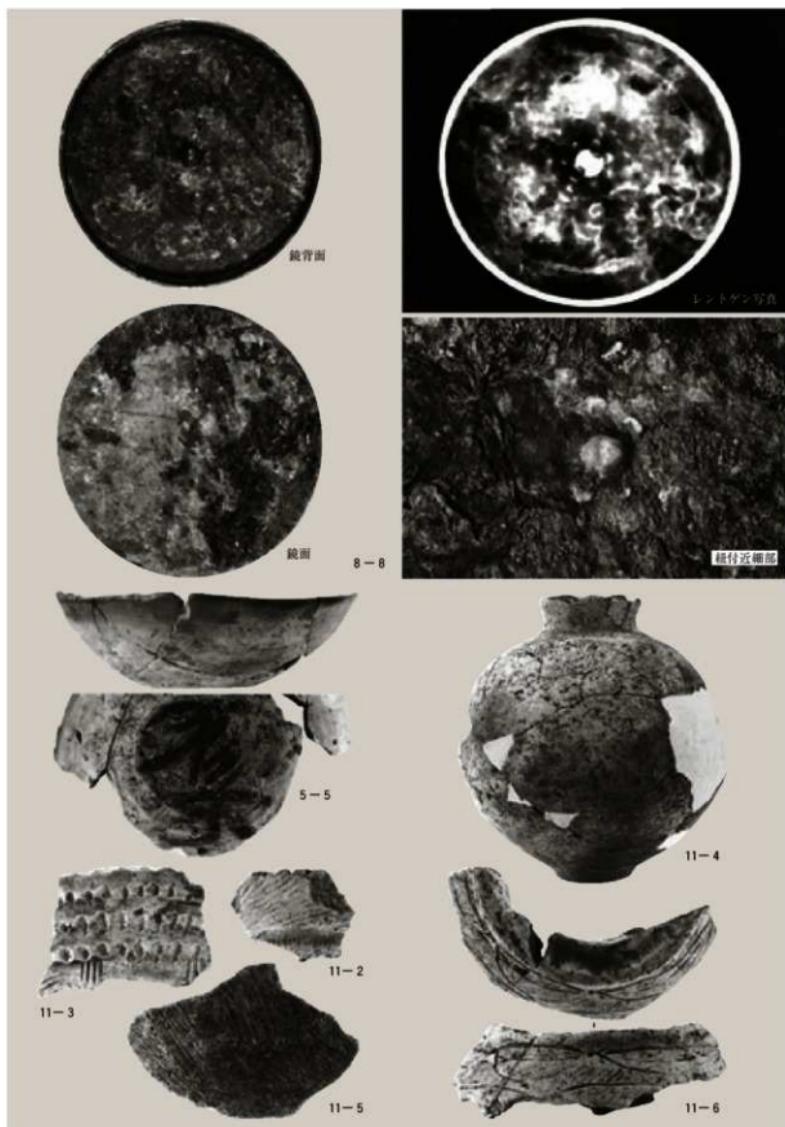


11 4号性格不明遺構全景（北から）



12 4号性格不明遺構細部

1 西漢検出（南から）
2 西漢土層断面（南から）
3 西漢土器出土状況（北東から）
4 北漢全景（北から）



13 出土遺物

写 真 図 版

第 2 編 桜 町 遺 跡 (1 次)



1 桜町遺跡遠景（西から）



2 1次調査区全景



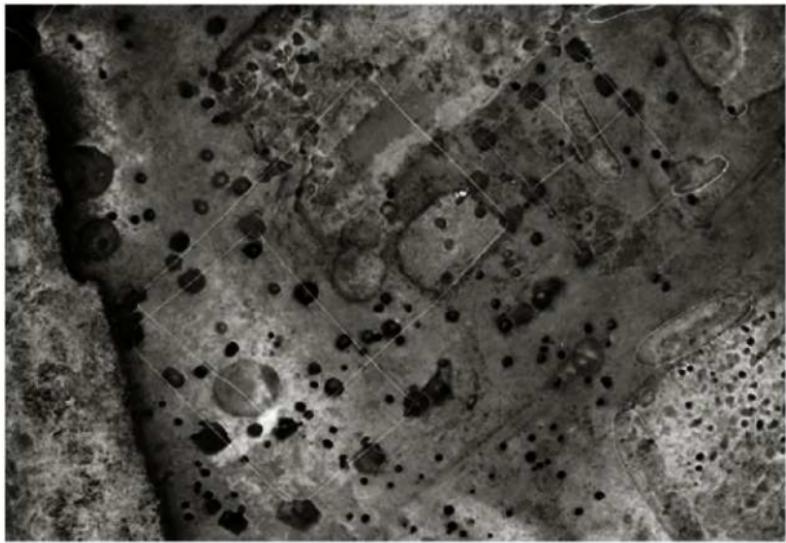
3 調査区中央部全景



4 調査区南西部全景



5 調査区西端部全景



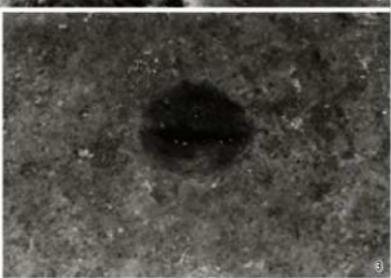
6 調査区中央部、5・9・13号掘立柱建物跡周辺全景



7 3号竪穴住居跡全景（南から）



8 3号竪穴住居跡細部



1 土層断面（南から）
2 掘出（南から） 3 P1 土層断面（東から）



9 1号周溝墓全景（南西から）

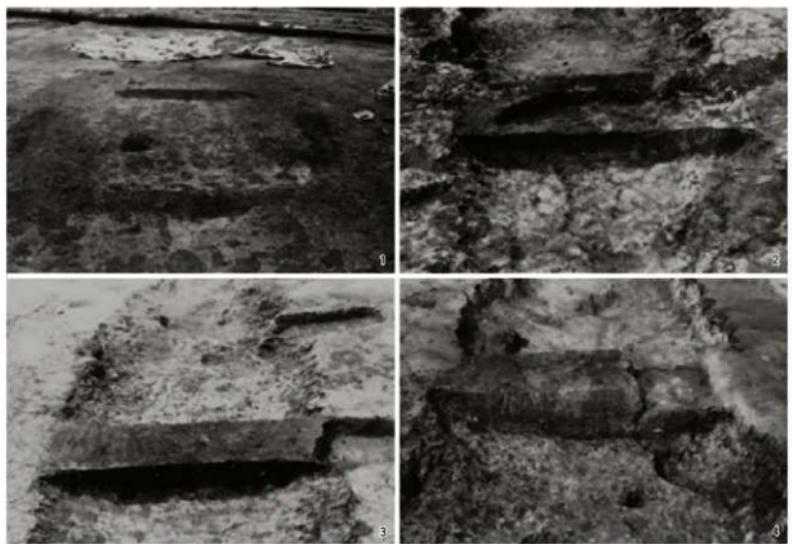


10 1号周溝墓細部

1 検出（南から） 2 北溝土層断面（東から）
3 南溝土層断面（東から） 4 南溝土器出土状況（北から）



11 2号周溝墓全景（北東から）



12 2号周溝墓細部

1 棚出（北から） 2 北溝土層断面（東から）
3 南溝土層断面（東から） 4 西溝土層断面（南から）



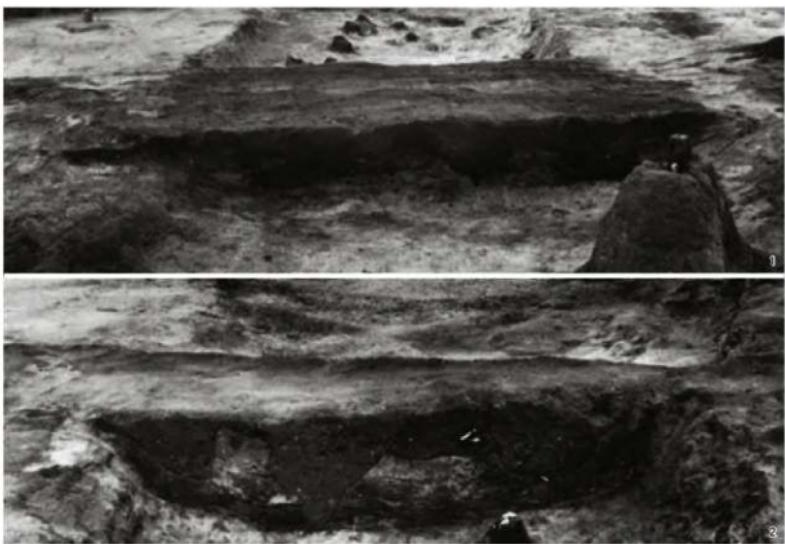
13 3号周溝墓全景（東から）



14 4号周溝墓全景（南東から）



15 5号周溝墓全景（北西から）



16 5号周溝墓土層断面

1 北溝土層断面（北東から）
2 東溝土層断面（南から）



17 5号周溝墓細部

1 南溝土層断面（北東から）
2 検出（北西から） 3 東溝土器出土状況（北から）



18 6号周溝状遺構全景（南から）



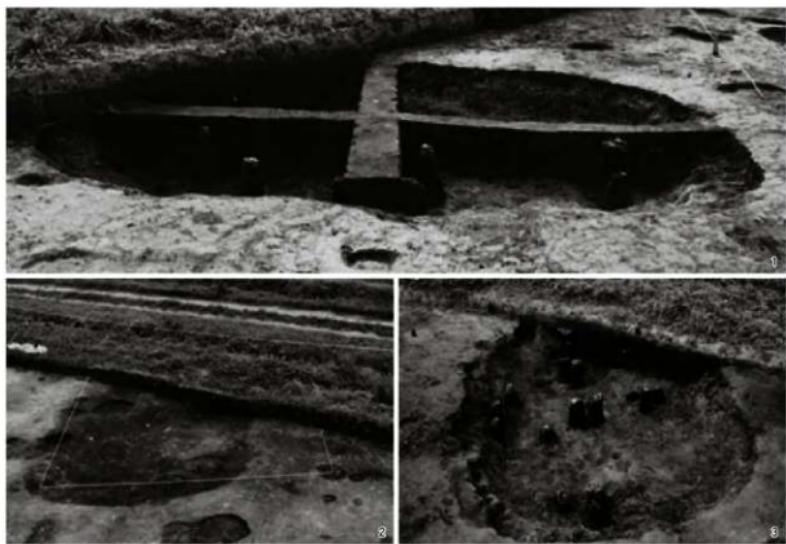
19 7号周溝墓全景（南西から）



20 8号周溝墓全景（北から）



21 1号竖穴状遺構全景（東から）

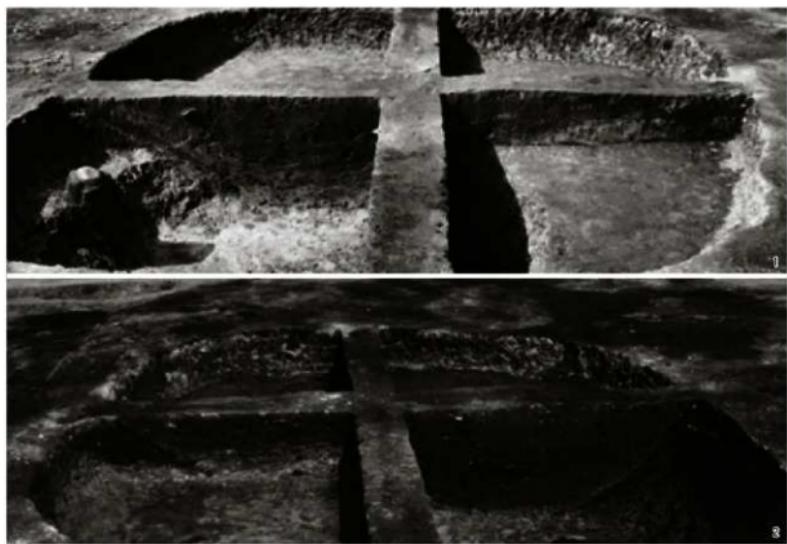


22 1号竖穴状遺構細部

1 土堀断面（東から）
2 掘出（北から） 3 遺物出土状況（北から）



23 2号竪穴状遺構全景（南西から）



24 2号竪穴状遺構土層断面

1 東西土層断面（南から）
2 開北土層断面（西から）



25 4号竪穴状遺構全景（北から）



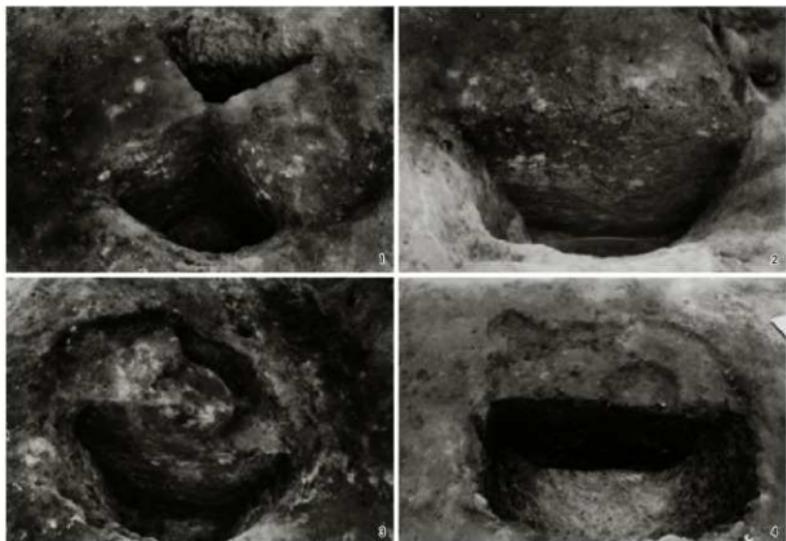
26 5号竪穴状遺構全景（南から）



27 1号掘立柱建物跡全景（北から）



28 2号掘立柱建物跡全景（東から）

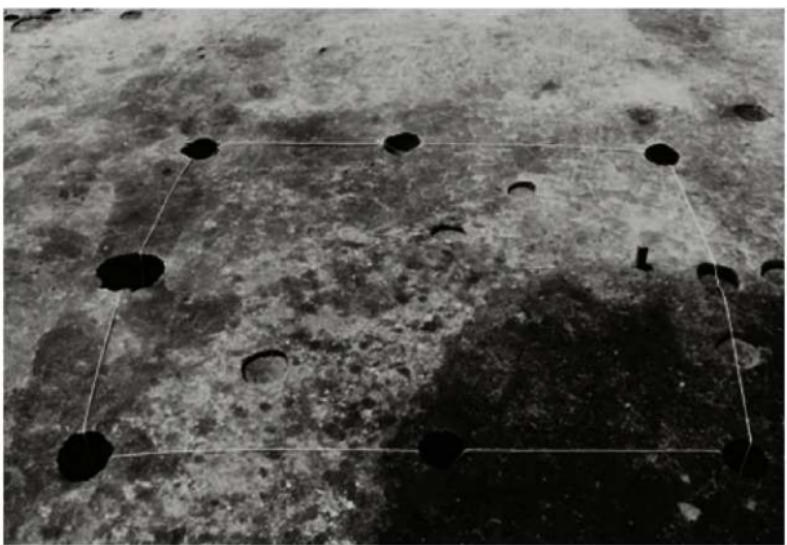


29 2号掘立柱建物跡細部

1 P1 土層断面（北西から） 2 P2 土層断面（西から）
3 P6 土層断面（西から） 4 P10 土層断面（南から）



30 3号掘立柱建物跡検出（東から）



31 4号掘立柱建物跡全景（北から）



32 5号掘立柱建物跡全景（南から）



33 6号掘立柱建物跡全景（南から）



34 7号掘立柱建物跡全景（東から）



35 8・10・14・16号掘立柱建物跡全景（南から）



36 10号掘立柱建物跡全景（南から）



37 8号掘立柱建物跡細部

1 検出（南から）
2 P 1 土層断面（南東から）
3 P 3 土層断面（南から）
4 P 4 土層断面（北西から）



38 11号掘立柱建物跡全景（北から）



39 9号掘立柱建物跡全景（北から）



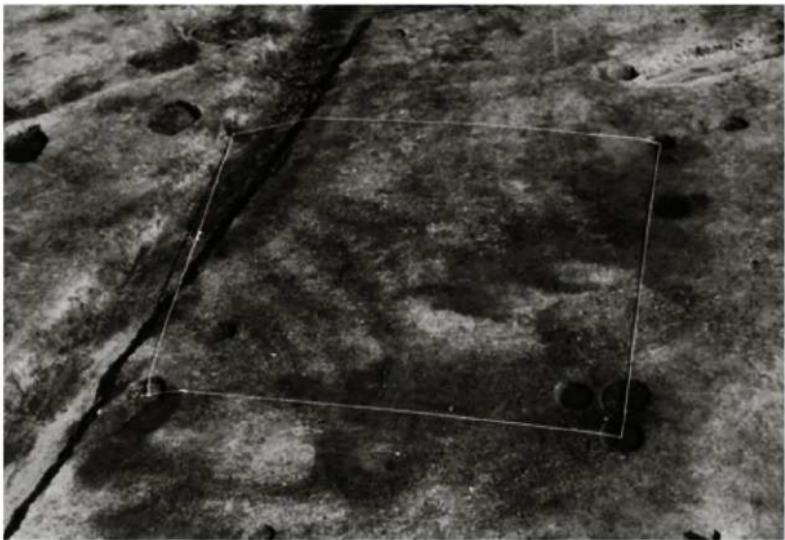
40 12号掘立柱建物跡全景（東から）



41 13号掘立柱建物跡全景（東から）



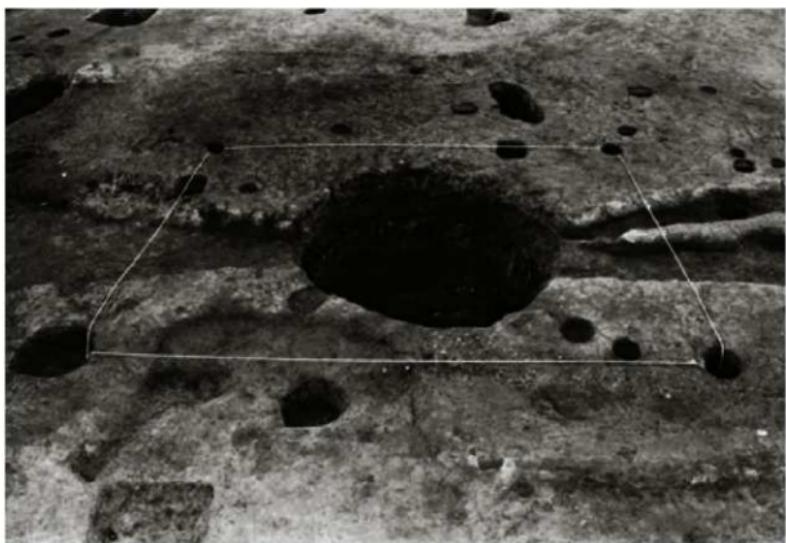
42 14号掘立柱建物跡全景（南から）



43 15号掘立柱建物跡全景（西から）



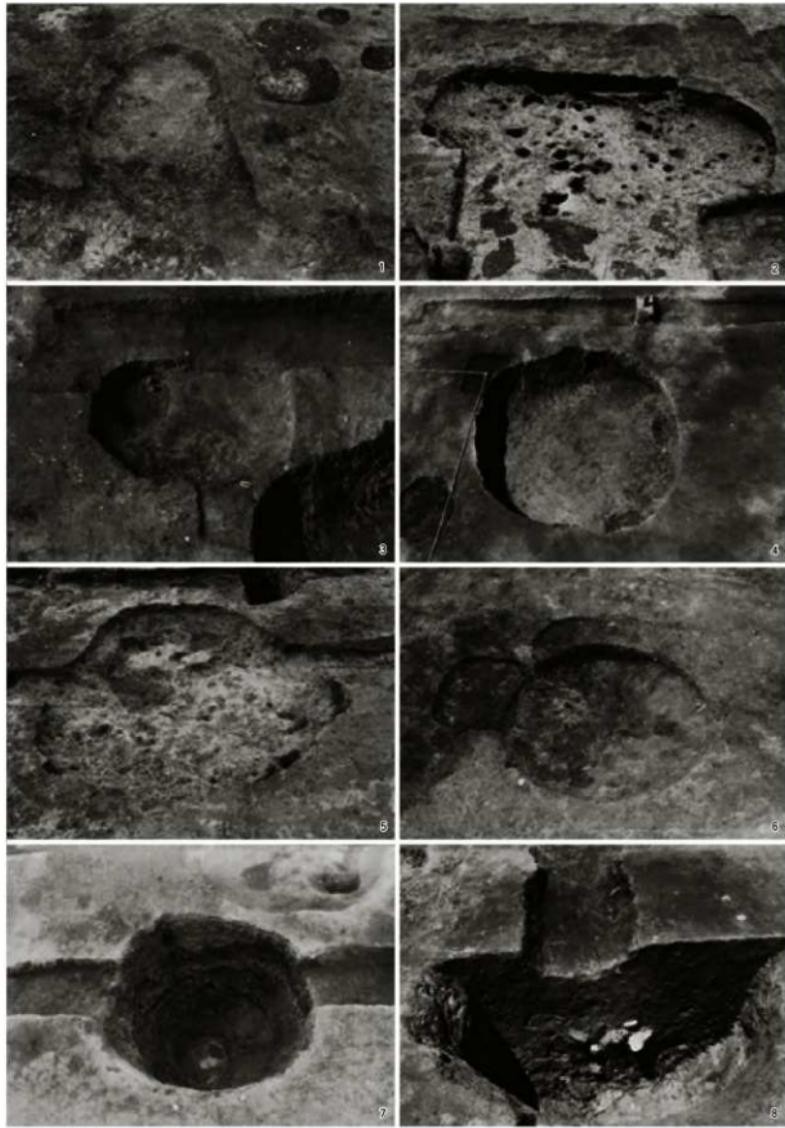
44 16号掘立柱建物跡全景（南から）



45 17号掘立柱建物跡全景（南から）

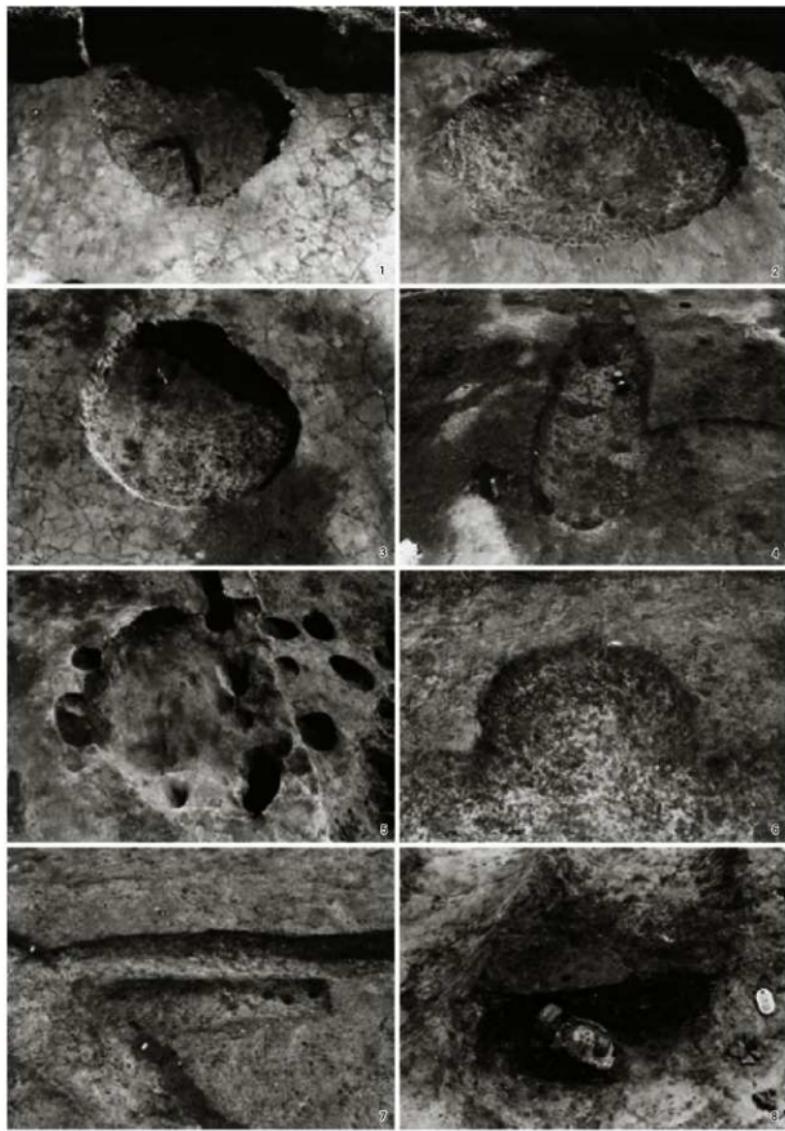


46 18号掘立柱建物跡全景（上空から）



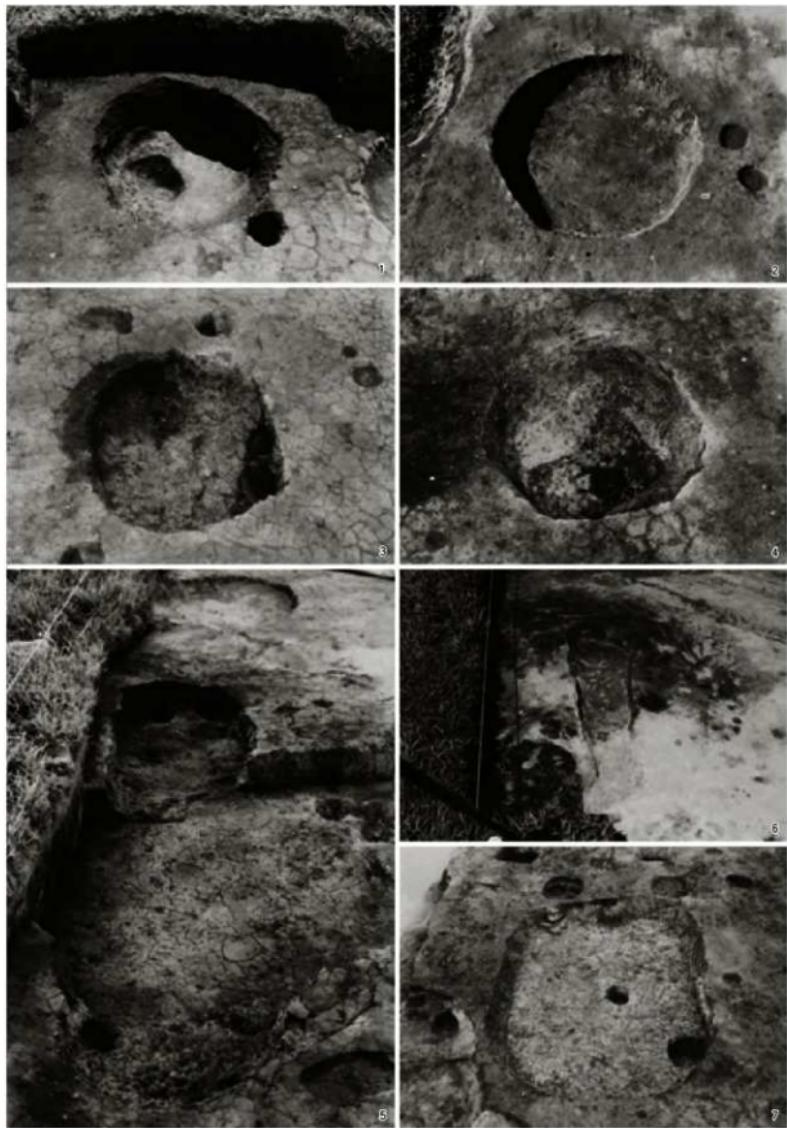
47 1 ~ 7 号土坑

1 1号土坑全景(南から) 2 2号土坑全景(北から)
 3 3号土坑全景(南から) 4 4号土坑全景(南から)
 5 5号土坑全景(南から) 6 7号土坑全景(南から)
 7 6号土坑全景(北から) 8 6号土坑土壁断面(東から)



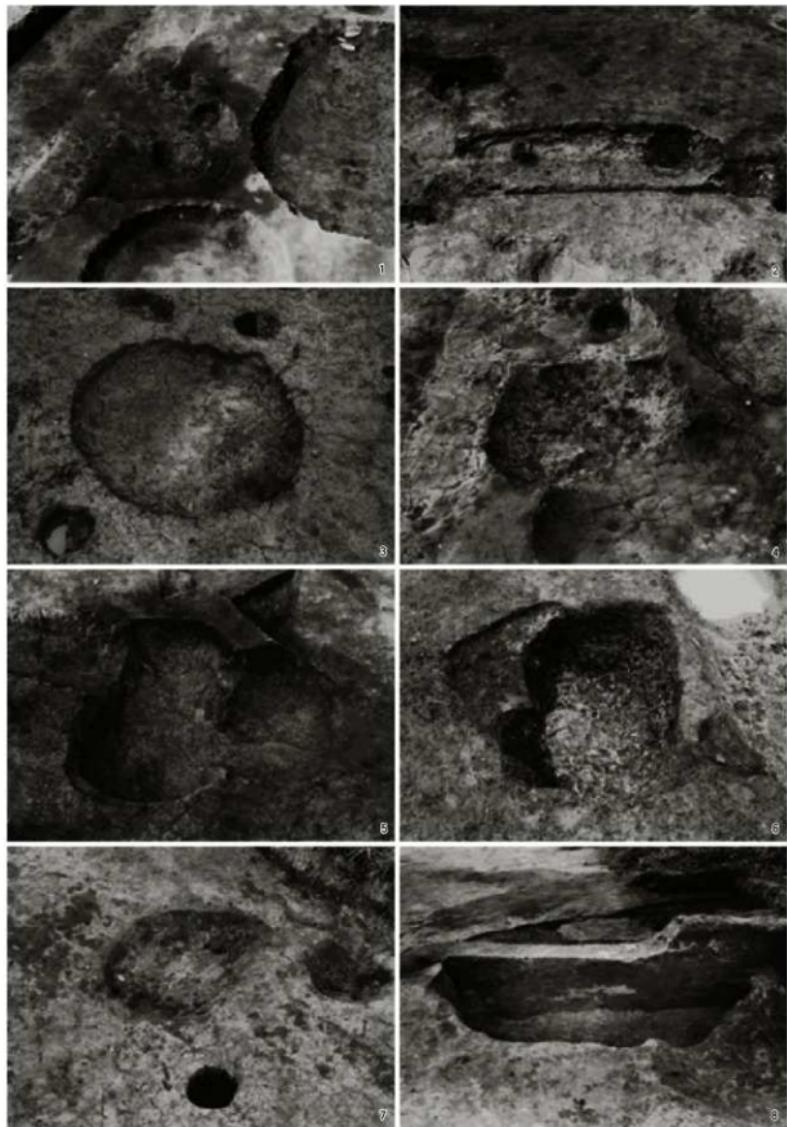
48 8 ~14号土坑

- | | |
|----------------|------------------|
| 1 8号土坑全貌（北から） | 2 9号土坑全貌（北から） |
| 3 10号土坑全貌（北から） | 4 11号土坑全貌（東から） |
| 5 12号土坑全貌（北から） | 6 14号土坑全貌（南西から） |
| 7 13号土坑全貌（南から） | 8 13号土坑出土状況（西から） |



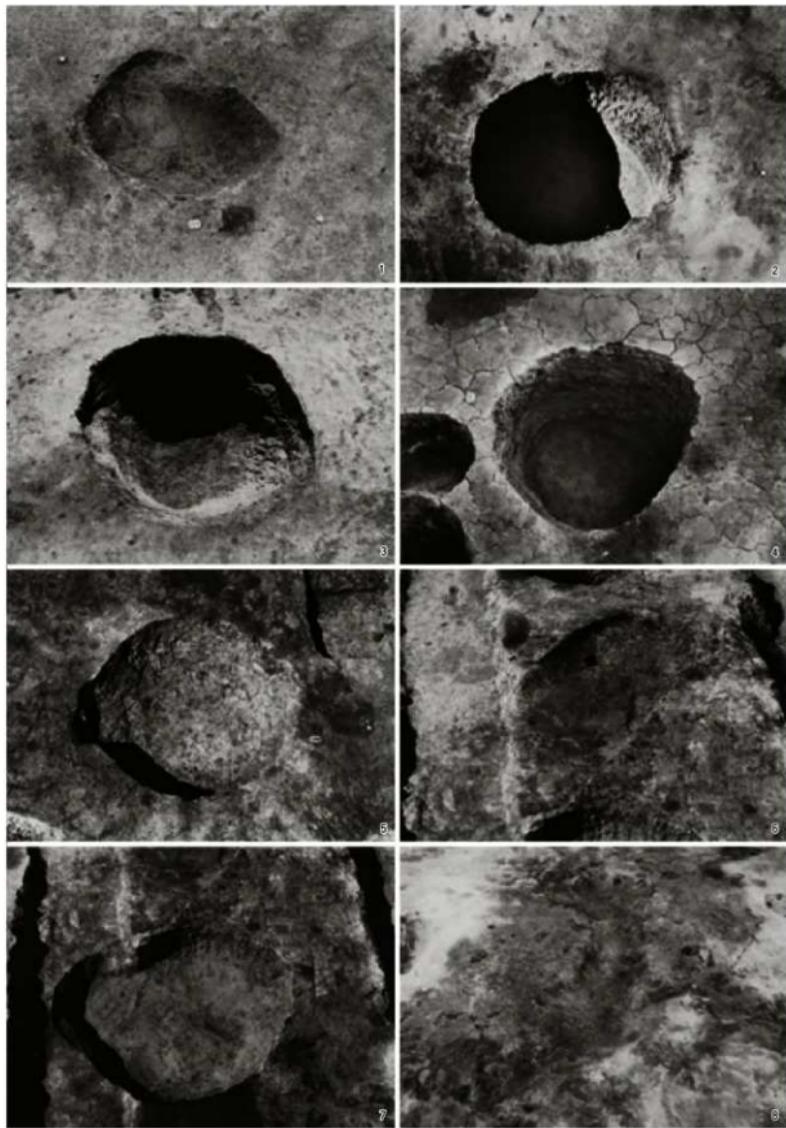
49 16～22号土坑

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 16号土坑全貌（北から） | 2 17号土坑全貌（南から） |
| 3 18号土坑全貌（東から） | 4 20号土坑全貌（東から） |
| 5 19号土坑全貌（東から） | 6 21号土坑全貌（東から） |
| | 7 22号土坑全貌（南から） |



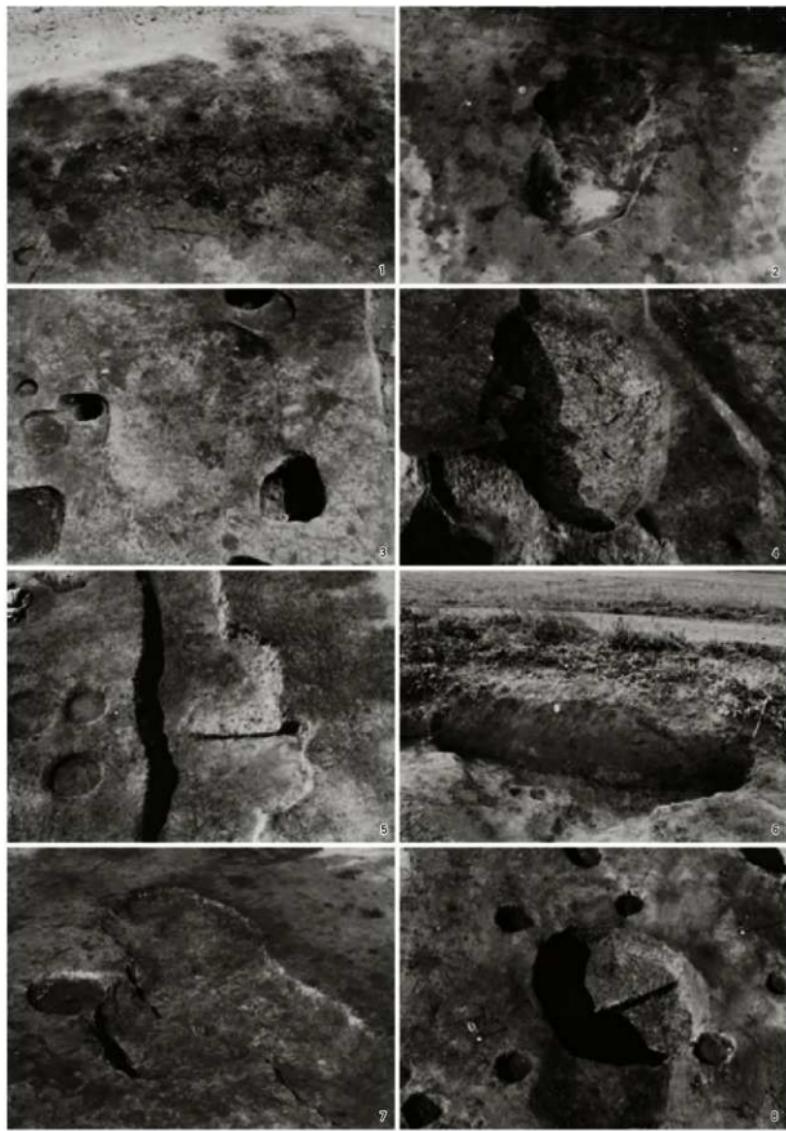
50 23~31号土坑

- 1 23号土坑全景（南から）
 2 24号土坑全景（東から）
 3 25号土坑全景（東から）
 4 26号土坑全景（南から）
 5 27・28号土坑全景（南から）
 6 29号土坑全景（東から）
 7 30号土坑全景（南から）
 8 31号土坑土壁断面（東から）



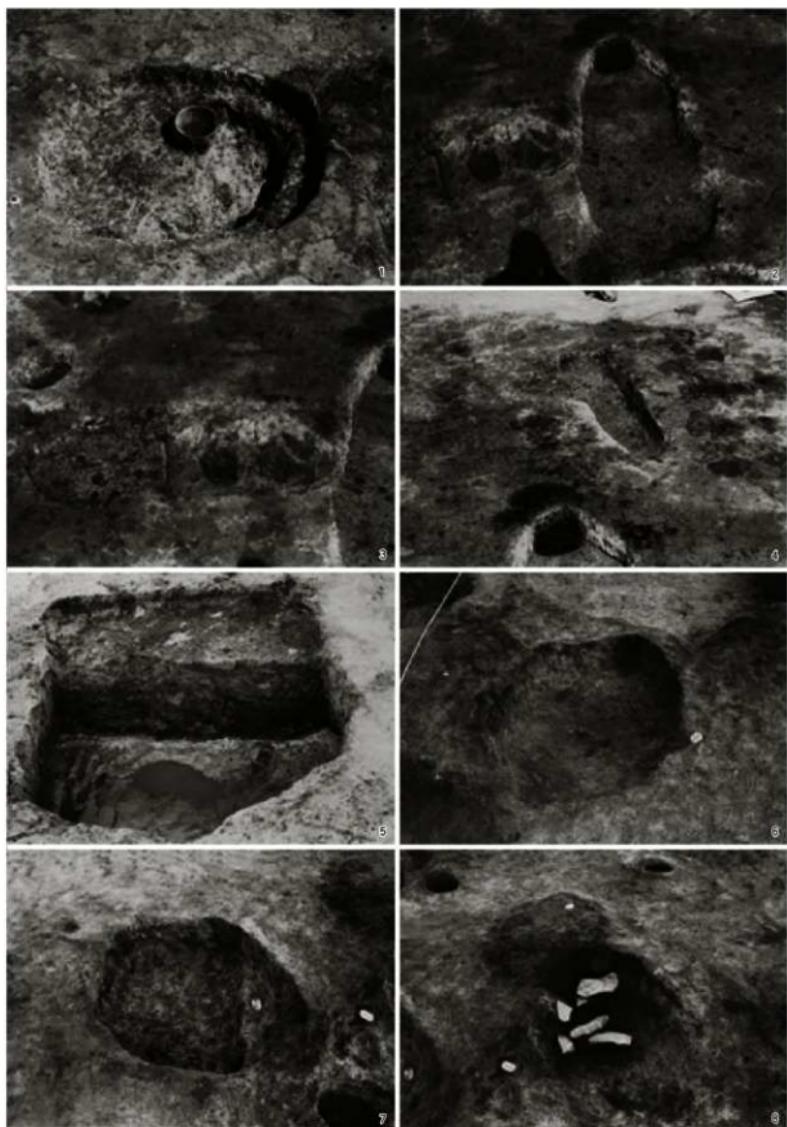
51 32～39号土坑

- 1 32号土坑全貌 (南から)
2 33号土坑全貌 (南から)
3 34号土坑全貌 (北から)
4 35号土坑全貌 (西から)
5 36号土坑全貌 (南から)
6 37号土坑全貌 (南から)
7 38号土坑全貌 (南から)
8 39号土坑全貌 (東から)



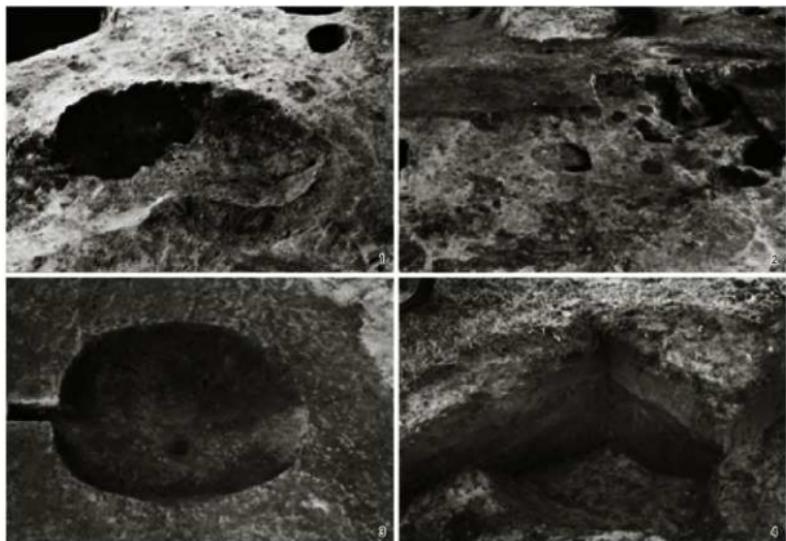
52 40~47号土坑

- 1 40号土坑全貌（南から） 2 41号土坑全貌（北から）
 3 42号土坑全貌（西から） 4 43号土坑全貌（南から）
 5 44号土坑全貌（東から） 6 45号土坑全貌（北から）
 7 46号土坑全貌（南から） 8 47号土坑全貌（南から）



53 48~50・52・54・56~58号土坑

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 48号土坑土器出土状況（南西から） | 2 49号土坑全貌（南から） |
| 3 50号土坑全貌（南から） | 4 52号土坑全貌（南から） |
| 5 54号土坑全貌（南から） | 6 56号土坑全貌（南から） |
| 7 57号土坑全貌（南から） | 8 58号土坑土器出土状況（南から） |



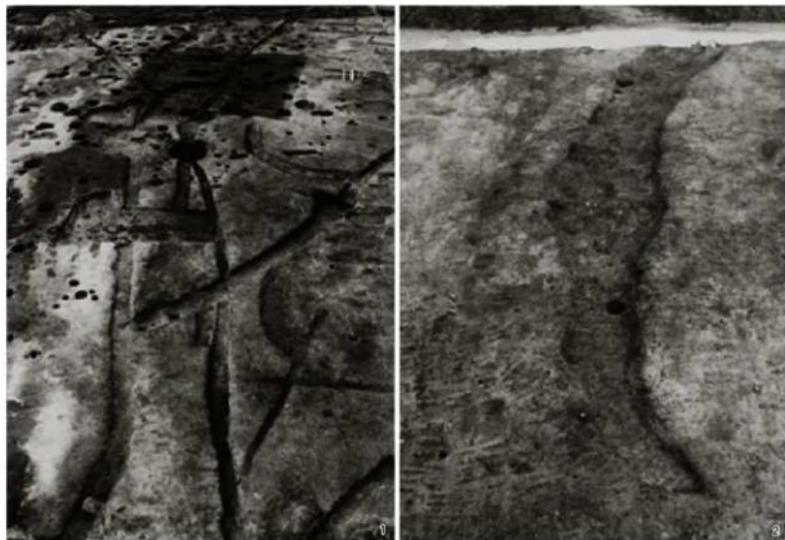
54 59~62号土坑

1 59号土坑全景（南から） 2 60号土坑全景（南から）
3 61号土坑全景（南から） 4 62号土坑全景（北から）



55 1・2号溝跡

1 1号溝跡全景（東から） 2 2号溝跡全景（東から）



56 3~6・8号溝跡

1 3・4・6・8号溝跡全景（東から） 2 5号溝跡全景（南から）



57 7・9号溝跡

1 7号溝跡全景（北から） 2 9号溝跡全景（北西から）



58 5・10~12号溝跡

1 10号溝跡検出（南から）
2 11号溝跡全景（南から）
3 5・12号溝跡（南から）



59 14~18号溝跡全景



60 15・17・18号溝跡

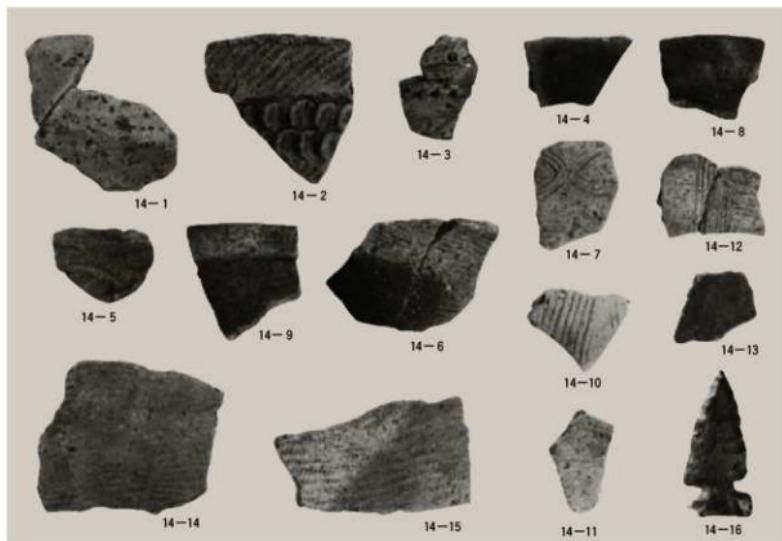
- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 15号溝跡土層断面（北西から） | 2 15号溝跡本杭断面（北から） |
| 3 15号溝跡北西端全貌（南東から） | 4 15号溝跡南東端全貌（南から） |
| 5 17号溝跡全貌（南東から） | 6 17号溝跡土層断面（南東から） |
| 7 18号溝跡全貌（南東から） | 8 作業風景 |



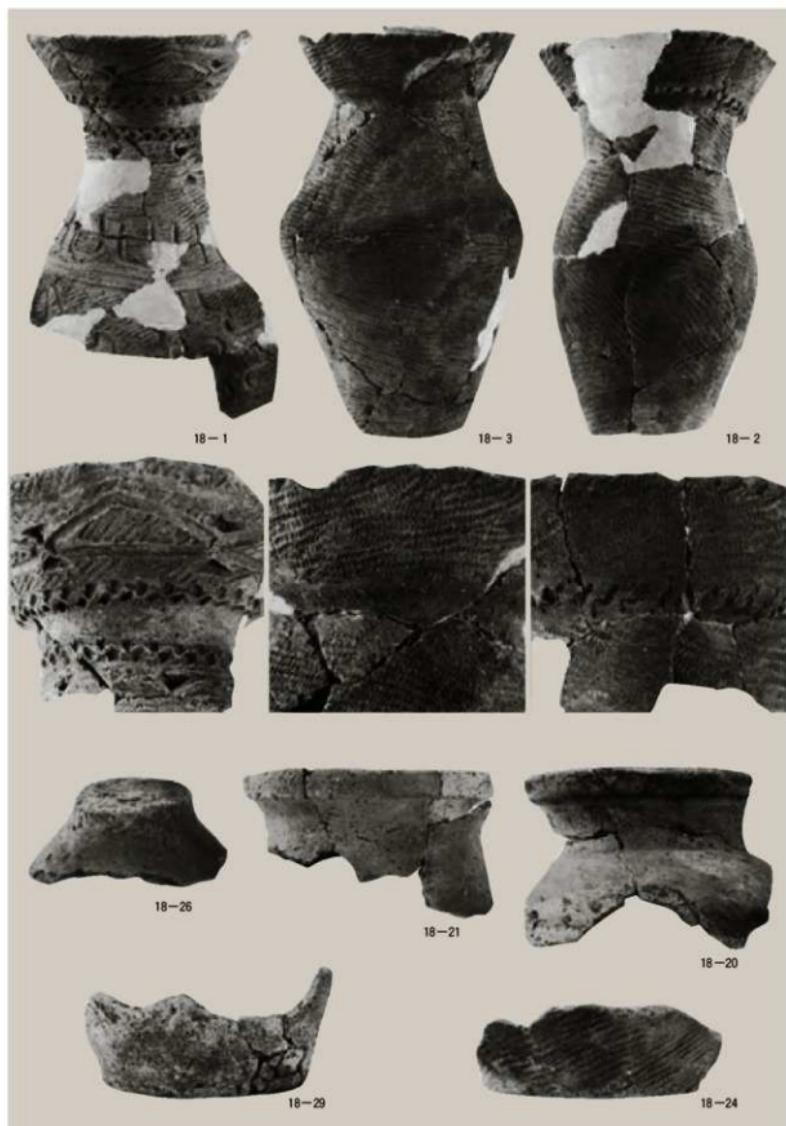
61 1号周溝墓出土土器



62 2号周溝墓出土土器



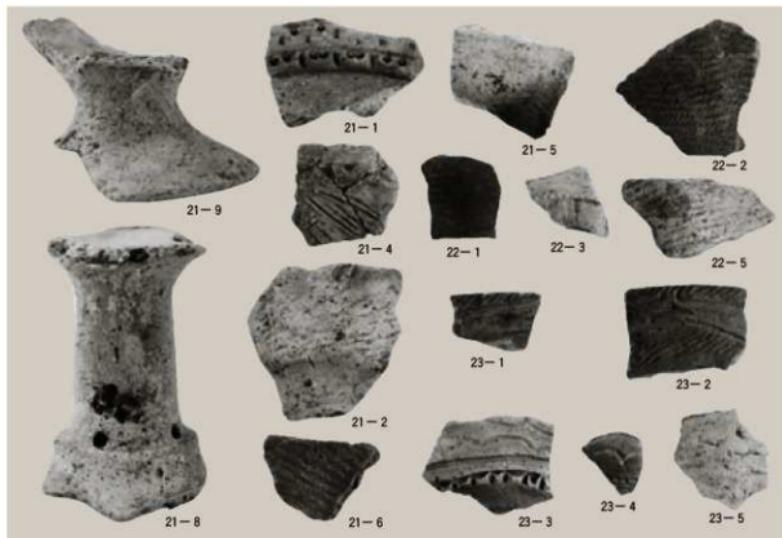
63 3号周溝墓出土土器



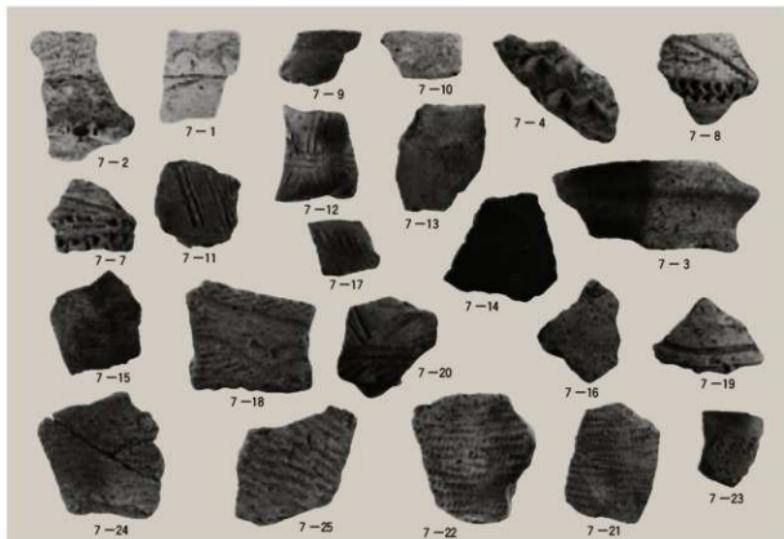
64 5号周溝墓出土土器（1）



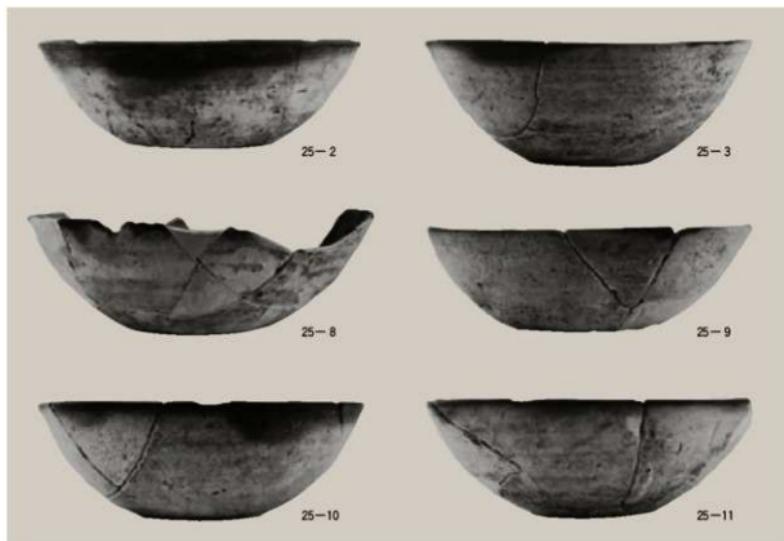
65 5号周溝墓出土土器（2）



66 6～8号周溝墓出土土器



67 3号竖穴住居跡出土土器



68 1号竖穴状遺構出土土器



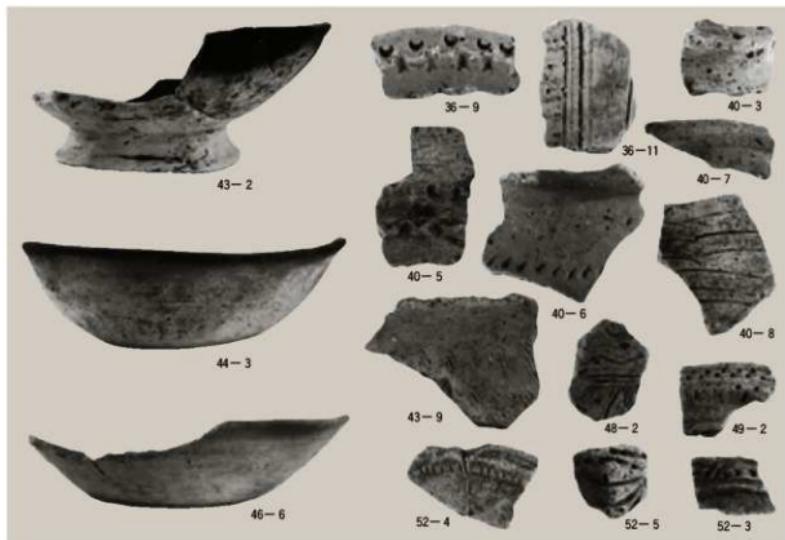
69 1号竖穴状遺構出土土器



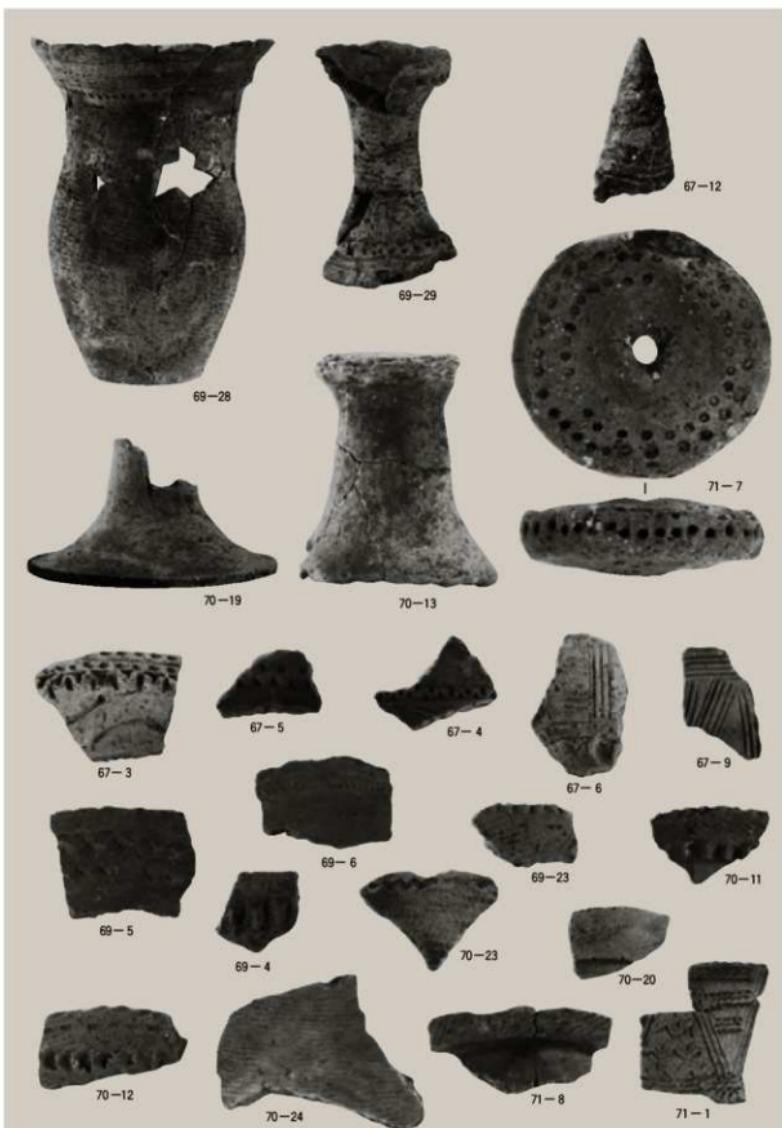
70 2号竖穴状遺構出土土器



71 4・5号竪穴状遺構出土土器



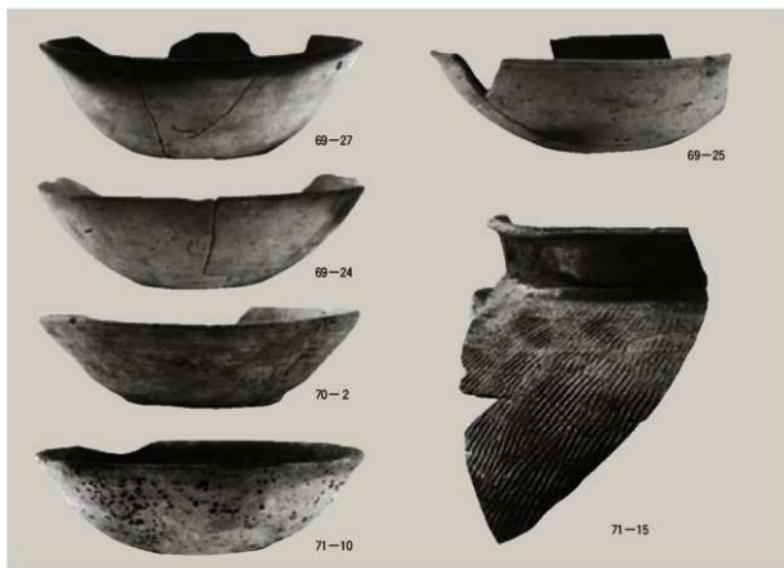
72 捜立柱建物跡出土土器



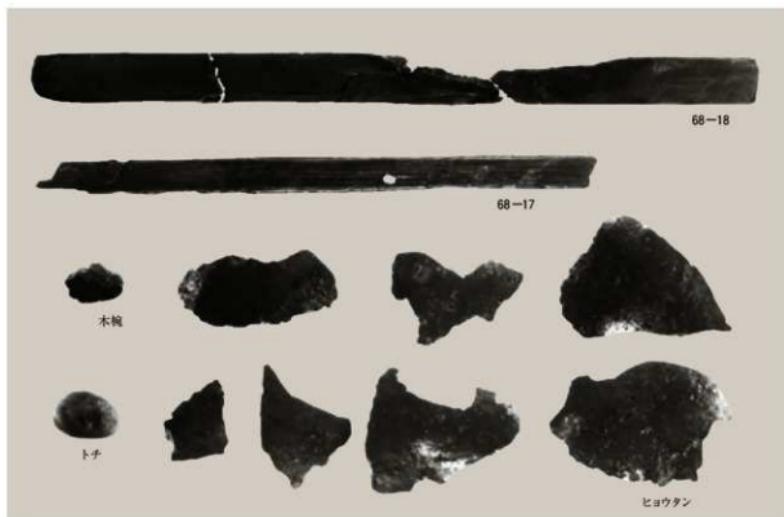
73 土坑出土弥生土器・石錨・土製紡錘車



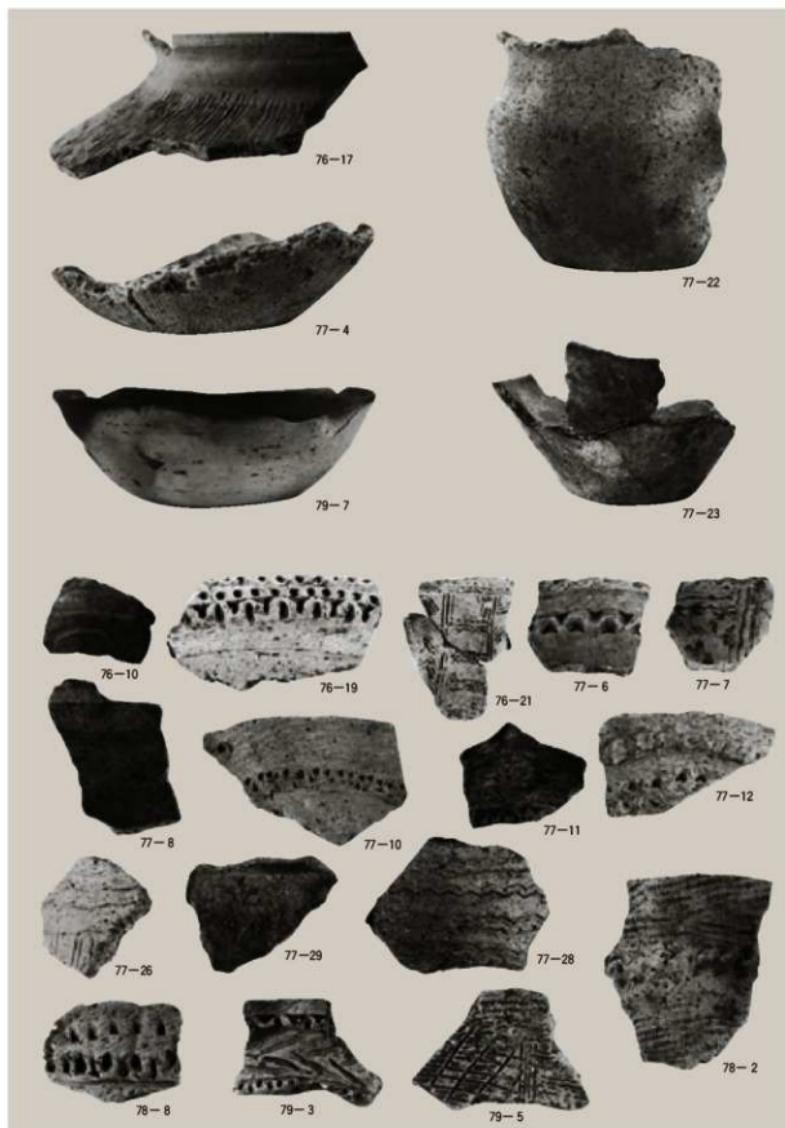
74 土坑出土土器（1）



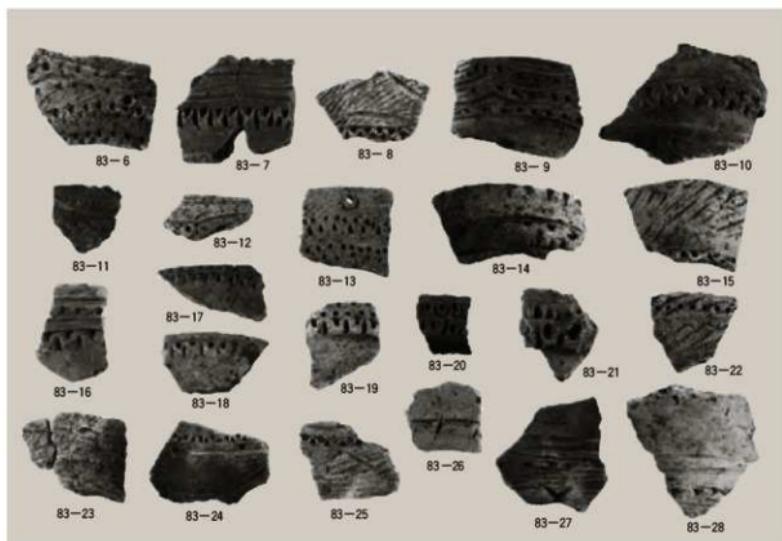
75 土坑出土土器（2）



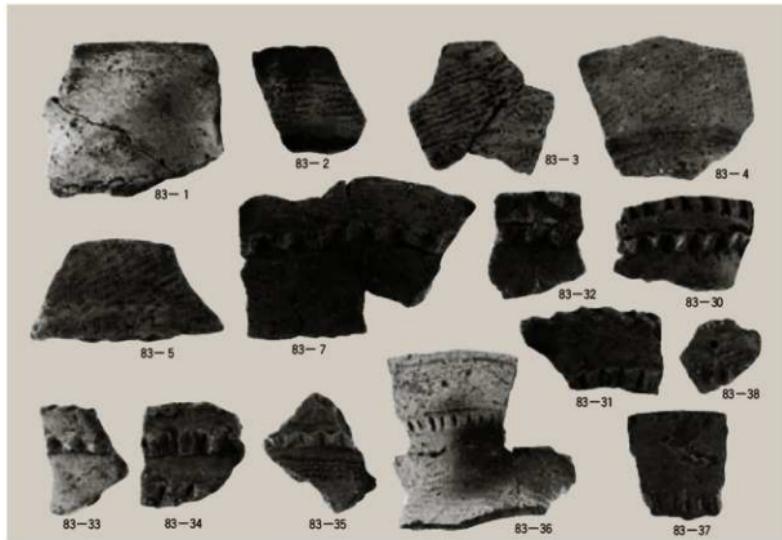
76 土坑出土木質遺物



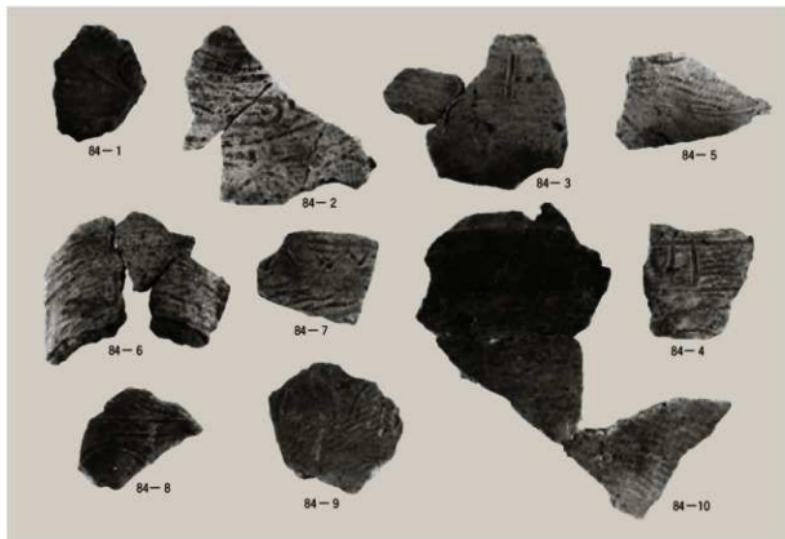
77 溝跡出土土器



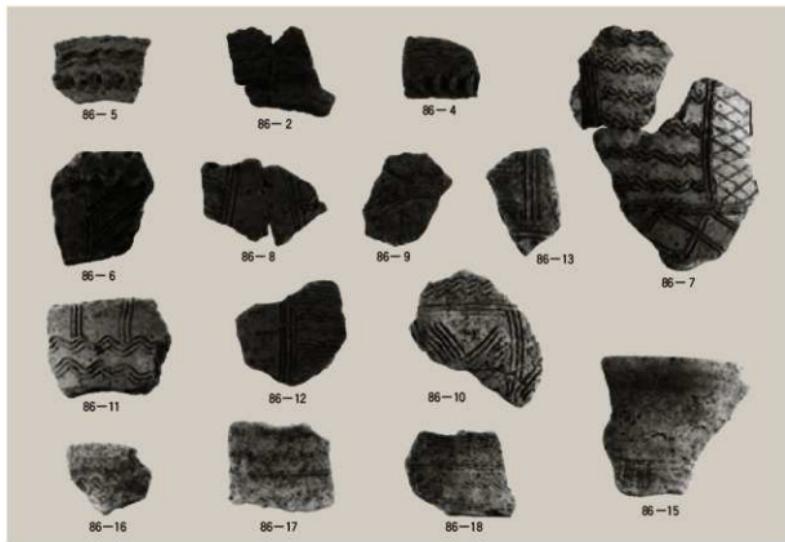
78 遺構外出土弥生土器（1）



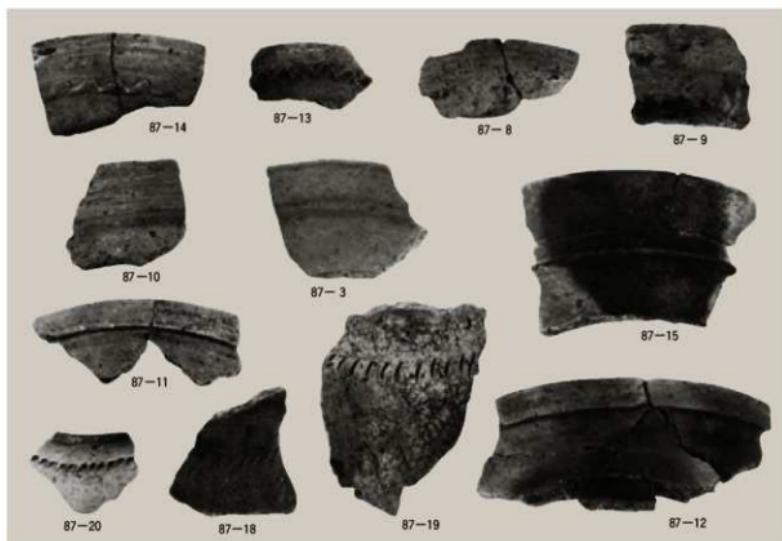
79 遺構外出土弥生土器（2）



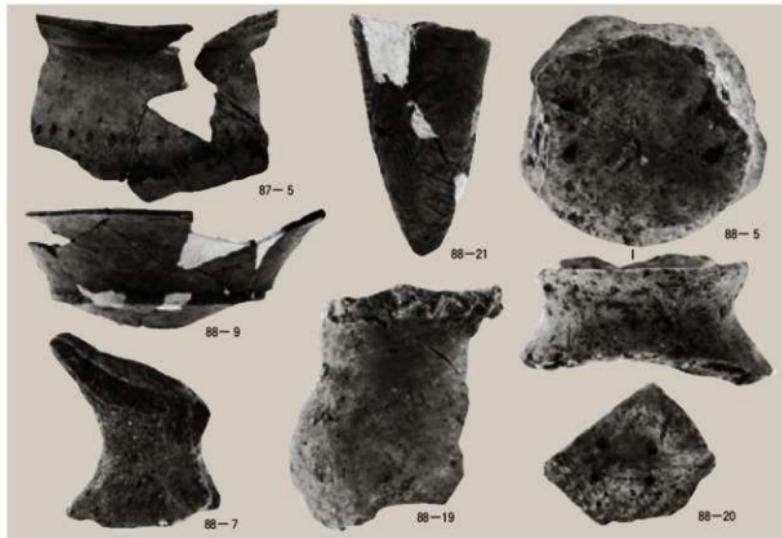
80 遺構外出土弥生土器（3）



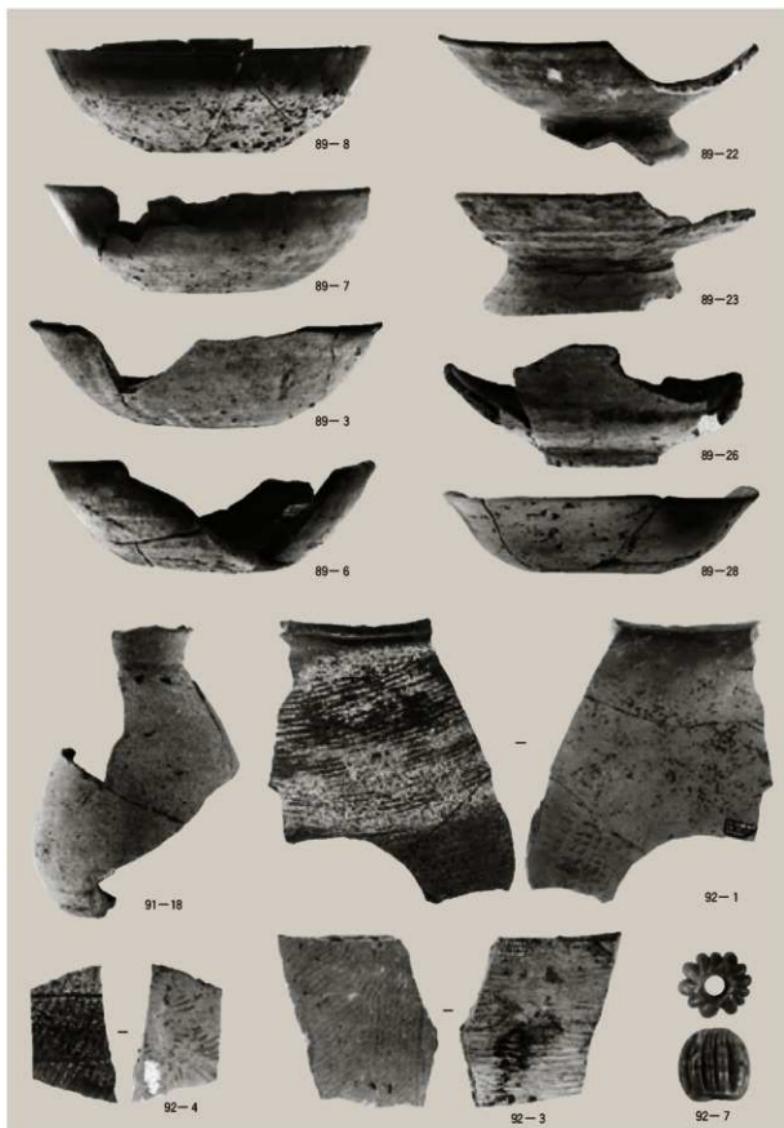
81 遺構外出土弥生土器（4）



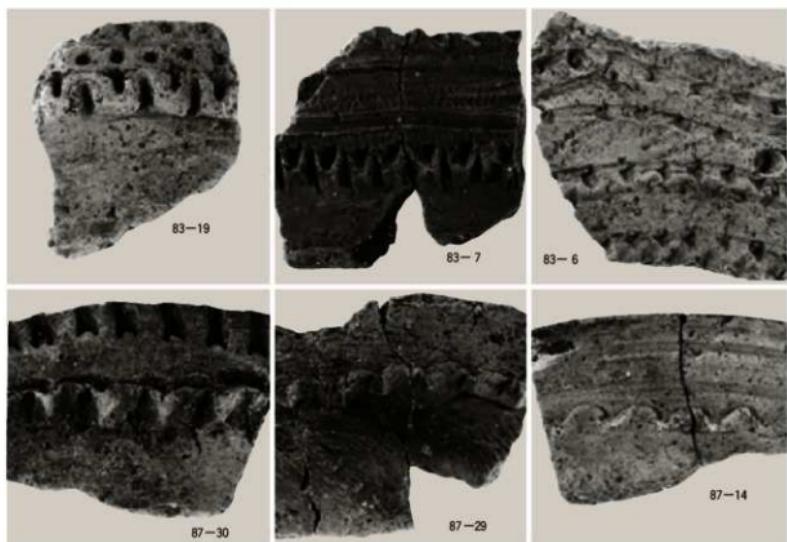
82 遺構外出土弥生土器（5）



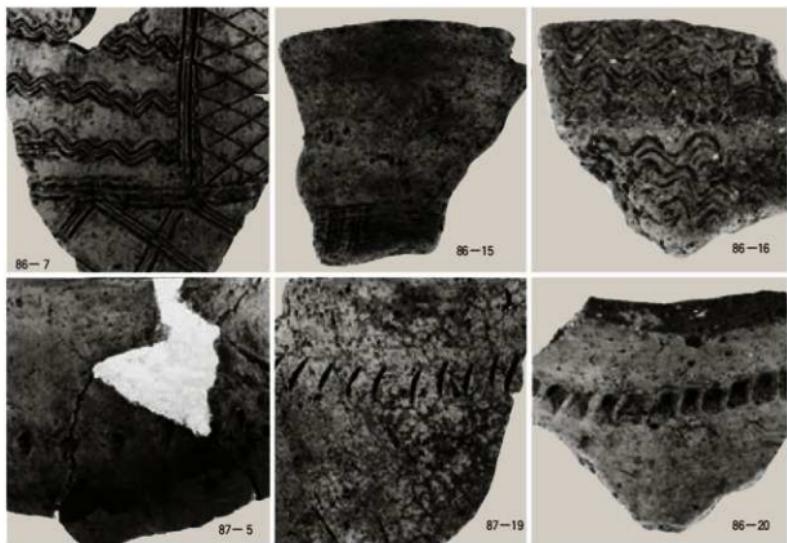
83 遺構外出土弥生土器（6）



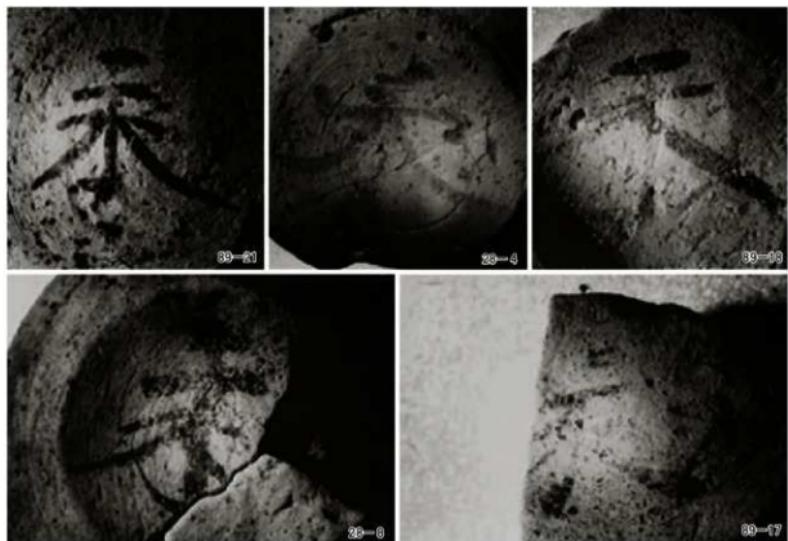
84 遺構外出土土師器・須恵器・ガラス製品



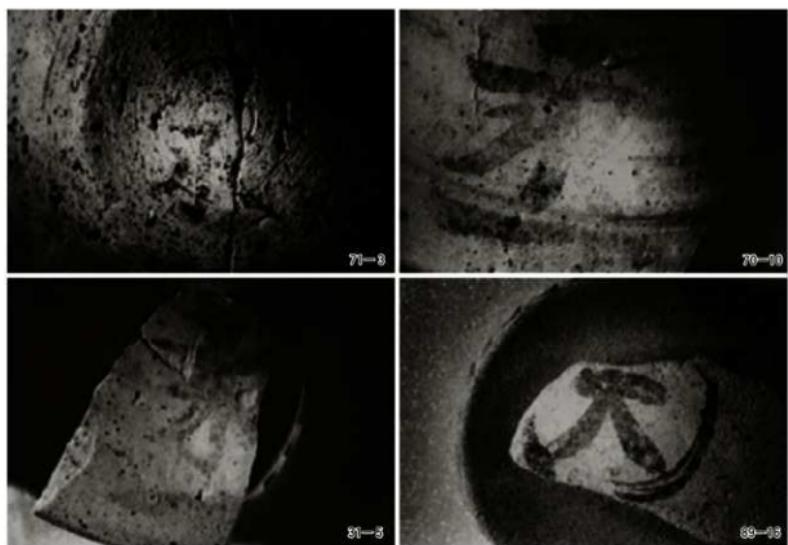
85 出土弥生土器細部（1）



86 出土弥生土器細部（2）



87 出土墨書土器（1）



88 出土墨書土器（2）

付編 1 荒屋敷遺跡（4次調査）出土の和鏡に付着した布の分析報告

(財)元興寺文化研究所

1. 分析資料

No 1 和鏡

2. 分析内容

・和鏡付着布の記録と織り密度測定

・布の繊維種同定

3. 使用機器

・実体顕微鏡 (Leica社 MZ16)

・走査型電子顕微鏡 ((株)日立製作所 S-3500N)

4. 方法および結果

①布の形状

鏡面と鏡背に付着した布を実体顕微鏡で観察し写真撮影を行った（写真1，2）。布は平織で経緯糸ともに撚りは見られなかった。

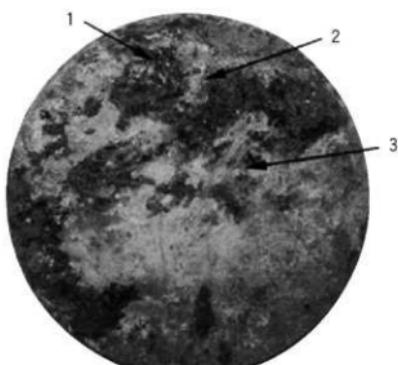
鏡面は布目の劣化が鏡背に較べて著しく、また布の重なりは確認できなかった。鏡背は布が数層重なっているのが確認できた。

布の乱れが少ない鏡背5（写真2，C）の織り密度を測定した結果、1cm当たりおおよそ経糸54本×緯糸49本であった。

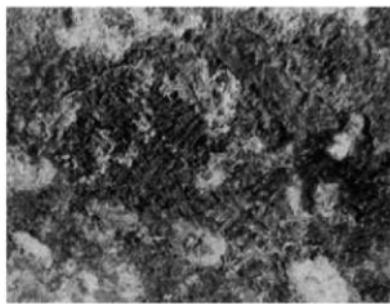
（布に耳がみられず、経緯糸の判断ができなかつたため糸の本数の多い方を経糸とした。）

②繊維種同定

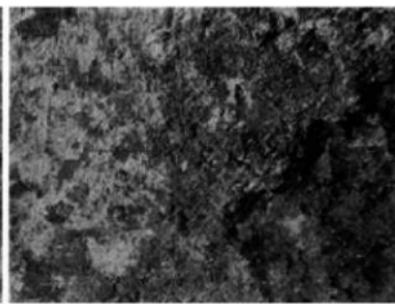
鏡背から布をごく微量採取し、走査型電子顕微鏡で経緯糸の断面を観察した。その結果、丸みを帯びた三角形の繊維断面の抜け痕が観察され、経緯糸共に綿であることが判った（写真3）。



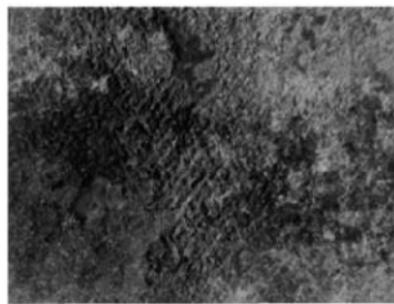
a 鏡面付着布の撮影箇所



b 1の付着布

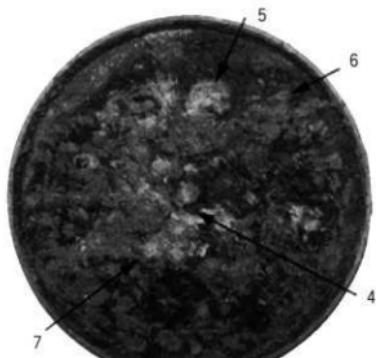


c 2の付着布

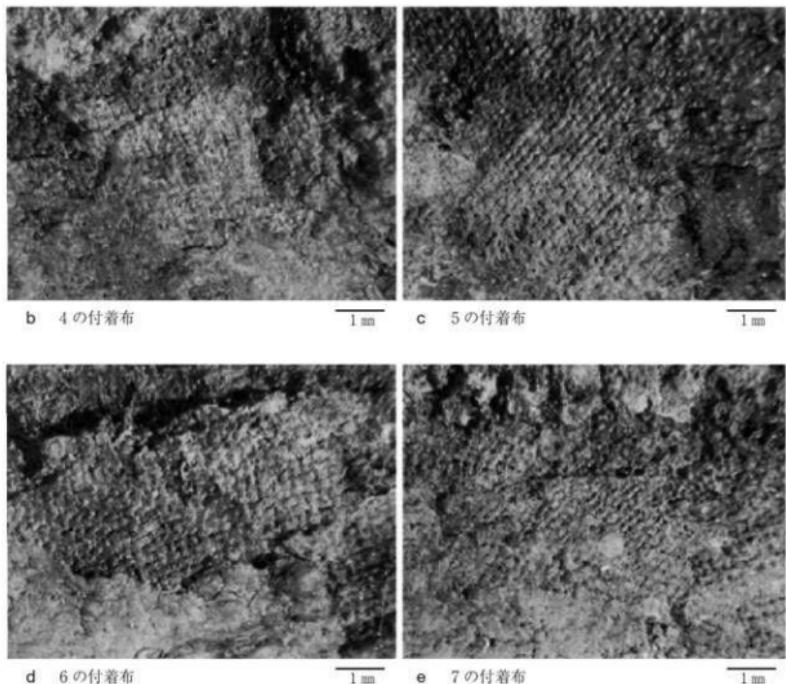


d 3の付着布

写真1 鏡面付着布



a 鏡背付着布の撮影箇所



b 4 の付着布

1 mm

1 mm

1 mm

1 mm

c 5 の付着布

1 mm

1 mm

1 mm

1 mm

1 mm

d 6 の付着布

1 mm

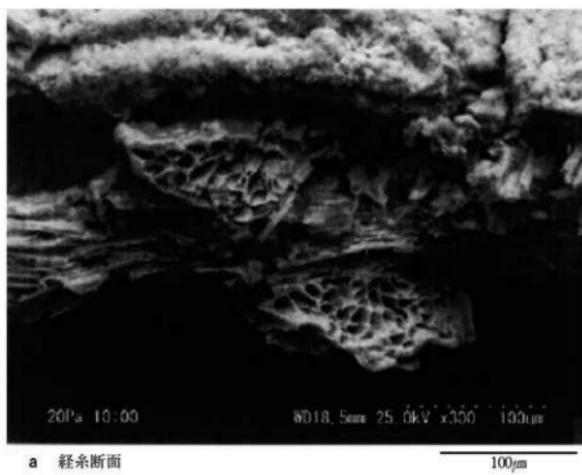
1 mm

1 mm

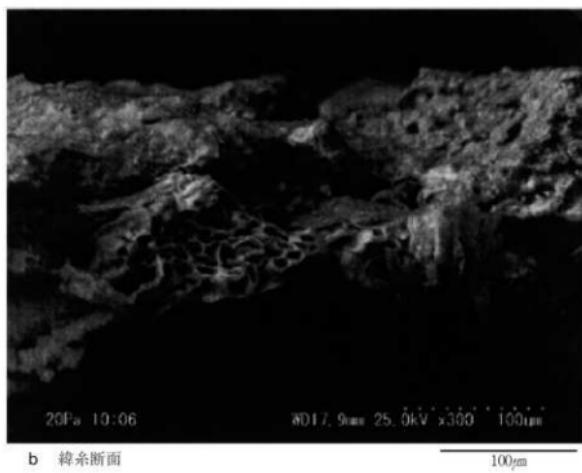
1 mm

1 mm

e 7 の付着布



a 経糸断面



b 褶糸断面

写真3 鏡背付着布の繊維断面

付編2 桜町遺跡（1次調査）出土遺物放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ*

1. はじめに

桜町遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-3678	遺構：SK6 層位：下層	試料の種類：生試料・種子 試料の性状：ひょうたん 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-3679	遺構：2号方形周溝墓 西溝 層位：L 1	試料の種類：土器付着物・煤類 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.5N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-3680	遺構：8号方形周溝墓 南溝 層位：L 1	試料の種類：土器付着物・煤類 カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-3681	グリッド：F8-A4 層位：L 1	試料の種類：土器付着物・煤類 カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-3682	グリッド：F8-B4 層位：搅乱	試料の種類：土器付着物・煤類 カビ：無	超音波煮沸洗浄 アセトン処理 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.5N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を、図1に暦年代較正結果をそれぞれ示す。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%

であることを示すものである。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{13}C 年代 (yrBP±1 σ)	"C年代を暦年代に較正した年代範囲	
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-3678	-27.66±0.2	1090±25	895AD(27.4%)925AD, 955AD(40.8%)995AD	890AD(95.4%)1020AD
PLD-3679	-25.24±0.18	1930±30	30AD(8.6%)40AD, 50AD(37.7%)90AD, 100AD(21.9%)125AD	AD(95.4%)140AD
PLD-3680	-25.04±0.19	1870±30	80AD(53.2%)180AD, 190AD(15.0%)220AD	70AD(95.4%)240AD
PLD-3681	-32.26±0.25	1875±35	80AD(40.5%)140AD, 150AD(14.9%)180AD, 190AD(12.8%)220AD	70AD(95.4%)240AD
PLD-3682	-17.49±0.2	1870±30	80AD(16.3%)110AD, 120AD(35.4%)180AD, 190AD(16.5%)220AD	70AD(95.4%)230AD

なお、暦年代較正の詳細は以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期5730±40年) を較正することである。

^{14}C 年代の暦年代較正にはOxCal3.9を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

*バレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

参考文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. p. 3-20

Stuiver M., P.J. Reimer, E. Bard, J.W. Beck, G.S. Burr, K.A. Hughen, B. Kromer, G. McCormac, J. van der Plicht and M. Spurk
1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24000-0 cal BP *Radiocarbon* 40 (3) 1041-1083

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy : The OxCal Program *Radiocarbon* 37 (2) 425-430
Bronk Ramsey C., 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

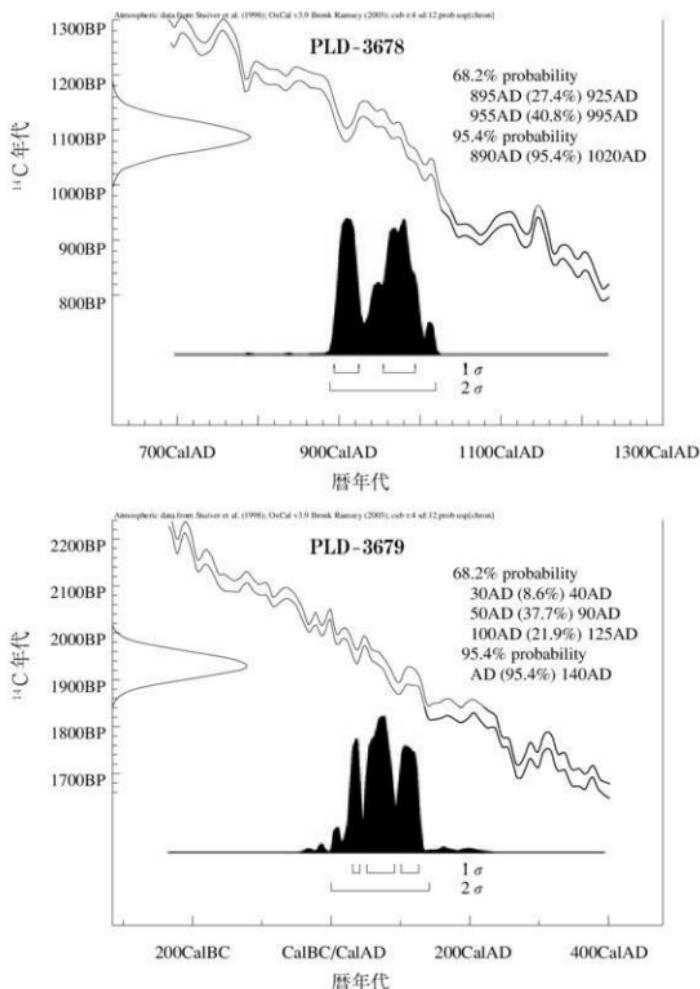


図1 暦年代較正結果（1）

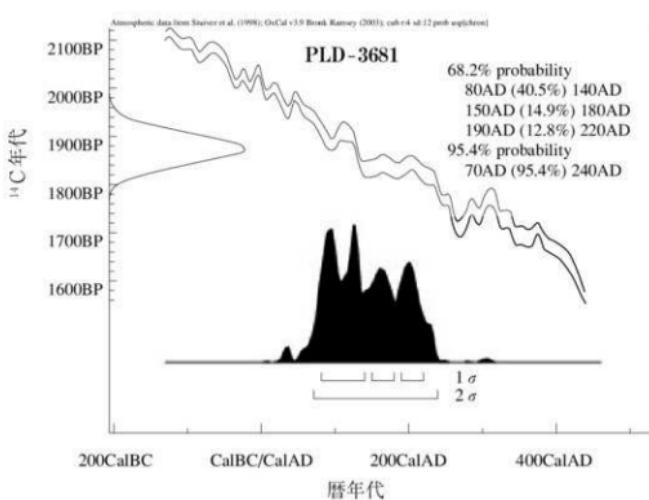
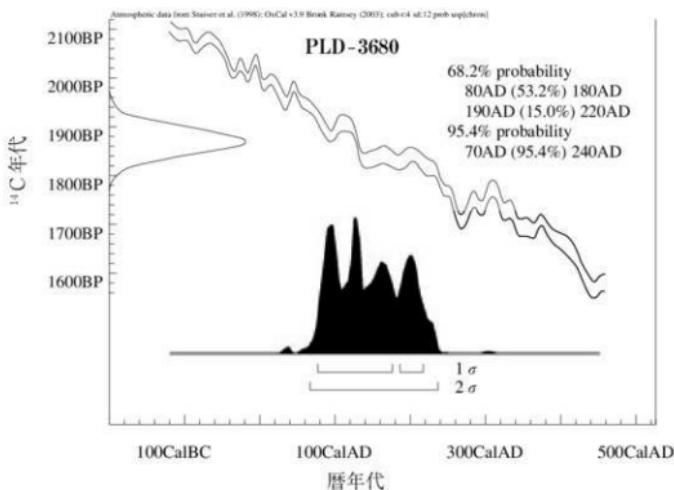


図2 暗年代較正結果（2）

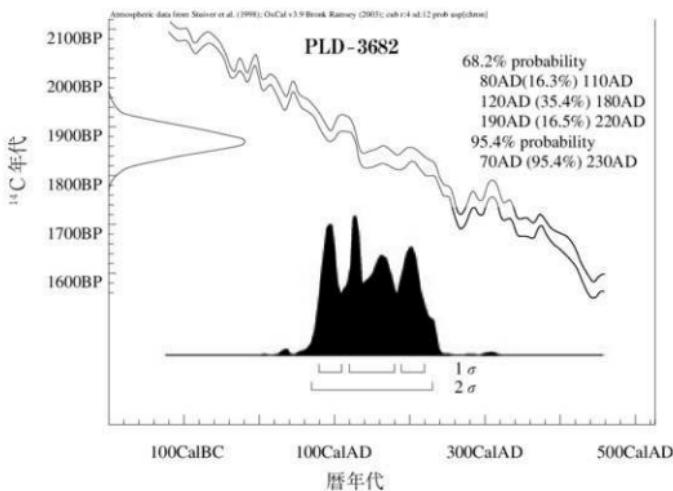


図3 历年代較正結果（3），測定試料

報告書抄録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうりせきはっくつちょうさはうこく5							
書名	会津継貫北道路遺跡発掘調査報告5							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第430集							
編著者名	安田 稔・宮田 安志・福田 秀生							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111							
発行年月日	2005年12月16日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号	度数	度数				
荒屋敷 (4次)	福島県耶麻郡 猪川村大字油田 字荒屋敷	403	00073	37°35'55"	139°52'50"	2004年8月3日 ~ 2004年10月11日	1,700m ²	道路(会津継貫北道路) 建設に伴う事前調査
桜町 (1次)	福島県河沼郡 湯川村大字桜町 字中町	422	00030	37°33'07"	139°54'03"	2004年5月10日 ~ 2004年11月19日	4,300m ²	同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
荒屋敷 (4次)	集落跡	弥生時代 平安時代 中世	土坑(14) 溝跡(5) 性格不明遺構(2) 柱穴群			弥生土器 土師器、須恵器 陶磁器、銅鏡 など	今回の4次調査では、弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺構が確認された。平安時代から中世にかけては、土坑・溝跡などが確認された。特筆される遺物として、銅鏡が1面出土した。古代から中世と推定される。	
桜町 (1次)	墳墓群 集落跡	弥生時代 平安時代 近世	堅穴住居跡(1) 方形周溝墓(7) 掘立柱建物跡(18) 溝跡(18)	堅穴状遺構(4) 周溝状遺構(1) 土坑(62) 柱穴群(多数)		弥生土器、石器 土師器、須恵器 陶磁器、鉄製品 ガラス製品 木質遺物、など	桜町遺跡は、弥生時代・平安時代・近世の複合遺跡である。今回の1次調査では弥生時代の方形周溝墓が7基確認された。弥生時代後期の墓制を考える上で重要な資料となる。平安時代は掘立柱建物跡を中心とする集落が確認された。	

*経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による

福島県文化財調査報告書第430集

会津縱貫北道路遺跡発掘調査報告 5

荒屋敷遺跡（4次）

桜町遺跡（1次）

平成17年12月16日発行

編 集 財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部

発 行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉並町2-16

財団法人福島県文化振興事業団 (〒960-8116) 福島市春日町5-54

国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所 (〒963-0111) 郡山市安積町荒井字太郎内28-1

印 刷 石井電算印刷株式会社 (〒963-0724) 郡山市田村町上行合字南川田37-2



付図 桜町遺跡(1次調査)遺構配置図